

令和 7 年度

教 授 要 項

シラバス (syllabus)



香川県立保健医療大学

KAGAWA PREFECTURAL UNIVERSITY OF HEALTH SCIENCES

目 次

I 科目の履修にあたって

[保健医療学部]

1 看護学科の科目の履修にあたって(令和3年度以後入学生)……………	1
2 臨床検査学科の科目の履修にあたって(令和7年度以後入学生)……………	3
3 臨床検査学科の科目の履修にあたって(令和4～6年度入学生)……………	5
4 臨床検査学科の科目の履修にあたって(令和3年度入学生)……………	7
5 [補足] DP(ディプロマ・ポリシー)についての説明……………	9

II 授業科目表

[保健医療学部]

1 看護学科授業科目表(令和3年度以後入学生に適用)……………	10
2 臨床検査学科授業科目表(令和7年度以後入学生に適用)……………	14
3 臨床検査学科授業科目表(令和4～6年度入学生に適用)……………	18
4 臨床検査学科授業科目表(令和3年度入学生に適用)……………	22

III 各科目シラバス

1 各項目についての説明……………	27
2 追試験・再試験の取扱い……………	28
3 各科目シラバス……………	29

1 看護学科の科目の履修にあたって

【教育目的】

人の尊厳の擁護と科学的思考力を中核とする看護実践能力を身につけ、看護専門職として地域の人々の健康で幸福な生活の実現に貢献する、自律性と創造性が発揮できる人材の育成を目指す。

【教育目標】

卒業時まで「人間関係を構築する能力」「倫理的に判断し行動する能力」「根拠に基づく看護実践能力」「課題を探究し対応できる能力」「連携協働する能力」「地域の看護を創造する能力」「成長し続ける能力」の7つの看護実践能力の基礎を修得することを目指す。

【教育課程の編成方針】

- (1) 看護学の学修が、基礎から応用および専門に向けて、段階的に積み上がるように科目編成するとともに、看護学周辺領域の学修が、看護学の学修に関連づけられるように科目を設定し配置する。
- (2) 看護実践能力が4年間で「基礎－応用－統合」と着実に獲得できるように看護学実習を配置する。特に、2年次前期の実習修了までに基礎形成を目指す。
- (3) 看護学実習前後に演習を配置し「臨床推論・臨床判断」の事例学習を協同（学生同士・教員・臨床看護師）で行う。
- (4) 1年次から、地域包括ケアと看護の役割拡大への関心及び理解が段階的に深まるように地域看護学を配置する。学生が主体的に取り組む「地域健康サポーター実習」を2年次以降の自由時間内で実践する。
- (5) 1年次「看護ゼミナールⅠ」で課題探求能力の基礎作りを行い、3年次「看護ゼミナールⅡ」と、4年次「看護研究」の課題探求能力の発揮につなげる。
- (6) 学生の自律性と創造性が発揮できるように、自己学修、グループ討議、発表会など多様な学修形態を採り入れるとともに、個人及びグループの学修時間が自由に確保できるように時間割編成を行う。

【教育課程の科目編成区分】

- (1) 全科目は、＜基礎科目群＞と＜看護専門科目群＞に大きく区分する。
- (2) ＜基礎科目群＞は、教育目的に示した『人の尊厳、科学的思考、人の健康と生活』の基盤形成を担う。すなわち、人間の本質と生命の尊厳を学び、豊かな人間性と倫理観を醸成するとともに、課題を見出して学問的探求を行い主体的に問題解決できるための基礎的能力を身につける科目群である。

基礎科目群は、自然科学の基本的知識と学際的な学問の状況から、人間とその生命現象を学ぶ【自然】【人間】、人間をとりまく社会・環境と現代社会の仕組みと課題を理解するための【社会】、看護学の臨床実践の基礎となる【健康】、知識・情報を活用し、科学的な探求とコミュニケーションを促進する【情報】【外国語】に区分する。

その履修は、看護学を学ぶ上で必要な基盤的な科目を1年次に修得するよう配置するとともに、看護専門科目群の学びと統合することによって、より豊かな人間性と倫理観を身につけた看護専門職としての成長発展を意図して、基礎科目群は2年次、3年次にも段階的に学修する科目構造としている。

- (3) ＜看護専門科目群＞は、教育目的に示した『確かな看護実践能力を身につけ、看護専門職として地域の人々の健康で幸福な生活の実現に貢献する』ために、看護学の専門的知

識・技術を基礎から応用へと段階的に学修するための科目群である。

全ての看護学に共通する学問と実践の基礎・基盤を学ぶ【看護学総論】【看護技術論・臨床推論】、看護の対象を全体的に理解し、看護実践を展開するための思考方法を学ぶ【看護過程論】、健康レベルや人間の成長発達に基づいた対象理解と援助方法を学ぶ【健康レベル別看護論】【発達段階別看護論】、メンタルヘルスに関する看護を学ぶ【メンタルヘルス看護論】、生活者である対象の理解を深め、在宅や地域の多様な場における支援を学ぶ【地域・在宅看護論】、看護職のキャリアと専門性を探求し、より良い看護を提供するための制度や発展方法を学ぶ【看護発展論】、県内複数の医療機関、市町・保健所、施設や訪問看護ステーションなど多様な場で行う【看護学実習】、主体的に課題探求する能力を身につける【看護ゼミナール・看護研究】に区分する。

【看護学実習】は、4年間で基礎、応用、統合と着実に看護実践能力を獲得することができるように、学生自身が自己の成長と課題を段階ごとに確認しながら次に進んでいけるように配置している。また、臨床実践の考え方や判断を学び、実習をより効果的に進めることを意図した【臨床推論】は、複数学年の合同学習であるピアラーニングの形態を取り、各々の学年での学習目的を設定した上で実習前後に配置する科目構造としている。

【卒業の認定に関する方針（DP）】

看護学科では、以下に示された能力を修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（看護学）の学位を授与する。

各科目との関連は授業科目表に示す。

- ①一人ひとりの人間を総合的に理解し、互いに成長し合える関係形成ができる基礎的能力を身に付けている。
- ②人の尊厳と権利を擁護する看護について探究し、倫理的判断に基づいて行動できる基礎的能力を身に付けている。
- ③看護の対象と状況を的確にアセスメントし、根拠に基づく看護が実践できる基礎的能力を身に付けている。
- ④看護の実践・研究・教育の場で、将来、論理的に課題を探究し対応できる基礎的能力を身に付けている。
- ⑤看護の対象を取り巻く保健・医療・福祉チーム員の役割を理解し、人々と連携協働しリーダーシップが発揮できる基礎的能力を身に付けている。
- ⑥常に変化する社会に関心を寄せ、地域における看護の課題を探究し、新たな看護を創造できる基礎的能力を身に付けている。
- ⑦看護を学ぶ自分と真摯に向き合い、看護専門職として誇りと責任をもって実践し成長し続ける基礎的能力を身に付けている。

卒業要件：学士（看護学）の学位

（単位）

	必修	選択	計
基礎科目群	26	11 以上	37 以上
看護専門科目群	84	5 以上※	89 以上
計	110	16 以上	126 以上

※看護発展論から選択し、そのうち、
家族看護、がん看護、チーム医療又は
看護における代替療法、訪問看護論
から2以上それ以外の科目から3以上

【卒業後取得できる資格】

看護師国家試験受験資格

2 臨床検査学科の科目の履修にあたって（令和7年度以後入学生）

【教育目的】

個々の検査の意義や測定法など、臨床検査に関する専門的な知識や技術を習得することはもとより、医療の高度化・多様化に適切に対応できる基礎的能力や臨床検査の専門家として他の医療従事者と協働し、保健・医療・福祉の様々な分野で活躍することのできる能力を身につけた人材を育成することを目指す。

【教育目標】

臨床検査学科においては「高い倫理観をもつ豊かな人間性」、「専門的知識と技術」、「科学的思考力と研究能力」、「社会貢献能力」、「他職種連携能力」などを培う科目構成とし、臨床検査技師として必要とされる総合的実践能力の修得を目指す。

【教育課程の編成方針】

- (1) 臨床検査学学修の効率化を目指して、基礎科目群から臨床検査専門科目群へと積み上がる科目構成とする。また、臨床検査に関連する領域の学修も含め、社会において幅広く活躍できる能力も培える科目配置とする。
- (2) 基礎科目群として、高い倫理観をもつ豊かな人間性を養うために哲学、倫理学などの人文科学系科目と、社会学、経済学、健康科学などの社会・健康科学系科目を配置する。さらに高等学校での学習内容を確認し、専門領域への橋渡しとする目的で、物理学、化学、生物学などの自然科学系科目と生理学、生化学などの専門基礎科目を配置する。また、情報化社会への対応のために、情報科学を配置した。国際的視野を持って活動できる人材育成のため、英語と中国語を配置しており、特に、英語学習では、基礎英語、英会話、医療英語、文献などの読解力を養う。これらに加えて、地域の健康活動に貢献できる人材の養成を目指して、教養講座・香川を配置する。

さらに、専門基礎科目は、健康、疾病、病態を広く理解するとともに、人体の構造と機能を系統的に理解し、臨床検査についての専門知識、技術、医療チームとしての役割、他職種との連携を学修する目的で科目を構成し、医療機器の取り扱いに重要な医用電子工学、医用電子工学演習を配置している。また、国際的視野を広げるために国際保健論を設け、他職種との連携能力を修得するために、組織論と地域チーム医療論を配置している。

- (3) 臨床検査専門科目群は、専門的知識・技術、科学的思考と研究能力を修得するため、検査結果や実験結果を総合的・多角的に判断分析、管理運営する基礎的能力及び検査技術を修得する目的で科目構成する。早期に学習への興味やモチベーションを高めることを目的として、検査学概論、臨床検査学体験実習、臨床医学Ⅰなどの科目を配置している。また、医療の高度化や安全管理・社会環境の変化に対応すべく、検診検査学、生殖補助医療技術論、リスクマネジメント、健康食品学などの科目も履修可能であり、臨床検査技師の業務範囲の拡大内容についても修得できるように、医療安全管理学を中心に学内実習・演習を充実させている。

臨地実習は、臨地実習ガイドラインをもとに、実習施設との綿密なプログラム確認を行うことにより、総合的実践能力を高められる内容の科目編成とする。医療機関等で具体的・個別的に臨

床検査業務や他職種連携業務等を実践することで、医療従事者として必要とされる倫理感や責任感の修得も目指す。一方、臨地実習前には、各領域の学内実習科目において臨地実習前技能到達度評価を実施し、実習に必要な知識、技能や接遇能力を習得しているかの確認を行い、臨地実習を行うことが可能な水準に達しているかの能力評価を行う。

さらに、卒業研究は、少人数制で実施することで、科学的思考力、研究能力、及びデータ管理能力が高められる指導を行う。また、所定科目履修者は在学中に、健康食品管理士、遺伝子分析科学認定士及び食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格取得が可能な科目体制を設けている。

【教育課程の科目編成区分】

- (1) 全科目は「基礎科目群」と「臨床検査専門科目群」に大きく区分する。
- (2) 「基礎科目群」は、＜人文科学＞、＜社会・健康科学＞、＜自然科学＞、＜外国語＞、＜情報科学＞、＜総合科目＞及び＜専門基礎＞に細区分している。
- (3) 「臨床検査専門科目群」は＜分析検査学＞、＜形態検査学＞、＜検査情報解析検査学＞、＜総合検査学＞、＜臨地実習＞に細区分している。

授業科目表をみればわかるように、履修すべき内容は多岐にわたっているが臨床検査専門科目群のそのほとんどが必修科目である。卒業後の個人の目標や夢を実現するためには、可能な限り選択科目も多く履修することが望ましい。さらに、資格取得後は医療従事者の一人として社会に貢献できるよう学生時代からの準備を期待したい。

卒業要件

(単位)

	必修	選択	計
基礎科目群	33	22 以上	55 以上
臨床検査専門科目群	82	6 以上	88 以上
計	115	28 以上	143 以上

【卒業の認定に関する方針 (DP)】

臨床検査学科では、以下に示された能力を卒業までに修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（臨床検査学）の学位を授与する。

- ①豊かな人間性と高い倫理観を身に付けている。
- ②臨床検査に必要な専門的な知識・技術と実践能力を身に付けている。
- ③臨床検査学発展のために、自らの能力の向上に努め、データ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を身に付けている。
- ④国際感覚を備え、臨床検査を通して、地域社会に広く貢献できる能力を身に付けている。
- ⑤医療・環境・食品・保健分野などで、他職種と連携しながら、幅広く活躍できる能力を身に付けている。

3 臨床検査学科の科目の履修にあたって（令和4～6年度入学生）

【教育目的】

個々の検査の意義や測定法など、臨床検査に関する専門的な知識や技術を習得することはもとより、医療の高度化・多様化に適切に対応できる基礎的能力や臨床検査の専門家として他の医療従事者と協働し、保健・医療・福祉の様々な分野で活躍することのできる能力を身につけた人材を育成することを目指す。

【教育目標】

臨床検査学科においては「高い倫理観をもつ豊かな人間性」、「専門的知識と技術」、「科学的思考力と研究能力」、「社会貢献能力」、「他職種連携能力」などを培う科目構成とし、臨床検査技師として必要とされる総合的実践能力の修得を目指す。

【教育課程の編成方針】

- (1) 臨床検査学学修の効率化を目指して、基礎科目群から臨床検査専門科目群へと積み上がる科目構成とする。また、臨床検査に関連する領域の学修も含め、社会において幅広く活躍できる能力も培える科目配置とする。
- (2) 基礎科目群として、高い倫理観をもつ豊かな人間性を養うために哲学、倫理学などの人文科学系科目と、社会学、経済学などの社会科学系科目を配置する。さらに高等学校での学習内容を確認し、専門領域への橋渡しとする目的で、物理学、化学、生物学などの自然科学系科目と生理学、生化学などの専門基礎科目を配置する。また、情報化社会への対応のために、情報科学を配置した。国際的視野を持って活動できる人材育成のため、英語と中国語を配置しており、特に、英語学習では、基礎英語、英会話、医療英語、文献などの読解力を養う。これらに加えて、地域の健康活動に貢献できる人材の養成を目指して、健康科学科目と教養講座・香川を配置する。

さらに、専門基礎科目は、健康、疾病、病態を広く理解するとともに、人体の構造と機能を系統的に理解し、臨床検査についての専門知識、技術、医療チームとしての役割、他職種との連携を学修する目的で科目を構成し、医療機器の取り扱いに重要な医用電子工学、医用電子工学演習を配置している。また、国際的視野を広げるために国際保健論を設け、他職種との連携能力を修得するために、組織論と地域チーム医療論を配置している。

- (3) 臨床検査専門科目群は、専門的知識・技術、科学的思考と研究能力を修得するため、検査結果や実験結果を総合的・多角的に判断分析、管理運営する基礎的能力及び検査技術を修得する目的で科目構成する。早期に学習への興味やモチベーションを高めることを目的として、検査学概論、臨床検査学体験実習、臨床医学Ⅰなどの科目を配置している。また、医療の高度化や安全管理・社会環境の変化に対応すべく、検診検査学、生殖補助医療技術論、リスクマネジメント、健康食品学などの科目も履修可能であり、臨床検査技師の業務範囲の拡大内容についても修得できるように、医療安全管理学を中心に学内実習・演習を充実させている。

臨地実習は、臨地実習ガイドラインをもとに、実習施設との綿密なプログラム確認を行うことにより、総合的実践能力を高められる内容の科目編成とする。医療機関等で具体的・個別的に臨

床検査業務や他職種連携業務等を実践することで、医療従事者として必要とされる倫理感や責任感の修得も目指す。一方、臨地実習前には、各領域の学内実習科目において臨地実習前技能到達度評価を実施し、実習に必要な知識、技能や接遇能力を習得しているかの確認を行い、臨地実習を行うことが可能な水準に達しているかの能力評価を行う。

さらに、卒業研究は、少人数制で実施することで、科学的思考力、研究能力、及びデータ管理能力が高められる指導を行う。また、所定科目履修者は在学中に、健康食品管理士、遺伝子分析科学認定士及び食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格取得が可能な科目体制を設けている。

【教育課程の科目編成区分】

- (1) 全科目は「基礎科目群」と「臨床検査専門科目群」に大きく区分する。
- (2) 「基礎科目群」は、＜人文科学＞、＜社会科学＞、＜自然科学＞、＜外国語＞、＜情報科学＞、＜健康科学＞、＜総合科目＞及び＜専門基礎＞に細区分している。
- (3) 「臨床検査専門科目群」は＜分析検査学＞、＜形態検査学＞、＜検査情報解析検査学＞、＜総合検査学＞、＜臨地実習＞に細区分している。

授業科目表をみればわかるように、履修すべき内容は多岐にわたっているが臨床検査専門科目群のそのほとんどが必修科目である。卒業後の個人の目標や夢を実現するためには、可能な限り選択科目も多く履修することが望ましい。さらに、資格取得後は医療従事者の一人として社会に貢献できるよう学生時代からの準備を期待したい。

卒業要件

(単位)

	必修	選択	計
基礎科目群	34	24 以上	58 以上
臨床検査専門科目群	87	6 以上	93 以上
計	121	30 以上	151 以上

【卒業の認定に関する方針 (DP)】

臨床検査学科では、以下に示された能力を卒業までに修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（臨床検査学）の学位を授与する。

- ①豊かな人間性と高い倫理観を身に付けている。
- ②臨床検査に必要な専門的な知識・技術と実践能力を身に付けている。
- ③臨床検査学発展のために、自らの能力の向上に努め、データ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を身に付けている。
- ④国際感覚を備え、臨床検査を通して、地域社会に広く貢献できる能力を身に付けている。
- ⑤医療・環境・食品・保健分野などで、他職種と連携しながら、幅広く活躍できる能力を身に付けている。

4 臨床検査学科の科目の履修にあたって（令和3年度入学生）

【教育目的】

個々の検査の意義や測定法など、臨床検査に関する専門的な知識や技術を習得することはもとより、医療の高度化・多様化に適切に対応できる基礎的能力や臨床検査の専門家として他の医療従事者と協働し、保健・医療・福祉の様々な分野で活躍することのできる能力を身につけた人材を育成することを目指す。

【教育目標】

臨床検査学科においては「高い倫理観をもつ豊かな人間性」、「専門的知識と技術」、「科学的思考力と研究能力」、「社会貢献能力」、「他職種連携能力」などを培う科目構成とし、臨床検査技師として必要とされる総合的実践能力の修得を目指す。

【教育課程の編成及び実施に関する方針】

- (1) 臨床検査学修の効率化を目指して、教養教育科目、専門基礎科目、専門科目へと段階的に積み上がる科目構成としている。また、臨床検査に関連する領域の学習も含め、社会において幅広く活躍できる能力も培える科目配置としている。
- (2) 教養教育科目として、高い倫理観をもつ豊かな人間性を養うために哲学、倫理学などの人文科学系科目と、社会学、経済学などの社会科学系科目を配置する。さらに高等学校での学習内容を確認し、専門領域への橋渡しとする目的で、物理学、化学、生物学などの自然科学系科目と生理学、生化学などの専門基礎科目を配置する。また、情報化社会への対応のために、情報科学を配置した。国際的視野を持って活動できる人材育成のため、英語と中国語を配置しており、特に、英語学習では、基礎英語、英会話、医療英語、文献などの読解力を養う。これらに加えて、地域の健康活動に貢献できる人材の養成を目指して、健康科学科目と教養講座・香川を配置する。
- (3) 専門基礎科目は、健康、疾病、病態を広く理解するとともに、人体の構造と機能を系統的に理解し、臨床検査についての専門知識、技術、医療チームとしての役割、他職種との連携を学修する目的で科目を構成し、医療機器の取り扱いに重要な医用電子工学、医用電子工学演習を配置している。また、国際的視野を広げるために国際保健論を設け、他職種との連携能力を修得するために、組織論と地域チーム医療論を配置している。
- (4) 専門科目は、専門的知識・技術、科学的思考と研究能力を修得するため、検査結果や実験結果を総合的・多角的に判断分析、管理運営する基礎的能力及び検査技術を修得する目的で科目構成する。早期に学習への興味やモチベーションを高めることを目的として、検査学概論、臨床検査学体験実習、臨床医学Ⅰなどの科目を配置している。また、医療の高度化や安全管理・社会環境の変化に対応すべく、検診検査学、生殖補助医療技術論、リスクマネジメント、健康食品学などの科目も履修可能であり、臨床検査技師の業務範囲の拡大内容についても修得できるように、医療安全管理学を中心に学内実習・演習を充実させている。

臨地実習は、臨地実習ガイドラインをもとに、実習施設との綿密なプログラム確認を行うことにより、総合的実践能力を高められる内容の科目編成とする。医療機関等で具体的・個別的に臨床検査業務や他職種連携業務等を実践することで、医療従事者として必要とされる倫理感や責任感の修得も目指

す。一方、臨地実習前には、各領域の学内実習科目において臨地実習前技能到達度評価を実施し、実習に必要な知識、技能や接遇能力を習得しているかの確認を行い、臨地実習を行うことが可能な水準に達しているかの能力評価を行う。

さらに、卒業研究は、少人数制で実施することで、科学的思考力、研究能力、及びデータ管理能力が高められる指導を行う。また、所定科目履修者は在学中に、健康食品管理士、遺伝子分析科学認定士及び食品衛生管理者・食品衛生監視員の資格取得が可能な科目体制を設けている。

【教育課程の科目編成区分】

- (1) 全科目は「教養教育科目」、「専門基礎科目」、「専門科目」の3領域に大きく区分している。
- (2) 「教養教育科目」は、＜人文科学＞、＜社会科学＞、＜自然科学＞、＜外国語＞、＜情報科学＞、＜健康科学＞、＜総合科目＞に細区分している。
- (3) 「専門科目」は＜分析検査学＞、＜形態検査学＞、＜検査情報解析検査学＞、＜総合検査学＞、＜臨地実習＞に細区分している。

授業科目表をみればわかるように、履修すべき内容は多岐にわたっているが専門科目のそのほとんどが必修科目である。卒業後の個人の目標や夢を実現するには可能な限り選択科目も多く履修することが望ましい。さらに、資格取得後は医療従事者の一人として社会に貢献できるよう学生時代からの準備を期待したい。

卒業要件

(単位)

	必修	選択	計
教養教育科目	8	20 以上	28 以上
専門基礎科目	21	6 以上	27 以上
専門科目	64	5 以上	69 以上
計	93	31 以上	124 以上

【卒業の認定に関する方針 (DP)】

臨床検査学科では、以下に示された能力を卒業までに修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（臨床検査学）の学位を授与する。

- ①豊かな人間性と高い倫理観を身に付けている。
- ②臨床検査に必要な専門的な知識・技術と実践能力を身に付けている。
- ③臨床検査学発展のために、自らの能力の向上に努め、データ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を身に付けている。
- ④国際感覚を備え、臨床検査を通して、地域社会に広く貢献できる能力を身に付けている。
- ⑤医療・環境・食品・保健分野などで、他職種と連携しながら、幅広く活躍できる能力を身に付けている。

〔補足〕 DP（ディプロマ・ポリシー）についての説明

次頁以降にある授業科目表の「DP との関連」に記載されている番号は、下記内容に対応しています。

＜看護学科＞

看護学科では、以下に示された能力を修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（看護学）の学位を授与する。

①	一人ひとりの人間を総合的に理解し、互いに成長し合える関係形成ができる基礎的能力を身に付けている。
②	人の尊厳と権利を擁護する看護について探究し、倫理的判断に基づいて行動できる基礎的能力を身に付けている。
③	看護の対象と状況を的確にアセスメントし、根拠に基づく看護が実践できる基礎的能力を身に付けている。
④	看護の実践・研究・教育の場で、将来、論理的に課題を探究し対応できる基礎的能力を身に付けている。
⑤	看護の対象を取り巻く保健・医療・福祉チーム員の役割を理解し、人々と連携協働しリーダーシップが発揮できる基礎的能力を身に付けている。
⑥	常に変化する社会に関心を寄せ、地域における看護の課題を探究し、新たな看護を創造できる基礎的能力を身に付けている。
⑦	看護を学ぶ自分と真摯に向き合い、看護専門職として誇りと責任をもって実践し成長し続ける基礎的能力を身に付けている。

＜臨床検査学科＞

臨床検査学科では、以下に示された能力を卒業までに修得することを重視して成績評価を行い、所定の単位を修得した学生に対して、卒業を認め、学士（臨床検査学）の学位を授与する。

①	豊かな人間性と高い倫理観を身に付けている。
②	臨床検査に必要な専門的な知識・技術と実践能力を身に付けている。
③	臨床検査学発展のために、自らの能力の向上に努め、データ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を身に付けている。
④	国際感覚を備え、臨床検査を通して、地域社会に広く貢献できる能力を身に付けている。
⑤	医療・環境・食品・保健分野などで、他職種と連携しながら、幅広く活躍できる能力を身に付けている。

1 看護学科 授業科目表【令和3年度以後入学生に適用】

基礎科目群

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	看護 共通	DPとの 関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択					
自然	生物学	新美健太	1			2	30	○	④	2単位以上 (選択2単位以上)	29
	化学	小森博文	1			2	30	○	④		30
	物理学	鶴町徳昭	1			2	30	○	④		31
人間	教育学	松原勝敏	1			2	30	○	①④	4単位以上 (必修1単位) (選択3単位以上)	32
	心理学	大久保智生		1		2	30	○	①④		33
	哲学	三宅岳史		1		2	30	○	②④		34
	健康科学	石川雄一	1			1	15	○	③④		35
	健康スポーツ	石川雄一、石田佳二	1			1	30	○	③		36
	障がい論	枝川千鶴子		3		1	15		②④		37
	生命倫理	南貴子、岡田仁、塩田敦子		3	1		15		②⑤		38
社会	社会学	加野芳正	1			2	30	○	①④	4単位以上 (必修1単位) (選択3単位以上)	39
	法学	辻上佳輝		1		2	30	○	②④		40
	経済学	福村晃一	1			2	30	○	①④		41
	史学	武重千尋	1			2	30	○	①④		42
	文化人類学	丹羽佑一	1			2	30	○	①②		43
	医療倫理学	近藤真紀子、岡西幸恵、岩本真紀、森田公美子、 中島文香、金アンナ、他	3			1	15		①②		44
	社会保障論	北川裕美子		2	1		15		②		45
情報	情報リテラシー	比江島欣慎	1		1		15		①	3単位 (必修3単位)	46
	看護情報学	比江島欣慎		1	1		15		④⑥		47
	看護統計	比江島欣慎		2	1		15		④⑥		48
外国語	英語Ⅰ	南貴子	1		2		30	○	①⑦	6単位以上 (必修4単位) (選択2単位以上)	49
	英語Ⅱ	南貴子		1	2		30	○	①⑦		50
	英語Ⅲ	南貴子	2			2	30	○	①④		51
	英語Ⅳ	南貴子		2		2	30	○	①④		52
	中国語Ⅰ	毛勇	2			2	30	○	①④		53
	中国語Ⅱ	毛勇		2		2	30	○	①④		54
健康	人体の構造と機能Ⅰ (消化吸収、血液と呼吸の働き)	松本由樹	1		2		30		④	18単位以上 (必修17単位) (選択11単位以上)	55
	人体の構造と機能Ⅱ (内部調節、脳神経、身体運動)	松本由樹	1		2		30		④		56
	人体の構造と機能Ⅲ (生化学/栄養代謝)	新美健太		1	1		15		④		57
	人体の構造と機能Ⅳ (生体防御/感染)	奥田潤		1	1		15		④		58
	病理学概論	水津太、平川栄一郎		1	1		15		④		59
	疾病と治療Ⅰ (呼吸器、循環器、消化器)	筒井邦彦		1	2		30		④		60
	疾病と治療Ⅱ (内分泌代謝、腎泌尿器、女性生殖器)	筒井邦彦、樋本尚志、塩田敦子		1	2		30		④		61
	疾病と治療Ⅲ (血液、脳神経、運動器)	筒井邦彦、松下誠司		1	2		30		④		62
	疾病と治療Ⅳ (産科、小児科)	塩田敦子、中村信嗣	3		1		15		④		63
	疾病と治療Ⅴ (精神科)	松村義人	3		1		15		④		64
	臨床薬理	香西祥子		3	1		15		④⑤		65
	臨床栄養	片山陽子		3	1		15		④⑤		66
	医療とME機器	大栗聖由	2			1	15		④⑤		67
	臨床心理学	竹森元彦	2			1	15		①④		68
	臨床検査ラボラトリー	多田達史	2			1	15		④⑤		69
基礎科目群 計					26	37	960			37単位以上 (必修26単位) (選択11単位以上)	
基礎科目群 進級要件単位数		2年次への進級要件			19	6※1					
		3年次への進級要件			2	3※2					
		4年次への進級要件			5	2※3					

「進級要件単位数」の見方

- ※1 「自然」「人間」「社会」の卒業要件単位数を充たすように1年次に最低2単位ずつ（計6単位）は修得しておく必要があります。また、1年次に各2単位しか修得しない場合、「人間」及び「社会」については忘れずに3年次配当の選択科目を修得する必要があります。
- ※2 「外国語」及び「健康」の選択科目は2年次にしか配当が無いため、卒業要件単位数を充たすためには2年次に最低「外国語」から2単位、「健康」から1単位の計3単位を修得しておく必要があります。
- ※3 選択科目の4年次への進級要件単位数が「2」となっているのは、「3年次に必ず2単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。
「人間」及び「社会」について、1年次の修得単位数が各2単位である場合は、卒業要件単位数を充たすためには、4年次には選択科目の配当がないので、3年次に「障がい論」及び「医療倫理学」の計2単位を修得していなければ4年次へ進級できない」という意味です。

「DPとの関連」の見方

当該科目の内容がDPのいずれの項目と関連するかを示しています。番号は「履修にあたって」及び「〔補足〕DPについての説明」記載のDPの項目番号と対応しています。
看護学科・臨床検査学科共通の科目は、掲載ページの学科のDPとの関連を示しています。

看護専門科目群 (1/2)

(令和3年度以後入学生に適用)

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択				
看護学 総論	看護学概論Ⅰ（看護の概念）	小野美穂	1		1		15	①②	5単位 (必修5単位)	70
	看護学概論Ⅱ（看護専門職と倫理）	小野美穂		1	1		15	②⑦		71
	看護学概論Ⅲ（看護サービス管理）	片山陽子、平木民子	4		1		15	⑤⑥		72
	看護教育	小野美穂		2	1		15	⑤⑦		73
	看護管理	小野美穂		2	1		15	⑤⑥		74
看護 技術論 臨床 推論	看護技術論Ⅰ（援助的人間関係）	則包和也、土岐弘美、多田羅光美	1		1		30	①③	13単位 (必修13単位)	75
	看護技術論Ⅱ（日常生活援助技術①）	呉小玉、重兼望、新任教員	1		1		30	③④		76
	看護技術論Ⅲ（フィジカルアセスメント①）	新井恵津子、小林秋恵、重兼望、筒井邦彦、新任教員		1	1		30	③④		77
	看護技術論Ⅳ（日常生活援助技術②）	呉小玉、重兼望、新任教員		1	2		45	③④		78
	看護技術論Ⅴ（診療に伴う技術）	新井恵津子、重兼望、新任教員	2		1		30	③④		79
	看護技術論Ⅵ（フィジカルアセスメント②）	筒井邦彦、新井恵津子、重兼望、新任教員	2		2		45	③④		80
	総合看護技術演習Ⅰ（1年+2年）	小林秋恵、小野美穂、新井恵津子、重兼望、多田羅光美、他演習担当教員		1	1		15	③④		81
	総合看護技術演習Ⅱ（1年+2年）	竹内千夏、平井智重子、和田知世、新任教員、他演習担当教員		2	1		15	③④		82
	臨床推論演習Ⅰ（2年+4年）	小林秋恵、小野美穂、新井恵津子、重兼望、新任教員、他演習担当教員	2		1		15	③④		83
	臨床推論演習Ⅱ（3年のみ）	岡田麻里、竹内千夏、吉本知恵、片山陽子、平井智重子、和田知世、他演習担当教員		3	1		30	③④		84
看護 過程論	看護過程論Ⅰ（看護過程の方法論）	小林秋恵、小野美穂、新井恵津子、重兼望、岡田麻里、竹内千夏、多田羅光美、松本裕子、他演習教員	2		2		45	③④	6単位 (必修6単位)	86
	看護過程論Ⅱ（呼吸と循環のアセスメント）	新井恵津子、岩本真紀	2		1		15	③④		87
	看護過程論Ⅲ（栄養代謝と排泄のアセスメント）	森田公美子、重兼望	2		1		15	③④		88
	看護過程論Ⅳ（活動と休息のアセスメント）	小林秋恵、竹内千夏	2		1		15	③④		89
	看護過程論Ⅴ（心と身体の関係アセスメント）	土岐弘美、則包和也、多田羅光美	2		1		15	①④		90
健康 レベル 別看護 論	プライマリーヘルスケア	岡田麻理、他	2		1		15	⑤⑥	8単位 (必修8単位)	91
	慢性期ケア	近藤真紀子、森田公美子、岩本真紀、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、他	2		2		45	③④		92
	急性期ケア	近藤真紀子、岩本真紀、岡西幸恵、森田公美子、中島文香、金アンナ		3	2		45	③④		93
	リハビリテーション看護	近藤真紀子、岩本真紀、森田公美子、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、他		2	1		15	③④		94
	緩和・エンドオブライフケア	近藤真紀子、岩本真紀、森田公美子、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、片山陽子、他	3		1		15	③④		95
	健康レベル別看護技術演習	近藤真紀子、岩本真紀、森田公美子、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、他	4		1		30	③④		96
発達段 階別看護 論	成人看護学概論	近藤真紀子、岩本真紀	2		1		15	③④	9単位 (必修9単位)	97
	老年看護学Ⅰ（対象理解）	吉本知恵、竹内千夏、平井智重子		2	1		30	③④		98
	老年看護学Ⅱ（援助方法）	吉本知恵、竹内千夏、平井智重子	3		1		30	③④		99
	母性看護学Ⅰ（対象理解）	木戸久美子、植村裕子、松下有希子、十河美智子		2	2		45	③④		100
	母性看護学Ⅱ（援助方法）	植村裕子、木戸久美子、松下有希子、十河美智子	3		1		30	③④		101
	小児看護学Ⅰ（対象理解）	枝川千鶴子、松本裕子、加藤豊		2	2		45	③④		102
	小児看護学Ⅱ（援助方法）	枝川千鶴子、松本裕子、加藤豊	3		1		30	③④		103
メンタル ヘルス看護 論	精神保健看護学Ⅰ（対象理解）	則包和也、土岐弘美、多田羅光美		2	1		30	④⑦	2単位 (必修2単位)	104
	精神保健看護学Ⅱ（援助方法）	則包和也、土岐弘美、多田羅光美	3		1		30	①③		105
地域・ 在宅看護 論	地域看護学Ⅰ（看護職の活動の場と役割）	片山陽子、辻よしみ、木戸久美子、佐々木純子、他	1		1		15	⑤⑥	7単位以上 (必修7単位)	106
	地域看護学Ⅱ（ライフサイクルと健康支援）	佐々木純子、辻よしみ		1	1		15	⑤⑥		107
	離島看護学Ⅰ（へき地の暮らし）	近藤真紀子、岡西幸恵、岩本真紀、森田公美子、中島文香、金アンナ、片山陽子、他		1	1		15	④⑥		108
	離島看護学Ⅱ（へき地の看護活動）	近藤真紀子、岡西幸恵、岩本真紀、森田公美子、中島文香、金アンナ、他	2		1		15	④⑥		109
	在宅看護学Ⅰ（概論）	片山陽子		2	1		30	③④		110
	在宅看護学Ⅱ（展開論）	片山陽子、岡田麻里、和田知世	3		1		30	③④		111
	地域包括ケア論	佐々木純子、岡田麻里		3	1		15	④⑥		112

看護専門科目群 (2/2)

(令和3年度以後入学生に適用)

科目名			担当教員		配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
					前期	後期	必修	選択				
看護発展論	家族看護	岡田麻里、他		2			1		15	③④	2 単位以上 (選択 2 単位以上)	113
	がん看護	近藤真紀子、森田公美子、岩本真紀、岡西幸恵、中島文香、金アンナ	4				1		15	③④		114
	チーム医療	岡田麻里、竹内千夏		3			1		15	⑤⑦		115
	看護における代替療法	塩田敦子	4				1		15	③④		116
	訪問看護論	片山陽子		3			1		15	③④		117
	看護政策論	井伊久美子	4				1		15	④⑥	3 単位以上 (選択 3 単位以上)	118
	災害看護	松本登紀子	4				1		15	④⑥		119
	看護職のメンタルヘルス	則包和也	4				1		15	①⑦		120
	リプロダクティブ・ヘルス	植村裕子、木戸久美子、松下有希子、十河美智子		3			1		15	④⑥		121
	地域保健論	辻よしみ、佐々木純子		3			1		15	④⑥		122
	異文化看護	片山陽子	4				1		15	①④		123
看護学実習	看護学導入実習	小野美穂、片山陽子、辻よしみ、木戸久美子、岡田麻里、小林秋恵、他引率教員	1			1			45	④⑥	2 5 単位 (必修 2 5 単位)	124
	看護技術論実習	吳小玉、小野美穂、小林秋恵、新井恵津子、重兼望、中島文香、金アンナ、他担当教員		1		2			90	①③		125
	看護過程論実習	近藤真紀子、岩本真紀、森田公美子、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、小野美穂、小林秋恵、新井恵津子、重兼望、他実習指導教員	2			4			180	③④		126
	発達段階別看護論実習Ⅰ (母性看護学)	木戸久美子、植村裕子、松下有希子、十河美智子		3		2			90	③④		127
	発達段階別看護論実習Ⅱ (小児看護学)	枝川千鶴子、松本裕子、加藤豊		3		2			90	③④		128
	発達段階別看護論実習Ⅲ (老年看護学)	吉本知恵、竹内千夏、平井智重子		3		2			90	③④		129
	メンタルヘルス看護論実習 (精神保健看護学)	則包和也、土岐弘美、多田羅光美		3		2			90	①③		130
	在宅看護学実習	片山陽子、岡田麻里、和田知世、他		3		2			90	③⑤		131
	健康レベル別看護論実習	近藤真紀子、岩本真紀、森田公美子、岡西幸恵、中島文香、金アンナ、重兼望	4			3			135	③⑤		132
	看護学総合実習	吉本知恵、他看護学科教員		4		3			135	③⑥		133
	地域健康サポーター実習	岡田麻里、片山陽子、辻よしみ、佐々木純子、植原千明、藤村保志花、枝川千鶴子、松本裕子、加藤豊、則包和也、土岐弘美、多田羅光美、竹内千夏、平井智重子、他		2～4		2			90	⑥⑦		134
看護ゼミナール・看護研究	看護研究方法論Ⅰ (看護研究概要/文献検討方法)	枝川千鶴子	3			1			30	③④	9 単位 (必修 9 単位)	135
	看護研究方法論Ⅱ (研究計画書/質的研究)	吉本知恵、土岐弘美		3		1			30	③④		136
	看護研究方法論Ⅲ (量的研究)	比江島欣慎		3		1			15	③④		137
	看護ゼミナールⅠ (大学での学び方)	則包和也、吉本知恵、佐々木純子、筒井邦彦、比江島欣慎、枝川千鶴子、小林秋恵、土岐弘美、多田羅光美、植原千明、新井恵津子		1		2			60	④⑦		138
	看護ゼミナールⅡ (実践知の探究)	多田羅光美、則包和也、土岐弘美、枝川千鶴子、松本裕子、加藤豊		3		2			60	④⑦		139
	看護研究	吉本知恵、他看護学科教員		4		2			60	④⑦		140
	看護研究	吉本知恵、他看護学科教員		4		2			60	④⑦		140
看護専門科目群計							84	11	2,625		89 単位以上 (必修 84 単位) (選択 5 単位以上)	
看護専門科目群 進級要件単位数			2 年次への進級要件				16					
			3 年次への進級要件				30					
			4 年次への進級要件				25					

2 臨床検査学科 授業科目表【令和7年度以後入学生に適用】

基礎科目群 (1/2)

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	看護 共通	DPとの 関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択					
人文科学	日本語表現法	秋山達也	1			2	30		①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	141
	哲学	三宅岳史		1		2	30	○	①③		34
	史学	武重千尋	1			2	30	○	①⑤		42
	心理学	大久保智生		1		2	30	○	①⑤		33
	倫理学	佐藤慶太		1		2	30		①⑤		142
社会・健康科学	法学	辻上佳輝		1		2	30	○	①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	40
	教育学	松原勝敏	1			2	30	○	①⑤		32
	社会学	加野芳正	1			2	30	○	①③		39
	経済学	福村晃一	1			2	30	○	①③		41
	文化人類学	丹羽佑一	1			2	30	○	①③		45
	健康科学	石川雄一	1			1	15	○	①③		35
	健康スポーツ	石川雄一、石田佳二	1			1	30	○	①⑤		36
自然科学	物理学	鶴町徳昭	1			2	30	○	②③	8 単位以上 (選択 8 単位以上)	31
	物理学実験	鶴町徳昭、太田安彦		1		1	30		②③		143
	化学	小森博文	1			2	30	○	②③		30
	化学実験	新美健太		1		1	30		②③		144
	生物学	新美健太	1			2	30	○	②③		29
	生物学実験	新美健太		1		1	30		②③		145
外国語	英語Ⅰ	南貴子	1		2		30	○	④⑤	6 単位以上 (必修 4 単位) (選択 2 単位以上)	49
	英語Ⅱ	南貴子		1	2		30	○	④⑤		50
	英語Ⅲ	—	2			2	30	○	④⑤		—
	英語Ⅳ	—		2		2	30	○	④⑤		—
	中国語Ⅰ	—	2			2	30	○	④⑤		—
	中国語Ⅱ	—		2		2	30	○	④⑤		—
情報科学	情報科学Ⅰ	服部哲郎	1		1		30		③⑤	3 単位 (必修 3 単位)	146
	情報科学Ⅱ	服部哲郎		1	1		30		③⑤		147
	情報科学演習	服部哲郎	1		1		30		③⑤		148
総合科目	教養講座・香川	古山達雄、新美健太、南貴子、他	1		1		15		④⑤	1 単位 (必修 1 単位)	149
計					8	39	810			26単位以上 (必修8単位) (選択18単位以上)	
進級要件単位数		2年次への進級要件			8	16※1					
		3年次への進級要件				2					
		4年次への進級要件									

「進級要件単位数」の見方

※1 教養基礎科目の選択科目は3・4年次に配当が無いいため、卒業要件を充たすためには1年次のみに配当のある「人文科学」「社会・健康科学」「自然科学」の卒業要件単位数を充たし、最低16単位を修得しておく必要があります。

「DPとの関連」の見方

当該科目の内容がDPのいずれの項目と関連するかを示しています。番号は「履修にあたって」及び「〔補足〕DPについての説明」記載のDPの項目番号と対応しています。看護学科・臨床検査学科共通の科目は、掲載ページの学科のDPとの関連を示しています。

基礎科目群 (2/2)

(令和7年度以後入学生に適用)

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択				
専門基礎	解剖学	古山達雄	1		2		45	②③	9 単位 (必修 9 単位)	150
	解剖学実習	古山達雄、新美健太		1	1		30	②③		151
	生理学	古山達雄	1		2		45	②③		152
	生理学実習	—	2		1		30	②③		—
	生化学Ⅰ(人体の構造と機能Ⅲ)	新美健太		1	1		15	②③		153
	生化学Ⅱ	太田安彦		1	1		15	②③		154
	生化学実習	—	2		1		30	②③		—
	生命科学概論	岡田仁	1		1		30	②③	7 単位 (必修 7 単位)	155
	微生物学	奥田潤		1	2		30	②③		156
	病理病態学	水津太、平川栄一郎		1	2		30	②③		157
	検査機器概論	太田安彦、宮川朱美、末澤千草、小河佳織、森西起也、近藤明宏、青野りよ		1	1		30	②③		158
	薬理学	—		2	1		30	②③	10 単位以上 (必修 6 単位) (選択 4 単位以上)	—
	公衆衛生学Ⅰ(保健)	—	2		1		15	②③		—
	公衆衛生学Ⅱ(疫学)	—	2		1		15	②③		—
	公衆衛生学Ⅲ(環境)	—	2		1		15	②③		—
	食品衛生学 ▲	—	2			1	15	②③		—
	環境・食品検査学実習	—		2	1		30	②⑤		—
	社会福祉学	辰巳裕子		1		1	30	①③		159
	瀬戸内圏環境論	平篤志	1			1	15	①③		160
	国際保健論	太田安彦、新田恭子、依田健志、末澤千草、他	1			1	15	④⑤		161
	組織論	片山昭彦	1			1	15	③⑤		162
	地域チーム医療論	—	2		1		15	④⑤		—
	医療統計学Ⅰ	横山佳充		1	1		30	②③		163
	医療統計学Ⅱ	—	4			1	15	②③	3 単位 (必修 3 単位)	—
	医用電子工学	生越重章		1	1		30	②③		164
	医用電子工学演習	生越重章、近藤明宏		1	1		30	②③		165
	医療情報処理学	—	2		1		15	①⑤	—	—
計					25	6	690		29単位以上 (必修25単位) (選択4単位以上)	
進級要件単位数		2年次への進級要件			16	2※1				
		3年次への進級要件			9	1※1				
		4年次への進級要件								

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

「進級要件単位数」の見方

※1 選択科目の2年次への進級要件単位数が「2」、3年次への進級要件単位数が「1」となっているのは、「1年次に必ず2単位、2年次に必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「専門基礎科目の選択科目は、3年次に配当がなく、また4年次でも1単位しか配当がないため、卒業要件である選択4単位以上を充たすためには、1年次に選択科目を最低でも2単位は修得しておかなければ進級できず、仮に1年次での選択が2単位である場合は、2年次には必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味です。そのため、1年次に選択科目を2単位修得していれば、2年次に配当されている「食品衛生学」の選択1単位のみの修得で進級は可能です。

臨床検査専門科目群

(令和7年度以後入学生に適用)

	科目名	担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択				
分析検査学	臨床化学検査学	—	2		1		30	②③	20単位 (必修20単位)	—
	生体試料分析検査学	—	2		1		30	②③		—
	病態化学分析検査学	—		2	1		30	②③		—
	生体試料分析検査学実習 ★	—	3		2		60	②③		—
	一般検査学	—		2	2		30	②③		—
	一般検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	放射性同位元素学	—	3		1		15	②③		—
	分子生物学	—	2		1		30	②③		—
	分子生物学実習	—		2	1		30	②③		—
	臨床遺伝子検査学	—	3		1		30	②③		—
	臨床遺伝子検査学実習	—	3		1		30	②③		—
	生体防御検査学	—	2		1		30	②③		—
	高感度分析検査学	—		2	1		30	②③		—
	高感度分析検査学実習 ★	—		2	1		30	②③		—
形態検査学	輸血・移植検査学	—	3		2		30	②③	19単位以上 (必修18単位) (選択1単位以上)	—
	輸血・移植検査学演習	—	2		1		15	②③		—
	輸血・移植検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	微生物検査学	—	2		2		30	②③		—
	細菌検査学実習 ★	—		2	2		60	②③		—
	ウイルス・真菌検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	医動物検査学演習 ★	—		2	1		30	②③		—
	病理病態学演習	—		2	2		30	②③		—
	病理検査学	—	3		2		30	②③		—
	病理検査学実習 ★	—	3		2		60	②③		—
	血液検査学Ⅰ	—	2		2		30	②③		—
	血液検査学Ⅱ	—		2	2		30	②③		—
	血液検査学実習 ★	—	3		2		60	②③		—
	顕微鏡技術論	水津太、太田安彦、末澤千草、森西起也、近藤明宏	1			1	15	②③		166
検査情報解析検査学	写真技術論	—	2			1	15	②③	22単位 (必修22単位)	—
	生体画像情報検査学	—	2		4		60	②③		—
	生体制御機能検査学	—		2	3		45	②③		—
	生体機能検査学実習Ⅰ ★	—		2	2		60	②③		—
	生体機能検査学実習Ⅱ ★	—	3		2		60	②③		—
	臨床医学Ⅰ	樋本尚志		1	1		30	②⑤		167
	臨床医学Ⅱ	—	2		2		45	②③		—
	病態生理機能検査学	—		2	1		30	②③		—
	病態代謝機能検査学	—	3		2		45	②③		—
	検査精度保証管理学 ★	—	3		1		30	②③		—
	検査分析システム学	—		3	2		30	②⑤		—
	検査情報解析学	—	4		1		15	①③		—
	臨床検査管理運営学	—	4		1		15	③⑤		—
総合検査学	検査学概論	多田達史	1		1		15	①②	15単位以上 (必修10単位) (選択5単位以上)	168
	臨床検査学体験実習	多田達史、奥田潤、樋本尚志、岡田仁、水津太、池亀彰茂、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、小河佳織、森西起也、近藤明宏、青野りよ		1		1	15	②③		169
	基礎検査技術学演習	—	2		1		15	①②		—
	専門ゼミナール（臨床検査）	—		3	1		30	①③		—
	臨床検査関係法規	—	4		1		15	②③		—
	先端医療技術学	—		4	1		15	②⑤		—
	医療安全管理学	—		4	2		30	②⑤		—
	検診検査学	—		3	1		15	②③		—
	生殖補助医療技術論	—		3		1	15	①⑤		—
	リスクマネジメント	—		4		1	15	①④		—
	遺伝子分析科学	—	4			1	30	②③		—
	健康食品学	—	3		2		30	④⑤		—
	健康食品学関係法規 ▲	—	3			1	15	④⑤		—
	卒業研究	—	4			3	135	②③		—
臨床実習	臨床実習前技能到達度評価★	—	3		1		30	①②	12単位 (必修12単位)	—
	臨床検査総論臨床実習	—		3	2		60	①②		—
	病理組織細胞学臨床実習	—		3	2		60	①②		—
	臨床生理検査学臨床実習	—		3	3		90	①②		—
	臨床化学検査学臨床実習	—		3	1		30	①②		—
	臨床血液検査学臨床実習	—		3	1		30	①②		—
	臨床微生物検査学臨床実習	—		3	1		30	①②		—
	臨床免疫検査学・輸血移植免疫検査学臨床実習	—		3	1		30	①②		—
計					82	10	2,145		88単位以上 (必修82単位) (選択6単位以上)	
進級要件単位数		2年次への進級要件			2					
		3年次への進級要件			35	1※1				
		4年次への進級要件			39					

★：臨床実習を履修するために、単位修得を必要とする科目

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

※1 進級要件単位数の見方…選択科目の3年次への進級要件単位数が「1」となっているのは、「2年次に必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「形態検査学」領域について、卒業要件である選択1単位以上を充たすためには、3・4年次には選択科目の配当がないので、1年次に配当の「顕微鏡技術論」か、2年次に配当の「写真技術論」のどちらか最低1単位を修得していなければ3年次へ進級できない」という意味です。

3 臨床検査学科 授業科目表【令和4～6年度入学生に適用】

基礎科目群 (1/2)

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	看臨 共通	DPとの 関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択					
人文科学	日本語表現法	—	1			2	30		①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	—
	哲学	—		1		2	30	○	①③		—
	史学	—	1			2	30	○	①⑤		—
	心理学	—		1		2	30	○	①⑤		—
	倫理学	—		1		2	30		①⑤		—
社会科学	法学	—		1		2	30	○	①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	—
	教育学	—	1			2	30	○	①⑤		—
	社会学	—	1			2	30	○	①③		—
	経済学	—	1			2	30	○	①③		—
	文化人類学	—	1			2	30	○	①③		—
自然科学	物理学	—	1			2	30	○	②③	8 単位以上 (選択 8 単位以上)	—
	物理学実験	—		1		1	30		②③		—
	化学	—	1			2	30	○	②③		—
	化学実験	—		1		1	30		②③		—
	生物学	—	1			2	30	○	②③		—
	生物学実験	—		1		1	30		②③		—
外国語	英語Ⅰ	—	1		2		30	○	④⑤	6 単位以上 (必修 4 単位) (選択 2 単位以上)	—
	英語Ⅱ	—		1	2		30	○	④⑤		—
	英語Ⅲ	南貴子	2			2	30	○	④⑤		51
	英語Ⅳ	南貴子		2		2	30	○	④⑤		52
	中国語Ⅰ	毛勇	2			2	30	○	④⑤		53
	中国語Ⅱ	毛勇		2		2	30	○	④⑤		54
情報科学	情報科学Ⅰ	—	1		1		30		③⑤	3 単位 (必修 3 単位)	—
	情報科学Ⅱ	—		1	1		30		③⑤		—
	情報科学演習	—	1		1		30		③⑤		—
健康科学	健康科学	—	1			1	15	○	①③		—
	健康スポーツ	—	1			1	30	○	①⑤		—
総合科目	教養講座・香川	—	1		1		※3		④⑤	1 単位 (必修 1 単位)	—
上記の選択科目から 2 単位										2 単位以上 (選択 2 単位以上)	
計					8	39	※3			28 単位以上 (必修 8 単位) (選択 20 単位以上)	
進級要件単位数	2 年次への進級要件				8	16※1					
	3 年次への進級要件					4※2					
	4 年次への進級要件										

「進級要件単位数」の見方

※1 教養基礎科目の選択科目は3・4年次に配当が無いため、卒業要件を充たすためには1年次のみに配当のある「人文科学」「社会科学」「自然科学」の卒業要件単位数を充たし、最低16単位を修得しておく必要があります。

※2 選択科目の3年次への進級要件単位数が「4」となっているのは、「2年次に必ず4単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。例えば、「1年次に修得した選択科目が16単位の場合、3・4年次には配当科目が無いため、卒業要件である選択20単位以上を充たすためには、2年次に選択科目を4単位修得しておかなければ進級できない」という意味です。そのため、1年次に選択科目を18単位以上を修得していれば、少なくとも2年次に配当されている「外国語」の選択科目2単位のための修得で進級可能です。自分が修得している科目は何か、修得単位数はいくつなのかをよく確認し、計画を立てて履修しましょう。

「DPとの関連」の見方

当該科目の内容がDPのいずれの項目と関連するかを示しています。番号は「履修にあたって」及び「〔補足〕DPについての説明」記載のDPの項目番号と対応しています。看護学科・臨床検査学科共通の科目は、掲載ページの学科のDPとの関連を示しています。

<補足>

※3 令和4～5年度入学生は30時間（合計825時間）、令和6年度入学生は15時間（合計810時間）。

基礎科目群 (2/2)

(令和4～6年度入学生に適用)

科目名	担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
		前期	後期	必修	選択				
専門基礎	解剖学	—	1	2		45	②③	9 単位 (必修 9 単位)	—
	解剖学実習	—	1	1		30	②③		—
	生理学	—	1	2		45	②③		—
	生理学実習	古山達雄、新美健太	2	1		30	②③		170
	生化学Ⅰ(人体の構造と機能Ⅲ)	—	1	1		15	②③		—
	生化学Ⅱ	—	1	1		15	②③		—
	生化学実習	新美健太	2	1		30	②③		171
	生命科学概論	—	1	1		30	②③	7 単位 (必修 7 単位)	—
	微生物学	—	1	2		30	②③		—
	病理病態学	—	1	2		30	②③		—
	検査機器概論	—	1	1		30	②③		—
	薬理学	小坂信二、田中裕章、芳地一	2	1		30	②③	10 単位以上 (必修 6 単位) (選択 4 単位以上)	172
	公衆衛生学Ⅰ(保健)	竹内一	2	1		15	②③		173
	公衆衛生学Ⅱ(疫学)	比江島欣愼	2	1		15	②③		174
	公衆衛生学Ⅲ(環境)	桐山賀充	2	1		15	②③		175
	食品衛生学 ▲	中内康起	2		1	15	②③		176
	環境・食品検査学実習	池亀彰茂、安永恵、長尾裕一、千原涼子、小林龍太郎、小河佳織		2	1	30	②⑤		177
	社会福祉学	—	※2	※2	1	30	①③		—
	瀬戸内圏環境論	—	1		1	15	①③		—
	国際保健論	—	1		1	15	④⑤		—
	組織論	—	1		1	15	③⑤		—
	地域チーム医療論	多田達史、松本裕子、岡田仁、中村丈洋	2		1	15	④⑤		178
	医療統計学Ⅰ	—		1	1	30	②③		—
	医療統計学Ⅱ	太田安彦	4		1	15	②③		179
	人間工学	—		1	1	※3	②⑤	4 単位 (必修 4 単位)	—
	医用電子工学	—		1	1	30	②③		—
	医用電子工学演習	—		1	1	30	②③		—
	医療情報処理学	徳原康哲	2		1	15	①⑤		180
計				26	6	※3		30単位以上 (必修26単位) (選択4単位以上)	
進級要件単位数	2年次への進級要件			17	2※1				
	3年次への進級要件			9	1※1				
	4年次への進級要件								

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

「進級要件単位数」の見方

※1 選択科目の2年次への進級要件単位数が「2」、3年次への進級要件単位数が「1」となっているのは、「1年次に必ず2単位、2年次に必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「専門基礎科目の選択科目は、3年次に配当がなく、また4年次でも1単位しか配当がないため、卒業要件である選択4単位以上を充たすためには、1年次に選択科目を最低でも2単位は修得しておかなければ進級できず、仮に1年次での選択が2単位である場合は、2年次には必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味です。そのため、1年次に選択科目を2単位修得していれば、2年次に配当されている「食品衛生学」の選択1単位のみの修得で進級は可能です。

<補足>

※2 令和4～5年度入学生は後期開講、令和6年度入学生は前期開講。

※3 令和4年度入学生は30時間（合計690時間）、令和5～6年度入学生は15時間（合計675時間）。

臨床検査専門科目群

(令和4～6年度入学生に適用)

科目名	担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
		前期	後期	必修	選択				
分析検査学	臨床化学検査学	多田達史	2		1	30	②③	20単位 (必修20単位)	181
	生体試料分析検査学	多田達史	2		1	30	②③		182
	病態化学分析検査学	多田達史		2	1	30	②③		183
	生体試料分析検査学実習 ★	多田達史、太田安彦	3		2	60	②③		184
	一般検査学	池亀彰茂、徳原康哲		2	2	30	②③		185
	一般検査学実習 ★	池亀彰茂、徳原康哲、森西起也	3		1	30	②③		186
	放射性同位元素学	岩崎孝信	3		1	15	②③		187
	分子生物学	岡田仁	2		1	30	②③		188
	分子生物学実習	岡田仁、青野りよ		2	1	30	②③		189
	臨床遺伝子検査学	岡田仁	3		1	30	②③		190
	臨床遺伝子検査学実習	岡田仁、青野りよ	3		1	30	②③		191
	生体防御検査学	宮川朱美	2		1	30	②③		192
	高感度分析検査学	宮川朱美		2	1	30	②③		193
	高感度分析検査学実習 ★	宮川朱美、青野りよ		2	1	30	②③		194
	輸血・移植検査学	宮川朱美	3		2	30	②③		195
	輸血・移植検査学演習	宮川朱美、青野りよ	2		1	15	②③		196
	輸血・移植検査学実習 ★	宮川朱美、青野りよ	3		1	30	②③		197
形態検査学	微生物検査学	奥田潤	2		2	30	②③	19単位以上 (必修18単位) (選択1単位以上)	198
	細菌検査学実習 ★	奥田潤、末澤千草		2	2	60	②③		199
	ウイルス・真菌検査学実習 ★	末澤千草、奥田潤、根ヶ山清	3		1	30	②③		200
	医動物検査学演習 ★	末澤千草、原田正和		2	1	30	②③		201
	病理病態学演習	水津太、森西起也		2	2	30	②③		202
	病理検査学	水津太、平川栄一郎	3		2	30	②③		203
	病理検査学実習 ★	水津太、森西起也、平川栄一郎	3		2	60	②③		204
	血液検査学Ⅰ	池亀彰茂	2		2	30	②③		205
	血液検査学Ⅱ	田岡輝久		2	2	30	②③		206
	血液検査学実習 ★	池亀彰茂、近藤明宏	3		2	60	②③		207
	顕微鏡技術論	—	1			15	②③		—
	写真技術論	田中康弘	2			15	②③		208
検査情報解析検査学	生体画像情報検査学	大栗聖由	2		4	60	②③	22単位 (必修22単位)	209
	生体制御機能検査学	樋本尚志、大栗聖由		2	3	45	②③		210
	生体機能検査学実習Ⅰ ★	樋本尚志、大栗聖由、小河佳織、近藤明宏		2	2	60	②③		211
	生体機能検査学実習Ⅱ ★	樋本尚志、太田安彦、末澤千草、大栗聖由、小河佳織	3		2	60	②③		212
	臨床医学Ⅰ	—		1	1	30	②⑤		—
	臨床医学Ⅱ	樋本尚志	2		2	45	②③		213
	病態生理機能検査学	樋本尚志		2	1	30	②③		214
	病態代謝機能検査学	樋本尚志	3		2	45	②③		215
	検査精度保証管理学 ★	徳原康哲	3		1	30	②③		216
	検査分析システム学	徳原康哲		3	2	60	②⑤		217
	検査情報解析学	徳原康哲	4		1	15	①③		218
	臨床検査管理運営学	徳原康哲	4		1	15	③⑤		219
総合検査学	検査学概論	—	1		1	15	①②	16単位以上 (必修11単位) (選択5単位以上)	—
	臨床検査学体験実習	—		1		15	②③		—
	基礎検査技術学演習	池亀彰茂、近藤明宏	2		1	15	①②		220
	専門ゼミナール(臨床検査)	多田達史、奥田潤、樋本尚志、古山達雄、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、新美健太		3	1	30	①③		221
	臨床検査関係法規	太田安彦	4		1	15	②③		222
	先端医療技術学	多田達史、平川栄一郎、奥田潤、古山達雄、樋本尚志、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、新美健太		4	2	30	②⑤		223
	医療安全管理学	多田達史、奥田潤、古山達雄、樋本尚志、小林英治、岡田仁、池亀彰茂、大栗聖由、森西起也、近藤明宏		4	2	30	②⑤		224
	検診検査学	松本導彦		3	1	15	②③		225
	生殖補助医療技術論	小河佳織、塩田敦子、中澤留美		3		15	①⑤		226
	リスクマネジメント	多田達史、奥田潤、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、小河佳織、近藤明宏、森西起也、青野りよ		4		15	①④		227
	遺伝子分析科学	岡田仁	4		1	30	②③		228
	健康食品学	太田安彦、藤井映子、多田達史、池亀彰茂、末澤千草、近藤明宏	3		2	30	④⑤		229
	健康食品学関係法規 ▲	太田安彦、末澤千草、近藤明宏、森西起也	3		1	15	④⑤		230
	卒業研究	多田達史、奥田潤、樋本尚志、古山達雄、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、新美健太、小河佳織、森西起也、近藤明宏、青野りよ	4		3	135	②③		231
臨床実習	臨地実習前技能到達度評価	多田達史、奥田潤、樋本尚志、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、小河佳織、森西起也、近藤明宏、青野りよ	3		1	30	①②	16単位 (必修16単位)	232
	臨床検査総論臨床実習	徳原康哲		3	2	60	①②		233
	病理組織細胞学臨床実習	水津太		3	2	60	①②		234
	臨床生理検査学臨床実習	樋本尚志、大栗聖由	3	3	90	①②			235
	臨床化学検査学臨床実習	多田達史	3	2	60	①②			236
	臨床血液検査学臨床実習	池亀彰茂	3	2	60	①②			237
	臨床微生物検査学臨床実習	奥田潤	3	2	60	①②			238
	臨床免疫検査学・輸血移植免疫検査学臨床実習	宮川朱美	3	2	60	①②			239
計					87	10	2,310	93単位以上 (必修87単位) (選択6単位以上)	
進級要件単位数		2年次への進級要件			2				
		3年次への進級要件			35	1※1			
		4年次への進級要件			43				

★：臨地実習を履修するために、単位修得を必要とする科目

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

※1 進級要件単位数の見方…選択科目の3年次への進級要件単位数が「1」となっているのは、「2年次に必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「形態検査学」領域について、卒業要件である選択1単位以上を充たすためには、3・4年次には選択科目の配当がないので、1年次に配当の「顕微鏡技術論」か、2年次に配当の「写真技術論」のどちらか最低1単位を修得していなければ3年次へ進級できない」という意味です。

4 臨床検査学科 授業科目表【令和3年度入学生に適用】

教養教育科目

科目名		担当教員	配当年次		単位		時間	看臨 共通	DPとの 関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択					
人文科学	日本語表現法	—	1			2	30		①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	—
	哲学	—		1		2	30	○	①③		—
	史学	—	1			2	30	○	①⑤		—
	心理学	—		1		2	30	○	①⑤		—
	倫理学	—		1		2	30		①⑤		—
社会科学	法学	—		1		2	30	○	①⑤	4 単位以上 (選択 4 単位以上)	—
	教育学	—	1			2	30	○	①⑤		—
	社会学	—	1			2	30	○	①③		—
	経済学	—	1			2	30	○	①③		—
	文化人類学	—	1			2	30	○	①③		—
自然科学	物理学	—	1			2	30	○	②③	8 単位以上 (選択 8 単位以上)	—
	物理学実験	—		1		1	30		②③		—
	化学	—	1			2	30	○	②③		—
	化学実験	—		1		1	30		②③		—
	生物学	—	1			2	30	○	②③		—
	生物学実験	—		1		1	30		②③		—
外国語	英語Ⅰ	—	1		2		30	○	④⑤	6 単位以上 (必修 4 単位) (選択 2 単位以上)	—
	英語Ⅱ	—		1	2		30	○	④⑤		—
	英語Ⅲ	—	2			2	30	○	④⑤		—
	英語Ⅳ	—		2		2	30	○	④⑤		—
	中国語Ⅰ	—	2			2	30	○	④⑤		—
	中国語Ⅱ	—		2		2	30	○	④⑤		—
情報科学	情報科学Ⅰ	—	1		1		30		③⑤	3 単位 (必修 3 単位)	—
	情報科学Ⅱ	—		1	1		30		③⑤		—
	情報科学演習	—	1		1		30		③⑤		—
健康科学	健康科学	—	1			1	15	○	①③		—
	健康スポーツ	—	1			1	30	○	①⑤		—
総合科目	教養講座・香川	—	1		1		30		④⑤	1 単位 (必修 1 単位)	—
上記の選択科目から 2 単位										2 単位以上 (選択 2 単位以上)	
計					8	39	825			28単位以上 (必修8単位) (選択20単位以上)	
進級要件単位数	2年次への進級要件				8	16※1					
	3年次への進級要件					4※2					
	4年次への進級要件										

「進級要件単位数」の見方

※1 教養教育科目の選択科目は3・4年次に配当が無いため、卒業要件を充たすためには1年次のみに配当のある「人文科学」「社会科学」「自然科学」の卒業要件単位数を充たし、最低16単位を修得しておく必要があります。

※2 選択科目の3年次への進級要件単位数が「4」となっているのは、「2年次に必ず4単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。
例えば、「1年次に修得した選択科目が16単位の場合、3・4年次には配当科目が無いため、卒業要件である選択20単位以上を充たすためには、2年次に選択科目を4単位修得しておかなければ進級できない」という意味です。そのため、1年次に選択科目を18単位以上を修得していれば、少なくとも2年次に配当されている「外国語」の選択科目2単位のための修得で進級可能です。自分が修得している科目は何か、修得単位数はいくつなのかをよく確認し、計画を立てて履修しましょう。

「DPとの関連」の見方

当該科目の内容がDPのいずれの項目と関連するかを示しています。番号は「履修にあたって」及び「補足」DPについての説明」記載のDPの項目番号と対応しています。
看護学科・臨床検査学科共通の科目は、掲載ページの学科のDPとの関連を示しています。

専門基礎科目（臨床検査学科）

（令和3年度入学生に適用）

科目名	担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの 関連	卒業要件単位数	ページ
		前期	後期	必修	選択				
解剖学Ⅰ	—	1		1		30	②③	8単位以上 (必修8単位)	—
解剖学Ⅱ	—	1		1		30	②③		—
解剖学実習	—		1	1		30	②③		—
生理学Ⅰ	—	1		1		30	②③		—
生理学Ⅱ	—	1		1		30	②③		—
生理学実習	—	2		1		30	②③		—
生化学Ⅰ	—		1	1		15	②③		—
生化学Ⅱ	—		1	1		15	②③		—
生化学実習	—	2			1	30	②③	—	
生命科学概論	—	1		1		30	②③	5単位以上 (必修4単位) (選択1単位以上)	—
微生物学	—		1	1		30	②③		—
病理病態学	—		1	1		30	②③		—
検査機器概論	—		1	1		30	②③		—
薬理学 ▲	—		2		1	30	②③		—
実験動物学演習	—	2			1	15	②③		—
公衆衛生学Ⅰ（保健）	—	2		1		15	②③	10単位以上 (必修5単位) (選択5単位以上)	—
公衆衛生学Ⅱ（疫学）	—	2		1		15	②③		—
公衆衛生学Ⅲ（環境）	—	2		1		15	②③		—
食品衛生学 ▲	—	2			1	15	②③		—
環境・食品検査学実習	—		2	1		30	②⑤		—
社会福祉学	—		1		1	30	①③		—
瀬戸内圏環境論	—	1			1	15	①③		—
国際保健論	—	1			1	15	④⑤		—
組織論	—	1			1	15	③⑤		—
地域チーム医療論	—	2			1	15	④⑤		—
医療統計学Ⅰ	—		1	1		30	②③		—
医療統計学Ⅱ	太田安彦	4			1	15	②③		179
人間工学	—		1	1		30	②⑤	4単位 (必修4単位)	—
医用電子工学	—		1	1		30	②③		—
医用電子工学演習	—		1	1		30	②③		—
医療情報処理学	—	2		1		15	①⑤		—
計				21	10	735		27単位以上 (必修21単位) (選択6単位以上)	
進級要件単位数	2年次への進級要件			15	2※1				
	3年次への進級要件			6	3※1				
	4年次への進級要件								

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

「進級要件単位数」の見方

※1 選択科目の2年次への進級要件単位数が「2」、3年次への進級要件単位数が「3」となっているのは、「1年次に必ず2単位、2年次に必ず3単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「専門基礎科目の選択科目は、3年次に配当がなく、また4年次でも1単位しか配当がないため、卒業要件である選択6単位以上を充たすためには、1年次に選択科目を最低でも2単位は修得しておかなければ進級できず、仮に1年次での選択が2単位である場合は、2年次には必ず3単位修得しなければ進級できない」という意味です。そのため、1年次に選択科目を4単位以上修得していれば、少なくとも2年次に配当されている「薬理学」又は「実験動物学演習」のどちらかの選択1単位をのみの修得で進級は可能です。

専門科目（臨床検査学科）

（令和3年度入学生に適用）

	科目名	担当教員	配当年次		単位		時間	DPとの関連	卒業要件単位数	ページ
			前期	後期	必修	選択				
分析検査学	臨床化学検査学	—	2		1		30	②③	17単位 (必修17単位)	—
	生体試料分析検査学	—	2		1		30	②③		—
	病態化学分析検査学	—		2	1		30	②③		—
	生体試料分析検査学実習 ★	—	3		2		60	②③		—
	一般検査学	—		2	1		30	②③		—
	一般検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	放射性同位元素学	—	3		1		15	②③		—
	分子生物学	—	2		1		30	②③		—
	分子生物学実習	—		2	1		30	②③		—
	臨床遺伝子検査学	—	3		1		30	②③		—
	臨床遺伝子検査学実習	—	3		1		30	②③		—
	生体防御検査学	—	2		1		30	②③		—
	高感度分析検査学	—		2	1		30	②③		—
	高感度分析検査学実習 ★	—		2	1		30	②③		—
形態検査学	輸血・移植検査学	—	3		1		30	②③	14単位以上 (必修13単位) (選択1単位以上)	—
	輸血・移植検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	微生物検査学	—	2		1		30	②③		—
	細菌検査学実習	—		2	2		60	②③		—
	ウイルス・真菌検査学実習 ★	—	3		1		30	②③		—
	医動物検査学演習 ★	—		2	1		30	②③		—
	病理病態学演習	—		2	1		30	②③		—
	病理検査学	—	3		1		30	②③		—
	病理検査学実習 ★	—	3		2		60	②③		—
	血液検査学Ⅰ	—	2		1		30	②③		—
	血液検査学Ⅱ	—		2	1		30	②③		—
検査情報解析検査学	血液検査学実習 ★	—	3		2		60	②③	19単位 (必修19単位)	—
	顕微鏡技術論	—	1			1	15	②③		—
	写真技術論	—	2			1	15	②③		—
	生体画像情報検査学	—	2		2		60	②③		—
	生体制御機能検査学	—		2	2		45	②③		—
	生体機能検査学実習Ⅰ ★	—		2	2		60	②③		—
	生体機能検査学実習Ⅱ ★	—	3		2		60	②③		—
	臨床医学Ⅰ	—		1	1		30	②⑤		—
	臨床医学Ⅱ	—	2		2		45	②③		—
	病態生理機能検査学	—		2	1		30	②③		—
	病態代謝機能検査学	—	3		2		45	②③		—
総合検査学	検査精度保証管理学 ★	—	3		1		30	②③	12単位以上 (必修8単位) (選択4単位以上)	—
	検査分析システム学	—		3	2		60	②⑤		—
	検査情報解析学	徳原康哲	4		1		15	①③		218
	臨床検査管理運営学	徳原康哲	4		1		15	③⑤		219
	検査学概論	—	1		1		15	①②		—
	臨床検査学体験実習	—		1		1	15	②③		—
	基礎検査技術学演習	—	2		1		15	①②		—
	専門ゼミナール（臨床検査）	—		3	1		30	①③		—
	臨床検査関係法規	太田安彦	4		1		15	②③		222
	先端医療技術学	多田達史、平川栄一郎、奥田潤、古山達雄、樋本尚志、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、新美健太		4	2		30	②⑤		223
	医療安全管理学	多田達史、奥田潤、古山達雄、樋本尚志、小林英治、岡田仁、池亀彰茂、大栗聖由、森西起也、近藤明宏		4	1※1		15※1	②⑤		224
	検診検査学	—		3	1		15	②③		—
	救急医学概論	R7年度開講なし		4		1	15	④⑤		—
	生殖補助医療技術論	—		3		1	15	①⑤		—
	リスクマネジメント	多田達史、奥田潤、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、小河佳織、近藤明宏、森西起也、青野りよ		4		1	15	①④		227
	遺伝子分析科学	岡田仁	4			1	30	②③		228
	健康食品学 ▲	—	3			2	30	④⑤		—
	健康食品学関係法規 ▲	—	3			1	15	④⑤		—
臨床実習	卒業研究	多田達史、奥田潤、樋本尚志、古山達雄、岡田仁、水津太、池亀彰茂、徳原康哲、宮川朱美、末澤千草、太田安彦、大栗聖由、新美健太、小河佳織、森西起也、近藤明宏、青野りよ	4			3	135	②③	7単位 (必修7単位)	231
	臨床検査総論臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	病理組織細胞学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	臨床生理検査学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	臨床化学検査学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	臨床血液検査学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	臨床微生物検査学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
	臨床免疫検査学・輸血移植免疫検査学臨床実習	—		3	1		45	①②		—
計					64	13	2,115		69単位以上 (必修64単位) (選択5単位以上)	
進級要件単位数		2年次への進級要件			2					
		3年次への進級要件			26	1※2				
		4年次への進級要件			30					

★：臨床実習を履修するために、単位修得を必要とする科目

▲：健康食品管理士認定試験受験資格上必修科目

※1 医療安全管理学単位数・時間数について…令和3年度入学生は、単位数1、時間数15時間として適用されます。

※2 進級要件単位数の見方…選択科目の3年次への進級要件単位数が「1」となっているのは、「2年次に必ず1単位修得しなければ進級できない」という意味ではありません。「形態検査学」領域について、卒業要件である選択1単位以上を充たすためには、3・4年次には選択科目の配当がないので、1年次に配当の「顕微鏡技術論」か、2年次に配当の「写真技術論」のどちらか最低1単位を修得していなければ3年次へ進級できない」という意味です。

各科目シラバス

各項目についての説明

〇〇看護学（〇〇Nursing）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学 期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担 当 教 員		科目責任者（評価責任者）には冒頭に●を表記しています。									
授業の目的		本科目でどのようなことが学べ、その学習内容がどのように使用できるのかを示しています。									
到達目標		本科目の授業終了段階で、どのようなことが出来るようになることを目指して授業を行うのかを、具体的に示しています。									
授業の進め方		到達目標に向けて、どのように学習を進めていくかを示しています。									
授業スケジュール		回	内容・教員・形式等								
		15 時間の授業は8回、30 時間の授業は 15 回、45 時間の授業は 23 回で計画し、教育内容のスケジュール等を示しています。 オムニバスの場合は、各回での担当教員を（ ）で示しています。 また、回ごとにどのような形式で授業を行うのかは【 】で示しています。									
教 科 書		授業に使用するテキストを示しています。									
参考書・参考資料		教科書として使用するテキスト以外の主要な文献資料などを示しています。									
事前学習・事後学習		到達目標を達成するために必要な時間外学習などについて示しています。									
他の授業との関連		事前に履修しておくことが望ましい科目、また、当該科目が他のどの科目に関連してくるかなど、他科目との関連を示しています。									
成績評価方法・基準・フィードバック		到達目標の達成状況の評価方法・基準とそのフィードバックの方法について示しています。									
オフィスアワー		授業に関する質問のほか、相談あるいは個人的な指導等を受けるために設定された時間を示しています。記載している日時などは、あくまでも目安として考えてください。									
備考		本科目に関連する実務経験を有する本学教員を示しています。 また、授業の目的や到達目標を達成するために学生に期待する授業に臨む姿勢や態度のほか、本科目を要件とする資格なども示しています。									

*一部シラバスに記載されている「履修要件科目」とは、その科目を履修するために単位を取得（または取得見込み）している必要がある科目のことです。

追試験・再試験の取扱い

追試験・再試験の取扱いは、「学生便覧」、「実習棟掲示板」及び「本学ホームページの在学生向け掲示板」に掲示中ですが、改めて留意事項について説明します。追再試験を受験する際には、必ずご確認ください。

追試験

・追試験は、病気その他やむを得ない理由により試験を受けられなかった者が受験できます。追試験を受けようとする場合、以下手順にて手続きを進めてください。

- ①原則、ユニバーサルパスポート当該科目の「Q&A」にて欠席理由を報告。（原則、試験開始前まで）
- ②追試験を受けようとする者は、「追試験受験願」に当該試験日に試験を受けることが出来なかった理由を証する医師の診断書等※（コピー可）を添えて、当該授業科目の試験終了後1週間以内に事務局（教務・学生担当）へ提出。①の報告のみでは、受験不可となります。

※忌引、交通機関の事故、疾病等、裁判員…公休の場合に準ずる

就職試験…就職試験の通知文等

再試験

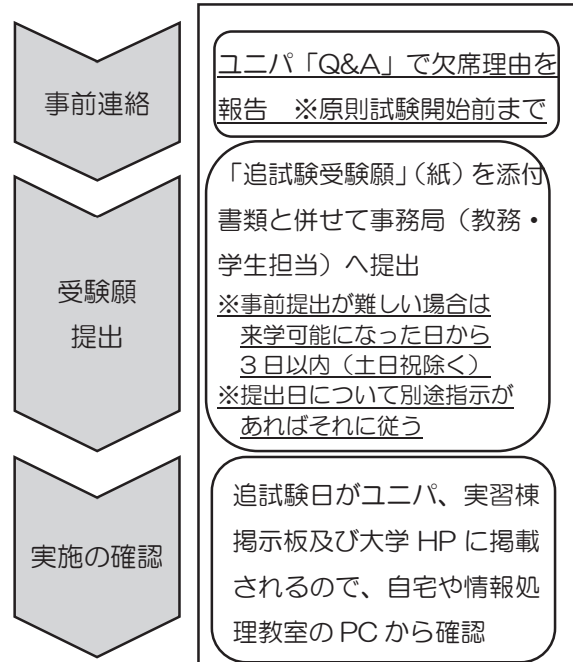
・再試験は、試験又は追試験で不合格となった者に対し、担当教員が必要と認めた場合、実施することがあります。そのため、担当教員が必要なしとすれば、実施されません。再試験を行う際は、次の2通りの方法で周知します。

- ①実習棟掲示板1階に紙掲示を行い、本学ホームページの在学生向け掲示板において「紙掲示を行った」旨を周知。
- ②ユニバーサルパスポート当該科目の「課題提出」で周知。

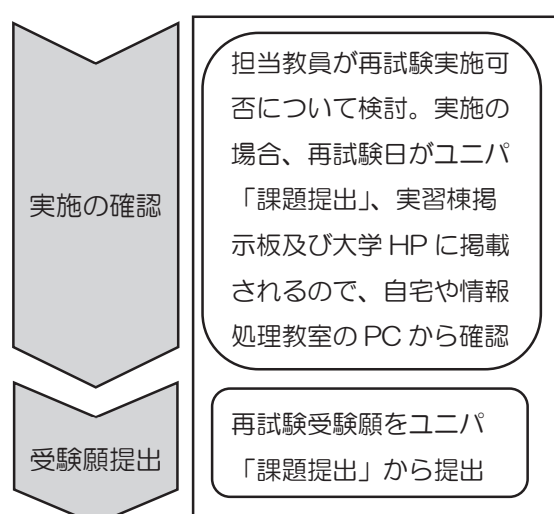
*再試験を受けようとする者は、指定された日時までに「再試験受験願」をユニバーサルパスポート当該科目の「課題提出」から提出してください。

未提出の場合、受験不可となります。

追試験フロー



再試験フロー



★受験願様式は、[本学ホームページ](#)>[キャンパスライフ](#)>[各種様式](#)にあります。

生物学(Biology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●新美 健太(NIIMI Kenta)										
授業の目的	生命の精緻な構造と巧みな生存戦略を学習するとともに最新の生物学研究の知見に触れることにより、多彩な生命現象に興味を持ち、その仕組みを理解する。										
到達目標	① 細胞がどのような構造をしているか説明できる。 ② 遺伝情報が細胞の性質として表れる過程を説明できる。 ③ 細胞同士の情報伝達の仕組みを説明できる。 ④ 細胞が分裂し増殖する仕組みを説明できる。 ⑤ 生殖と発生の仕組みを説明できる。 ⑥ 生物学に関する最新の知見を概説できる。										
授業の進め方	教科書、配布資料、スライドを用いた講義形式										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生物の基礎									
	2	生物のイメージング									
	3~4	細胞小器官の構造と機能									
	5	細胞骨格の構造と機能									
	6~8	遺伝子の発現制御									
	9	細胞間接着									
	10~11	細胞内情報伝達									
	12~13	細胞分裂									
	14~15	生殖と発生									
教科書	基礎から学ぶ生物学・細胞生物学 和田勝著（羊土社）										
参考書・参考資料等	Essential細胞生物学 中村桂子ほか監訳（南江堂）										
事前学習・事後学習	・予め教科書の該当部分を読み、疑問点を整理しておく。 ・講義において理解できなかった部分を整理し適宜質問する。また興味を持った話題については積極的に文献検索するなどして学びを深める。										
他の授業との関連	解剖学、生理学、生化学などの専門基礎科目を学ぶ上での基礎となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、リアクションペーパー(約20%)、期末試験(約80%)により評価する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける(niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	単純に知識を吸収するだけではなく、生命現象に好奇心を持って積極的な態度で受講して欲しい。										

化学 (Chemistry)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●小森 博文 (KOMORI Hirofumi)										
授業の目的	化学は、私たちの身のまわりの物質を対象とする学問であるが、物質だけでなく生命現象も化学反応によって支えられていることから、医療を学ぶものにとっても重要な分野である。原子の構造をはじめ、さまざまな物質や反応についての基礎的な知識を広く修得し、化学的なものの見方や考え方を身につける。										
到達目標	①原子の構造と周期律の関係を説明できる。 ②化学結合の種類や性質を説明できる。 ③化学反応の概念や法則を説明できる。										
授業の進め方	一部の授業では、POGIL教材 (Process Oriented Guided Inquiry Learning)を用いた演習を行う。化学の重要な概念について、資料を分析しながら、自分なりの答えを論理的に導き出す。単なる暗記ではなく、問題を解く過程を重視しながら、化学の重要な概念を学ぶ。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	導入 (講義の進め方、化学について)									
	2	身の回りの物質と元素									
	3	原子番号と原子量									
	4	原子の構造									
	5	電子配置と周期表									
	6	原子軌道									
	7	イオン結合と共有結合									
	8	分子の形									
	9	混成軌道									
	10	分子軌道									
	11	分子間力									
	12	化学反応式と物質質量									
	13	酸と塩基									
	14	化学平衡									
	15	酸化と還元									
教科書	幅上茂樹ほか著『基礎化学-化学の世界へようこそ』(三共出版)										
参考書・参考資料等	高等学校「化学基礎」の教科書等										
事前学習・事後学習	事前学習として教科書の該当箇所の予習を行う。 事後学習として教科書の演習問題や小テストの復習を行う。										
他の授業との関連	生体現象は、すべて化学反応の結果おこる。したがって、看護学科の基礎科目群の中の健康に関する科目、臨床検査学科の分析検査学・形態検査学・総合検査学の中のすべての科目に関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の方法・基準で評価する。 期末筆記試験を行う。 再試験は原則行わない。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。										
オフィスアワー	komori.hirofumi@kagawa-u.ac.jp										
備考	分からないことがあれば、積極的に質問してください。										

物理学 (Physics)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●鶴町 徳昭 (TSURUMACHI Noriaki)										
授業の目的	医療系の学生にとって物理学はあまり関係ないと思うかもしれないが、それは大きな間違いである。医療の現場で遭遇するさまざまな事象や機器の理解のためには物理学の知識や考え方がどうしても必要となる。本授業においては高校で物理を履修していない学生でも理解できるように体系的に物理学を学び理解する。										
到達目標	①力と運動の概念や熱の伝達、電気や磁気など簡単な物理現象のメカニズムを論理的に説明できる。 ②物理量と単位の間関係を説明できる。 ③物理現象と医療機器との関係を説明できる。										
授業の進め方	物理学的な自然の見方・考え方について身近な現象を例にしながら解説する。また演示実験等もできる限り導入し理解を深める。これらを通じて物理現象の規則性・法則性やその客観的表現方法について理解すると共に、医学への応用についても考察する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	序論	物理学的な自然の見方・考え方、測定と医療機器【講義】								
	2	力学1	静止している物体【講義】								
	3	力学2	運動している物体【講義】								
	4	力学3	仕事とエネルギー【講義】								
	5	力学4	医療機器と力学【講義】								
	6	熱学1	熱と温度【講義】								
	7	熱学2	エントロピー【講義】								
	8	熱学3	極低温【講義】【実験】								
	9	波動1	音【講義】								
	10	波動2	光【講義】【実験】								
	11	電磁気学1	電荷・電場・電流【講義】								
	12	電磁気学2	磁力【講義】								
	13	電磁気学3	電磁波【講義】								
	14	現代物理学1	原子の構造【講義】								
	15	現代物理学2	X線・原子核【講義】								
教科書	医療系のための物理(佐藤幸一・藤城敏幸著:東京教学社)										
参考書・参考資料等	シップマン自然科学入門:新物理学(Shipman著、勝守訳:学術図書出版社)など適宜指示する。										
事前学習・事後学習	事前に教科書の該当箇所の予習を行うこと。 事後には講義内容を復習するとともに、演習問題で間違った箇所を再度解き、理解すること。										
他の授業との関連	生体現象を含むすべての現象は物理の法則に従い、おこっている。したがって「医療とME機器」「医療電子工学」「先端医療技術学」は言うに及ばず、「人体の構造と機能Ⅰ～Ⅳ」「疾病と治療Ⅰ～Ⅴ」とも関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、レポート(30%)と期末筆記試験(70%)で評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	連絡先 香川大学創造工学部先端材料科学領域 電話番号:087-864-2390 e-mail:tsurumachi.noriaki@kagawa-u.ac.jp										
備考	講義内容の区切りのよいところでレポート問題を課す予定である。 講義中、講義時間外での積極的な質問を歓迎する。										

教育学 (Education)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●松原 勝敏 (MATSUBARA Katsutoshi)										
授業の目的	「教育とは何か」という問いを考えるヒントとなる基礎的な知識の獲得を目指すとともに、教育分野が「人」そして「命」をどのように見ているのかということ意識しながら、教育学の概念を把握することを目的とします。										
到達目標	①今日の教育事象について、教育学の知見を踏まえて自らの意見を述べるができる。 ②「教育」と「看護」という同じく人を対象とする学問領域において、それぞれの共通性と相違性を理解し説明することができる。										
授業の進め方	授業スケジュールに示したテーマに沿って、例えば、学習指導なら学習指導の考え方を、教育内容なら教育内容構成の考え方を・・・などと、それぞれの項目に関する基本的な原則や理念を学習し、教育の各領域に関わる基礎知識の習得を目指します。そして、今日の様々な教育問題を検討します。 授業終了後には、毎回、Google Formを通じて、講義内容に関連する考察や意見、質問等をまとめたミニレポートの提出を求めます。このレポートは、その次の授業の最初にいくつかを選んで担当教員が全員に紹介します。そして、提出された意見や疑問点などを受講者全員で検討します。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	教育学の概念:オリエンテーション&教育学の全体像									
	2	教育の目的:憲法や教育基本法をヒントにした教育目的論の紹介									
	3	教育課程:教育課程の概念と教育課程の種類と特色									
	4	学習指導(1):学習指導方法の種類と特色									
	5	学習指導(2):学力の概念とこれからの時代に求められる学力									
	6	幼児教育の方法論:幼児教育の重要性と難しさの理解									
	7	西洋の学校の歴史(1):学校の誕生と古代の学校の特色									
	8	西洋の学校の歴史(2):近代的な学校の特色									
	9	我が国の学校の歴史:明治期以降の学校の歴史									
	10	生涯学習:生涯学習が求められる背景及び生涯学習の重要性									
	11	障害児教育(1):障害児教育の歴史									
	12	障害児教育(2):特別支援教育の理念と制度									
	13	少子化問題:少子化の原因とその影響									
	14	教師の在り方:教師に求められる資質能力									
	15	全体のまとめ:教師に求められる資質、全体の復習									
教科書	佐々木正治編著(2024)『新初等教育原理〔改訂版〕』(福村出版)										
参考書・参考資料等	井上豊久ほか『教育っていったい何だろう』(福村出版)、 西川信廣ほか『教育学を学ぼう』(福村出版)										
事前学習・事後学習	授業の1週間前に学習シートを配布しますので、それを元に予習をしてください。 また、授業の内容を振り返るためのレポートを課します。										
他の授業との関連	学生の中には、将来教育者を目指す方もいらっしゃるのではないのでしょうか？また、医療職について何年か後に中堅となり後輩等を指導する立場になることもあるでしょう。そういった方にとって、本学で修学した専門科目の内容を伝えるために参考になればと思います。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の方法・基準により評価します。 授業のミニレポート(38%)、レポート点(12%)、期末筆記試験(50%)の割合で総合得点を計算し、全体の60%以上の得点で単位を認定します。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	メールアドレス:matubara@takamatsu-u.ac.jp 講義時間の前後にあるいはメールで質問していただけたらと思います。										
備考	教育学と聞くと、指導のコツや技術の授業だと思いが少なくありません。もちろん、それらに関することも教育学の一領域ですが、この授業では、一般的な教育学概論の授業として講義します。つまり、教育という社会的な活動が私たちの社会でどのような意味を持っているのか、課題は何かを考えて行きたいと思います。										

心理学 (Psychology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●大久保 智生 (OKUBO Tomoo)										
授業の目的	身近な心に関する問題から心理学の基礎に触れることを通じて、人間理解の方法を深めることを目的とします。また、心に関する様々な問題に対して、多角的な視点から思考できるようになるために、様々なトピックを挙げ、人間行動の日常を科学的に考えていきます。										
到達目標	①心に関する問題に対して、多角的な視点から説明することができる。 ②社会問題について、心理学の考え方をを用いて説明することができる。										
授業の進め方	様々な心理学のトピックについて、講義を中心に進めていきます。授業中に扱う内容について、自分の身の周りの出来事と関連付けながら考えてください。みなさんが楽しく学べるように工夫していきます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	オリエンテーション:心理学とは									
	2	知覚と認知									
	3	記憶の過程									
	4	目撃証言と冤罪									
	5	心理測定と心理占い									
	6	学習と条件付け									
	7	やる気と動機づけ									
	8	性格と状況									
	9	適応とストレス									
	10	発達と子育て									
	11	対人関係とコミュニケーション能力									
	12	非行・犯罪とひきこもり									
	13	虐待と学力低下									
	14	いじめとハラスメント									
	15	恋愛とデートDV									
教科書	実践をふりかえるための教育心理学:教育心理にまつわる言説を疑う(ナカニシヤ出版)										
参考書・参考資料等	その都度、紹介していきます。読書案内も出す予定です。										
事前学習・事後学習	事前学習および事後学習として、毎回、授業の感想を書いてもらいます。次の回の最初に提出された感想に対して様々な観点から答えていきます。ぜひ何でも質問・意見してください。										
他の授業との関連	医療従事者として、知っておいてもらいたいトピックも含めて、講義を行っていきますので、他の授業と関連を考えながら、受講してください。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業への参加度と定期試験で評価します。定期試験の内容は授業に出ていれば回答できる問題となります。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	メール (okubo.tomoo@kagawa-u.ac.jp)にて随時質問等は受け付けます。										
備考	毎回、感想を書いてもらいますが、何でも自由に書いてください。こちらは楽しく心理学について説明していきますので、みなさんも楽しんでもらえたらと思います。										

哲学(Philosophy)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●三宅 岳史(MIYAKE Takeshi)										
授業の目的	哲学とは、「なぜ」「どうして」「～って何？」などの素朴な問いから物事を深く掘り下げていく学問である。この授業でも、さまざまな問いを出発点に哲学を始めることにしよう。そこで、1. 哲学ではどのようなことが問題にされてきたか、2. その問いに哲学者はどのような考えを巡らせてきたか、3. それに対して自分はどう思うのか、というようなことを考えていくのがこの授業の目的である。										
到達目標	① 哲学で議論されてきた問題を示すことができる。 ② 哲学者が考えた問題と議論について説明できる。 ③ 哲学的問題について自分の見解と根拠を述べることができる。										
授業の進め方	哲学者の考えを見る前に、普段から疑問に思っていたことを形にしてみよう。例えば、他人の心は分かるのか、「話せばわかる」ものなのか、男女はなぜすれ違うのか、権力とは何か、「私」とは何か、色を塗りたくったものがなぜ芸術なのか、などなど色々な問いについて考え、話し合ってみる。そのあとで、哲学者のいくつかの考えや立場を見てみよう。そのために、教科書を一緒に読んだり、DVD視聴などをしたりして、問題を考える。このように、グループワークや発表を中心に、講義や解説などをききながら、授業は進んでいく予定である。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	プラトンとプラトニック・ラブ【講義】									
	2	愛とは何か？【講義・話し合い】									
	3	アリストテレスの哲学と芸術論【講義】									
	4	美とは何か？アートの目的は何か？【講義・話し合い】									
	5	我々は自由なのか？：ストア派とエピクロス派【講義・話し合い】									
	6	この世に悪があるのはなぜか？：中世哲学者と神【講義・話し合い・発表】									
	7	確実な知識は存在するのか？：デカルトの懐疑【講義・話し合い・発表】									
	8	我々は白紙状態で生まれるのか？：ロックの経験論【講義・話し合い・発表】									
	9	もし政府がなかったら？：ホッブズと社会契約【講義・話し合い・発表】									
	10	嘘は絶対許されないのか？：カントとミルの倫理学【講義・話し合い・発表】									
	11	意識の決定は幻か？：ニーチェ、マルクス、フロイト【講義・話し合い・発表】									
	12	人間とは何か？：サルトル、メルロー＝ポンティ、ハイデガー【講義・話し合い】									
	13	哲学カフェ：哲学の問題を作ってみよう【話し合い・体験】									
	14	哲学カフェ：自分たちの作った問題をテツガクする【話し合い・体験】									
	15	まとめ ふりかえりとDVD視聴『小さな哲学者たち』【視聴・ふりかえり】									
教科書	貫成人『哲学マップ』(ちくま新書)2004年										
参考書・参考資料等	シャロン・ケイ『中学生からの対話する哲学教室』(玉川大学出版)2012年 伊藤邦武『物語 哲学の歴史』(中公新書)2012年										
事前学習・事後学習	事前学習としては、教科書で次の授業の箇所をあらかじめ読むこと。ときどき配布プリントのワークを事前学習として出すこともある。 事後学習としては、配布プリントの確認問題をするように指示することもある。										
他の授業との関連	様々なことに対して疑問を持ち、それを深く考えることはすべての科目において、より深く理解するために必要不可欠である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点(参加意欲と課題)(35%)と中間レポート・発表(15%)、最終レポート(50%)により総合的に評価する。事前連絡なしでの欠席は、1回につき、5点の減点とする。 ＜評価の視点＞レポートは「課題との適合性」「要約(報告)の正確さ」「説明の説得性」「文章表現の適切性」「視点の独自性」から評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	連絡先: miyake.takeshi@kagawa-u.ac.jp										
備考	うまく意見は言えなくてもいいので、積極的に意見を述べ、授業に参加することが望ましい。										

健康科学 (Health Science)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●石川 雄一 (ISHIKAWA Yuuichi)										
授業の目的	現代における健康課題を明らかにし、望ましい生活・運動習慣を身近な観点から見直すことによって、自らの健康観とよりよい生活実践の在り方を考えていくとともに、健康の科学的視点を学ぶことを授業の目的とする。										
到達目標	①現代における健康問題を明らかにできる。 ②運動と健康の関連性について科学的視点から説明することができる。										
授業の進め方	授業はスライドを使用して講義形式で進めます。時に質問等を投げかけたり、グループで考えたりする時間を作ったりします。授業終了時には小レポートも課して、授業展開を深めていきます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	健康の概念 健康の概念について説明する。									
	2	体力の概念 猪飼道夫氏の体力の概念を中心的に考察し、体力の構造と機能を理解する。									
	3	体力があれば健康といえるか？ 体力と健康の関係について考察する。									
	4	運動しないとどうなるのか ヒトの身体が運動しないとどうなるのかについて、ベッドレスト実験の知見をもとに説明する。									
	5	運動不足と生活習慣病 運動不足と心疾患、糖尿病などの生活習慣病との関連性について説明する。									
	6	適度な運動とは？ 運動処方について、その条件や内容について説明する。									
	7	有酸素運動について 有酸素運動について、運動生理学的な知識をもとに説明する。									
	8	貯筋について 筋肉と健康について考察する。									
教科書	使用しない。										
参考書・参考資料等	なし										
事前学習・事後学習	必要に応じ指示する。										
他の授業との関連	現代の健康問題を明らかにし、運動と健康の関連を理解することは、健康な生活を送るうえで重要である。本科目は、看護学科の専門基礎科目である人体の構造と機能ⅠⅡ、生化学、さらにすべての専門科目と関連する。臨床検査学科の基礎科目である解剖学ⅠⅡ、生化学ⅠⅡ、生命科学概論、病理病態学などとも関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業後のミニレポート、授業態度、課題レポートにより総合的に評価する。 評価結果についてはオフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	集中授業期間中の休み時間。										
備考	健康について問題意識を持って受講してください。										

健康スポーツ (Health and Sports Science)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実技
担当教員	●石川 雄一 (ISHIKAWA Yuuichi)、石田 佳二 (ISHIDA Keiji)										
授業の目的	トレーニングやストレッチなどを実施することにより健康な体の維持や専門職に必要な身体づくりについて理解する。またスポーツにおいては、個人や集団でのレベル向上のために、チームで基礎練習や戦術練習に取り組み、スポーツの特性を理解するだけではなく、集団での役割認識や協調能力などを身につける。										
到達目標	①各種トレーニングが自分の健康のため体力維持のために遂行できる。 ②バレーボールを通じて集団における役割認識や協調能力を身につけることができる。										
授業の進め方	健康づくりやスポーツのために必要なトレーニングやコンディショニングについて学習しながら自身の運動能力や体力を向上する。同時にスポーツの基礎練習などによる個人の技術の向上や、チームでの戦術練習やゲームなどによる集団としてのレベルアップに取り組む。またさまざまなスポーツの体験により健康づくりや生涯スポーツなどについて理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	体力や運動能力を知る バレーボールのパスなどの基本動作練習									
	2	柔軟性の向上 バレーボールのパスのレベルアップ									
	3	筋力の向上 バレーボールのパスのまとめとサーブの基本動作練習									
	4	瞬発力の向上 バレーボールのサーブのレベルアップ									
	5	敏捷性の向上 バレーボールのパス、サーブのまとめ									
	6	巧緻性の向上 バレーボールの連係について(三段階での連係)									
	7	協調性の向上 バレーボールの連係をゲームに生かす									
	8	コンディショニングの維持 バレーボールのアタックと攻撃(戦術)について									
	9	準備運動や整理運動について バレーボールのゲームを想定した練習									
	10	試しのゲーム(バレーボール)									
	11	レベルアップや課題克服のためのチーム練習(バレーボール)									
	12	リーグ戦(バレーボール)									
	13	トーナメント戦(バレーボール)									
	14	トーナメント戦(バレーボール)									
	15	まとめ									
教科書	使用しない。										
参考書・参考資料等	なし										
事前学習・事後学習	必要に応じ指示する。										
他の授業との関連	自身が健康であることにより、医療従事者としてより活発に活動することができる。また集団における役割意識や協調能力を身につけることは、チーム医療を行う上で重要である。したがって、健康教育、組織論、チーム医療等と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、活動記録の内容(出席含む)、授業への取り組み方、運動技能などにより総合的に評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	特に設定しません。相談のあるかたは、授業後に時間をとります。										
備考	体力向上や健康づくりのために授業以外でも体を動かせる機会を確保する。 実技が可能な服装、体育館用のシューズを用意する。										

障がい論 (Theory of Disability)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)										
授業の目的	国内外の様々な学問領域における障がいに関する見識に触れて、基本的な捉え方や考え方を理解し、我が国における障がい児・者の課題について、自分の考えをまとめて表現する。										
到達目標	①様々な学問領域の視点をもとに、障がいについて概説できる。 ②障がいのある人の尊厳と権利について倫理的視点で説明できる。 ③障がいのある人が持つ能力と、能力を生かす方法について説明できる。 ④障がいのある人となない人が共生できる社会に向けて、看護として何ができるか自分の考えを述べることができる。										
授業の進め方	①事例を提示しながら講義する。 ②小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 ③授業支援者(障がい者、支援者等の当事者)に授業に参加していただき、障がいとともに生活することの実際に触れ、看護者としての自己の課題に気づく。 ④講義内容を振り返りながら自分の感想や意見をレポートし,期日までに提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	障がいに関連する理念や理論・概念									
	2	現代日本の障がい児・者の実態と社会制度									
	3~4	障がいのある子どもの成長発達と多職種連携(授業支援者とともに考える)									
	5~6	障がいのある人の自立と共生(授業支援者とともに考える)									
	7	障がいと雇用(授業支援者とともに考える)									
	8	共生する社会の実現に向けての看護の課題:発表と討議									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	適宜紹介する										
事前学習・事後学習	事前学習:障がい児・者に関する時事問題を新聞やニュース等で把握し、事前に関心を高めておく。 事後学習:授業支援者の体験を真摯に聞き、積極的に質問したり、講義内容から自己課題を見つけて探求する。										
他の授業との関連	・これまでの看護学の学び(講義・演習・実習)と関連付けながら学習する。 ・この授業での学びを4年次実習(健康レベル別看護学実習・看護学総合実習)に活かす。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業後の課題レポート(60%)、授業毎の小レポート(40%)により、総合的に評価する。 フィードバック:演習時やグループ討議において適時フィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	研究室在室の時はいつでも対応します。										
備考	実務経験のある教員 枝川(看護師)										

生命倫理(Life Science and Bioethics)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●南 貴子(MINAMI Takako)、岡田 仁(OKADA Hitoshi)、塩田 敦子(SHIOTA Atsuko)										
授業の目的	医療技術の進歩に伴い、生命の在り方をめぐる問題は近年ますます複雑化している。当事者の視点を尊重しつつ、歴史的・文化的背景や諸外国の事例・法制度も取り入れながら、多角的に倫理的諸問題について考えることのできる姿勢を身につける。										
到達目標	生殖補助医療、新生児医療、移植医療、災害・救急医療、終末期医療などをめぐる倫理的諸問題について理解し、倫理という正解のない問いについて、自分なりに問題意識を持ち、取り組むことができる。										
授業の進め方	グループ討論も取り入れつつ、講義を中心に進める。(レポート提出有)										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生命倫理とは(南)【講義】									
	2	生殖医療と倫理①(人工妊娠中絶、遺伝カウンセリング、出生前診断、着床前診断)(塩田)【講義・討議】									
	3	生殖医療と倫理②(生殖補助医療、子の出自を知る権利)(南)【講義・討議】									
	4	新生児医療と倫理(岡田)【講義・討議】									
	5	移植医療と倫理(脳死と臓器移植、再生医療)(岡田)【講義・討議】									
	6	災害・救急医療と倫理(岡田)【講義・討議】									
	7	終末期医療と倫理(尊厳死と安楽死)(南)①【講義・討議】									
	8	終末期医療と倫理(尊厳死と安楽死)(南)②【講義・討議】									
教科書	特に指定しない。適宜、資料を配付する。										
参考書・参考資料等	看護のための生命倫理 改訂3版(ナカニシヤ出版) 生命倫理と医療倫理 第4版(金芳堂) はじめて出会う生命倫理(有斐閣アルマ)										
事前学習・事後学習	生命倫理に関する時事問題を把握し、関心を高めておく。 これまでに臨地実習等で出会った事例を想起しておく。 授業後のレポート作成に真摯に取り組む。										
他の授業との関連	生殖医療と倫理の問題は「母性看護学」に関連する。 新生児医療と倫理の問題は「小児看護学」に関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	各回における受講態度、授業での討議参加、レポートで評価する(南45%、岡田40%、塩田15%)。 (※受講態度重視のため、授業時には出席番号順に着席しておくこと。) 総合評価結果への疑問・異議申し立てについては個別に対応する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	授業終了後に随時対応する。研究室45(岡田)										
備考	学内の実務経験のある教員:岡田(医師)										

社会学 (Sociology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●加野 芳正 (KANO Yoshimasa)										
授業の目的	ヒトは社会的動物だと言われます。私たちは家族、学校、職場などの社会制度を作り、他方で、社会は私たちの行動を縛り、暮らしに影響を与えます。このことを「人生」という視点で考えます。私たちは家族の中に生まれ、幼児期を家族と保育所で過ごします。そして中学、高校、大学で学んだ結果して職業を選びとります。皆さんの多くは病院を職場とし、仕事に精を出す一方で恋愛や結婚、子育てなどの課題に直面します。そこにジェンダー規範が少なからず影響を及ぼします。こうした人生の歩みについて社会学の視点で考察します。										
到達目標	① 私たちの人生が、いかに社会的規範によって縛られているかを説明することができる。 ② よりよい人生を送るために、社会学の知識がどのように役立つかを説明できる。 ③ 病院等の職場で働くに当たって、社会学の知識がどのように役立つかを説明できる。										
授業の進め方	シラバスに沿って教員が話題を提供し、それを題材としてディスカッションを行います。レジュメ(パワポ資料)に加えて、ビデオや新聞記事を教材として適宜活用していきます。集中講義ではありますが、場合によってはプレゼンしてもらったことがあります。授業は教員と学生が共同して作り上げていくものなので、状況に応じた最適な授業を展開していきます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	イントロダクションー 社会学とはどのような学問か									
	2	人間形成の社会学									
	3	ジェンダーの社会学									
	4	性と多様性の社会学									
	5	いじめの社会学									
	6	不登校の社会学									
	7	逸脱と犯罪の社会学									
	8	貧困と格差の社会学									
	9	マナーと作法の社会学									
	10	職場とハラスメントの社会学									
	11	組織とコミュニケーションの社会学									
	12	看護職と感情の社会学									
	13	恋愛と結婚・離婚の社会学									
	14	出産・子育て・子育て支援の社会学									
	15	まとめ									
教科書	使用しない										
参考書・参考資料等	授業開始前に配布します。										
事前学習・事後学習	配付された資料に目を通したり、関連情報を探して予習すると講義の理解度は高まります。また、受講後のレポートをしっかりと書いてもらおうと思っています。										
他の授業との関連	人文科学、社会科学では社会学的視点が不可欠ですので、多くの科目と関連してくると思います。また、他の科目を深く学習することで、社会学がよりよく理解できるようになると考えています。										
成績評価方法・基準・フィードバック	レポート(50%) 授業への参加度(プレゼンテーション、質疑・応答など)(50%) 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明します。										
オフィスアワー	昼休み及び授業終了後に、教室または講師控室にてお願いします。また、メール等で質問等していただいても結構です。メールアドレスは yoshimasa.kano2831@kjc.ac.jpあるいはyoshimasa.kano310508@gmail.comです。丁寧に応じます。										
備考	特にはありません										

法学 (Jurisprudence)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●辻上 佳輝 (TSUJIGAMI Yoshiteru)										
授業の目的	皆さんは、将来医療関係の仕事に就きたいのでしょうか？ でしたら、怖くないですか、ミスが。いや、人間誰だってミスします。この社会には、いくつもミスに対する償い方があります。謝るだけでもいいかもしれませんが、その仕事をやめなければならないかもしれません。法学は、その中で最も堅くて、でも最も正式な解決を教えてくれる学問です。 この講義では、皆さんが将来かかわる医師・看護師など医療従事者の法律上の責任がどうなっているのか、入り口だけでも覗いて見ましょう。きっと皆さんの行動が変わってきますよ。										
到達目標	①民法学の基本的な用語（主として契約・不法行為に関する用語）を用いることができる。 ②医事法の基本的な考え方（特に医療水準論）についておおよそが説明できる。										
授業の進め方	医事法をいきなり学ぼうとしても、それは無理です。医事法の基礎になっている法律、すなわち民法の基礎を学ばないといけません。民法の基礎を学ぶには、法律の基礎が必要です。そこで、この講義では、最初の2回で法律学の基礎を学びます。分かり易く講義しますので、恐れなくていいです。その後、民法の基礎を学び、医事法に必要な分野を特に勉強します。 そうして最後に判例の事実を素材に、医事法の基礎を学びましょう。予習は必要ありませんが、できるだけ復習に努めて下さい。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	【第1部法学入門】法律の基礎を知ろう 導入									
	2	【第1部法学入門】法律の基礎を知ろう 要件・効果、任意法規など									
	3	【第2部民事法入門】民事法の基礎 私法の意義									
	4	【第2部民事法入門】民事法の基礎 契約の基礎									
	5	【第3部医事法導入1】不法行為									
	6	【第4部医事法導入2】委任と事務管理									
	7	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 医療関係者の資格、コンタクトレンズ事件 憲法・人権論の概説									
	8	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 医療関係者の資格、歯科技工士事件 ・菊田医師事件 憲法・人権上の問題点									
	9	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 過失・医療水準、未熟児網膜症事件 ・サイレス投与事件									
	10	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 因果関係 ルンパール事件									
	11	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 応召義務 神戸診療拒否事件									
	12	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 説明義務 乳房温存療法事件									
	13	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 説明義務 コイル塞栓術事件									
	14	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 転医勧告義務、ロキソニン投与事件 ・精索捻 転事件									
	15	【第5部医事法】医師・看護師の民事責任 看護師の賠償義務、北大電気メス事件									
教科書	使用せず、教員作成の教材を配布する。毎回教材を持参すること。										
参考書・参考資料等	野崎和義＝柳井圭子『看護のための法学』（ミネルヴァ書房・1999年）、菅野耕毅『事例法学入門』（信山社・2003年）										
事前学習・事後学習	事前学習：講義中指示しますが、講義の前に配布テキストに作業してもらうことがあります。 事後学習：詳細は講義中に指示しますが、復習は必須です。										
他の授業との関連	医療従事者の法律上の責任を学ぶことは、医療を行うために学ぶすべての科目と関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を以下の方法・基準により評価します。レポートを課します。選択問題ですので得意な問題を選んでください。主にレポートの評価によります。平常点を加味することもあります。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ＜評価の視点＞レポートは、全体的には①問題と答えの相応性、②事例や判例のまとめ方、③法学的知識の正確性、④考察、私見の奥深さ、を総合的に評価する。 個別の問題の評価にあたっては、上記①～④に加え、⑤調査の適切さ、⑥社会的事象の理解の正確性、積極性、⑦文章表現の適格性、などを適宜織り交ぜて判断することがある。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明します。										
オフィスアワー	非常勤講師なので、日頃是对処できませんが、講義終了後しばらく大学にいますので、その時間ならば相談を受け付けます。メール等での連絡はいつでもかまいません。										
備考	講義に持参する必要はありませんが、一家に一冊六法(法律の条文が載っている本)はあったほうがよいと思います。六法や参考書を参照したほうがレポートが書きやすいはずです。										

経済学 (Economics)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●福村 晃一 (FUKUMURA Koichi)										
授業の目的	現代では、医療と関係する上で経済の問題は切り離せない。そのため本講義では、経済のさまざまな問題について分析する学問分野である、経済学についてその基礎を学ぶ。具体的には、経済学の基本的な考え方や分析手法を学ぶこと、さらに現実の経済問題を考察するための理論的基礎の修得を目的としている。 そこで、経済学を初めて学ぶ受講者を対象に、経済学入門の講義を行う。まず、個人や企業といったミクロの視点から考えた場合の経済学について基礎的内容を学ぶ。そこでは、私達の身近にあるさまざまなモノやサービスにおいて、その市場の機能を理解するとともに市場をめぐる諸問題を検討する。次に、一国や一地域全体といったマクロの視点から考えた場合の経済学について基礎的内容を学ぶ。具体的には、経済活動の重要な指標である、国内総生産 (GDP) の概念と、それがどのような構成をしているのかについて学習する。さらに様々な経済指標の測り方や、経済全体に関する問題や考え方についても学習する。										
到達目標	身近な経済現象を、経済学の概念を使って、自分の言葉で、筋道立てて説明できる。										
授業の進め方	講義資料に基づいて、板書と口述筆記を中心に講義を進める。講義中には練習問題を課し、講義時間内に解説を行う。時間の都合上、宿題として解いてもらう場合もある (各自採点を行う)。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	イントロダクション									
	2	経済学の十大原理									
	3	経済学者らしく考える									
	4	相互依存と交易 (貿易) からの利益									
	5	需要と供給									
	6	需要と供給の市場における作用									
	7	消費者、生産者、市場の効率性									
	8	政府の政策、税と効率・公平									
	9	外部性									
	10	国民所得の測定									
	11	生計費の測定									
	12	生産と成長									
	13	失業									
	14	貯蓄、投資と金融システム									
	15	開放マクロ経済学、まとめ									
教科書	講義資料を配布するため使用しない										
参考書・参考資料等	マンキュー著『マンキュー入門経済学[第3版]』(東洋経済新報社)2019年 その他については、授業中に適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	授業前には、前回の講義資料など配布した資料に目を通し、以前の講義とのつながりについて考える。 授業後には、各自で講義中配布された練習問題を解けるようにして、語句説明を自分の言葉で行えるようにする。										
他の授業との関連	経済学は様々な資源の配分や意思決定など日常生活について考える学問である。そのため、医療の現場においても、経済学の基本的な考え方、分析手法を学び、経済問題を考察することは必要不可欠である。また、練習問題を解く際に、四則演算などの計算が必要となるが、医療と関係する上ではそういった計算能力は必要不可欠なものとなる。したがって、多くの科目と関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、(1) 受講態度、(2)課題、(3) 期末筆記試験 ((1)と(2)を40%、(3)を60%)により評価する。 原則として、総授業数の3分の2以上の出席がなければ、原則評価を受けることができない。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。										
オフィスアワー	木曜日3時限目 場所: 非常勤講師控室 質問などは随時電子メールで受け付けています。										
備考	医療でも経済学がさまざまな形で活用されていますので、身の周りの制度の仕組みなどについて、普段からいろいろと考えてみてください。										

史学(History)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●武重 千尋(TAKESHIGE Chihiro)										
授業の目的	授業のテーマは「近代国家と国民」である。近代国民国家はどのようにして形成され、国民はどのように国家の構成員たる国民としてのアイデンティティを育んだか、などについて、歴史学の観点から考察する。										
到達目標	①歴史学の方法を学び、歴史的事象を多角的な視点から説明できる。 ②国民意識がどのように育成されたかを具体的な歴史的事象を用いて説明できる。										
授業の進め方	授業は、配布されたプリントに従って進められる。毎時の授業の終わりに配布される出席カードに授業内容についてのコメントを記して、振り返りを行う。また、授業の区切りに課される小レポートと全体の終了後に課されるレポートを作成することで、内容をまとめ、復習を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス 授業の内容と進め方、評価の方法等についての指導									
	2	歴史への問い 歴史学の歴史についての講義									
	3	歴史学の方法①時間の認識 時計についての講義									
	4	歴史学の方法②比較史 比較についての講義									
	5	歴史学の方法③心性史 意識についての講義									
	6	歴史学の方法④身体と病と「生死観」 授業のまとめと1回目レポート作成の指導									
	7	歴史学の方法⑤食文化史① フランスのお菓子についての講義									
	8	歴史学の方法⑤食文化史② イタリアの食文化についての講義									
	9	イタリアを創る① イタリア人の自己イメージについての講義									
	10	イタリアを創る② 民族意識とネットワークについての講義									
	11	イタリア人を創る① 教育と児童文学についての講義									
	12	イタリア人を創る② 絵画と表象についての講義									
	13	イタリア人を創る③ 記憶についての講義									
	14	国民国家論 国民国家の類型についての講義									
	15	まとめ 授業のまとめと2回目レポート作成上の注意									
教科書	適宜、プリントを配布するので必要ない。										
参考書・参考資料等	授業中に紹介する。										
事前学習・事後学習	あらかじめ配布されたプリントに事前に目を通し、わかりにくい点、とくに学びたい点を確認しておくこと。レポート作成に備えて毎回、授業内容の振り返りを行い要点をまとめておくこと。										
他の授業との関連	歴史を学ぶことは、現在の私たちの成り立ちを学ぶことである。近代国家の形成過程や国民意識について学ぶことは、現在の日本人や日本社会の理解に関連するため、すべての科目と関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	2回のレポートと毎回のコメントシートにより評価する。その基準は講義内容についての理解度である。配分割合は、1回目のレポート30%、2回目のレポート50%、毎回のコメントシート20%である。レポートの内容が不備な場合、再提出を求めることがある。 なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	非常勤講師のため、曜日・時間を指定できない。 授業の終了後であれば、対応できる。										
備考	積極的に授業に参加し、レポートを2回とも必ず提出すること。										

文化人類学 (Cultural Anthropology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●丹羽 佑一 (NIWA Yuichi)										
授業の目的	文化人類学は文化・社会から人類とは何かを知る学問である。人類の本質は他の生き物と同じように、生命である。しかし生き方に独特の工夫があり、人類固有の文化、社会を生んでいる。それが人類の特質である。本講義では、人類の特質について「人類そのものの起源」、「家族の起源」、「他界の起源」から解説され、「私たちは何であるか、何処へ行くのか」考える。										
到達目標	①「人類とは何か」を考察することができる。またその結果を他者に説明することができる。 ②「人類社会の将来」を考察することができる。またその結果を他者に説明することができる。										
授業の進め方	授業のテーマ、サブテーマに関わる諸説をビデオ映像も交えて紹介する形で授業は進められる。授業の節目ごとにテーマに従ったレポートを作成する。レポートには学んだ諸説を批判し、受講生自らのモノの見方、考え方を明確に表現することが求められる。レポート作成を通じて、受講生は授業で学んだ知識を確実なものとするとともに、自らのモノの見方を洗練させ、また説得力のある表現方法を獲得することが期待される。マイノートができる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		Ⅰ 章 人類の起源									
	1	人類の起源① 諸説の解説1 イーストサイド・ストーリーと直立二足歩行									
	2	人類の起源② 諸説の解説2 トウマイ・ストーリーと直立二足歩行									
	3	人類の起源③ 諸説の解説3 携帯電話説と人類の食性・初期の文化									
	4	Ⅰ 章まとめ(人類の起源・家族の起源・婚姻の起源)と質問									
		Ⅱ 章 他界の起源									
	5	埋葬の起源 旧石器時代人の埋葬法と旧石器時代人の死									
	6	祭りの起源 洞窟壁画と精霊の世界									
	7	他界の起源 愛媛県・上黒岩陰遺跡縄文早期人の死と他界 愛媛県・穴神洞遺跡の早期縄文人の祖霊祭祀と他界									
	8	他界の終焉 現代人の他界観									
	9	Ⅱ 章まとめ(他界観の展開)と質問									
		Ⅲ 章 家族の起源と変容									
	10	人類初期の婚姻制 霊長類の群れ落ちとヒトの群れ落ちの特異性									
	11	縄文時代の婚姻制 与助尾根遺跡縄文中期人の婚姻システム									
	12	世界の婚姻制の展開 いろいろな社会と婚姻制									
13	現代の婚姻制 変容する社会と婚姻制										
14	Ⅲ 章まとめ(変容する家族)と質問										
15	総まとめと全体質問										
教科書	用いない。										
参考書・参考資料等	奥野克己『文化人類学入門』辰巳出版 2022年 山極寿一『家族の起源』東京大学出版会 1994年など、授業中に紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習：婚姻、葬祭についての公共メディアの情報を収集、メモをとる。 事後学習：レポートによって学習内容を発展させる。										
他の授業との関連	「人類とは何か」「人類社会の将来」を考えることは、「医療の役割」「医療が目指すもの」を考える上でベースとなるものである。したがって、すべての医療従事者になるための科目と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の方法・基準により評価する。 平時のレポート(40点満点)と期末筆記試験(60点満点)の評価を総合する。合格基準は60点である。 レポートには「各章まとめ」でのコメント、期末試験には「正答案」によりフィードバックする。 評価結果について、レポートに関しては、オフィスアワーに準じる方法で、試験に関しては、大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価は受けられない。										
オフィスアワー	メールで質問に答える(niwa.yuichi@kagawa-u.ac.jp)。										
備考	ビデオ視聴した上でレポート課題を課す場合があるから、必ず出席すること。										

医療倫理学 (Medical Ethics)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岡西幸恵(OKA NISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、木村古都(KIMURA Koto)、辻川季巳栄(TIJIKAWA Kimie)										
授業の目的	医療倫理・看護倫理は、対象者の尊厳を守る上で重要である。医療従事者も、臨床現場では、倫理的葛藤に悩むことが多々あり、場合によっては、我々医療従事者が加害者となる場合もある。何が倫理的に問題であるのかに気づく倫理的感受性を高め、倫理的葛藤をどのように解決するのかを学ぶことは、臨床現場で看護師を目指す学生にとって不可欠なテーマである。本講義では、医療者が臨床で出会う様々な事象を、倫理的視点から分析し、倫理的感受性の涵養を目指す。										
到達目標	① 医療における倫理の重要性について説明できる ② 医療倫理が発展してきた歴史的経緯について説明できる ③ 医療倫理に関する事例分析から、何がどのように倫理的に問題であるのか説明できる。 ④ 看護倫理に関する事例分析から、何がどのように倫理的に問題であるのか、説明できる。 ⑤ 学生が関与する事例の分析から、何がどのように倫理的に問題であるのか、説明できる。 ⑥ 上記の統合により、倫理的感受性を高める。										
授業の進め方	講義と演習を組み合わせる授業を進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	歴史から考える医療倫理の重要性:ヨーロッパ・日本・米国(近藤)									
	2	倫理原則・手順論・ナラティブアプローチ、倫理的感受性(近藤)									
	3	看護倫理: 事例検討(森田、木村、辻川、近藤)									
	4	看護倫理: 事例検討(森田、木村、辻川、近藤)									
	5	学生と看護倫理: 事例検討(岩本、岡西、中島)									
	6	学生と看護倫理: 事例検討(岩本、岡西、中島)									
	7	医療倫理: 事例検討(近藤、金)									
	8	医療倫理: 事例検討(近藤、金)									
教科書	授業の中で紹介する										
参考書・参考資料等	授業の中で紹介する										
事前学習・事後学習	【事前学習】ハンセン病の歴史について復習しておくこと。臨地実習において経験した倫理的問題について考えておくこと。 【事後学習】医療機関への就職を希望する学生は、当事者意識をもって、事例分析に臨み深めること。										
他の授業との関連	医療倫理学は、離島看護学ⅠⅡで学んだハンセン病の歴史とは直接的に関連がある。看護倫理は、看護学における基本であり、臨床看護に関する全ての科目・演習・実習と関連がある。患者と直接的に関わる職場(医療機関など)への就職を希望する学生は、就職後、当事者として直面する重要なテーマであることから、履修を強く勧める。										
成績評価方法・基準・フィードバック	医療倫理に関する事例分析・レポート(35点)、看護倫理に関する事例分析・レポート(35点)、学生が関与する事例の分析・レポート(35点)とし、合算後、100点満点に調整する。評価の基準は、到達目標への到達度とする。フィードバックは、事例分析の過程、あるいは、毎回提出する「リアクションペーパー」に基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については全員に対してその傾向をフィードバックすると共に、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	授業終了後に随時対応する。また、メールでも対応する。										
備考	臨床経験のある教員: 近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)										

社会保障論 (Social Security)											
必修・選択の区別	必修	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	カリキュラムにより異なります。	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●北川 裕美子 (KITAGAWA Yumiko)										
授業の目的	看護職として、対象とする個人・集団に対して社会保障制度の活用のための情報提供ができることを目的に、我が国の社会保障制度の歴史、医療・年金・介護・雇用等の社会保険制度と理念、生活保護等の公的扶助、社会福祉諸法の制度と理念について理解する。併せて、年金・医療・介護の社会保険と、生活保護、障害者福祉などを中心に、制度の仕組みと内容や課題点等についてテキストや動画視聴等で理解を深める。										
到達目標	① 社会保障制度の意義や役割を説明できる。 ② 現在の社会保障・社会福祉制度の課題点について説明できる。 ③ 看護職として、対象とする個人・集団に対して社会保障制度の活用のための情報提供ができる。										
授業の進め方	看護師等、医療職にとって必要なわが国の社会福祉を中心とした社会保障制度に関する法制度やその置かれている現状をテキスト及び関連資料またDVDや新聞記事を活用して、わかりやすく授業を行います。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	オリエンテーション: 授業計画や社会保障とは何かについて【講義】 現代社会の変化と社会保障・社会福祉の動向【講義】 医療保障: 健康保険・国民健康保険・高齢者医療制度・国民医療費等【講義】 介護保障: 介護保険制度の歴史・概要・課題と展望等【講義】 所得保障: 年金保険制度・社会手当・労働保険制度等【講義】 公的扶助: 生活保護制度のしくみ・低所得者対策・貧困をめぐる課題等【講義】 社会福祉関連制度: 障害者福祉・児童家庭福祉等【講義】 まとめ: 社会保障制度の活用のための情報提供の方法等【講義】									
教科書	系統看護学講座 社会保障・社会福祉 (医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜関係資料を配布する。										
事前学習・事後学習	毎回の授業内容にテキストの該当部分を読んで授業に参加する。 授業後は、テキスト資料で復習する。										
他の授業との関連	新聞ニュースや実習経験から身近な問題として認識しておく。 3年次の実習 (小児、母性、老年、精神) に入る前に、看護学の学習と関連づけながら社会保障に関する知識を得ておく。										
成績評価方法・基準・フィードバック	「授業後の課題小レポート (30%)」, 「期末定期試験 (70%)」 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	授業後										
備考											

情報リテラシー (Information literacy)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●比江島 欣慎 (HIEJIMA Yoshimitsu)										
授業の目的	大学での生活や学修において必要な情報技術、情報セキュリティの基本知識を身につけると共に、学修に必要なとなるアプリケーションの活用スキルを身につける。										
到達目標	① 情報倫理に基づいた情報管理およびその説明ができる ② 通信ネットワークを利用した情報の収集、発信を適切に行える ③ 各種オフィスアプリケーションを利用して自分の意見等を表現できる										
授業の進め方	① 次回以降の講義につながる課題が出るので、出された課題を行う ② ①の課題を元に講義を受け、演習を行う ③ 講義で配布される資料を整理する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	メールの使い方・礼儀について、コンピューターリテラシー【講義・演習】									
	2	情報・個人情報とは、情報倫理について、情報管理・AI利用について【講義】									
	3	WORDの使い方①(整形、作表)【講義・演習】									
	4	WORDの使い方②(図の挿入)、ONENOTEの使い方【講義・演習】									
	5	EXCELの使い方①(入力、グラフ作成)【講義・演習】									
	6	EXCELの使い方②(分析)、PowerPointの使い方(作成の基本)【講義・演習】									
	7	PowerPointの使い方②(アニメーション)、効果的なプレゼン【講義・演習】									
	8	発表会									
教科書	系統看護学講座 別巻 看護情報学(医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜、必要な資料を配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 課題を指示に従って行う。 事後学習: 講義中に配布された資料を整理する。										
他の授業との関連	・この科目は「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の該当科目である ・本講義で習得するスキルは、すべての講義において、教員との連絡、課題の作成、課題の提出、成果の発表などを行う際に必要となる										
成績評価方法・基準・フィードバック	課題の提出状況およびその内容で評価する。 評価ポイント 1) 講義で説明した内容が反映されているか(約50%) 2) 講義で説明した技術を修得できているか(約50%) なお、提出された課題に不正がみられた場合、本科目の当該期での単位修得はできない。また、出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 フィードバック: 評価結果の確認、評価結果の確認期間を設けて対応する。										
オフィスアワー	授業の前後、および研究室16(要事前連絡)にて対応する。										
備考											

看護情報学(Nursing information)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)										
授業の目的	患者情報に係る看護師の役割認識と保健医療情報に関する基本的な知識を基盤に、医療機関、地域、医療関連企業等で運用されている保健医療情報システムの現状を理解し、保健医療情報の適切な管理や活用法について学修する。また、活用する際に必要となるデータサイエンスの基本について、因果推論を題材に学修する。										
到達目標	① 患者情報に係る看護師の役割と保健医療情報システムについての概要を説明できる ② 保健医療情報の管理および活用に関して留意すべき点を説明できる ③ データサイエンスおよび因果推論に関する基本知識を説明できる ④ ③の知識を事象理解に適用できる										
授業の進め方	① テキストを使って予習する ② 対面授業に参加し、ノートをとる ③ ②のノートとオンデマンド教材を使って復習する ④ 知識確認テストを受ける ⑤ ノートを整理して提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	保健医療における看護と情報(患者情報に係る看護師の役割)【講義・グループ討論】									
	2	保健医療と情報技術(医療機関、地域での利用について)【講義・グループ討論】									
	3	データサイエンスの基本について【講義】									
	4	保健医療分野におけるエビデンス(因果推論とランダム化比較試験)【講義】									
	5	観察研究(コホート研究、ケースコントロール研究)【講義】									
	6	因果推論演習【グループワーク】									
	7	保健医療現場での疫学(年齢調整死亡率、SMR)【講義】									
	8	保健医療に関する情報の活用(まとめ)【講義】									
教科書	「ぜんぶ絵で見る医療統計」比江島欣慎(羊土社)										
参考書・参考資料等	系統看護学講座 別巻 看護情報学(医学書院)										
事前学習・事後学習	事前学習: 指定された資料を使って予習する。 事後学習: 講義・演習の内容をノートに整理する。										
他の授業との関連	・ この科目は「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の該当科目である ・ 「看護統計」「看護研究方法論Ⅲ」に直接関連する ・ 「看護ゼミナールⅠ」の学修効果を高める ・ 看護専門科目の学修に役立つ										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を知識確認テスト(約10%)、演習課題(約10%)、期末試験(約80%)で総合的に評価する。 評価内容: 基本知識が身についているか、科学的に因果推論に関する思考ができているか。 なお、出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 フィードバック: 評価結果の確認、評価結果の確認期間を設けて対応する。										
オフィスアワー	授業の前後、および研究室16(要事前連絡)にて対応する。										
備考											

看護統計 (Statistics for Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)										
授業の目的	データサイエンス(統計学)の基礎知識は保健医療領域における科学的探究に必要不可欠である。本講義では、データサイエンスの基礎的な知識や分析方法を、講義と演習を通して理解し、理解した内容を看護に生かす術を習得する。										
到達目標	① 保健医療分野におけるデータサイエンス(統計学)の重要性を概説できる ② データサイエンスの基本的な考え方を説明できる ③ データに対し適切な記述統計を行いその結果が意味するところを説明できる ④ データに対し適切な推測統計を行いその結果が意味するところを説明できる										
授業の進め方	① テキストを使って予習する ② 対面授業に参加し、ノートをとる ③ ②のノートとオンデマンド教材を使って復習する ④ 知識確認テストを受ける ⑤ ノートを整理して提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	「看護情報学の復習」(データサイエンスの基本、因果推論)【講義】									
	2	データの種類と尺度、データの入力【講義・演習】									
	3	記述統計と推測統計(検定の考え方)【講義】									
	4	1変量の分布に関する分析(記述統計)【講義・演習】									
	5	1変量の分布に関する分析(推測統計)、因果推論と推測統計【講義・演習】									
	6	2変量の関係を調べる分析(離散×離散、離散×連続)【講義・演習】									
	7	2変量の関係を調べる分析(連続×連続)【講義・演習】									
	8	2変量の関係を調べる分析(相関分析)【講義・演習】									
教科書	「ぜんぶ絵で見る医療統計」比江島欣慎(羊土社)＜「看護情報学」で使用＞										
参考書・参考資料等	適宜、必要な資料を配付する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 指定された資料を使って予習する。 事後学習: 講義・演習の内容をノートに整理する。										
他の授業との関連	・ この科目は「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の該当科目である ・ 「看護研究方法論Ⅲ」に直接関連する ・ 「看護ゼミナールⅡ」の学修効果を高める ・ 看護専門科目の学修に役立つ										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を知識確認テスト(約10%)、演習課題(約10%)、期末試験(約80%)で総合的に評価する。 評価内容: 基本知識が身についているか、統計学的思考ができていないか。 なお、出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 フィードバック: 評価結果の確認、評価結果の確認期間を設けて対応する。										
オフィスアワー	授業の前後、および研究室16(要事前連絡)にて対応する。										
備考											

英語Ⅰ（Medical EnglishⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●南 貴子(MINAMI Takako)										
授業の目的	医療分野を中心とするさまざまなテーマの英語教材を用いて、Listening、Reading等の講義・演習を行い、英語の基礎力向上を図る。										
到達目標	①医療分野において必要となる基礎的な英語でのコミュニケーション能力を身につける。 ②英字新聞の読み方の基礎を身につける。										
授業の進め方	基本的に講義形式をとるが、必要に応じて視聴覚教材や演習も取り入れて進める。英文の読解演習を交えることで、正確な内容把握の訓練と語彙力の強化を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス									
	2	Medical Topic 1									
	3	Medical Topic 2									
	4	Medical Topic 3									
	5	Medical Topic 4									
	6	Medical Topic 5									
	7	Medical Topic 6									
	8	Review 1									
	9	Medical Topic 7									
	10	Medical Topic 8									
	11	Medical Topic 9									
	12	Medical Topic 10									
	13	Medical Topic 11									
	14	Medical Topic 12									
	15	Review 2									
教科書	Nishihara, T., Nishihara, M. & Martin, A., 2005, English for Medicine (Kinseido) Ohsawa, T. & Tsutsumi, R., 2015, A Shorter Course in Newspaper English (Nan'un-do)										
参考書・参考資料等	適宜指示する。										
事前学習・事後学習	授業後にCDの視聴を行い、音読練習やディクテーションなど、授業で学習した事項の復習をすること。										
他の授業との関連	英語Ⅱを受講する際に必要となる英語力を身につける。										
成績評価方法・基準・フィードバック	平常点30%、定期試験70%により総合的に判断する。 期末の筆記試験の結果については疑義がある場合には適宜対応します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 期末試験において受験者全員の平均点の3割に満たなかった者については、再試験の受験資格を与えません。成績は「不可」となります。										
オフィスアワー	適宜対応(要事前予約)										
備考	不定期に課題を出します。「授業を欠席・遅刻したことにより課題提出について知らなかった」等は、提出を遅らせる理由として認められませんので、注意してください。 授業内容については授業の進行の都合上、若干変更する場合があります。 教科書と英語辞典は必ず持参すること。講義中のPCの使用は原則として認めません。										

英語Ⅱ (Medical English Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●南 貴子(MINAMI Takako)										
授業の目的	海外のニュース記事をはじめ、医療・医療倫理等に関する英文を読むことで、文章を的確に読み取る力を養う。医療従事者として備えるべき基礎的な英会話力を養う。										
到達目標	①医療分野において必要となる基礎的な英文の読解力、コミュニケーション能力を身につける。 ②英字新聞の読み方の基礎を身につける。										
授業の進め方	基本的に講義形式をとるが、必要に応じて視聴覚教材や英文朗読等の演習も取り入れて進める。毎回予習をしていることを前提とする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス									
	2	Medical Topic 1									
	3	Medical Topic 2									
	4	Medical Topic 3									
	5	Medical Topic 4									
	6	Medical Topic 5									
	7	Medical Topic 6									
	8	Review 1									
	9	Medical Topic 7									
	10	Medical Topic 8									
	11	Medical Topic 9									
	12	Medical Topic 10									
	13	Medical Topic 11									
	14	Medical Topic 12									
	15	Review 2									
教科書	Nishihara, T., Nishihara, M. & Martin, A., 2005, English for Medicine (Kinseido) Ohsawa, T. & Tsutsumi, R., 2015, A Shorter Course in Newspaper English (Nan'un-do)										
参考書・参考資料等	適宜指示する。										
事前学習・事後学習	授業後にCDの視聴を行い、音読練習やディクテーションなど、授業で学習した事項の復習をすること。										
他の授業との関連	英語Ⅰを受講していることが前提となります。										
成績評価方法・基準・フィードバック	平常点30%、定期試験70%により総合的に評価する。 期末の筆記試験の結果については疑義がある場合には適宜対応します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 期末試験において受験者全員の平均点の3割に満たなかった者については、再試験の受験資格を与えません。成績は「不可」となります。										
オフィスアワー	適宜対応(要事前予約)										
備考	不定期に課題を出します。「授業を欠席・遅刻したことにより課題提出について知らなかった」等は、提出を遅らせる理由として認められませんので、注意してください。 授業内容については授業の進行の都合上、若干変更する場合があります。 教科書と英語辞典は必ず持参すること。講義中のPCの使用は原則として認めません。										

英語Ⅲ (Medical English Ⅲ)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●南 貴子 (MINAMI Takako)										
授業の目的	海外のニュース番組を通して、総合的な英語力を養う。 英語の医学用語の基礎について学習する。										
到達目標	①英語のリーディング力、リスニング力、表現力をバランスよく身につける。 ②基本的な医学用語の知識を習得する。										
授業の進め方	毎回、担当者を決めて、発表を行う。発表担当の回に無断欠席した場合は、単位を認めない。必要に応じて教科書以外の様々な視聴覚教材を用いた演習も取り入れて進める。定期的に英語医学用語の小テストを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス									
	2	News Story 1									
	3	News Story 2									
	4	News Story 3									
	5	News Story 4									
	6	News Story 5									
	7	News Story 6									
	8	中間テスト									
	9	News Story 7									
	10	News Story 8									
	11	News Story 9									
	12	News Story 10									
	13	News Story 11									
	14	News Story 12									
	15	復習・まとめ									
教科書	Yamane, S. & Yamane, K., 2023, ABC Newsroom (Kinseido) Okada, A. et al., 2018, English Medical Terminology, Revised Edition (Nan'un-do)										
参考書・参考資料等	適宜指示する。										
事前学習・事後学習	授業後に動画を再度視聴し、授業で学習した事項の復習をすること。各自、英語医学用語の学習を進めていくこと。										
他の授業との関連	英語Ⅳを受講する場合は、本講義を受講していること。										
成績評価方法・基準・フィードバック	平常点60%、定期試験40%により総合的に判断する。 期末の筆記試験の結果については疑義がある場合には適宜対応します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	適宜対応(要事前予約)										
備考	不定期に課題を出します。「授業を欠席・遅刻したことにより課題提出について知らなかった」等は、提出を遅らせる理由として認められませんので、注意してください。 授業内容については授業の進行の都合上、若干変更する場合があります。										

英語Ⅳ (Medical English Ⅳ)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●南 貴子 (MINAMI Takako)										
授業の目的	医療系の英文の読解を通して、医療系英文のスタイルに慣れ親しみ、 英文を正確に読み取る能力を養う。英語の医学用語の基礎について学習する。										
到達目標	① 医療系の英文の読解演習等を通して、基礎的・実践的な英語力・思考力を身につける。 ② 基本的な医学用語の知識を習得する。										
授業の進め方	毎回、担当者を決めて、発表を行う。発表担当の回に無断欠席した場合は、単位を認めない。必要に応じて視聴覚教材を用いる。定期的に英語医学用語の小テストを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス									
	2	Medical Topic 1									
	3	Medical Topic 2									
	4	Medical Topic 3									
	5	Medical Topic 4									
	6	Medical Topic 5									
	7	Medical Topic 6									
	8	Review 1									
	9	Medical Topic 7									
	10	Medical Topic 8									
	11	Medical Topic 9									
	12	Medical Topic 10									
	13	Medical Topic 11									
	14	Medical Topic 12									
	15	Review 2									
教科書	Okada, A. et al., 2018, English Medical Terminology, Revised Edition (Nan'un-do)										
参考書・参考資料等	適宜指示する。										
事前学習・事後学習	発表者以外の受講生も全員、毎回、予習をしていくことが前提となる。										
他の授業との関連	英語Ⅲを受講していること。										
成績評価方法・基準・フィードバック	平常点60%、定期試験40%により総合的に判断する。 期末の筆記試験の結果については疑義がある場合には適宜対応します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	適宜対応 (要事前予約)										
備考	不定期に課題を出します。「授業を欠席・遅刻したことにより課題提出について知らなかった」等は、提出を遅らせる理由として認められませんので、注意してください。 授業内容については授業の進行の都合上、若干変更する場合があります。 授業には、必ず英語辞典を持参すること。										

中国語 I (Chinese I)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●毛 勇(MAO Yong)										
授業の目的	受講者は、この授業で中国の標準語を習得することができる。中国語は文字としての漢字を用いているため、他の外国語より取り付きやすく簡単のように見えるかもしれない。しかし、現在中国で使われている漢字が簡略化された文字(簡体字)なので、全くの外国語として取り組むことが重要である。授業は、LL方式(Language Laboratory System)で行われる。受講者は、CD等により、現代中国を親しみながら、「聴・説」と「読・写」のバランスを取れた総合学習を通じて、自然な中国語を学ぶとともに、医療現場で使えるような実用表現も学ぶ。										
到達目標	①リスニングとスピーキングの訓練を通じて、中国語の基本的なコミュニケーション能力を身につける。 ②修得した内容をもとに将来必要に応じて発展的な学習ができる。										
授業の進め方	LL方式(Language Laboratory System)で行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	発音(1) 単母音、声調									
	2	発音(2) 子音									
	3	発音(3) 複合母音									
	4	発音(4) 複合母音									
	5	発音(5) 発音総合練習									
	6～7	こんにちは									
	8～9	保険証はありますか									
	10～11	内科はどこですか									
	12～13	喉が痛いです									
	14～15	熱が出ました									
教科書	『メデイカル実践中国語』(王宇南ほか、朝日出版社)										
参考書・参考資料等	中国語辞書(電子辞書を推薦)										
事前学習・事後学習	予習と復習が必要である。										
他の授業との関連	現在では、非常に多くの中国語を話す人たちが観光や就業、その他の目的で来日されている。当然そのような人たちが健康を害する機会も増え、医療に従事する者が中国語を理解しコミュニケーションをとることが必要となることも増えている。したがって、専門基礎科目・専門科目で得た知識を生かすためには、中国語の学習が必要である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点(15%)、期末筆記試験(85%)で評価する。 なお、期末筆記試験の再試験は原則として行わない。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	毎週授業の30分前、非常勤控室で対応する。										
備考	授業はLL方式(Language Laboratory System)で行うので、事前にCD,DVDで予習することが勧められる。										

中国語Ⅱ (ChineseⅡ)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●毛 勇 (MAO Yong)										
授業の目的	受講者は、この授業で中国の標準語を習得することができる。中国語は文字としての漢字を用いているため、他の外国語より取り付きやすく簡単のように見えるかもしれない。しかし、現在中国で使われている漢字が簡略化された文字(簡体字)なので、全くの外国語として取り組むことが重要である。授業は、LL方式(Language Laboratory System)で行う。受講者は、CD等により、現代中国を親しみながら、「聴・説」と「読・写」のバランスを取れた総合学習を通じて、自然な中国語を学ぶとともに、医療現場で使えるような実用表現を学ぶ。										
到達目標	①リスニングとスピーキングの訓練を通じて、中国語の基本的なコミュニケーション能力を身につける。 ②修得した内容をもとに将来必要に応じて発展的な学習ができる。										
授業の進め方	LL方式(Language Laboratory System)で行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1～2	いつから体調が悪くなったのですか									
	3～4	薬を処方する									
	5～6	来週再診にきてください									
	7～8	この薬を服用したことがありますか									
	9～10	インフルエンザワクチンを接種する									
	11～12	来週退院します									
	13～14	私は現金で払います									
	15	総復習									
教科書	『メディカル実践中国語』(王宇南ほか、朝日出版社)										
参考書・参考資料等	中国語辞書(電子辞書を推薦)										
事前学習・事後学習	予習と復習が必要である。										
他の授業との関連	現在では、非常に多くの中国語を話す人たちが観光や就業、その他の目的で来日されている。当然そのような人たちが健康を害する機会も増え、医療に従事する者が中国語を理解しコミュニケーションをとることが必要となることも増えている。したがって、専門基礎科目・専門科目で得た知識を生かすためには、中国語の学習が必要である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点(15%)、期末筆記試験(85%)で評価する。 なお、期末筆記試験の再試験は原則として行わない。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	毎週授業の30分前、非常勤控室で対応する。										
備考	授業はLL方式(Language Laboratory System)で行うので、事前にCD,DVDで予習することが勧められる。										

人体の構造と機能Ⅰ（消化吸収、血液と呼吸の働き）(Human Anatomy and physiologyⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●松本 由樹(MATSUMOTO Yoshiki)										
授業の目的	人体の正常な機能と構造との結びつきについて理解を深める。それぞれの用語を理解し、その結びつきでどのような働きが生まれるのか、その形や位置は働きにどう影響するのかを考える。さらに、正常な機能や構造に異常が生じる際の仕組みを理解する。										
到達目標	① 身体の構造と機能に関する用語とその意味を説明できる。 ② 身体の機能を構造に結び付けて説明できる。 ③ 身体の正常な機能と構造から以上となる仕組みを推測できる。										
授業の進め方	① 講義を中心に進めるが、スライド資料にノートを取りながら内容を理解する。 ② 毎日小テストを行って知識の習得の確認をする。 ③ 学生が調べまわって発表する時間も取り入れる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	解剖生理学を学ぶための基礎知識									
	2	栄養の消化と吸収①									
	3	栄養の消化と吸収②									
	4	栄養の消化と吸収③									
	5	呼吸と血液のはたらき①									
	6	呼吸と血液のはたらき②									
	7	呼吸と血液のはたらき③									
	8	呼吸と血液のはたらき④									
	9	血液の循環とその調節①									
	10	血液の循環とその調節②									
	11	血液の循環とその調節③									
	12	血液の循環とその調節④									
	13	血液の循環とその調節⑤									
	14	体液の調節と尿の生成①									
	15	体液の調節と尿の生成②									
教科書	系統看護学講座 人体の構造と機能[1] 解剖生理学(医学書院)										
参考書・参考資料等	スライド資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、教科書の課題と復習をして小テストに備える。										
他の授業との関連	医学関連科目の全てと看護学の臨床実践の基盤になる科目である。特に1年次後期の「疾病と治療」と「看護技術論」に繋がっていく科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、小テスト(100%)により評価する。到達目標の達成状況を、小テスト(100%)により評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	特に設けない。質問などはメールでお願いします。										
備考	授業に関する質問を歓迎。 高校範囲の生物学を履修していない場合、医学に関わる分野は目をとっておいてほしい。 大学生になって初めての半期の授業を楽しんでもらいたい。										

人体の構造と機能Ⅱ（内部調節、脳神経、身体運動）(Human Anatomy and physiologyⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●松本 由樹(MATSUMOTO Yoshiki)										
授業の目的	身体の正常な機能と構造との結びつきについて理解を深める。それぞれの用語を理解し、その結びつきでどのような働きが生まれるのか、その形や位置は働きにどう影響するのかを考える。さらに、正常な機能や構造に異常が生じる際の仕組みを理解する。										
到達目標	①身体の構造と機能に関する用語とその意味を説明できる。 ②身体の機能を構造に結び付けて説明できる。 ③身体の正常な機能と構造から異常となる仕組みを推測できる。										
授業の進め方	・講義を中心に進めるが、スライド資料にノートを取りながら内容を理解する。 ・毎日小テストを行って知識の習得の確認をする。 ・学生の質問に答える時間を取り入れる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	内臓機能の調節①									
	2	内臓機能の調節②									
	3	身体の支持と運動①									
	4	身体の支持と運動②									
	5	身体の支持と運動③									
	6	身体の支持と運動④									
	7	情報の受容と処理①									
	8	情報の受容と処理②									
	9	情報の受容と処理③									
	10	身体機能の防御と適応①									
	11	身体機能の防御と適応②									
	12	生殖・発生と老化のしくみ①									
	13	生殖・発生と老化のしくみ②									
	14	補足(生理学)									
	15	補足(解剖学)									
教科書	系統看護学講座 人体の構造と機能[1] 解剖生理学(医学書院)										
参考書・参考資料等	スライド資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問する。 ・授業後は、教科書の課題と復習をして小テストに備える。										
他の授業との関連	医学関連科目の全てと看護学の臨床実践の基盤になる科目である。特に1年次後期の「疾病と治療」と「看護技術論」に繋がっていく科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、小テスト(100%)により評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	特に設けない。質問などはメールでお願いします。										
備考	授業に関する質問を歓迎。 高校範囲の生物学を履修していない場合、医学に関わる分野は目とのおしておいてほしい。 大学生になって初めての半期の授業を楽しんでもらいたい。										

人体の構造と機能Ⅲ(生化学/栄養代謝)(Human Anatomy and physiologyⅢ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●新美 健太(NIIMI Kenta)										
授業の目的	糖、脂質、タンパク質など生体を構成する物質の化学的性質およびそれらの代謝を学び、生命現象を化学的な視点から理解する。また生化学の最新の研究成果に触れ、生体内の化学反応に興味を持つ。										
到達目標	① 生命を構成する化学物質を概説できる。 ② 酵素反応の化学的性質を説明できる。 ③ 糖、脂質、タンパク質の化学的性質と代謝の機構を概説できる。										
授業の進め方	教科書を中心に配布プリントとスライドを用いて講義を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生体を構成する有機化合物と無機化合物									
	2	酵素の機能、分類、反応速度、阻害、補酵素/ ビタミンの性質、機能									
	3	糖の化学的特性、糖の異性体と誘導体、多糖類の種類と構造・性質									
	4	糖代謝① (糖の消化、解糖系)									
	5	糖代謝② (クエン酸回路、電子伝達系)									
	6	脂質の化学的特性									
	7	脂質代謝									
	8	タンパク質・アミノ酸の化学的特性、代謝									
教科書	系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能2 生化学 (医学書院)										
参考書・参考資料等	マクマリー生物有機化学 生化学編 菅原二三男監訳 (丸善)										
事前学習・事後学習	・予め教科書の該当部分を読み、疑問点を整理しておく。 ・講義において理解できなかった部分を整理し適宜質問する。また興味を持った話題については積極的に文献検索するなどして学びを深める。										
他の授業との関連	生理学、薬理学、病理学など様々な科目と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、リアクションペーパー(約20%)、期末試験(約80%)により評価する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける(niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	単純に知識を吸収するだけではなく、生命現象に好奇心を持って積極的な態度で受講して欲しい。 疑問点、不明点はそのままにせず積極的に質問等すること。										

人体の構造と機能Ⅳ（生体防御/感染）(Human Anatomy and physiologyⅣ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●奥田 潤(OKUDA Jun)										
授業の目的	病原微生物（細菌、真菌、ウイルス、寄生虫）の性質と、それらが人体に感染するしくみおよび感染症を発症するしくみについて学ぶ。さらに、感染症と感染に対する生体防御機構、感染症の予防、感染症の治療について学ぶ。また、教員の最新の研究成果を講義内容に積極的に取り入れる。										
到達目標	①細菌、ウイルス、真菌、寄生虫の性質について説明できる。 ②病原微生物による感染のしくみ、生体防御のしくみ、感染症の予防と治療について説明できる。										
授業の進め方	・講義を中心に進めるが、ノートを取りながら内容を理解する。 ・授業中に理解が難しい点は積極的に質問する。 ・教員の最新の研究成果を分かりやすく説明する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	細菌の性質									
	2	ウイルスの性質、真菌の性質									
	3	寄生虫の性質									
	4	感染と感染症									
	5	感染に対する生体防御機構（自然免疫）									
	6	感染に対する生体防御機構（獲得免疫）									
	7	滅菌と消毒、ワクチンと予防接種									
	8	感染症の治療									
教科書	「系統看護学講座 微生物学 疾病のなりたちと回復の促進4」(医学書院)										
参考書・参考資料等	「ナースのための微生物学 改訂6版」水口康雄ら(南山堂)										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、教科書の課題を復習してテストに備える。										
他の授業との関連	・「看護技術論」「看護過程論」における「感染予防」の基盤になる科目である。 ・「疾病と治療」の感染症の治療の理解に深く関わる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、授業参加状況（出席、質問）10%、期末筆記試験90%により総合的に評価する。 〈評価の視点〉 「期末筆記試験では、暗記力・理解力・記述力を評価する」 ・フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。（研究室38）										
備考	＊実務経験のある教員　奥田（薬剤師）										

病理学概論 (Introductuon to Pathology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、平川 栄一郎 (HIRAKAWA Eiichiro)										
授業の目的	臨床医学の土台である病理学を通して疾患の基本的特徴を検討する。疾患・健康逸脱状態の病態生理および病変の主要因について考察し、病因論に論及する。										
到達目標	① 基本的な病気の原因、発症、経過と予後などを病状として理解し、病理学の言葉で説明できる。 ② 正常な生理機能の異常による病態について、解剖生理学の言葉で説明できる。										
授業の進め方	スライドとプリント、教科書を用いて授業を進めるが、病理学は幅広い知識が必要となる学問であるので、教科書を予習してくること。また講義中に理解度の確認のための質疑応答の時間を設ける。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	病理学序説、細胞・組織とその障害、再生と修復									
	2	循環障害、炎症									
	3	免疫とアレルギー、感染症									
	4	代謝異常、先天異常									
	5	腫瘍									
	6	循環器疾患、心疾患の病理病態、動脈硬化									
	7	呼吸器疾患、肺炎、肺癌									
	8	消化器の主な疾患、まとめ									
教科書	系統看護学講座 疾病の成り立ちと回復の促進[1]病理学(医学書院)										
参考書・参考資料等	カラーで学べる病理学(ヌーヴェルヒロカワ)										
事前学習・事後学習	各回の疾患について、予習してくること。 前回の講義内容について復習してくること。										
他の授業との関連	解剖学、組織学、生理学と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、期末筆記試験(知識)100%により判断する。 原則として、再試験は行わない。 評価結果については、オフィスアワーに準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	* 実務経験のある教員 平川(医師)										

疾病と治療Ⅰ（呼吸器、循環器、消化器）(Disease and TreatmentⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiko)										
授業の目的	解剖生理学の知識を基に、呼吸器、循環器、消化器の主な疾患に関する症候、病態生理、検査、診断、治療について学ぶ。特に診断、治療については必要に応じて最新の知見に基づく内容を学ぶ。										
到達目標	①呼吸器、循環器、消化器の主な疾患の症候、病態生理について概説できる。 ②呼吸器、循環器、消化器の主な疾患の診断に必要な検査と内科的・外科的治療について概説できる。										
授業の進め方	①各領域の疾病と治療に入る前に、解剖生理学の基礎知識を確認する。 ②スライド資料などでポイントを絞った講義になるので、学生自身の教科書を活用した予習・復習による学習が中心になる。 ③講義後は、知識の習得を確認する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	呼吸器疾患① 呼吸器感染症									
	2	呼吸器疾患② 慢性閉塞性肺疾患									
	3	呼吸器疾患③ 気管支喘息									
	4	呼吸器疾患④ 結核など									
	5	呼吸器疾患⑤ 肺腫瘍など									
	6	循環器疾患① 高血圧症									
	7	循環器疾患② 心不全、先天性心疾患									
	8	循環器疾患③ 虚血性心疾患、心筋症									
	9	循環器疾患④ 不整脈、心臓弁膜症									
	10	循環器疾患⑤ 末梢循環障害など									
	11	消化器疾患① 食道、胃、十二指腸の疾患									
	12	消化器疾患② 小腸、大腸の疾患									
	13	消化器疾患③ 肝臓の病態									
	14	消化器疾患④ 肝臓の個々の疾患									
	15	消化器疾患⑤ 胆道、膵臓の疾患									
教科書	系統看護学講座 成人看護学 [2]呼吸器、[3]循環器、[5]消化器(医学書院)										
参考書・参考資料等	看護のための臨床病態学 浅野 嘉延 南山堂 内科学(朝倉書店)、他、授業時に紹介する										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、教科書の課題等を復習して自己の理解度を確認しておく。										
他の授業との関連	・習得した知識は、「看護技術論」「看護過程論」「急性期ケア」「慢性期ケア」など看護学専門科目に活用する科目である。 ・習得した知識は1年次の「看護技術論実習」と2年次の「看護過程論実習」の対象者の理解に活かす科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、試験(知識と応用)で評価する。(100%) 受講態度がひどい場合は減点等を行うことがある。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックについては、筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。また各コマでリアクションペーパーを配布し、小課題や質問、感想などを求め、次回の授業でフィードバックする。										
オフィスアワー	授業の後に質問等を受ける。または時間があれば研究室にて対応するが、前もってアポイントメントをとるように。										
備考	* 実務経験のある教員 筒井(医師)										

疾病と治療Ⅱ（内分泌代謝、腎泌尿器、女性生殖器）(Disease and TreatmentⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●筒井邦彦(TSUTSUI Kunihiko)、樋本尚志(HIMOTO Takashi)、塩田敦子(SHIOTA Atsuko)										
授業の目的	解剖生理学の知識を基に、内分泌・代謝系、腎泌尿器系、アレルギー、膠原病、感染症および女性生殖器系の主な疾患に関する症候、病態生理、検査、診断、治療について学ぶ。特に診断、治療については必要に応じて最新の知見に基づく内容を学ぶ。										
到達目標	①内分泌・代謝、腎泌尿器、アレルギー、膠原病、感染症および女性生殖器の主な疾患の症候、病態生理について概説できる。 ②内分泌・代謝、腎泌尿器、アレルギー、膠原病、感染症および女性生殖器の主な疾患の診断に必要な検査と内科的・外科的治療について概説できる。										
授業の進め方	①各領域の疾病と治療に入る前に、解剖生理学の基礎知識を確認する。 ②スライド資料などでポイントを絞った講義になるので、学生自身の教科書を活用した予習・復習による学習が中心になる。 ③適宜、知識の習得の確認をする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	内分泌・代謝疾患① 糖尿病（筒井）									
	2	内分泌・代謝疾患② 糖尿病の治療など（筒井）									
	3	内分泌・代謝疾患③ 甲状腺・副甲状腺疾患（筒井）									
	4	内分泌・代謝疾患④ 副腎疾患（筒井）									
	5	内分泌・代謝疾患⑤ 脂質異常症、尿酸代謝障害（筒井）									
	6	腎・泌尿器疾患① 腎・泌尿器系疾患を理解するための基礎知識（樋本）									
	7	腎・泌尿器疾患② 腎疾患前編（樋本）									
	8	腎・泌尿器疾患③ 腎疾患後編（樋本）									
	9	免疫・アレルギー・感染症① 免疫・アレルギー（樋本）									
	10	免疫・アレルギー・感染症② 膠原病（樋本）									
	11	免疫・アレルギー・感染症③ 感染症（樋本）									
	12	女性生殖器系① 女性生殖器の基礎知識（塩田）									
	13	女性生殖器系② 子宮の良性腫瘍、悪性腫瘍（塩田）									
	14	女性生殖器系③ 卵巣・卵管の疾患 月経異常・不妊症（塩田）									
	15	女性生殖器系④ 性感染症、更年期疾患、乳腺疾患（塩田）									
教科書	系統看護学講座 成人看護学[6]内分泌・代謝[8]腎・泌尿器[11]アレルギー他(医学書院) ナーシンググラフィカEX 疾患と看護⑨ 女性生殖器 苛原 稔(メディカ出版)										
参考書・参考資料等	看護のための臨床病態学 浅野 嘉延 南山堂										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、教科書の課題等を復習して自己の理解を確認する。										
他の授業との関連	・習得した知識は、「看護技術論」「看護過程論」「急性期ケア」「慢性期ケア」など看護学専門科目に活用する科目である。 ・習得した知識は1年次の「看護技術論実習」と2年次の「看護過程論実習」の対象者の理解に活かす科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を筆記試験(100%)にて評価する。 受講態度がひどい場合は減点等を行うことがある。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックについては、筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。またリアクションペーパーを活用し、理解度、感想、質問についてフィードバックすることも行う。										
オフィスアワー	授業後、または研究室在室時に随時対応する。筒井(研修室23)、樋本(研究室32) 授業終了後に随時対応する。塩田(非常勤なので授業後が無理な場合は筒井がお伺いします)										
備考	* 実務経験のある教員 筒井(医師)、樋本(医師)、塩田(医師)										

疾病と治療Ⅲ（血液、脳神経、運動器）(Disease and Treatment Ⅲ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiko)、松下 誠司(MATSUSHITA Seiji)										
授業の目的	解剖生理学の知識を基に、血液、脳・神経、運動器系の疾患に関する症候、病態生理、検査、診断、治療について学ぶ。特に診断、治療については必要に応じて最新の知見に基づく内容を学ぶ。										
到達目標	①血液、脳・神経、運動器の主な疾患の症候、病態生理について概説できる。 ②血液、脳・神経、運動器の主な疾患の診断に必要な検査と内科的・外科的治療について概説できる。										
授業の進め方	①各領域の疾病と治療に入る前に、解剖生理学の基礎知識を確認する。 ②スライド資料などでポイントを絞った講義になるので、学生自身の教科書を活用した予習・復習による学習が中心になる。 ③適宜、知識の習得の確認をする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	血液・造血器疾患① 血液・造血器系疾患の基礎知識（筒井）【講義】									
	2	血液・造血器疾患② 赤血球の異常（筒井）【講義】									
	3	血液・造血器疾患③ 輸血（筒井）【講義】									
	4	血液・造血器疾患④ 白血球の異常など（筒井）【演習】									
	5	脳・神経系疾患① 脳血管障害（筒井）【講義】									
	6	脳・神経系疾患② 脳腫瘍（筒井）【講義】									
	7	脳・神経系疾患③ パーキンソン病、認知症など（筒井）【講義】									
	8	脳・神経系疾患④ 末梢神経障害など（筒井）【演習】									
	9	運動器系疾患① 外傷性疾患:骨折① 総論、各論（松下）【講義】									
	10	運動器系疾患② 外傷性疾患:骨折② 各論（松下）【講義】									
	11	運動器系疾患③ 骨折以外の外傷性疾患（松下）【講義】									
	12	運動器系疾患④ 内因性疾患:先天性疾患、炎症性疾患（松下）【講義】									
	13	運動器系疾患⑤ 内因性疾患:腫瘍、代謝性疾患、筋・腱・神経疾患(松下)【講義】									
	14	運動器系疾患⑥ 上肢・脊椎・下肢疾患（松下）【講義】									
	15	運動器系疾患⑦ まとめ（松下）【講義】									
教科書	系統看護学講座 成人看護学[4]血液・造血器[7]脳・神経[10]運動系（医学書院）										
参考書・参考資料等	看護のための臨床病態学 浅野 嘉延 南山堂										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、教科書の課題等を復習して自己の理解を確認する。										
他の授業との関連	・習得した知識は、「看護技術論」「看護過程論」「急性期ケア」「慢性期ケア」など看護学専門科目に活用する科目である。 ・習得した知識は1年次の「看護技術論実習」と2年次の「看護過程論実習」の対象者の理解に活かす科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を理解度の点から筆記試験(100%)により総合的に評価する。受講態度がひどい場合は減点等行うことがある。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックについては、筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。またリアクションペーパーを活用し、理解度、質問、感想などについてフィードバックする(筒井)。										
オフィスアワー	授業後、または研究室在室時に随時対応する。(研究室23) 授業後に随時対応(松下)。非常勤なので無理な場合は筒井からお伺いします。										
備考	＊実務経験のある学内教員 筒井(医師)、松下(医師)										

疾病と治療Ⅳ(産科、小児科)(Disease and Treatment Ⅳ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●塩田 敦子(SHIOTA Atsuko)、中村 信嗣(NAKAMURA Shinji)										
授業の目的	母性看護の実践に必要な周産期における正常と異常の特徴、病態、検査、治療について学ぶ。 小児看護の実践に必要な主な小児疾患の病態、診断、検査、治療について学ぶ。										
到達目標	①周産期の正常と異常、その病態と検査について概説できる。 ②周産期の異常に対応した治療について概説できる。 ③小児発達、発育が理解でできる。主な小児疾患について説明できる。 ④主な小児疾患の治療について概説できる。										
授業の進め方	ポイントを絞って教科書に沿って、パワーポイントなど用いて講義する。 難解な医学用語はできるだけ平易に解説、理解しやすいよう努める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	正常妊娠、異常妊娠(子宮外妊娠、流早産、血液型不適合妊娠)(塩田)									
	2	異常妊娠(妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病、胎児機能不全、母子感染)(塩田)									
	3	正常分娩(分娩の3要素)、異常分娩(胎位異常、回旋異常、帝王切開)(塩田)									
	4	正常産褥、異常産褥(産後うつ病、血栓症)(塩田)									
	5	新生児、染色体異常(中村)									
	6	小児疾患① 代謝、内分泌、免疫、感染症(中村)									
	7	小児疾患② 呼吸器、循環器(中村)									
	8	小児疾患③ 腎泌尿器、神経疾患(中村)									
教科書	系統看護学講座 母性看護学各論(医学書院) 系統看護学講座 小児臨床看護各論(医学書院)										
参考書・参考資料等	病気がみえる 10 産科(メディック・メディア) 資料は適宜配布する。										
事前学習・事後学習	各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し疑問点について質問する。 授業後は、教科書の課題などを復習してテストに備える。										
他の授業との関連	発達段階別看護論(母性看護学、小児看護学)に関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、期末筆記試験(100%)にて評価し、出席状況など学ぶ姿勢を含め総合的に成績として評価する。 筆記試験結果および総合評価結果については、オフィスアワーに準ずる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価理由について説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	授業終了時対応する。(塩田、中村)										
備考	* 実務経験のある教員 塩田(医師)、中村(医師)										

疾病と治療Ⅴ(精神科)(Disease and Treatment Ⅴ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●松村義人(MATSUMURA Yoshihito)										
授業の目的	精神看護の実践に必要な精神科診断学・症候学、代表的な精神疾患と精神科治療学を学ぶ。										
到達目標	①代表的精神疾患の症状を把握できる。 ②代表的精神疾患の対処法や治療法が理解できる。 ③検査方法の意義や手法が理解できる。										
授業の進め方	講義は、パワーポイントによるプレゼンテーションを中心に行う。言葉を暗記するのではなく、自分の目で見て、耳で聞くことで理解していく。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	序論:精神科症候学、診断学、治療学(総論、各論)									
	2	器質性脳症候群、老年精神医学									
	3	薬物依存									
	4	てんかん									
	5	統合失調症									
	6	気分障害									
	7	神経症・心身症									
	8	児童・青年期精神医学									
教科書	講義ではスライド資料を配布します。										
参考書・参考資料等	ナーシンググラフィカ 精神看護学(2):精神障害と看護の実践 第5版(メディカ出版)										
事前学習・事後学習	各回の内容に該当する部分を調べて授業に参加する。										
他の授業との関連	メンタルヘルス看護論に直接関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、レポート100%で評価する。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	講義終了時に講師控室にて対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 松村(医師)										

臨床薬理 (Clinical Pharmacology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●香西 祥子 (KOZAI Shoko)										
授業の目的	臨床現場で使われている薬物の作用機序や人体の影響について正しく理解する。										
到達目標	①薬理作用の基礎知識に基づき、薬物の特徴、作用機序、人体への影響について理解する。 ②主な薬物の特徴について、疾患・病態の概略とあわせて薬物の作用、副作用を理解し、臨床での与薬と観察に活かせる知識として定着させる。										
授業の進め方	教科書を中心に講義するが、スライドや資料を補足する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	薬理学の基礎、薬の作用機序、薬物の体内動態									
	2	末梢での神経活動に作用する薬物									
	3	中枢神経系に作用する薬物									
	4	循環器系に作用する薬物									
	5	呼吸器・消化器・生殖器系に作用する薬物									
	6	免疫、抗アレルギー、抗炎症薬に作用する薬物									
	7	抗感染薬									
	8	抗がん薬									
教科書	系統看護学講座 疾病の成り立ちと回復の促進③「薬理学」 医学書院										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は、重要ポイントをまとめる。										
他の授業との関連	2年次3年次の「疾病と治療」の知識や、1年次2年次3年次の実習経験を土台にして、薬理に関する正しい知識を獲得する。さらに、4年次の「在宅看護学実習」「健康レベル別看護論実習」で、チーム医療の一員として臨床現場での看護実践に活かす科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業参加状況50% (出席、質問)、レポート形式の試験(50%) 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	授業後に教室で対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 香西 (薬剤師)										

臨床栄養 (Clinical Nutrition)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)										
授業の目的	栄養の消化吸収や体内代謝など栄養に関する基礎的な知識を確認した上で、臨床における栄養状態のアセスメントと栄養管理における看護職の役割を学ぶ。3年次の実習経験を省察しながら療養生活及び主な疾患別に必要な栄養マネジメントの実践を学ぶ。										
到達目標	① 栄養素の働きとエネルギー代謝等、基礎的事項が説明できる。 ② 臨床での栄養評価、フレイル予防と低栄養予防の方法が説明できる。 ③ 療養生活と栄養の関連から、臨床栄養における看護師の役割を述べることができる。 ④ 主な疾患における栄養マネジメントの実践について概説できる。 ⑤ 高齢者と低栄養、フレイルなど社会課題と対応を考察できる。										
授業の進め方	① 教科書を中心に基礎的内容について講義する。 ② 事前課題を提示し、基礎的事項は各自学習したうえで質問内容を中心に解説する。 ③ 臨床での栄養マネジメントについて事例を基に講義する。 ④ 多職種支援、包括的支援のあり方について先進地域の実践を紹介し、全体討議する。 ⑤ 高齢者と低栄養、孤食、フレイルなど今日的課題について概説した上で討議する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	栄養素の働き等基本事項の確認と栄養管理の基本 (非常勤講師: 管理栄養士) 【講義】									
	2	栄養管理の基本 (非常勤講師: 管理栄養士) 【講義】									
	3	看護師の包括的な栄養ケア (非常勤講師: 看護師) 【講義】									
	4	医療機関におけるNSTなど食支援のチームケア (非常勤講師: 看護師) 【講義】									
	5~6	主な疾患における栄養マネジメントの方法 (片山) 【講義】									
	7~8	高齢者と低栄養、孤食、フレイルなど今日的課題と対策 (片山) 【講義・討議】									
教科書	ナーシング・グラフィカ 疾病の成り立ちと回復の促進 (4) 臨床栄養学 (メディカ出版)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 目標①の基礎的事項は、教科書の該当部分を読んで授業に参加し、疑問点を質問する。 事後学習: 教科書の課題を復習し、栄養評価は各自で実施できるよう取り組む。										
他の授業との関連	既習科目である「生物学」「化学」、「疾病と治療」で学んだ知識と、栄養代謝や食に関する看護学の関連知識や実習経験を基盤に学習することが必要である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価: ①授業時の課題レポート (20%)、②定期試験 (80%) 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価視点: ①は、知識の活用、自分の意見の記述、課題探究力 ②は、内容の理解、説明記述力 フィードバック: ①は全体の傾向と要点について次回の授業でフィードバックを行う。②の結果は採点后に結果を開示するとともに、結果のへの質問等はフィードバック期間を提示し個別対応する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する (副学長室)										
備考											

医療とME機器(Medical Engineering)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●大栗 聖由(OGURI Masayoshi)										
授業の目的	看護師が臨床で取り扱う機会が多いME機器について、その基本的な仕組みと取扱いについて理解する。また、看護の実践・研究・教育の場で、将来、論理的に課題を探究し対応できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	①基本的なME機器の取り扱いができる。 ②検査結果から患者の状態を把握し、医師の診断や治療計画に基づく看護の方針を考えることができる。										
授業の進め方	①授業は、教科書の内容を中心にパワーポイントを使用し、講義する。 ②講義は、病態把握における検査の目的や検査結果の解釈ができるように進める。 ③授業中に理解しがたい点があれば、その都度質問を受け付ける。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	医用工学の概説【講義】									
	2	主なME機器の仕組みと取り扱い パルスオキシメータ、血液ガス【講義】									
	3	主なME機器の結果と解釈 心電図の基礎【講義】									
	4	主なME機器の結果と解釈 心電図の検査法とその解釈(1)【講義】									
	5	主なME機器の結果と解釈 心電図の検査法とその解釈(2)【講義】									
	6	主なME機器の結果と解釈 心電図の検査法とその解釈(3)【講義】									
	7	主なME機器の結果と解釈 心電図問題と解説(1)【講義】									
	8	主なME機器の結果と解釈 心電図問題と解説(2)【講義】									
教科書	ナースのためのME機器マニュアル(JJNスペシャルNo.90)、小野哲章ほか、(医学書院) (授業中に必要な箇所は印刷してお渡しします。必要と判断した方は購入してください。)										
参考書・参考資料等	必要なものは講義内でその都度レジュメとして配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習として教科書を一読し疑問点はその都度質問する。 事後学習として与えられた資料の内容を復習する。										
他の授業との関連	「看護技術論Ⅴ」「疾病と治療」を支える科目である。 演習や実習で実際に遭遇した患者の検査結果の解釈に役に立つ。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、理解力確認のための期末筆記試験(100%)で評価する。 ・出席時間が3分の2に満たない場合、原則として評価を受けられません。 ・期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果開示期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付け可能。(研究室39)										
備考	医療現場で働くものとして、検査結果の判読ができるように学習して下さい。 * 実務経験のある教員 大栗(臨床検査技師)										

臨床心理学 (Clinical Psychology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●竹森 元彦 (TAKEMORI Motohiko)										
授業の目的	前半は、現代社会とカウンセリングについて学習するとともに、看護場面等を設定した演習を通じて自分のコミュニケーションを振り返る。後半では、臨床心理学の歴史や理論を学ぶ。以上を通して、臨床心理学やカウンセリングについての理論や実践について習得することを目的とする。										
到達目標	① 現代社会の問題の背景にある心の問題について説明できる。 ② グループでの演習を通して、自分のコミュニケーションの癖を説明できる。 ③ 授業全体を通して、看護場面におけるカウンセリングを深めて、それを記述することができる。 ④ 臨床心理学の基礎理論について、授業の内容にそって説明することができる。										
授業の進め方	前半は、現代社会における心の問題、カウンセリングの現代的意義を論じた上で、看護場面におけるカウンセリング的コミュニケーションについてシナリオ法を通して学ぶ。後半は、臨床心理学の理論やパーソナリティの理論について学ぶ。最後に、自己理解の演習として、コラージュ制作を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	現代社会とカウンセリングの必要性 【講義・討議】									
	2	カウンセリングとは何か？ 【講義・演習】									
	3	看護場面などのカウンセリングのシナリオ法 【講義・演習】									
	4	看護場面などのカウンセリングのシナリオ法 【講義・演習】									
	5	臨床心理学の理論、パーソナリティ理論、人格理論 【講義】									
	6	臨床心理学の理論、パーソナリティ理論、人格理論 【講義】									
	7	コラージュ療法の体験 【講義・演習】									
	8	全体の振り返り、質疑応答 【討議】									
教科書	心の生まれる場所 カウンセリング・希望の生まれる瞬間 (竹森元彦、ふくろう出版)										
参考書・参考資料等	特に指定しない										
事前学習・事後学習	事前にテキストを熟考のこと。各回に、振り返りのレポートを課します。										
他の授業との関連	自己及び看護の対象の理解・支援に関する専門科目につながる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、受講態度を基本として、小レポート50%、レポート課題50%等により総合的に評価する。フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。なお、原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	集中講義なので、休憩時間などに。 評価結果については、疑問・不服申し立ての期間を設け、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
備考	コラージュ制作のために、①切り抜いてもよい雑誌1, 2冊、②はさみorカッター、③のり(ピットのり等)を準備すること。 * 実務経験のある教員 竹森(臨床心理士)										

臨床検査ラボラトリー (Clinical Examination Laboratory)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	①診療における臨床検査の役割と、検体採取から検査結果の取り扱いまでの一連の流れを理解し、臨床検査における看護師の役割を考察する。 ②臨床で頻回に遭遇する主な疾患での臨床検査値について、データ変動のメカニズムを起点とし、病態との関連性を理解する事で臨床検査値の解釈を学ぶ。										
到達目標	①基本的な臨床検査値の解釈ができる。 ②患者病態を反映する臨床検査情報を読み取り、診断治療計画に基づく看護の方針を考えることができる。										
授業の進め方	①講義は事例などを用いて、病態と検査値の関係や検査結果の解釈・理解ができるように進める。 ②授業中に理解が難しい点などについて積極的に質問し、理解度の確認をしながら進める。 ③最新の研究成果による新たな臨床検査についても学ぶ。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	臨床検査の役割、種類、場面と目的、結果の評価について【講義】									
	2	検体の採取方法、保存、移送方法などの注意点【講義】									
	3	臨床事例における検査データの見方 ①糖尿病・内分泌疾患【講義】									
	4	臨床事例における検査データの見方 ②循環器疾患【講義】									
	5	臨床事例における検査データの見方 ③肝疾患【講義】									
	6	臨床事例における検査データの見方 ④腎疾患【講義】									
	7	臨床事例における検査データの見方 ⑤血液疾患【講義】									
	8	簡易測定の実施(血糖自己測定、鼻腔粘膜採取等)【演習】									
教科書	系統看護学講座 別巻 臨床検査 (医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜、資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・各回の内容に関連する教科書部分を読んで授業に参加し、疑問点は質問をする。 ・授業後は事例検討などの復習を行う。										
他の授業との関連	・「看護技術論Ⅴ」「疾病と治療」を側面から支える科目である。 ・演習や実習で出会った患者さんの検査データの解釈に役立つ科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・授業態度(積極性など)20%、筆記試験80%により総合的に評価する。 ・評価の視点:異常値のメカニズムの理解などについての学習意欲も評価対象とする。 ・試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室36にて対応する。 メール:tada@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	臨床検査は診断・治療に不可欠です。患者の病態を把握し、よりよい看護に役立つように勉強してください。 *実務経験のある学内教員 多田(臨床検査技師)										

看護学概論Ⅰ（看護の概念）(Introduction to Nursing SciencesⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●小野 美穂(ONO Miho)										
授業の目的	看護とは何か、看護学とはどのような学問なのか、このような問いを視点として多角的に探究し、今後の看護学を学ぶ上での動機づけを図る。また、看護の対象としての人間を総合的に理解し、看護学に真摯に向き合い、看護専門職としての誇りと責任を醸成する。										
到達目標	①看護とは何かを探究する姿勢をもち、自分で考え自分の言葉で表現できる。 ②看護が発展してきた歴史的背景と今後の動向について自分の言葉で説明できる。 ③看護の基本的概念(人間、環境、健康、看護)について自分の言葉で説明できる。 ④看護学に対する時代の要請や最新の知見を踏まえ、看護学を探究することができる。										
授業の進め方	・毎回の授業は、要点を示した資料に基づき講義する。 ・授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して提出する。 ・最新の知見や看護理論等を活用した研究を組み込みながら講義を展開する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護を学ぶにあたって【講義】									
	2	看護の歴史的変遷、ナイチンゲールの功績【講義・討論】									
	3	看護の定義(看護理論家、ニード論、相互作用理論、システム理論)【講義・討論】									
	4	看護の役割機能(看護理論②ケアリングの理論)【講義・討論】									
	5	対象の理解:人間のこころとからだ【講義・討論】									
	6	対象の理解:人間の成長発達と暮らし【講義・討論】									
	7	看護における健康の概念【講義・討論】									
	8	看護の継続性と連携									
教科書	基礎看護学[1]看護学概論(医学書院)										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布するとともに、参考文献を紹介する。										
事前学習・事後学習	・授業前、教科書の該当部分を熟読して授業に参加する。 ・授業後、配布資料と教科書を読み内容の理解を深め他の文献資料も参考にして考えを整理する。										
他の授業との関連	・1年次「看護学導入実習」の履修要件科目である。 ・大学で学修するすべての看護学関連科目の基盤となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない 到達目標の達成状況を、以下の視点と基準で評価する ①課題レポート(40%) ＜評価視点＞「論理的な記述と表現」「自分の考えの深まり」「レポートの体裁」 ②期末定期筆記試験(60%) ＜評価視点＞「基本的な知識と理解」「論理的な記述と表現」 レポートおよび試験結果のフィードバックを行う										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。 メールにてアポイントメントをとってください。										
備考	＊実務経験のある教員 小野(看護師)										

看護学概論Ⅱ（看護専門職と倫理）(Introduction to Nursing Sciences Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●小野 美穂(ONO Miho)										
授業の目的	「なぜ私たちは倫理を学ぶ必要があるのか」「医療倫理と看護倫理の違いは何か」「看護実践における倫理とは何か」、これらの問いを基点として探求して知識を整理し、倫理的課題に対する多角的な見方考え方があることを知る。										
到達目標	①看護が専門職をめざした道のりについて説明できる ②看護倫理の定義と原則について説明できる ③看護実践における倫理的ジレンマと解決に向けての考えの進め方について説明できる ④時代背景によるパラダイムシフトや最新の知見を踏まえ、倫理的課題について考えることができる										
授業の進め方	・毎回の授業の要点を示した資料に基づき講義する。 ・授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 ・視聴覚教材を用い事例を提示し、グループで小課題に取り組む。 ・最新の知見や研究を組み込みながら講義を展開する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護職が専門職の条件を満たそうと努力してきている道のり【講義・討論】									
	2	倫理の基礎：医療をめぐる倫理の歴史、生命倫理の原則【講義・討論】									
	3	看護専門職と倫理、看護の倫理原則【講義・討論】									
	4	看護倫理の概念（アドボカシー、責務、協力、ケアリング）【講義・討議】									
	5	看護職の倫理綱領、ICNと日本の比較【講義・討論】									
	6	看護実践と倫理①「日常の看護の営みにおける倫理」：事例検討【講義・討論】									
	7	看護実践と倫理②「日常の看護の営みにおける倫理」：事例検討【講義・討論】									
	8	看護実践と倫理③「倫理的問題へのアプローチ法」【講義・討論】									
教科書	基礎看護学[1]看護学概論(医学書院)										
参考書・参考資料等	毎回の授業で資料を配布し参考文献を紹介する。										
事前学習・事後学習	・授業前、教科書の該当部分を熟読して授業に参加する。 ・授業後、配布資料と教科書を読み内容の理解を深めて、課題に取り組む。										
他の授業との関連	・1年次「看護技術論実習」の履修要件科目である。 ・看護の対象に、実際にかかわり看護ケアを提供する看護学実習に密接に関連する科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席日数が授業時間数の3分に2に満たないときは、原則として評価を受けることはできない。 到達目標の達成状況を、以下の視点と基準で評価する ①レポート課題(50%) ＜評価の視点＞「内容の理解」「論理的記述」「考えの深まり」 ②期末定期試験(筆記)(50%) ＜評価の視点＞「基本的な知識の獲得と理解」「論理的記述」「知識と経験の統合」 試験結果のフィードバックを行う。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。 メールにてアポイントメントをとってください。										
備考	＊実務経験のある教員 小野(看護師)										

看護学概論Ⅲ(看護サービス管理)(Introduction to Nursing Sciences Ⅲ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●片山陽子(KATAYAMA Yoko)、平木民子(HIRAKI Tamiko)										
授業の目的	総合実習(卒業時の総合的な看護実践能力の習得)および卒業後の職場選択(看護職が働く環境を選ぶ)に向けて、患者中心の個性ある看護が提供できる看護組織とはどのような姿なのか、またどのように形成されるのかについて理解する。特に、看護の提供における「効率性、安全性、倫理性」の対立葛藤を克服して「患者の尊厳を守る看護」を実現するための個人と組織の課題について探究する。										
到達目標	①看護管理者が実践する「看護サービス管理」の概要について説明できる。 ②看護サービスの質を査定するための視点と方法について説明できる。 ③看護職同士および他職種と連携協働できる看護組織のあるべき姿について説明できる。 ④これからの自分自身の看護実践の経験に興味関心が出る。										
授業の進め方	前半は、4年次前期の実習前に行い、看護管理に関する問題現象やしくみづくりを理解し、その視点をもって前期の実習に臨む。後半は、前期の実習後に、グループおよび全体の意見交換を行い、後期の総合実習に備える。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	①看護ケアのマネジメントと看護サービス管理、看護サービス管理の要素とプロセス(平木)									
	2	②看護サービスの質の保証、看護サービス管理におけるリスクマネジメント(平木)									
	3	③看護サービス管理の事例紹介「急性期病院で実現した身体抑制のない看護」(平木)									
	4	④看護サービス管理の事例紹介「中小規模病院で実現した身体抑制のない看護」(片山)									
	5	⑤グループ発表と討論(平木)									
	6	⑥グループ発表と討論(平木)									
	7	⑦グループ発表と討論(平木)									
	8	⑧グループ発表と討論(平木)									
教科書	使用しない										
参考書・参考資料等	1回目の授業で文献リストを提示する										
事前学習・事後学習	・毎回の授業前に配布資料を読んで参加する。 ・毎回の授業後に自分の考えや意見を書いて提出する。										
他の授業との関連	2年次後期「看護管理」は、「チームワークとリーダーシップの理論」を中心に看護マネジメントの基本編を学習したが、今回は応用編となる。4年次後期の総合実習に直接関連する内容である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	①授業後の個人小レポート(50%) 「知識の活用」「論理的記述」「考察の深さ」 ②グループワーク成果(50%) 「資料の見やすさわかりやすさ」「興味深い内容」「考察の深さ」 ①②併せて、前期終了時に返却する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	授業開始時に教員が対応できる日時を提示する										
備考	＊実務経験のある教員 片山(保健師、看護師)、平木(看護師)										

看護教育(対象:令和元年度入学生から)(Nursing Education)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●小野 美穂 (ONO Miho)										
授業の目的	現在、自分が学んでいる看護学教育カリキュラムや主体的に学ぶ方法を理解し、卒業時の到達目標および卒業後のキャリア開発に向けての課題を探究する。さらに「教えることと学ぶこと」の本質や方法を理解して後輩指導に活かす。看護に対する時代の要請や最新の知見を踏まえ、看護における教育について探究する。										
到達目標	①看護教育制度の現状、大学教育拡充の要因について説明できる ②本学のカリキュラムの特徴が説明できる ③自分が看護を主体的に学ぶための課題や対策について説明できる ④興味関心のある教育に関する概念や理論についてグループワーク学習を行い、理解しやすく、伝わりやすい発表ができる。 ⑤看護学の教育評価について説明できる ⑥学習者の主体性を発揮する指導のあり方について説明できる										
授業の進め方	・毎回の授業の要点を示した資料に基づき講義する ・最新の知見や研究を組み込みながら講義を展開する ・一つのテーマについて、グループワークによりまとめ、成果物を発表する ・講義内容を振り返り、課題に対する自分の考えを記述して指定日までに提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護教育制度の現状と課題、本学のカリキュラム【講義・討論】									
	2	看護実践能力とは、臨床判断モデル、メタ認知と実践知【講義・討論】									
	3	主体的に学ぶために①:学習理論(行動主義、認知主義、状況主義)【講義・討論】									
	4	主体的に学ぶために②:看護学教育の基盤となる概念【講義・討論】									
	5	主体的に学ぶために③:実践の成長を支えるリフレクション【講義・討論】									
	6	主体的に学ぶために④:教育評価(自己評価とポートフォリオ)【講義・討論】									
	7	主体的な学びを促す支援方法①:指導の工夫【講義・討論】									
	8	主体的な学びを促す支援方法②:臨床看護現場での指導【講義・討議】									
教科書	特に使用しない										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布する。参考文献資料は授業中に随時紹介する										
事前学習・事後学習	事前学習:グループワーク課題についてメンバーと学びを深める 事後学習:配布資料を読んで内容の理解を深めて課題等に取り組む										
他の授業との関連	カリキュラム全体における2年次前期までの「基礎編」を終えて、3年次の「応用編」に入る前に、自分自身が受けている看護学教育や自分の学習を捉え直し、今後の学び方を方向づける。また、指導に関する知識を得て、合同演習等における後輩指導に活かす。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席日数が授業時間数の3分に2に満たないときは、原則として評価を受けることはできない ①課題レポート(50%) 〈評価視点〉「内容の理解」「論理的記述と言語表現」「自分の考えの深まり」「レポート体裁」 ②期末試験(50%) 〈評価視点〉重要な用語や概念の説明など 試験結果のフィードバックを行う										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する メールにてアポイントメントをとってください										
備考	* 実務経験のある教員 小野(看護師)										

看護管理(対象:令和元年度入学生から)(Nursing Management)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●小野 美穂(ONO Miho)										
授業の目的	看護組織(チーム)の一員として活動する際に必要となる「看護マネジメント」の概念を理解し、質の高い看護を提供するためのしくみづくりや環境について、時代の要請や最新の知見を踏まえ、探求する。2年次後期に看護管理を学ぶ目的は、次の3点である。①今後の臨床実習において「看護チームの一員である看護学生」という意識をもって視野を広げて実習する。②看護管理の知識を使って実習施設の看護を把握し就職活動に活かす。③就職後の看護職員として職場適応するための課題を把握する。										
到達目標	①マネジメントとリーダーシップの概念について説明できる ②病院における安全管理のしくみについて説明できる ③看護管理過程「目標・組織化・指揮・統制」が説明できる ④集団力学とアサーションの概念を使って自己課題を見出せる ⑤組織の変革と交渉術について説明できる										
授業の進め方	・毎回、授業の要点を示した資料に基づき講義する ・最新の知見や研究を組み込みながら講義を展開する ・授業中に小グループで討議する時間を設け、意見交換する ・講義内容を振り返って、自分の意見を記述して指定期日までに提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護ケアのマネジメント①:「マネジメントとは」「チーム医療」【講義・討論】									
	2	看護ケアのマネジメント②:「安全管理」【講義・討論】									
	3	看護サービスのマネジメント①:「看護管理過程, 看護提供体制」【講義・討論】									
	4	看護サービスのマネジメント②:「リーダーシップ理論①」【講義・討論】									
	5	看護サービスのマネジメント③:「リーダーシップ理論②」【講義・討議】									
	6	組織の調整①:「職満満足と動機づけ」「エンパワメント」【講義・討論】									
	7	組織の調整②:「集団力学」「アサーション」【講義・討論】									
	8	組織の調整③:「変革、交渉、コンフリクト」【講義・討論】									
教科書	系統看護学講座「看護管理」医学書院										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布し、文献資料リストを提示する										
事前学習・事後学習	事前学習:授業前に教科書の該当部分を熟読して授業に参加する 事後学習:配布資料と教科書を読み内容の理解を深め考えを整理して、小課題に取り組む										
他の授業との関連	2年次前期までの基礎的実習を終えて、3年次の応用的実習に入る前に、看護チームの一員としての看護学生という視点で、看護実践を捉え直すための科目である										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 ①課題レポート(50%) ＜評価視点＞「知識の理解と活用」「論理的記述と表現」 ②期末テスト(50%) ＜評価視点＞「学習内容の理解の確認」「重要な概念の理解」「自分の言葉で説明できる」										
オフィスアワー	授業後に質問を受ける または、メールにて事前アポイントをとってください										
備考	＊実務経験のある教員 小野(看護師)										

看護技術論Ⅰ（援助的人間関係）(Nursing SkillsⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●則包 和也(NORIKANE Kazuya)、土岐 弘美(TOKI Hiromi)、多田羅 光美(TATARA Terumi)										
授業の目的	看護の対象である人間について様々な視点から考えるとともに、自己を客観的に捉えることを通して、自己洞察する姿勢を養い、援助的人間関係を形成するために必要なことを考察する。										
到達目標	①人間とは何かという問いについて、包括的に理解する姿勢を修得することができる ②知覚・感情・認知など人間の内面の動きについて学習し、他者との関係性の中でどのように機能しているのかを理解できる ③人を援助することと看護とは何かということを考えることができる										
授業の進め方	講義と演習で進める。講義は少人数のグループワークを行いながら実施し、コミュニケーションやリクリエーションを取り入れた演習によって、体験的に学ぶことを重視する。その学びを素材として、自己理解を深めるとともに、他者との関係性について知見を得て、人を援助することの意味と意義を考察する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	人間を理解するための様々な視点 (則包)【講義】									
	2	人間の特殊性 (則包)【講義】									
	3	プロセスレコードの分析と自己理解1(土岐)【講義・演習】									
	4	自己の対話スキルの分析と自己理解(土岐)【講義・演習】									
	5	カラーージュ療法を用いた自己理解 (則包)【講義・演習】									
	6	患者-看護師関係の理解 (多田羅)【講義】									
	7	人間の表情と感情・認知の関係 (則包)【講義】									
	8	人間の生活の変化に伴う概念の発達 (則包)【講義】									
	9	心のモデルを用いた自己理解:ジョハリの窓、短所を長所に(則包)【講義・演習】									
	10	コミュニケーションの要素と構成 (則包)【講義・演習】									
	11	人間関係に影響を与える要因 (則包)【講義・演習】									
	12	自己理解を深める1(価値観、信念、自尊感情を客観視する)(則包)【講義・演習】									
	13	自己理解を深める2(認知、感情、行動に焦点を当てて自己を客観視する)(則包)【講義・演習】									
	14	プロセスレコードの分析と自己理解2(則包、土岐、多田羅)【講義・演習】									
	15	「なぜ、私は看護で人を助けようとしているのだろうか」のグループワークと発表(則包、土岐、多田羅)【演習】									
教科書	精神看護学[1]精神看護の基礎 (医学書院)、精神看護学[2]精神看護の展開 (医学書院)										
参考書・参考資料等	自分を好きになるためのワークブック(ふくろう出版)										
事前学習・事後学習	事前学習:人間について様々な視点から考えるため、日常生活のなかで自分や他者の傾向を意識するように留意すること。さらに、社会や世の中の情勢等に関する情報収集をしておくこと。 事後学習:講義の資料や教員の説明の内容と、自分自身の体験と照らし合わせながら、自分の意見・考えを深めることに留意する。										
他の授業との関連	本科目は、看護技術論実習の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 ・最終レポート(内容、形式の充足等)40%、演習課題(内容、形式の充足等)30%、授業毎の小レポート15%(内容、文字数)、授業貢献度15%(参加態度、提出期限の順守、教員との連絡のやりとり等)を総合して評価する。 ・評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜受け付けますが、事前にメール等で連絡をしてください。則包(研究室21)、土岐(研究室14)、多田羅(研究室30)										
備考	*実務経験のある教員:則包(看護師)、土岐(看護師)、多田羅(看護師)										

看護技術論Ⅱ（日常生活援助技術①）（Nursing Skills Ⅱ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●呉 小玉(WU Xiaoyu)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、県立病院出向看護師										
授業の目的	人間が身体・心理・社会的側面を統合した生活者として日常生活を営むことが健康生活の基盤であることを前提として、看護援助を必要としている人の全体像を想像し、安全安楽に援助を実践する方法とその根拠を理解する。										
到達目標	①「感染予防、食事/排泄、活動/休息・睡眠」に関する生活行動の目的と機能が説明できる。 ②「感染予防、食事/排泄、活動/休息・睡眠」の援助技術の実践方法と根拠が説明できる。 ③技術実施に際して、予測される危険性と事故予防策について説明できる。 ④看護師役・対象者役・観察調整役を通し、実際の臨床で実施する際の留意点を発見し説明できる。 ⑤対象者役を対象に、安全安楽に考慮した援助技術が実施できる。										
授業の進め方	・毎回の授業開始時に、事前学習での疑問点を出し合い討論する。 ・援助技術実施前の対象者アセスメントについて講義で事前学習を確認する。 ・技術の実施手順や方法については、DVD、テキスト、デモンストレーションで示すので、その後で学生が気づいたことや考えたことを積極的に出し合い、全体で理解を深めていく。 ・看護師役、対象者役、観察調整役を交代しながら行う。グループで考えながら演習展開し、演習の最後の時間は全体で討論して理解を深める。 ・振り返り学習として、演習ワークシートに「実施、評価、課題」を記入して整理する。自己課題をどこでどのようにクリアするか他者(教員、グループメンバー、先輩)支援も活用しながら課題達成する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業オリエンテーション、環境に働きかける援助①(病床環境を知る)(呉)【講義】									
	2~3	環境に働きかける援助②(快適な病床環境をつくる:ベッドメイキング)(呉)【演習】									
	4~5	活動と休息に関する援助①(生体リズムの調整と休息・睡眠を促す)(呉)【講義】									
		活動と休息に関する援助②(安楽な体位と体位変換、移動、移送)(呉)【講義・演習】									
	6~7	感染とその予防を促進する援助①(感染とその予防について知る:手洗い、ガウンテクニック)(呉)【講義・演習】									
	8~9	感染とその予防を促進する援助②(滅菌物の取り扱いを体験する)(呉)【講義・演習】									
	10~11	食事・栄養摂取に関する援助①(食行動と栄養摂取について知る)(呉)【講義・演習】									
		食事・栄養摂取に関する援助②(安全で安楽な食事の援助を行う)(呉)【講義・演習】									
	12~13	排泄の関する援助①(排泄のメカニズムを知る)(呉)【講義・演習】									
	排泄の関する援助②(排泄援助を安全安楽に行う:便器、尿器、ポータブルトイレの使用)(呉)【講義・演習】										
14~15	排泄の関する援助③(重症者の排泄援助を安全安楽に行う:紙おむつ)(呉)【講義・演習】										
	まとめ(呉)【講義・演習】										
教科書	・基礎看護技術―看護過程の中で技術を理解する―(南江堂) ・フィジカルアセスメントガイドブック(医学書院)										
参考書・参考資料等	・資料を配布する。 ・看護形態機能学―生活行動からみるからだ―(医学書院) ・写真でわかる実習で使える看護技術(インターメディカ)										
事前学習・事後学習	・毎回の授業前に提示される事前課題を手がかりにテキストを読んで授業に参加する。イメージできない用語や手技について授業開始前に質問し全員で共有する。また、対象者の状態をアセスメントするための「人体の構造と機能」の知識を自分が理解しているかどうかを確認しておく。 ・演習ワークシートを活用して、繰り返し練習する必要があると評価した技能は各自で取り組む。										
他の授業との関連	・「人体の構造と機能」の知識を活用し、「看護学概論Ⅰ」と統合させる科目である。 ・1年次後期の「看護技術論Ⅳ(日常生活援助技術②)」につなぐ科目である。 ・「看護技術論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況20%(出席、看護師役と対象者役の取り組みとディスカッション)、演習ワークシート40%(評価視点は知識の理解と応用、援助の根拠説明と実践を客観視する力)筆記試験40%(評価視点は知識、論理的記述)で総合的に評価する。全ての評価結果については、疑問・異議申し立ての期間を設け評価内容を説明する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	教員は学生が技術練習や質問ができるように、日程等を授業開始時から授業終了時に表示する。										
備考	* 実務経験のある教員 呉(看護師)、重兼(看護師)、県立病院出向看護師。また、この科目については目的や到達目標を達成するために、実習室にある実習用モデル、e-ラーニング教材等を用いて、時間外に基礎実習室を効果的に活用して自主的に学習してください。										

看護技術論Ⅲ（フィジカルアセスメント①）（Nursing Skills Ⅲ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●新井 恵津子 (ARAI Etsuko)、小林 秋恵 (KOBAYASHI Akie)、重兼 望 (SHIGEKANE Nozomi)、筒井 邦彦 (TSUTSUI Kunihiko)										
授業の目的	・看護におけるヘルスアセスメントおよびフィジカルアセスメントの考え方と方法を学ぶ。 ・フィジカルアセスメントの基本的知識と技術を身につける。										
到達目標	①看護におけるヘルスアセスメントの必要性が説明できる。 ②自分自身の身体を活用するフィジカルイグザミネーションおよびアセスメントに必要な知識・技術が説明できる。 ③安全で正確な観察・測定技術が実施できる。 ④観察・測定した身体情報について解釈し、専門用語を用いて説明できる。 ⑤看護師役と対象者役の体験から学んだことを表現でき、自己課題を明確にできる。										
授業の進め方	・毎回の授業では、事前学習での疑問点を出し合い討論し、アセスメントに必要な知識を講義で確認、演習において最新の知見を踏まえた解説をする。 ・技術側面は、DVD、テキスト、デモンストレーションで示すので、学生が気づいたことや考えたことを積極的に意見交換し、全体で理解を深めていく。 ・技術練習は看護師役、対象者役、観察調整役を交代しながら行う。 ・技術練習の振り返り学習として、演習ワークシートに「実施、評価、課題」を記入して整理する。自己課題をどこでどのように達成するか他者（教員、グループメンバー、先輩）支援も活用しながら取り組む。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	看護におけるヘルスアセスメント、フィジカルアセスメント、面接技法（新井）【講義】									
	3~4	一般状態と生命徴候、体温・呼吸・意識・脈拍・血圧に関するアセスメント（新井、小林、重兼）【講義・演習】									
	5	バイタルサインズの測定技術（新井、小林、重兼）【講義・演習】									
	6	バイタルサインズの測定技術とアセスメント（新井、小林、重兼）【演習・技術試験】									
	7	循環器・呼吸器のフィジカルアセスメント（筒井、新井）【講義・演習】									
	8	循環器・呼吸器・腹部の観察とアセスメント（新井、小林、重兼）【演習・技術試験】									
	9~10	一次救命処置（新井、小林、重兼）【講義・演習】									
	11~14	「体温調整、褥瘡法、呼吸を安楽にする」に関する援助技術とアセスメント（新井、小林、重兼）【講義・演習】									
	15	事例患者の日常生活ニーズを抽出し援助を考える（新井、小林、重兼）【演習】									
教科書	・写真でわかる看護のためのフィジカルアセスメント アドバンス（インターメディカ） ・フィジカルアセスメントガイドブック（医学書院） ・基礎看護技術―看護過程の中で技術を理解する―（南江堂）										
参考書・参考資料等	・看護形態機能学―生活行動からみるからだ―（医学書院）										
事前学習・事後学習	・授業前に提示される事前課題を手がかりにしてテキストを読み理解して授業に参加する。対象者の状態をアセスメントするための「人体の構造と機能」の知識を再確認しておく。 ・演習ワークシートを活用して、自己課題を見出し課題達成に取り組む。										
他の授業との関連	・「人体の構造と機能」「疾病と治療」の知識を活用する科目である。 ・この科目は、2年次前期「看護技術論Ⅵ（フィジカルアセスメント②）」の基礎編になる。 ・「看護技術論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況30%（出席状況、演習の取り組み、演習ワークシート）、技術試験（30%）、筆記試験（40%）により総合的に評価する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設ける。										
オフィスアワー	学生の技術の練習や質問に対応できるように、教員は時間帯を授業開始時に表示する。										
備考	＊実務経験のある教員 新井（看護師）、小林（看護師）、重兼（看護師）、筒井（医師） 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

看護技術論Ⅳ(日常生活援助技術②)(Nursing Skills Ⅳ)

必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義・演習
担当教員	●呉 小玉(WU Xiaoyu)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、県立病院出向看護師										
授業の目的	看護援助を必要としている人の健康状態をアセスメントし、安全安楽に援助技術を実践するための方法と根拠を理解し、対象者との効果的な相互作用に基づく実践ができるための課題を明確にする。										
到達目標	①看護援助技術の実践方法について、根拠に基づいて説明できる。 ②技術実施に際して、予測される危険性と事故予防策について説明できる。 ③看護師役・対象者役・観察者役を通して、実際の臨床で実施する際の留意点を発見し説明できる。 ④対象者役を対象に、安全安楽を考慮した援助技術が実施できる。										
授業の進め方	・毎回の授業開始時に、事前学習での疑問点を出し合い討論する。 ・援助実施前に必要な対象者アセスメントについて講義で事前学習を確認する。 ・技術の実施手順については、DVD、テキスト、デモンストレーションで示すので、その後で学生が気づいたことや考えたことを積極的に出し合い、全体で理解を深めていく。 ・看護師役、対象者役、観察調整役を交代しながら行う。グループで考えながら演習展開し、演習の最後の時間は全体で討論して理解を深める。 ・振り返り学習として、演習ワークシートに「実施、評価、課題」を記入して整理する。自己課題をどこでどのようにクリアするか他者(教員、グループメンバー、先輩)支援も活用しながら課題達成する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	授業のオリエンテーション、清潔の援助技術①(全身の清潔について知る) (呉)【講義】									
	3~4	清潔の援助技術②(全身清拭を安全安楽に行う) (呉)【演習】									
	5~6	清潔の援助技術③(安全安楽に寝衣、寝具を交換する) (呉)【演習】									
	7~8	清潔の援助技術④(手と足、口腔の清潔援助を行う) (呉)【演習】									
	9~10	清潔の援助技術⑤(洗髪を安全安楽に行う) (呉)【演習】									
	11~12	感染予防の技術①(滅菌物を取り扱い自然排尿がない人への援助:導尿) (呉)【演習】									
	13~14	排泄の援助技術②(自然排尿がない人への援助:導尿) (呉)【演習】									
	15~16	排泄の援助技術③(自然排便がない人への援助:浣腸) (呉)【演習】									
	17~18	事例を用いた演習(安全安楽な援助技術) (呉)【演習】									
	19~20	事例を用いた演習(安全安楽な援助技術) (呉)【演習】									
21~23	事例を用いた演習(安全安楽な援助技術)まとめ (呉)【演習】										
教科書	・基礎看護技術一看護過程の中で技術を理解する一(南江堂) ・フィジカルアセスメントガイドブック(医学書院)										
参考書・参考資料等	・資料を配布する。 ・看護形態機能学—生活行動からみるからだ—(医学書院) ・写真でわかる実習で使える看護技術(インターメディカ)										
事前学習・事後学習	・毎回の授業前に提示される事前課題を手がかりにしてテキストを読んで授業に参加する。イメージできない用語や手技について授業開始前に質問し全員で共有する。また、対象者の健康状態をアセスメントするための「人体の構造と機能」の知識を自分が理解しているかどうかを確認しておく。 ・演習ワークシートを活用して、繰り返し練習する必要があると評価した技能は各自で取り組む。										
他の授業との関連	・「人体の構造と機能」の知識を活用し、「看護学概論Ⅰ」「看護技術論Ⅰ」と統合させる科目である。 ・2年次以降の看護学における看護技術の基礎となる科目である。 ・「看護技術論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況20%(出席、看護師役と対象者役の取り組みとディスカッション)、演習ワークシート40%(評価視点は知識の理解と応用、援助の根拠説明と実践を客観視する力)筆記試験40%(評価視点は知識、論理的記述)で総合的に評価する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。全ての評価結果については、疑問・異議申し立ての期間を設け評価内容を説明する。										
オフィスアワー	教員は学生が技術練習や質問ができるように、日程等を授業開始時か授業終了時に表示する。										
備考	* 実務経験のある教員 呉(看護師)、重兼(看護師)、県立病院出向看護師。また、この科目については目的や到達目標を達成するために、実習室にある実習用モデル、e-ラーニング教材等を用いて、時間外に基礎実習室を効果的に活用して自主的に学習してください。										

看護技術論Ⅴ（診療治療に伴う技術）(Nursing Skills Ⅴ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●新井 恵津子 (ARAI Etsuko)、重兼 望 (SHIGEKANE Nozomi)										
授業の目的	診療を受ける対象者が必要とする看護援助ニーズを理解し、安全安楽に実践するための方法及びその根拠を理解し、対象者との効果的な相互作用に基づく実践ができるための課題を理解する。										
到達目標	①診療に伴う看護技術の実践方法について、根拠に基づいて説明できる。 ②技術実施に際して、予測される危険性と事故予防策について説明できる。 ③看護師役・対象者役・観察者役を通して、実際の臨床で実施する際の留意点を発見し説明できる。 ④対象者役を対象に、安全安楽を考慮した援助技術が実施できる。										
授業の進め方	・毎回の授業では、事前学習での疑問点や前回授業の疑問点を出し合い討論し、演習を進めながら最新の知見を踏まえながら、解説する。 ・技術の実施手順については、DVD、テキスト、デモンストレーションで示すので、その後で学生が気づいたことや考えたことを積極的に出し合い、全体で理解を深めていく。 ・看護師役、対象者役、観察者役を交代しながら行う。グループで考えながら演習展開し、演習の最後の時間は全体で討論して理解を深める。 ・振り返り学習として、演習ワークシートに「実施、評価、課題」を記入して整理する。自己課題をどこでどのようにクリアしていくか他者（教員、グループメンバー、先輩）支援も活用しながら課題達成する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	薬物に伴う看護援助技術、看護の役割と法的根拠（新井、重兼）【講義・演習】									
	2	検査に伴う看護援助技術、検査の種類と看護の役割（新井、重兼）【講義・演習】									
	3	薬物療法・検査時の援助技術：注射器の取り扱い（新井、重兼）【講義・演習】									
	4	静脈血採血の援助技術（新井、重兼）【講義・演習】									
	5	静脈血採血の技術演習（新井、重兼）【講義・演習】									
	6	薬物療法の援助技術（経口、外用、注射）（新井、重兼）【講義・演習】									
	7	薬物療法の技術演習（皮下注射、筋肉注射、皮内注射）（新井、重兼）【講義・演習】									
	8	薬物療法の技術演習（点滴静脈注射）（新井、重兼）【講義・演習】									
	9	呼吸に関する援助技術（酸素療法）（新井、重兼）【講義・演習】									
	10	呼吸に関する援助技術（吸入：気道加湿法）（新井、重兼）【講義・演習】									
	11	呼吸に関する援助技術（口腔内・鼻腔内吸引）（新井、重兼）【講義・演習】									
	12	呼吸に関する援助技術（口腔内・鼻腔内吸引）（新井、重兼）【講義・演習】									
	13	技術チェック（新井、重兼）【講義・演習】									
	14	技術チェック（新井、重兼）【講義・演習】									
	15	事例を用いた援助技術（新井、重兼）【講義・演習】									
教科書	・基礎看護技術一看護過程の中で技術を理解する一（香春知永編集、南江堂） ・写真でわかる実習で使える看護技術（吉田みつ子、インターメディカ）										
参考書・参考資料等	・写真でわかる臨床看護技術アドバンス①②（インターメディカ）										
事前学習・事後学習	・毎回の授業前には教科書を読んで授業に参加する。イメージできない用語や手技について授業開始前に質問し全員で共有する。他の「看護技術論」の科目で学んだことと関連づけておく。 ・演習ワークシートを活用して、繰り返し練習する必要があると評価した技能は各自で取り組む。										
他の授業との関連	・2年次前期に同時進行している「看護技術論Ⅵ（フィジカルアセスメント②）」「健康レベル別看護技術演習」と関連づけて習得する。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況20％（出席、演習の取り組みとディスカッション）、演習ワークシートの評価40％、筆記試験40％により総合的に評価する。 原則として授業出席時間数の5分の4に満たないときは、原則評価を受けられません。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設ける。										
オフィスアワー	学生の技術の練習や質問に対応できるように、教員は時間帯を授業開始時に表示する。										
備考	＊実務経験のある教員 新井（看護師）、重兼（看護師） 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

看護技術論Ⅵ(フィジカルアセスメント②)(Nursing Skills Ⅵ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義・演習
担当教員	●筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiro)、新井 恵津子(ARAI Etsuko)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、(新任教員)										
授業の目的	対象者が抱える疾病に伴う身体状況を把握するために、正しいフィジカルアセスメントの知識と手技を学ぶ。それらを新しい知見も取り入れながら統合でき、正しくアセスメントが行える実践能力を身に着ける。										
到達目標	①患者役の学生の身体を用いながら正しいフィジカルアセスメントが実施できる。 ②身体診察技法を使って得た情報を解釈し、その内容について専門用語を用いて他者に説明できる。 ③事例対象者の身体状態の診察で得た情報を解釈推論し自分の行動や必要な看護援助が説明できる。										
授業の進め方	・毎回の授業前に、事前学習課題について自身で調べ、レポートとして提出する。 ・アセスメントに必要な知識を講義で確認する。 ・技術的側面はデモンストレーションで示すので、学生が気づいたことや考えたことを積極的に出し合い、全体で理解を深めていく。 ・看護師役、対象者役を交代しながら行う。グループで考えながら演習展開し理解を深める。 ・自己課題をどこでどのようにクリアしていくか他者(教員、グループメンバー)支援も活用しながら課題を達成する。 ・仮想事例のフィジカルアセスメントのプロセスをグループで検討しプレゼンする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~4	<担当教員>#1~#23筒井、新井、重兼									
	5~8	①~④循環器系:症状・徴候把握、アセスメント、循環器状態の評価【講義・演習】									
	9~12	⑤~⑧感覚器:症状・徴候把握、アセスメント、感覚器状態の評価【講義・演習】									
	13~16	⑨~⑫呼吸器、消化器:症状・徴候把握、アセスメント、呼吸器、消化器状態の評価【講義・演習】									
	試験	⑬~⑯中枢神経、運動器:症状・徴候把握、アセスメント、中枢神経、運動器状態の評価【講義・演習】									
	17	ここまでの試験									
	18~20	⑰仮想症例説明									
	21~23	⑱~⑳仮想症例についてグループごとにフィジカルアセスメントを立案する									
教科書	⑳~㉓プレゼンテーション										
教科書	・写真でわかる看護のためのフィジカルアセスメント アドバンス(インターメディカ) ・フィジカルアセスメントガイドブック(医学書院)										
参考書・参考資料等	・看護形態機能学—生活行動からみるからだ—(医学書院) ・写真でわかる実習で使える看護技術(インターメディカ) ・基礎看護技術—看護過程の中で技術を理解する—(南江堂)										
事前学習・事後学習	・毎回の授業前に提示される事前課題を手がかりにしてテキストを読み理解して授業に参加する。イメージできない用語や手技について授業開始前に質問し全員で共有する。また、対象者の状態をアセスメントするための「人体の構造と機能」の知識を自分が理解しているかどうかを確認しておく。 ・演習ワークシートを活用して、繰り返し練習する必要があると評価した技能は各自で取り組む。										
他の授業との関連	・「人体の構造と機能」「疾病と治療」の知識を活用して、看護が自立して対象の身体状態を把握し判断できることを目指す科目である。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況(看護師役と対象者役の取り組みとディスカッション、事前学習等の提出物)(40%)、筆記試験(40%)、プレゼンテーションの内容と質問内容(20%)により総合的に評価します。出席時間数の5分の4に満たないときは、原則評価を受けることができません。 事前課題は演習までに提出し、内容を評価します。その後返却し内容に関するフィードバックを行った上で演習時に生かしてもらいます。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明します。演習中の取り組み方については、教員すべてから必要な助言を行います。仮想症例に対するグループワークでは、教員がそれぞれのグループを見回り、適切な助言を行っていきます。										
オフィスアワー	基本授業終了後、実習室で。 主担当教員が空いている時間は自室で対応します。アポイントメントを先にとってください。										
備考	* 実務経験のある教員 筒井(医師)、新井(看護師)、重兼(看護師)、新任教員(看護師)										

総合看護技術演習Ⅰ（1年生＋2年生）(Seminar of Integrated Nursing SkillsⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	演習
担当教員	●小林 秋恵(KOBAYASHI Akie)、小野 美穂(ONO Miho)、新井 恵津子(ARAI Etsuko)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、多田羅 光美(TATARA Terumi)、他演習担当教員										
授業の目的	臨地実習で個別対象者の尊厳を守りながら看護技術を実施する際には、対象者の特性、心身の状態、場の状況に応じた方法を考案して実施する必要がある。また実行過程では対象者と相互作用しつつ臨機応変な対応が必要となる。このような臨床看護実践における思考と行動をイメージして、臨地実習の準備状態を整える。										
到達目標	①事例患者が必要とする日常生活のニーズが把握できる。 ②事例患者の特性、状態、特定場面の状況に応じた看護援助場面を想像し、技術実施の展開方法および留意点が説明できる。 ③看護師役は実践場面の「気づき－解釈－反応」について他者に説明できる。 ④観察者は看護師役の実践場面を観察し、実施者の「気づき－解釈－反応」について気づいたことや考えたことを周囲の人と意見交換できる。 ⑤意見交換することで自分と他者の「気づき－解釈－反応」を比較することができる。 ⑥自分の認識、思考、行動の特徴が記述できる。										
授業の進め方	・グループで、事例患者の援助ニーズおよび看護援助技術の展開方法を検討する。 ・グループで看護師役を決めて、先輩の対象者役に対して看護援助を実施し、メンバーは観察する。 ・グループメンバー（先輩、教員を含む）で観察して気づいたことと考えたことについて意見交換をする。 ・毎回、演習ワークシートに整理記述して、自分の特性や課題が明確になるように活用する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス、事例、課題に関する説明（小林）【講義】									
	2	グループワーク：看護援助の検討、看護技術の練習（演習担当教員）【演習】									
	3	課題①における看護実践と意見交換（演習担当教員）【演習】									
	4	課題①における実践の振り返り（演習担当教員）【演習】									
	5	課題②における看護実践と意見交換（演習担当教員）【演習】									
	6	課題②における実践の振り返り（演習担当教員）【演習】									
	7	課題③における看護実践と意見交換（演習担当教員）【演習】									
	8	課題③における実践の振り返り、演習のまとめ（演習担当教員）【演習】									
教科書	演習ワークシートと資料を配布する。										
参考書・参考資料等	・フィジカルアセスメントガイドブック（医学書院） ・基礎看護技術－看護過程の中で技術を理解する－（南江堂）										
事前学習・事後学習	・課題に沿ってグループで取り組む。 ・「看護技術論実習」の目的目標を意識して取り組む。										
他の授業との関連	・看護技術論Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの学習内容を実践的に統合する科目である。 ・「看護技術論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を下記の項目で評価する。 ・授業参加状況（50％）：討論やグループ学習への取り組み、メンバーシップの発揮 ・演習ワークシートの記述（20％）：対象の理解度、看護技術実施計画の個別性 ・レポート記述（30％）：明快性、論理性、具体性 看護実践やグループ討議時に形成評価を行い、改善点を説明する。成績評価については自己評価の面接時にフィードバックする。 出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	授業開始時に担当教員が対応できる日時を提示する。										
備考	＊実務経験のある教員 小林（看護師）、小野（看護師）、新井（看護師）、重兼（看護師）、多田羅（看護師） 目的・目標を達成するために、授業時間外に実習室にある実習用モデル、シミュレーター等を効果的に活用して主体的に学習してください。										

総合看護技術演習Ⅱ（1年生＋2年生）(Seminar of Integrated Nursing skillsⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	演習
担当教員	●竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatsu)、平井 智重子(HIRAI Chieko)、和田 知世(WADA Chise)、新任教員、他演習担当教員										
授業の目的	模擬患者として援助を受ける場面を経験し、援助対象者としての立場から患者の心理や状況を考察できる。また、看護実践者である1年生との相互学修を通して、個性を踏まえた看護実践の思考過程と対象者の尊厳を守る看護実践について考察し、「看護過程論実習」の学びと統合するとともに自己課題を明確化する。										
到達目標	①看護過程論実習での経験を踏まえ、事例患者の全体像を理解し、設定場面における心理・状況を説明することができる。 ②事例患者の個性を踏まえ、設定場面における模擬患者としての心理・行動を表現でき、グループで共有できる。 ③尊厳に配慮した看護実践および個性のある看護実践について、模擬患者として看護実践者の1年生と意見交換できる。 ④看護実践者1年生の「気づき－解釈－反応」の思考を分析し、気づいたことや考えたことを1年生とともに振り返ることができる。 ⑤演習の学びを看護過程論実習の学びと統合し、自己の状況(知識、認識、価値観)の成長と課題について考察できる。										
授業の進め方	・1年生と2年生が合同で演習を実施し、2年生は模擬患者、看護師および観察者の役割をとる。 ・模擬患者の全体像を理解した上で、設定場面における患者の心理や行動を考察する。 ・看護実践場面において、模擬患者、看護師および観察者として行動する。 ・看護実践場面を患者、看護師および観察者の立場から振り返り、1年生と意見交換する。 ・演習での学びと看護過程論実習の学びを統合し、自己の成長と課題を明確にする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス、事例、課題に関する説明(竹内、平井、和田、新任教員)【演習】									
	2	グループワーク:日常生活ニーズの抽出、看護援助の共有(演習担当教員)【演習】									
	3	課題①における看護実践と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	4	課題①における実践の振り返り(演習担当教員)【演習】									
	5	課題②における看護実践と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	6	課題②における実践の振り返り(演習担当教員)【演習】									
	7	課題③における看護実践と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	8	課題③における実践の振り返り、演習のまとめ(演習担当教員)【演習】									
教科書	演習ワークシートと資料を配布する。										
参考書・参考資料等	課題に取り組むにあたり必要な資料は各自で探し、活用する。										
事前学習・事後学習	事前学習:看護過程論実習を統合して学ぶため、看護過程論実習の目的目標を確認して取り組む。 また、授業開始までに課題に対するグループ学習を行った上で、演習に参加する。 事後学習:今回の演習で得た自己課題の達成に向けて各自が取り組む。										
他の授業との関連	看護過程論実習での学びと統合させる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を演習の取り組み・授業参加状況および1年生への学習支援に関するルーブリック評価(50%)、演習ワークシート記述(20%)、レポート記述(30%)により総合的に評価する。 ・フィードバック:成績評価については面接時にルーブリック評価を開示する。 ・出席時間数が総授業時間の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室に連絡を下さい。その際、時間等調整します。竹内(研究室11)、平井・和田・新任教員(看護学科共同研究室1)										
備考	＊実務経験のある教員 竹内(看護師)、平井(看護師)、和田(看護師)、新任教員(看護師)										

臨床推論演習Ⅰ（2年生＋4年生）(Clinical reasoningⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	演習
担当教員	●小林 秋恵(KOBAYASHI Akie)、小野 美穂(ONO Miho)、新井 恵津子(ARAI Etsuko)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、他演習担当教員										
授業の目的	慢性疾患や障がいをもつ対象の看護実践におけるフィジカルアセスメントを基盤にした臨床推論の思考過程を学ぶ。										
到達目標	①医学的知識を基盤に、事例患者や場面状況に含まれる病態および症状・徴候を説明できる。 ②事例患者の特定場面状況における身体・心理状態を解釈し、推論できる。 ③特定場面状況において自分がとるべき行動を説明できる。 ④自分の「気づき、解釈、反応」について他者に説明できる。 ⑤グループメンバーと意見交換し、他者と自分の「気づき、解釈、反応」の比較ができる。 ⑥自己の認識と思考の特徴が把握でき、課題を明らかにできる。										
授業の進め方	①事例分析を個人学習で行い、それをもとに同級生グループで討議する。 ②先輩との共同学習で、特定場面状況での「気づき、解釈、反応」について意見交換し自己の思考の振り返りを行う。 ③個人で演習ワークシートを記述し、学習に活用する。 ④グループ編成は2年生6～7名と4年生6～7名の合同グループとし、担当教員が支援する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス(小林)【講義】									
	2	事例患者の全体像と健康問題の理解度の確認(演習担当教員)【グループ討議】									
	3	特定場面状況①②の推論と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	4	特定場面状況①②の推論の振り返り(演習担当教員)【演習】									
	5	特定場面状況③④の推論と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	6	特定場面状況③④の推論の振り返り、まとめ(演習担当教員)【演習】									
	7	4年生提供事例の特定場面状況⑤⑥の推論と意見交換(演習担当教員)【演習】									
	8	特定場面状況⑤⑥の推論の振り返り、まとめ(演習担当教員)【演習】									
教科書	・系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[4] 臨床看護総論(医学書院) ・フィジカルアセスメントガイドブック、山内豊明(医学書院)										
参考書・参考資料等	演習ワークシートと授業資料を配付する。										
事前学習・事後学習	・事前学習:授業開始前に事例患者、場面状況、事前学習ワークシートを提示するので、「疾病と治療」「看護過程論Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ」「慢性期ケア」で学習した知識を用いて個人学習しておく。 ・事後学習:看護過程論実習の目標を達成できるように、演習で明確化した自己課題に取り組む。										
他の授業との関連	・看護過程論実習で必要となる思考過程を学ぶ科目である。 ・「疾病と治療」「看護過程論」「看護技術論」「慢性期ケア」の学習内容を実践的に統合する科目である。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を下記の項目で評価する。 ・演習参加状況(50%):討論やグループ学習への取り組み、推論思考の言語化 ・ワークシート記述(20%):学習内容の理解度、論理的記述、考えの深まり ・レポート記述(30%):明快性、論理性、具体性 グループ討論や振り返り時に形成評価を行い、改善点を説明する。成績評価については自己評価の面接時にフィードバックする。 出席時間数が総授業時間の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	＊実務経験を有する教員 小林(看護師)、小野(看護師)、新井(看護師)、重兼(看護師)										

臨床推論演習Ⅱ（3年生のみ）（Clinical reasoningⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	●岡田 麻里（OKADA Mari）、竹内 千夏（TAKEUCHI Chinatsu）、吉本 知恵（YOSHIMOTO Chie）、片山 陽子（KATAYAMA Yoko）、平井 智重子（HIRAI Chieko）、和田 知世（WADA Chise）他										
授業の目的	実習の振り返りを通して、対象をケアするための看護実践力の向上に必要な臨床推論・臨床判断の思考を学ぶ。										
到達目標	①実習で体験した事例の場面を選定し、状況について「気づき」から対象の病状変化を含むその場面の臨床推論・判断を記述し、自分の解釈を他者に説明できる ②選定した場面における対象の状況を具体的な主観的・客観的データに基づいて説明できる ③選定した場面の状況に至る経緯と、次に生じる状況の予測を、医学的な知識に基づいて説明できる ④選定した場面について2側面（「その時の行動（介入）」と「今後を含めた介入」）から考え、説明することができる ⑤全ての演習過程において、グループ演習に積極的に参加し、自己の役割を認識する ⑥本演習授業を通して、臨床推論に関する自己の評価と今後の課題が明らかにできる										
授業の進め方	グループで、臨床推論・臨床判断をもちいた事例展開、シミュレーターの活用による実践的演習、振り返り、学びの共有（グループ・全体）を行う。 文献および著書や他大学の取り組みなども考慮しつつ、最新の知見を紹介する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~4	オリエンテーション・臨床推論臨床判断とは（演習担当教員）【講義・演習・討議】									
	5~8	テーマごとの事例の振り返りと事例に関する臨床推論・臨床判断（演習担当教員）【演習・討議】									
	9~12	テーマごとの事例に対する臨床推論臨床判断に基づく介入（演習担当教員）【演習・討議】									
	13~15	学びの全体共有・まとめ（演習担当教員）【演習・討議】									
教科書	適宜紹介										
参考書・参考資料等	適宜紹介										
事前学習・事後学習	事前学習：実習で受け持った事例の振り返り 事後学習：生活の場、高齢者の特徴を踏まえた臨床推論・臨床判断、対象者に向き合う看護職としてのあり方についても考えを深める。自己の課題を明確にし、臨床推論に必要な病態生理・医学的知識を修得する。自己の課題に取り組む学修計画を立てることができる。										
他の授業との関連	慢性疾患の病態、慢性期ケアの特徴、健康疾病概念、3年次までの実習での受け持ち事例との関連										
成績評価方法・基準・フィードバック	ワークシート、資料、レポート記述：50％ グループ討議・発表の参加状況：50％ 評価基準：主体性、協働学修力、論理的思考、説明力 フィードバック：評価結果のフィードバックについては、期間を設けて開示する。 成績の疑問等については成績公開後3日間に対応する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時										
備考	＊実践経験のある学内教員：岡田（看護師）、吉本（看護師）、片山（看護師）、竹内（看護師）、平井（看護師）、和田（看護師） 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

臨床推論演習Ⅲ(2年+4年／4年のみ)(Clinical reasoningⅢ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	森田公美子(MORITA Kumiko)、近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、岡西幸恵(OKA NISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、他 【Ⅲ-① 1～8回】●森田公美子(MORITA Kumiko)【Ⅲ-② 9～15回】●岡西幸恵(OKANISHI Sachie)										
授業の目的	【1～8回】疾病や障害を有して入院環境にある対象の、全人的な視点からの望ましい回復や安全の確保、病状の安定を目的とした臨床推論・臨床判断の思考過程を学ぶ。 【9～15回】生命の危機的状態にある患者の身体状況を的確に把握し、緊急度や重症度の判断に基づいて、患者の状態にあった的確な看護ケアを導き出すための臨床推論・臨床判断の思考を学ぶ。										
到達目標	【1～8回】 ①2年生の臨床推論に対しその精度を高める意見をもってグループ学習に取り組める。 ②自分もしくは4年生のグループメンバーが実際に行った臨床推論・臨床判断を2年生とともに客観的に捉え直し他者に説明できる。 ③自分もしくは4年生のグループメンバーが提供した事例を分析し、望ましい臨床推論・臨床判断を2年生とともに検討できる。 ④自己の認識と思考の特徴が把握でき、課題を明らかにできる。 【9～15回】 ①CBT・OSCEを通して、臨床実習に必要な知識・技術を獲得していることを確認できる。 ②事例患者の問題について、医学的知識を基盤に病態を推測し説明できる。 ③病態の重症度や緊急度、起こりうるリスクから問題解決に向けた看護実践の最善策を説明できる。 ④演習を通して看護実践の臨床推論・臨床判断を考察できる。 ⑤自己の思考と行動の特徴および自己課題を明確にできる。										
授業の進め方	【1～8回】①2年生と共通する事例の臨床推論・臨床判断の分析に個人・グループで取り組む。②2年生の分析をもとに共同して臨床推論・臨床判断の意図、妥当性などをグループで討議する。③実習において展開した臨床推論・臨床判断の場面を抽出し、2年生に提供する事例を作成する。④作成した事例を2年生に提供し、共同で臨床推論・臨床判断の分析にグループで取り組む。⑤各学年の1グループは6～7名、2・4年生の1つの合同グループは12～14名とし、担当教員が学習支援を行う。 【9～15回】①臨床実習に必要な知識を確認する(CBT)。②説定事例について臨床推論・臨床判断を用いた事例展開を行う(OSCE)。③OSCE後、振り返り、学びの共有を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3～6 7～8 9～10 11～15	1～8回の授業ガイダンス(森田)【講義】 事例患者の全体像と健康問題の理解度の確認(演習担当教員)【グループ討議】 特定場面①②③の推論と意見交換(演習担当教員)【演習】 実習での実践事例の特定場面状況④⑤の推論と意見交換(演習担当教員)【演習】 CBT:Computer Based Testing(演習担当教員)【演習】 OSCE:Objective Structured Clinical Examination(演習担当教員)【演習・グループ討議】 ・急性増悪事例および周手術期事例に関する臨床推論・臨床判断 ・振り返りと学びの共有									
教科書	系統看護学講座 専門分野 臨床看護総論 基礎看護学(医学書院) フィジカルアセスメントガイドブック、山内豊明(医学書院)										
参考書・参考資料等	演習ワークシートと授業資料を配付する。										
事前学習・事後学習	【1～8回】事前学習:健康レベル別看護論実習において展開した臨床推論・臨床判断を記録に残しておく。事後学習:臨床推論・臨床判断において必要な知識や看護の技術を臨床で活用できるように復習する。【9～15回】事前学習:CBTはこれまでに学んだ全範囲が対象となるので早めに準備する。OSCEは事前に提示する事例について個別学習する。事後学習:演習内容を振り返り自己課題に応じて復習、健康レベル別看護論実習に向けて準備をする。										
他の授業との関連	【1～8回】臨床推論演習Ⅰと共同・並行。【9～15回】健康レベル別看護論実習の履修要件である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の項目により総合的に評価する。 【1～8回】授業参加状況:出席状況、グループ討議と演習への取り組み(40%)、事例・レポート作成:論理的な記述、明快性、具体性(60%) 【9～15回】CBT成績(40%)、OSCE成績(40%)、グループ討議と演習への取り組み(20%) フィードバックは、グループおよび個別で適時実施する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	＊実務経験のある教員:近藤(看護師)・岩本(看護師)・森田(看護師)・岡西(看護師)・中島(看護師)・金(看護師) 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

看護過程論Ⅰ（看護過程の方法論）（Nursing ProcessesⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義・演習
担当教員	●小林 秋恵(KOBAYASHI Akie)、小野 美穂(ONO Miho)、新井 恵津子(ARAI Etsuko)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)、岡田 麻里(OKADA Mari)、竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatu)、多田羅 光美(TATARA Terumi)、松本 裕子(MATSUMOTO Yuko)、他演習担当教員										
授業の目的	健康上の障害や問題をもつ対象者を全体的に理解し、生活上の諸問題を抽出し、その解決に向けた確な看護援助を提供するための問題解決思考のプロセスを学ぶ。										
到達目標	①看護過程の展開方法が説明できる。 ②事例患者の情報をアセスメント枠組みに沿って解釈推論し、全体像把握ができる。 ③事例患者の健康問題の解決に資する看護計画の立案ができる。										
授業の進め方	講義と演習（グループワーク、発表、討論）を並行して進めていく。3～4名/1G（合計20グループ）を編成し、1人の教員が2グループを担当して演習指導を行う。グループワーク終了後は、個人ワークに取り組む。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護過程とは(小林)【講義】									
	2	医学情報の整理、解釈と理解(小林)【講義】									
	3	情報のアセスメント(小林)【講義】									
	4	全体像の描写、健康問題の抽出(小林)【講義】									
	5	看護計画の立案(小林)【講義】									
	6	看護計画の実施と評価(小林)【講義】									
	7	展開事例の分析(小林)【講義・討論】									
	8	展開事例の分析(小林)【講義・討論】									
	9	事例のグループワーク①:医学情報の整理(全員)【発表・討論】									
	10	事例のグループワーク②:医学情報の整理(全員)【発表・討論】									
	11	事例のグループワーク③:健康認識・健康管理のアセスメント(全員)【発表・討論】									
	12	事例のグループワーク④:栄養代謝、排泄のアセスメント(全員)【発表・討論】									
	13	事例のグループワーク⑤:活動・休息、睡眠のアセスメント(全員)【発表・討論】									
	14	事例のグループワーク⑥:認知知覚、自己概念のアセスメント(全員)【発表・討論】									
	15	事例のグループワーク⑦:ストレスコーピングのアセスメント(全員)【発表・討論】									
	16	事例のグループワーク⑧:役割、価値信念のアセスメント(全員)【発表・討論】									
	17	事例のグループワーク⑨:全体像の描写、健康問題の抽出(全員)【発表・討論】									
	18	事例のグループワーク⑩:全体像の描写、健康問題の抽出(全員)【発表・討論】									
	19	事例のグループワーク⑪:看護計画の立案(全員)【発表・討論】									
	20	事例のグループワーク⑫:看護計画の立案(全員)【発表・討論】									
	21	看護記録(小林)【講義】									
	22	個人ワーク【演習】									
	23	個人ワークの発表【発表・討論】									
教科書	系統看護学講座 基礎看護学4 臨床看護総論（医学書院）										
参考書・参考資料等	「看護過程論実習」で使用する実習記録用紙を使って演習する。										
事前学習・事後学習	事前学習:前回の授業での疑問点や理解できない点を解消しておく。 事後学習:グループで発表できるように準備する。										
他の授業との関連	・「看護過程論Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」の知識を活用しながら本科目の理解を深める。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。 ・3年次および4年次の実習の基盤となる看護の方法論である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	グループワークでの学びを個人ワークに発揮させる。その成果を以下の視点で評価する。 グループワーク(40%):発表資料内容とグループ協力、発表スキルと意見交換、グループ学習への取り組み 個人ワーク(60%):「医学情報の整理と解釈の妥当性」、「看護アセスメントにおける解釈推論の妥当性」、「全体像描写、健康問題」の妥当性、「看護計画の個別性、具体性、現実性」 演習後、学生が自己評価し、これに基づいて担当教員が評価する。看護過程論実習までに学習成果や課題がフィードバックされる。 出席時間数が授業時間の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	演習指導担当教員が適宜対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 小林(看護師)、小野(看護師)、新井(看護師)、重兼(看護師)、岡田(看護師)、竹内(看護師)、多田羅(看護師)、松本(看護師)										

看護過程論Ⅱ（呼吸と循環のアセスメント）（Nursing ProcessesⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●新井恵津子(ARAI Etsuko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)										
授業の目的	循環機能および呼吸機能が障害された人の生活への影響をアセスメントし、影響を最小限に抑えるための看護援助に関する知識を得る。										
到達目標	①循環機能障害の生活への影響が説明できる。 ②呼吸機能障害の生活への影響が説明できる。 ③循環器および呼吸器の機能障害を最小限に抑える看護援助の目標と方法を記述できる。										
授業の進め方	・授業の要点、最新の知見を示した資料に基づき講義する。 ・授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換をする。 ・講義内容に基づき、事例に対しグループ毎の看護過程を展開、発表、意見交換をする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	循環器障害による症状と看護(新井、岩本)【講義】									
	2	循環器障害による検査と治療・処置を受ける患者の看護(新井、岩本)【講義】									
	3	虚血性心疾患・心不全患者の看護(新井、岩本)【講義】									
	4	呼吸・心臓リハビリテーションの看護(新井、岩本)【講義】									
	5	呼吸機能障害による症状と看護(新井、岩本)【講義】									
	6	呼吸機能障害による検査と治療・処置を受ける患者の看護(新井、岩本)【講義】									
	7	循環器疾患患者の看護(新井、岩本)【GW】									
	8	呼吸器疾患患者の看護(新井、岩本)【GW】									
教科書	系統看護学講座「成人看護学」〔2〕呼吸器 〔3〕循環器(医学書院)										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・「人体の構造と機能」「疾病と治療」の中で、呼吸器と循環器に該当する事前学習をする。										
他の授業との関連	・「看護過程論Ⅰ」の演習に活かす科目である。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況20%(授業後の提出用紙、討論やグループ学習への取り組み)、レポート・事例発表会80%により総合的に評価する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックについては、期末レポート終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設ける。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。不在時はメール(arai@kagawa-puhs.ac.jp)で対応する。										
備考	＊実務経験のある学内教員 新井(看護師)、岩本(看護師)										

看護過程論Ⅲ(栄養代謝と排泄のアセスメント)(Nursing ProcessesⅢ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	● 森田 公美子(MORITA Kumiko)、重兼 望(SHIGEKANE Nozomi)										
授業の目的	栄養代謝と排泄の機能が障害された人の生活への影響をアセスメントし、影響を最小限に抑えるための看護援助に関する知識を得る。										
到達目標	①人間の栄養代謝と排泄に関わる心身の正常な諸機能について説明できる。 ②人間の栄養代謝と排泄に関わる機能が障害された場合の生活への影響が説明できる。 ③人間の栄養代謝と排泄に関わる看護援助の目標と方法が記述できる。										
授業の進め方	・毎回の授業の要点を示した資料に基づき授業を進める。 ・授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 ・授業内容を振り返りながらレポート課題に取り組む。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	人間の栄養代謝機能・排泄機能について(森田、重兼)【講義・GW】									
	2	栄養代謝機能障害に伴う検査と治療を受ける患者の看護(森田、重兼)【講義・GW】									
	3	嚥下・輸送機能の障害と看護(咽頭、食道疾患)(森田、重兼)【講義・GW】									
	4	消化・吸収機能の障害と看護(胃、小腸疾患)(森田、重兼)【講義・GW】									
	5	栄養代謝機能の障害と看護(糖代謝疾患)(森田、重兼)【講義・GW】									
	6	排泄機能障害に伴う検査と治療を受ける患者の看護(森田、重兼)【講義・GW】									
	7	排便機能の障害と看護(大腸疾患)(森田、重兼)【講義・GW】									
	8	排尿機能の障害と看護(腎・泌尿器疾患)(森田、重兼)【講義・GW】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 成人看護学 [5]消化器、[6]内分泌代謝、[8]腎・泌尿器 (医学書院)										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布する。										
事前学習・事後学習	「人体の構造と機能」「疾病と治療」の中で、栄養代謝・排泄に該当する事前学習を行う。										
他の授業との関連	「看護過程論Ⅰ」の演習に活かす科目である。 「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加状況(討論やグループ学習への取り組み)40%、グループ学習の成果発表資料・レポート課題等 60%により総合的に評価する。 個別のフィードバックが必要である場合は、オフィスアワーに準ずる方法にて評価結果を説明する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 森田(看護師)、重兼(看護師)										

看護過程論Ⅳ(活動と休息のアセスメント) (Nursing ProcessesⅣ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●小林 秋恵(KOBAYASHI Akie)、竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatsu)										
授業の目的	人間が生活の中で活動するために必要な人体の仕組みと機能を理解し、脳・神経機能と運動機能が障害される状況および生活への影響をアセスメントし、安全安楽な生活行動の維持向上に向けての看護援助に関する知識を得る。										
到達目標	①人間の生活行動に関する具体的状況とそれを支える身体の仕組みと機能について説明できる。 ②活動と休息に関する障害がある場合の生活への影響について説明できる。 ③活動と休息に関する障害をもつ人への看護援助の目標と方法が記述できる。										
授業の進め方	・毎回の授業の要点を示した資料に基づき講義する。 ・授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 ・小グループで、事例を用いた生活行動アセスメントの演習を行う。 ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して授業後に提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	人間にとっての活動と休息とは、24時間の生活リズム (竹内、小林)【講義】									
	2	脳・神経機能障害による症状・徴候とアセスメント (竹内、小林)【講義】									
	3	中枢神経系の障害をもつ患者の看護援助 (竹内、小林)【講義】									
	4	末梢神経系、自律神経系の障害をもつ患者の看護援助 (竹内、小林)【講義】									
	5	運動機能障害による症状・徴候とアセスメント (小林、竹内)【講義】									
	6	筋系、骨格系の障害をもつ患者の看護援助 (小林、竹内)【講義】									
	7	脊椎系の障害をもつ患者の看護援助 (小林、竹内)【講義】									
	8	リハビリテーションにおける生活者としての自立と尊厳 (小林、竹内)【講義】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 成人看護学〔7〕脳・神経、〔10〕運動器(医学書院)										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・本授業に関連する内容について、「人体の構造と機能」「疾病と治療」のなかから事前学習をする。 ・授業内容を復習して筆記試験に備える。										
他の授業との関連	・「看護過程論Ⅰ」の演習に活かす科目である。 ・「看護過程論実習」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を下記の項目で評価する。 ・授業参加状況(20%)：討論やグループ学習の取り組み、探求心、授業後提出用紙の記述内容 ・筆記試験(80%)：事例分析のアセスメントの妥当性 授業後提出用紙の質問に対応し、学習への取り組みに対して適宜改善点を伝える。筆記試験の結果は、3日以内に開示する。 出席時間数が総授業時間の3分の2に満たないときは、原則として筆記試験を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	＊実務経験のある教員 小林(看護師)、竹内(看護師)										

看護過程論Ⅴ（心と身体の関係アセスメント）（Nursing ProcessesⅤ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●土岐 弘美(TOKI Hiromi)、則包 和也(NORIKANE Kazuya)、多田羅 光美(TATARA Terumi)										
授業の目的	人間の心のはたらきと発達に関する理解を基盤として、表情や言動とどのように関連しているのかについて、考察する能力を養う。また、ストレスが人間に及ぼす影響を多角的に捉えることによって、精神的な支援に必要な知識や技術に対する知見を得る。										
到達目標	①人間の心の仕組みと人格発達について理解し、説明できる。 ②人間のストレスやストレスと身体反応の関係について理解し、説明できる。 ③心と身体の関係について、精神分析理論、発達理論、ストレス理論などを活用してアセスメントし、アプローチを検討できる。										
授業の進め方	・授業中にグループで討議や演習する時間を設け、意見交換を行う。 ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して授業後に提出する。 ・講義、演習、グループワーク、グループプレゼンテーション、自己学習などアクティブラーニングを組み合わせる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	心の仕組み（則包）【講義】									
	2	意識と知覚、認知と行動（則包）【講義】									
	3	学習 性格 人格 知能（則包）【講義】									
	4	自己概念 発達（多田羅）【講義】									
	5	エリクソンの漸進的発達段階（土岐）【講義】									
	6	発達課題における危機・役割・自己同一性（土岐）【講義】									
	7	ストレスの概要と理解1（則包）【講義】									
	8	ストレスの概要と理解2 身体反応とストレス（則包、土岐、多田羅）【講義・GW】									
教科書	資料、精神看護学[1]精神看護の基礎(医学書院)、精神看護学[2]精神看護の展開(医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	毎回の講義内容に該当する教科書を読んで、疑問点や質問を考えて参加すること。 適宜、小課題レポートを出すので、授業を振り返って知識を整理して考えをまとめておく。										
他の授業との関連	「看護過程論実習」の履修要件科目である。 「看護過程論Ⅰ」の演習に活かす科目である。 「メンタルヘルス看護論」の基礎となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。評価方法は、試験50%、レポート20%、課題10%、授業貢献度(参加態度、提出期限の順守)10%、授業毎の小レポート(内容、文字数)10%を総合して評価する。人間の行動や身体反応から心理状態を推論し、表現する力を習得しているかを評価基準とする。評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜受け付けますが、事前にメール等で連絡をしてください。 則包(研究室21) 土岐(研究室14) 多田羅(研究室30)										
備考	* 実務経験のある教員 則包(看護師)、土岐(看護師)、多田羅(看護師)										

プライマリーヘルスケア (Primary Health Care)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●岡田 麻里 (OKADA Mari) 、他										
授業の目的	プライマリ・ヘルスケアの概念に基づいて地域で実践されている看護活動を通して、地域全体における人々の健康と暮らしを支える視点を理解し、地域の看護活動の課題を考察する。また、プライマリ・ケアの基本的考え方と多様な場における実践を理解し、生活者への看護のあり方と看護職の役割・課題を考察する。										
到達目標	①プライマリ・ヘルスケアとプライマリ・ケアの概要を説明できる。 ②プライマリ・ヘルスケアの実践と課題について考察できる。 ③ヘルスプロモーションの概念を説明できる。 ④健康と人々の暮らしについて多角的な視点から説明し、“すべての人に健康を”の意味を考察する。 ⑤プライマリ・ケアの実践と課題を説明できる。 ⑥プライマリ・ケアにおける看護職の役割を考察できる。										
授業の進め方	・毎回の授業の要点を示した資料に基づき講義する。 ・授業中に、討論する時間を設け、意見交換を行う。 ・講義内容を通して自分の感想や考えを振り返り、自己の学びを深める。 ・個人学修、グループ学修を取り入れ、全体で学びを共有する。 ・文献および著書や学会のなどの取り組みも考慮しつつ、最新の知見を紹介する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	プライマリ・ヘルスケア (PHC) の基本的な考え方 (岡田)【講義】									
	2	地域住民主体のPHCとヘルスプロモーション (岡田)【講義】									
	3	プライマリ・ケアと地域包括ケア (岡田)【講義・討論】									
	4	多様な場におけるプライマリ・ケアの実践 (岡田)【講義】									
	5	プロジェクト学修 (岡田・他)【共有】									
	6	プロジェクト学修 (岡田・他)【共有】									
	7	全体発表 (岡田・他)【共有】									
	8	我が国におけるプライマリ・ケアの課題と看護職の役割 (岡田・他)【講義】									
教科書	なし										
参考書・参考資料等	資料を配布するとともに、著書・文献等を適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	1年次の「看護学導入実習」「看護技術論実習」で学習・経験したことを想起して復習し、「看護過程論実習」に活かす。地域看護学ⅠⅡの学習を復習しておく。										
他の授業との関連	2年次の「看護過程論実習」及び「地域健康サポーター実習」において、入院中の患者の看護や、生活者として地域で暮らす人々に視野を広げて、生活、暮らし、個人としての対象だけでなく、その人が暮らす地域や共通の健康課題をもつ集団としても視野を広げるための授業である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を授業・討議への参加・貢献 (30%)、課題レポート (50%)、プレゼンテーション (20%) により総合評価する。評価基準は、知識、論理的思考力、協働学習力、表現力とする。 フィードバック: 各授業ごとにリフレクションシートへのフィードバックを実施する。評価については、期間を設け開示する。 出席時間数が総授業の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する										
備考	既習内容を活用し、主体的に取り組んでください。 実践経験のある学内教員 岡田 (看護師) 他 成績に関する疑問等については成績公開後3日間は対応する。										

慢性期ケア (Cronic Care Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子 (KONDO Makiko)、森田公美子 (MORITA Kumiko)、岩本真紀 (IWAMOTO Maki)、岡西幸恵 (OK ANISHI Sachie)、中島文香 (NAKASHIMA Fumika)、金アンナ (KIM Anna)、加治木孝子 (KAJISKI Takako)、木村古都 (KIMURA Koto)、辻川季巳栄 (TSUJIKAWA Kimie)										
授業の目的	慢性疾患をもつ人とその家族の特徴を理解し、病いと共に生きることを支える看護方法について学ぶ。										
到達目標	①慢性期と慢性期ケアの特徴について、説明できる。 ②消化器・呼吸器・循環器・代謝・内分泌・腎泌尿器・血液造血器系の主要な疾患、およびがん・難病に関して、病態生理学に基づき、各慢性疾患にどのような特徴があるのかを説明できる。 ③様々な慢性疾患を有する患者とその家族直面する困難、生活状況、対処など、どのような体験をしているのかについて説明できる。 ④病いと共に生きる患者と家族に対する看護援助について考察できる。										
授業の進め方	①教科書と配布資料に基づいて講義する。必要時、小グループで討議する。 ②事例分析を行い、プレゼンテーションする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	慢性期とは (近藤)【講義・討論】									
	2	慢性期の看護のポイント (近藤)【講義・討論】									
	3	病いを有するという体験 (加治木, 辻川, 近藤)【講義・討論】									
	4	難病を有する人への看護(木村, 近藤)【講義・討論】									
	5～6	消化器系の慢性疾患を有する人への看護 (近藤)【講義・討論】									
	7	感染症を有する人への看護(山崎・岡西)【講義・討議】									
	8	内分泌系の慢性疾患を有する人への看護 (中島・近藤)【講義・討論】									
	9～10	代謝系の慢性疾患を有する人への看護 (辻川・森田)【講義・討論】									
	11～12	呼吸器系の慢性疾患を有する人への看護 (岡西)【講義・討論】									
	13～14	循環器系の慢性疾患を有する人への看護 (大田・岩本)【講義・討論】									
	15～16	腎泌尿器系の慢性疾患を有する人への看護 (岩本)【講義・討論】									
	17～18	血液・造血器系の慢性疾患を有する人への看護 (森田)【講義・討論】									
	19～20	がんを有し主に治療期にある人への看護(森田)【講義・討論】									
	21～23	事例検討(岡西・森田・岩本・中島・金・TA辻川)【討論・発表】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 成人看護学2-15(医学書院)										
参考書・参考資料等	慢性期看護論(鈴木志津枝他、ヌーベルヒロカワ) 病気がみえる(1)消化器、(2)循環器、(3)糖尿病・代謝・内分泌、(4)呼吸器、(5)血液、(6)免疫・膠原病・感染症、(7)脳・神経、(8)腎・泌尿器(MEDIC MEDIA)										
事前学習・事後学習	事前学習:教科書の該当部分を熟読して授業に参加する。 事後学習:配布資料と教科書を読み、授業内容の理解を深め、他の文献資料も参考にして考えを整理する。授業で触れない疾患や病態については、主体的に学びを深めるよう努力すること。										
他の授業との関連	健康レベル別看護論実習の履修要件科目である。成人看護学概論に続き、病いをもち人へのケアを考える重要かつ基本的な科目である。急性期ケア、リハビリテーション看護、緩和・エンドオブライフケア、がん看護、健康レベル別看護技術演習などと関連があると共に、基盤となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	各担当教員の出題する試験(70%)、および事例検討(20%)、レポート(10%)で評価する。試験の評価基準は、出題範囲について十分に理解できているか否かとする。出題範囲が広範囲に及ぶので、日ごろから予習・復習を心がけること。 フィードバックは、毎回提出する「リアクションペーパー」に基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については、全員に対してその傾向をフィードバックし、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	在室時は随時対応する。 不在時は、メールで連絡してほしい。										
備考	* 実務経験のある教員 近藤(看護師)、森田(看護師)、岩本(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師) *講義の順番は、変更することがある。										

急性期ケア (Acute Care Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子 (KONDO Makiko)、岩本真紀 (IWAMOTO Maki)、岡西幸恵 (OKANISHI Sachie)、森田公美子 (MORITA Kumiko)、中島文香 (NAKASHIMA Fumika)、金アンナ (KIM Anna)、他										
授業の目的	生命の危機的状態にある患者とその家族へのケアについて学習する。										
到達目標	①生命の危機的状態にある患者とその家族の特徴、および看護実践の概要について説明できる。 ②周術期の特徴、手術侵襲と生体反応について病態学的に説明できる。 ③周術期の各期の特徴的な看護実践について説明できる。 ④手術に伴う形態機能の変化に対するケアについて説明できる。 ⑤術式別の看護のポイントについて、病態学・外科学の知識に基づいて説明できる。 ⑥救急看護のポイントについて説明できる。 ⑦クリティカルケアのポイントについて説明できる。 ⑧上記の知識を統合して、事例分析できる。										
授業の進め方	①教科書・配布資料に基づき、講義する。 ②課題に沿って、グループでディスカッションし資料を作成、プレゼンテーションを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	周術期:周術期看護の特徴(近藤)【講義・討議】									
	2	周術期:手術による侵襲と生体反応 (近藤)【講義・討議】									
	3	周術期:術前看護 (近藤)【講義・討議】									
	4	周術期:術中看護 (近藤)【講義・討議】									
	5	周術期:術後(1) (近藤)【講義・討議】									
	6	周術期:術後(2) (近藤)【講義・討議】									
	7	周術期:術後(3) (近藤)【講義・討議】									
	8	周術期:術後(4)・多職種連携と継続看護(PERIO)(近藤)【講義・討議】									
	9	周術期:形態機能の変化 (井上)【講義・討議】									
	10	周術期:周術期看護の実際(心臓外科) (長尾)【講義・討議】									
	11	周術期:移植医療 (吉岡)【講義・討議】									
	12~13	術式別看護の要点:グループワーク									
	14~15	術式別看護の要点:プレゼンテーション (消化器・呼吸・脳神経・内分泌・循環器・腎泌尿器・筋骨格系、等の手術) (近藤、岩本、岡西、森田、中島、金、TA辻川)【GW・プレゼンテーション】									
	16~17	救急看護 (岩本)【講義・討議】									
	18~21	クリティカルケア (岡西)【講義・討議】									
	22~23	急性期における事例検討 (森田・岩本・岡西・中島・金・TA辻川)【講義・討議】									
教科書	ナースングラフィカ 成人看護学(4)周術期看護(中島恵美子他、メディカ出版)、NiCE看護学テキスト 成人看護学 急性期看護Ⅱ 救急看護・クリティカルケア(佐藤まゆみ他、南江堂)、NiCE看護学テキスト 成人看護学 成人看護技術(野崎真奈美他、南江堂)										
参考書・参考資料等	周術期看護論(雄西智恵美他、ヌーヴェルヒロカワ)、写真でわかる臨床看護技術(村上美好、インターメディカ)										
事前学習・事後学習	【事前学習】授業範囲の教科書を読み、予習を十分に行うこと 【事後学習】授業の資料などをもとに復習を十分に行うこと。「人体の構造と機能」「疾病と治療」「慢性期ケア」「リハビリテーション看護」などで学んだことを基盤としているので、これらの科目についても復習し、知識の統合を図ること。試験範囲が広範囲となるため、一夜漬けでは対応できない。計画的に学習を進めること。また、術式別看護のポイントに関するグループワーク・事例分析については、時期が重なるため、計画的に学習を進めること。										
他の授業との関連	健康レベル別看護論実習の履修要件科目である。成人看護学概論、慢性期ケア、リハビリテーション看護、がん看護、健康レベル別看護技術演習などと関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・講義担当教員の出題する筆記試験(70%)、課題別のディスカッション&プレゼンテーションの成果(30%)によって評価する。 ・評価基準は、当該範囲についての理解度とする。 ・フィードバックは、毎回提出するレスポンスシートに基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については、全員に対してその傾向をフィードバックするが、個別にフィードバックの必要な学生については個別に連絡する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	在室時は適宜対応する。不在時は、メールに連絡してほしい。kondou-m@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	実務経験のある教員:近藤(看護師)、岩本(看護師)、岡西(看護師)、森田(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)、外部講師(看護師)、TA(看護師)										

リハビリテーション看護 (Rehabilitation Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岡西幸恵(OKA NISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、遠部泰子(ONBE Yasuko)										
授業の目的	障害を有する人がその人らしく生きることができるよう、リハビリテーションの理論を基盤に、多職種連携における看護の役割と機能について学ぶ。										
到達目標	①リハビリテーションの理念や考え方について説明できる。 ②障害の種類やレベルに応じたリハビリテーション看護について説明できる。 ③多職種連携によるアプローチを理解し、チームにおける看護師の役割について考察する。										
授業の進め方	①教科書と配布資料に基づき、講義を行う。必要時、グループディスカッションを行う。 ②臨床現場で活躍する専門家の講義を含む。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	リハビリテーションの定義と理念・理論 (近藤)【講義・討論】									
	2	専門看護師による卓越した看護実践(重度心身障がい者) (遠部,近藤)【講義・討議】									
	3	中枢神経系に障害を有する方へのリハビリテーション(1) (近藤)【講義・討論】									
	4	中枢神経系に障害を有する方へのリハビリテーション(2) (近藤)【講義・討論】									
	5	頭頸部がん術後のリハビリテーション(岡西)【講義・討論】									
	6	感覚器に障害をもつ方へのリハビリテーション(森田)【講義・討論】									
	7	運動器に障害を有する方へのリハビリテーション(岩本)【講義・討議】									
	8	多職種連携・まとめ (岩本)【講義・討論】									
	9	試験									
教科書	ナーシンググラフィカ リハビリテーション看護(メディカ出版)										
参考書・参考資料等	NICE看護学テキスト リハビリテーション看護(酒井郁子他、南江堂)										
事前学習・事後学習	事前学習：各回の内容に該当する教科書部分を読んで授業に参加する。「人体の構造と機能」「疾病と治療」「慢性期ケア」の復習が重要である。 事後学習：授業で学んだことを復習するとともに、関連文献を幅広く精読する習慣をつける。										
他の授業との関連	成人看護学概論、急性期ケア、慢性期ケア、緩和エンドオブライフケア、健康レベル別看護論演習、健康レベル別看護論実習などと関連がある。「人体の構造と機能」「疾病と治療」の知識を前提とする。										
成績評価方法・基準・フィードバック	筆記試験'(90%)およびレポート(10%)により、評価する。レポートでは知識の応用、筆記試験では授業目標の到達度を評価する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 フィードバックは、毎回提出する「授業の感想」に基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については、全員に対して、その傾向をフィードバックし、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	在室時は、適宜対応する。 不在時は、メールで連絡してほしい。										
備考	* 実務経験を有する教員 近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(看護師)、岡西(看護師)、外部講師(専門看護師)										

緩和・エンドオブライフケア (Palliative and End of Life Care)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子 (KONDO Makiko)、岩本真紀 (IWAMOTO Maki)、森田公美子 (MORITA Kumiko)、岡西幸恵 (OKA NISHI Sachie)、中島文香 (NAKASHIMA Fumika)、金アンナ (KIM Anna)、片山陽子 (KATAYAMA Yoko)、西村美穂 (NISHIMURA Miho)										
授業の目的	最期の生を生きる人へのケア、および、早期から始める緩和ケアについて学ぶ。										
到達目標	①エンドオブライフケア・緩和ケアの基本的な考え方について説明できる。 ②全人的苦痛とクオリティーオブライフについて説明できる。 ③緩和ケアと症状マネジメントについて理解できる。 ④グリーフケアについて説明できる。 ⑤在宅におけるエンドオブライフケアについて説明できる。										
授業の進め方	講義を中心に、グループワークやDVD視聴も取り入れる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	エンドオブライフケア・緩和ケアの基本的考え方、トータルペインとQOL (岡西, 金)【講義・討論】 意思決定支援(岩本)【講義・討議】 症状マネジメント (森田, 中島)【講義・討論】 症状マネジメント (森田, 中島)【講義・討論】 スピリチュアルケア (近藤)【講義・討論】 グリーフケアと家族(遺族)ケア (西村, 近藤)【講義・討論】 看護師のグリーフケアとストレスマネージメント(西村, 近藤)【講義・討議】 在宅におけるエンドオブライフケア(片山)【講義・討議】									
教科書	系統別看護学講座 緩和ケア(医学書院)										
参考書・参考資料等	緩和・ターミナルケア看護論(ヌーベルヒロカワ)										
事前学習・事後学習	事前学習: 授業範囲について、教科書を読み予習しておく。 事後学習: 講義の復習を行う。死生観など、生と死についての自己の考えを深める。										
他の授業との関連	成人看護学概論、慢性期ケア、リハビリテーション看護、急性期ケア、がん看護、健康レベル別看護技術演習、健康レベル別看護論実習などに関連がある。										
成績評価方法・基準・フィードバック	各担当教官の提示する試験・レポートによって評価する。 学びの到達度については、全員に対して、その傾向をフィードバックし、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	在室時、適宜対応する。										
備考	実務経験の教員: 近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(がん看護専門看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)、片山(看護師・保健師)、西村(看護師)										

健康レベル別看護技術演習 (Seminar of Nursing Skills by Health Level)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岡西幸恵(OKA NISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、他										
授業の目的	健康レベルの各期にある患者とその家族を対象に、クオリティオブライフの向上を目指す看護実践に必要な基礎的技術を学ぶ。										
到達目標	①急性期ケアに必要な看護技術を習得する ②慢性期ケアに必要な看護技術を習得する。 ③回復期ケア・終末期ケアに必要な看護技術を習得する。										
授業の進め方	技術演習										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~7	周術期看護学・重症集中看護学演習 (近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・外部講師)【演習】 ・術前オリエンテーション ・術中看護:手術室看護 ・気管挿管、口腔・気道ケア ・ドレーン管理 (胸腔ドレーン、他) ・術後モニタリング ・術後早期のベッド上での清潔ケア ・形態機能の変化(ストーマケア)									
	8~11	慢性期看護学演習(近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・外部講師)【演習】 ・教育的アプローチ ・貧血・血小板減少時のセルフケア教育 ・血糖測定・インシュリンの自己注射									
	12~13	回復期(リハビリテーション期)看護学演習 (近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・外部講師)【演習】 ・ALS患者とのコミュニケーション ・移乗・移動									
	14~15	終末期看護学演習(近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・外部講師)【演習】 ・看取りの看護									
教科書	成人看護学系の授業で使用した書籍・資料										
参考書・参考資料等	必要時、紹介する										
事前学習・事後学習	・健康レベル別看護論実習の履修要件科目である。 ・これまでの成人看護学系の科目(成人看護学概論・慢性期ケア・リハビリテーション看護・緩和エンドオブライフケア、がん看護、急性期ケア)で学んだことを基盤に実施する。したがって、これらの科目の復習を良くしておくこと ・演習項目については、事前学習をして臨むこと ・臨地実習とのつながりを意識しながら演習に臨み、よく復習すること										
他の授業との関連	成人看護学概論、慢性期ケア、リハビリテーション看護、緩和・エンドオブライフケア、がん看護、急性期ケア、健康レベル別看護論実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	各演習項目の事前学習(30%)・演習への取り組みと内容(50%)・事後学習(20%)によって評価する。フィードバックは、演習中、健康レベル別看護論実習を通しておこなう。授業時間数の5分の4に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	随時、対応します。										
備考	成人看護学実習室、教室などで実施します。場所が変更になる可能性がありますので、教員からの情報に留意してください。また、目的や到達目標を達成するために、時間外に実習室を効率的に活用し、シミュレーター、実習用モデル等を用いて自主的に学習してください。 詳細なスケジュールは、ガイダンスで説明します。 実務経験のある看護師:近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)										

成人看護学概論 (Introduction to Adult Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)										
授業の目的	成人期にある人の特徴と成人期にある人への看護を展開する上で必要となる理論や概念について学び、成人期にある人への看護支援の在り方について検討する。										
到達目標	①看護における人間理解とケアリングについて説明できる。 ②健康レベル別看護の特徴について説明できる。 ③成人期にある人の特徴と健康問題について説明できる。 ④成人期にある人を理解し看護を展開するために必要な理論や概念について説明できる。 ⑤成人期にある人への看護支援のあり方について考察できる。										
授業の進め方	①授業の要点を示した資料に基づき講義する。必要時、小グループで討議する。 ②講義内容を振り返りながら自分の考えをまとめ表現する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	全人的理解とケアリング(近藤)【講義・討論】									
	2	健康レベル別ケア(近藤)【講義・討論】									
	3	ライフサイクルから見た成人期 (岩本)【講義・討論】									
	4	成人期に特徴的な健康問題(保健統計と医療施策) (岩本)【講義・討論】									
	5	成人期にある人の理解とケアに必要な理論(1):理論・概念とは(近藤)【講義・討論】									
	6	成人期にある人の理解とケアに必要な理論(2):危機理論・セルフケア理論(近藤)【講義・討論】									
	7	成人期にある人の理解とケアに必要な理論(2):行動変容ステージモデル、成人学習理論(岩本)【講義・討論】									
	8	成人期にある人の理解とケアに必要な理論(2):病みの軌跡(岩本)【講義・討論】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 成人看護学1 成人看護学総論 (医学書院)										
参考書・参考資料等	必要資料は配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習:教科書の該当部分を熟読して授業に参加する。 事後学習:授業内容を復習し、他の文献や資料も参考にして考えを整理する。										
他の授業との関連	慢性期ケア、急性期ケア、リハビリテーション看護、緩和・エンドオブライフケア、がん看護、健康レベル別看護技術演習、健康レベル別看護論実習など、病いと共に生きる方への支援を考えるための基礎となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	課題レポート・期末試験など、各々の担当教員の指定する課題の達成度に基づき評価する。 フィードバックは、毎回提出する「リアクションペーパー」に基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については、全員に対してその傾向をフィードバックし、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	在室時は、随時対応する。 不在時は、メールに連絡してほしい。										
備考	＊実務経験のある教員 近藤(看護師)岩本(看護師)										

老年看護学Ⅰ（対象理解）（Gerontological NursingⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatsu)、平井 智重子(HIRAI Chieko)										
授業の目的	様々な健康レベルにある高齢者とその家族を対象に、その人が生きてきた過程で培われた潜在的・顕在的な能力を最大限に発揮できるような看護を実践するために、人間のライフサイクルの中での老年期の特徴や高齢者の加齢に伴う変化の特徴、超高齢社会の現状と課題、老年看護の理念、老年看護の場と看護の役割について学ぶ。										
到達目標	①高齢者の加齢と疾患に伴う健康障害の生活への影響について説明できる。 ②高齢者その人の価値信念を尊重する意味について説明できる。 ③高齢者とその家族の関係性について説明できる。 ④高齢者を取り巻く日本の保健医療福祉システムについて説明できる。 ⑤高齢者が能力を最大限に発揮できるような看護について説明できる。										
授業の進め方	事前学習、視聴覚教材や事例を用いた講義、グループワーク、体験学習を組み合わせる。関連の研究論文を用いて最新の知見を紹介する。 高齢者理解を深めるため、授業時間内に「高齢者疑似体験」、時間外に「高齢者へのライフレビューインタビューおよびライフレビューブック作成」を実施する。なお看護学生による高齢者のライフレビューブック作成に関する研究成果を活用し事前説明を実施する。 授業内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して授業後に提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	老いるということ(吉本)【講義】									
	2	老いを生きるということ・ライフレビューブック作成について(吉本)【講義・討論】									
	3	老年期の健康と生きがい(吉本)【講義・討議】									
	4~5	高齢者疑似体験(吉本、竹内、平井)【演習】									
	6	老年看護学の理念(吉本)【講義】									
	7	老年看護における倫理①高齢者の自己決定(吉本)【討論・講義】									
	8	老年看護における倫理②高齢者虐待と身体拘束(吉本)【講義・討論】									
	9	老年期の生活行動と健康維持①食べると排泄する(平井)【講義・討論】									
	10	老年期の生活行動と健康維持②動くとき清潔保持(平井)【講義・討論】									
	11	老年期の生活行動と健康維持③認知とコミュニケーション(竹内)【講義・討論】									
	12	高齢者を支える保健医療福祉制度の現状と課題(吉本)【自己学習・講義】									
	13	医療機関で治療を受ける高齢者の看護(竹内)【講義・討論】									
	14	介護保険施設で暮らす高齢者の看護(吉本)【講義】									
	15	高齢者の健康障害による家族への影響と看護:医療機関・施設・自宅(吉本)【講義・討論】									
	教科書	系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学(医学書院) ナーシング・グラフィカ 老年看護学 ①高齢者の健康と障害(メディカ出版)									
参考書・参考資料等	参考資料を配布する。映画、書籍を紹介する。										
事前学習・事後学習	授業前に教科書の指定した箇所を読み、疑問点や質問を考えて参加する。 授業後に教科書・資料、自己学習シートを用いて復習する。 「高齢者疑似体験」、「高齢者へのライフレビューインタビューおよびライフレビューブック作成」後にレポートを課す。「高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」・「昔の写真集」閲覧により高齢者および超高齢社会に対する理解を深める。										
他の授業との関連	この授業を基盤に、3年次に「老年看護学Ⅱ(援助方法)」で具体的な実践方法を学ぶ。 並行して開講される「社会保障論」「家族看護論」と関連がある。 「老年看護学Ⅱ」の履修要件科目である。 「発達段階別看護論実習Ⅲ(老年看護学)」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を筆記試験(70%)、レポート(20%)、授業参加度(10%)により総合的に評価する。筆記試験で「知識とその応用」、レポートで「課題との適合度」「内容の具体性」「学んだ知識を活用した考察」「構成と文章表現の適切性」から評価する。授業参加度は「準備状況」「取り組み状況」から評価する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。評価結果のフィードバックについては、期間を設けて開示する。										
オフィスアワー	研究室に連絡を下され。その際、時間等調整します。吉本(研究室6)、竹内(研究室11)、平井(看護学科共同研究室1)										
備考	* 高齢者および超高齢社会に対する理解を深めるために、日常生活の中で高齢者やその家族の言動や心情に関心を持つと共に、社会における高齢者に関する情報に目を向け、学習に活用しましょう。 * 本科目の目的や到達目標を達成するために、授業資料等を用い実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。 * 実務経験のある教員 吉本(看護師)、竹内(看護師)、平井(看護師)										

老年看護学Ⅱ(援助方法)(Gerontological NursingⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatsu)、平井 智重子(HIRAI Chieko)										
授業の目的	老年期にある人の加齢や疾患によって生じた健康障害による生活機能をアセスメントし、高齢者の生きてきた過程や価値信念に基づいた生き方を理解し、高齢者の尊厳を尊重した生活を支援するための看護援助方法を学ぶ。										
到達目標	①老年期にある人の加齢や疾患に伴う生活機能および包括的アセスメントができる。 ②老年期にある人の尊厳が守られた生活を維持もしくは再構築できるような看護援助を考案できる。 ③病院から在宅移行する高齢者に対する退院支援を説明できる。 ④認知症高齢者の日常生活援助を説明できる。										
授業の進め方	①既習の学習内容は復習して授業に臨む。事前学習、視聴覚教材や事例を用いた講義、グループワークを組み合わせて進める。テーマに関連した研究論文などの最新の知見を紹介する。 ②看護過程演習は、個人あるいはグループにおいて事例に関するアセスメントおよび看護計画を段階的に進め、全体発表において共有し理解を深める。さらに、演習事例を用いた臨床推論について理解を深める。 ③授業内に「認知症をもつ模擬患者演習」、「廃用症候群の予防に関する看護技術演習」を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	包括的アセスメントとアセスメントツール(吉本)【講義】									
	2	高齢者に多い疾患のアセスメントと看護(脳血管障害・呼吸器障害)(吉本)【講義】									
	3~4	認知症高齢者の理解と看護①②(竹内)【講義・演習】									
	5	高齢者に多い疾患のアセスメントと看護(運動器障害)(吉本)【講義】									
	6	事例に基づく看護過程の展開①(吉本、竹内、平井)【演習・討論】									
	7	事例に基づく看護過程の展開②(吉本、竹内、平井)【演習・討論】									
	8	事例に基づく看護過程の展開③(吉本、竹内、平井)【演習・討論】									
	9	事例に基づく看護過程の展開④(吉本、竹内、平井)【演習・討論】									
	10	移行の支援と継続看護マネジメント(竹内)【講義・討論】									
	11	人生の統合への支援 回想法とライフレビュー／高齢者と家族看護(吉本)【講義・討論】									
	12	高齢者のレクリエーション(竹内)【講義・演習】									
	13	施設における看取り(竹内)【講義】									
	14~15	高齢者のヘルスプロモーション／廃用症候群の予防に関する看護技術演習(吉本、竹内、平井)【講義・演習】									
教科書	・系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学(医学書院) ・ナースンググラフィカ 老年看護学①高齢者の健康と障害(メディカ出版)										
参考書・参考資料等	毎回授業資料を配布する。参考文献資料は、授業中に随時紹介する。										
事前学習・事後学習	・授業前に教科書の指定した箇所を熟読して疑問点や質問を考えて授業に参加する。 ・授業後に教科書・資料で復習し、知識を整理してアセスメントできるようにする。 ・看護過程の展開では、事前学習を行った上でグループワークに参加して得た知見を活用して個人課題に取り組む。 ・「廃用症候群の予防に関する看護技術演習」、「高齢者のレクリエーション」、「施設における看取り」の授業後にレポート等を課す。										
他の授業との関連	・「看護技術論」「看護過程論」「疾病と治療」の知識・技術を基盤に老年期の人への看護の知識・技術を積み上げる。 ・「老年看護学Ⅰ」と共に、「発達段階別看護論実習Ⅲ(老年看護学)」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を筆記試験(知識とその応用)70%、レポート5%、看護過程課題15%、授業参加状況(準備状況、取り組み状況)10%により総合的に評価する。 ・評価結果のフィードバックについては、期間を設けて開示する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室に連絡を下さい。その際、時間等調整します。吉本(研究室6)、竹内(研究室11)、平井(看護学科共同研究室1)										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、授業資料等を用い実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。 * 実務経験のある学内教員 吉本(看護師)、竹内(看護師)、平井(看護師)										

母性看護学Ⅰ（対象理解）（Maternity NursingⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義・演習
担当教員	●木戸 久美子（KIDO Kumiko）、植村 裕子（UEMURA Yuko）、松下 有希子（MATSUSHITA Yukiko）、十河美智子（SOGO Michiko）										
授業の目的	人間の生涯における性の発達と健康について学び、生命と性と生殖についての考えを深め、新しい家族の誕生期にある人々の健康生活を支援する母性看護について理解する。										
到達目標	①母性看護学の基盤となる理論と概念が説明できる。 ②母性看護の対象の理解ついて説明できる。 ③主な母子保健統計の外観し、重要な母子保健施策について説明できる。 ④女性のライフサイクル各期における看護の必要性が説明できる。 ⑤リプロダクティブヘルスケアに必要なスキルが説明できる。 ⑥妊娠褥婦と新生児の健康と看護について説明できる。										
授業の進め方	講義と演習を組み合わせた授業を行う。 母性看護に特有の技術について、実技演習を行う。実技演習時には、ユニフォーム着用とし、母性看護・助産学実習室にて行う（頭髪はまとめる、爪は短く切る、ネイル・付け爪禁止）。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	母性看護学の基盤となる理論と概念（木戸）【講義】									
	2	母性看護の歴史の変遷と母性看護の対象理解（木戸）【講義】									
	3	母子保健統計と母子保健施策（植村）【講義】									
	4	女性のライフサイクルと健康支援（植村）【講義】									
	5	児の誕生（特別講義）【講義・演習】									
	6	児の誕生における家族機能の変化（母子とその家族）（特別講義）【講義・演習】									
	7	母性看護における看護技術（ウェルネス診断）（木戸）【講義】									
	8	母性看護学概論総括（木戸・植村）【講義】									
	9	妊婦の看護（植村）【講義】									
	10	妊婦の看護（植村）【講義】									
	11	妊婦の看護（植村）【講義】									
	12	産婦の看護（松下）【講義】									
	13	産婦の看護（松下）【講義】									
	14	褥婦の看護（木戸）【講義】									
	15	褥婦の看護（木戸）【講義】									
	16	褥婦の看護（木戸）【講義】									
	17	新生児の看護（十河）【講義】									
	18	新生児の看護（十河）【講義】									
	19	母性看護学各論総括（木戸・植村）【講義】									
	20	母性看護技術【演習】									
	21	母性看護技術【演習】									
	22	母性看護技術【演習】									
	23	母性看護技術【演習】									
教科書	系統看護学講座 母性看護学概論（医学書院） 系統看護学講座 母性看護学各論（医学書院）										
参考書・参考資料等	授業において適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	【事前学習】各回の授業に該当する内容に相当する教科書を読み予習しておく。提示された事前学習課題に取り組んでおくこと（第1回目の講義日に提示する）。 【事後学習】該当する内容の講義資料および教科書を復習する。指定された参考文献に目を通しさらなる問いをもつこと。										
他の授業との関連	「母性看護学Ⅱ」の履修要件科目である。「発達段階別看護論実習Ⅰ（母性看護学）」の履修要件科目である。母性看護学Ⅰの授業内容を踏まえて、母性看護学Ⅱの授業が行われる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	【成績評価方法・基準】 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 到達目標の達成状況を以下の形成評価、総括評価をもとに総合的に評価する。 【形成評価30%】学習課題への取組（提出）、ふれあい親子体験のレポート 【総括評価70%】終講試験（終講試験の配分は、授業項目1～8回に関する試験内容30%、授業項目9～23回に関する試験内容70%とする） 【フィードバック】毎回の授業時に、質問や学びに対する質問を受け付け、次回の授業前に回答する。学習課題へのフィードバックは提出されたノートに対してコメントをする。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	木戸（研究室20）植村（研究室31） 金曜日4コマ目（実習期間中や出張時は、別途オフィスアワーを明示する） オフィスアワー以外も、個別に対応可。以下のメールアドレスに要件を書いてアポをとること。 kido-k@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	知識や理論に基づいて考える力と主体的に学習する姿勢を培い、意見交換を通して自分の考えを整理・表現し、思考が創造的に発展することを期待する。 目的、到達目標を達成するために、実習室にある妊婦腹部触診モデル（計測に必要な物品）、バイタルサイン人形（診察に必要な物品）、沐浴人形（リネン類）、e-ラーニング教材（教科書、動画一覧）を用いて、時間外の時間を活用して自主的に学習する。なお、実習室を使用する場合は事前に予約を取り、使用する。 ＊実務経験のある教員 木戸（助産師）、植村（助産師）、松下（助産師）、十河（助産師）										

母性看護学Ⅱ(援助方法)(Maternity NursingⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●植村 裕子(UEMURA Yuko)、木戸 久美子(KIDO Kumiko)、松下 有希子(MATSUSHITA Yukiko)、十河美智子(SOGO Michiko)										
授業の目的	妊産褥婦および新生児とその家族の身体的、心理的、社会的特徴と生理的变化について最新の知見に基づいて理解し、安全で安楽な看護が実践できる基礎的知識と技術を習得する。										
到達目標	① 妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の特徴と生理的变化について説明できる。 ② 紙上事例(褥婦・新生児)の看護過程が展開できる。 ③ 褥婦、新生児に必要な看護が安全、安楽に実践できる。 ④ 親子の愛着、絆の形成と役割発達等の発達課題と家族に及ぼす影響を理解し、家族の発達を支える看護が説明できる。										
授業の進め方	講義と演習を組み合わせた授業である。 紙上事例を基に、母性看護の看護過程を展開する。 母性看護学Ⅰで学習した内容をふり返り、最新の知見を取り入れて、事例の情報を整理する。 演習時(褥婦、新生児に必要な看護技術、褥婦の看護シミュレーション)は、母性・助産実習室でユニフォーム着用とする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	母性看護の看護過程(植村)【講義】									
	2	事例の説明(松下)【講義】									
	3	褥婦、新生児に必要な看護技術(褥婦および新生児の健康診査、沐浴)【演習】									
	4	褥婦、新生児に必要な看護技術(褥婦および新生児の健康診査、沐浴)【演習】									
	5	褥婦、新生児に必要な看護技術(褥婦および新生児の健康診査、沐浴)【演習】									
	6	看護過程の展開(褥婦・新生児)【演習・講義】									
	7	看護過程の展開(褥婦・新生児)【演習・講義】									
	8	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	9	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	10	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	11	看護過程の展開(褥婦・新生児)【講義】									
	12	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	13	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	14	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
	15	褥婦の看護シミュレーション【演習】									
教科書	系統看護学講座 母性看護学概論(医学書院) 系統看護学講座 母性看護学各論(医学書院)										
参考書・参考資料等	母子健康手帳、実践マタニティ診断(日本助産診断実践学会、医学書院)その他、授業において適宜紹介する。 母性看護学Ⅰ、疾病と治療Ⅳの授業で用いた教科書、参考書、資料等とする。										
事前学習・事後学習	事前学習:紙上事例を読み、分からない言葉を調べる。 事後学習:授業内容をふり返り、学習した内容を整理する。看護過程の記録を整理する。										
他の授業との関連	母性看護学Ⅰ、疾病と治療Ⅳでの学修内容を復習して本科目の授業に臨むこととする。 「発達段階別看護論実習Ⅰ(母性看護学)」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を形成評価(授業参加度、学習課題)40%、総括評価(終講試験)60%で総合的に評価する。 毎回の授業時に学習内容を確認し、個々のニーズに対応したフィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 * 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価を受けられない。										
オフィスアワー	植村(研究室31) 個別に対応する。以下のメールアドレスに要件を書いて事前に予約をとる。 uemura@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	目的、到達目標を達成するために、実習室にある産褥腹部モデル、乳房モデル、パイタルサイン人形、e-ラーニング教材(教科書 動画一覧)を用いて、時間外の時間を活用して自主的に学習する。なお、実習室を使用する場合は事前に予約を取り、使用する。 * 実務経験のある教員 植村(助産師)、木戸(助産師)、松下(助産師)、十河(助産師)										

小児看護学Ⅰ（対象理解）（Pediatric NursingⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)、松本 裕子(MATSUMOTO Yuko)、加藤 豊(KATOU Yutaka)										
授業の目的	人間のライフサイクルの中での小児期の特徴や子どもの成長・発達、小児看護の役割と課題について理解する。 現代社会における子どもと家族の健康に関する諸問題、医療、保健、福祉、教育の動向について理解する。子どもの権利を守る看護者の役割について多角的視点から理解する。										
到達目標	①小児期各期の子どもの成長発達の特徴について具体的に説明できる。 ②小児期各期、各健康レベルの子どもや家族の特徴を踏まえたケア方法を記述できる。 ③現代社会における子どもと家族の健康に関する諸問題に関心を持ち、子どもの権利を守る看護職の役割について自分の意見を述べられる。 ④子どもの権利を尊重した援助の方法について、具体的に述べられる。 ⑤子どもに特有な症状について、解剖生理の特徴を踏まえたメカニズムと看護ケアを記述できる。										
授業の進め方	・教員は最新の知識を伝え、講義資料に沿って進める。 ・小グループで課題に取り組む時間を設け、発表や意見交換を行う。 ・子どもが具体的にイメージでき、子どもの成長発達を保障する関わり方について考えられるように、視聴覚教材及び具体的な事例を提示した課題を用いる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	小児看護の歴史と役割、小児看護を支える基本理念と倫理的課題（枝川）									
	2	子どもの権利と看護、小児看護で用いられる理論（枝川）									
	3	成長・発達の原則（枝川）									
	4	乳児期・幼児期の子どもの成長・発達と看護（枝川）									
	5	学童期・思春期の子どもの成長・発達と看護（枝川）									
	6	発育の評価（枝川）									
	7	健康障害のある子どもの理解と反応（松本）									
	8	倫理的配慮に基づいた看護援助（松本）									
	9	入院中の子どもと家族の看護（松本）									
	10	外来における子どもと家族の看護（松本）									
	11	災害にあった子どもと家族の看護（松本）									
	12～15	子ども特有の症状のメカニズムと看護（松本・加藤・枝川）									
	16	ハイリスク新生児と家族の看護（枝川）									
	17	健康レベルに応じた子どもの家族の看護[慢性期]（松本）									
	18	健康レベルに応じた子どもの家族の看護[終末期]（松本）									
	19	健康レベルに応じた子どもの家族の看護[急性期]（松本）									
	20	健康レベルに応じた子どもの家族の看護[周手術期]（松本）									
	21	障害のある子どもと家族の看護（枝川）									
	22～23	子どもと家族のための法律、保健・福祉施策（枝川）									
	教科書	小児看護学[1]小児看護学概論 小児臨床看護総論(医学書院)、小児看護学[2]小児看護学各論(医学書院)、ナーシング・グラフィカ 小児看護学① 小児の発達と看護(メディカ出版)									
	参考書・参考資料等	・資料を配付します。 ・授業において適宜紹介します。									
	事前学習・事後学習	事前学習:既習の学習内容や基礎的な用語・知識を復習しておく。子どもへの興味と関心を持ち、自主的な活動の機会を持つことを勧めます。 事後学習:小児看護学Ⅱ（技術論）の学習につなげられるよう復習すること。									
他の授業との関連	小児看護学Ⅱ、発達段階別看護論実習Ⅱ（小児看護学）の履修要件科目である。 また、子どもの成長・発達や現代社会の子育てに関する支援については、母性看護学Ⅰとの共通性が高いので関連づけて学習を進めて下さい。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、定期筆記試験:知識、記述力(85%)、課題レポート(15%)により評価します。 フィードバック:毎回の授業後に提出する学びや課題のリフレクションシートを活用し、適時フィードバックを行う。さらに、演習記録等の成果物を返却し学習内容に関するフィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	随時対応します。枝川(研究室22)、松本(研究室24)、加藤(看護学科共同研究室2)										
備考	小児特有の感染症についての自身の抗体価について確認をしておくこと。 * 実務経験のある教員 枝川(看護師)、松本(看護師)、加藤(看護師)										

小児看護学Ⅱ（援助方法）(Pediatric Nursing Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)、松本 裕子(MATSUMOTO Yuko)、加藤 豊(KATOU Yutaka)										
授業の目的	子どもや保護者の特性・状況を理解し、健全な成長発達の保障および健康障害に応じた看護実践に必要な知識、技術、態度を習得する。										
到達目標	①健康障害のある子どもの観察及び発達段階に応じた援助技術について、必要な知識や実践方法を説明できる。 ②健康障害のある子どもの観察及び発達段階に応じた援助技術を実施できる。 ③問題解決思考を用いて、子どもと家族の問題抽出及び個別性に応じた看護計画の立案ができる。 ④グループでのディスカッションにより、主体的な学習ができ、自己の課題に気づくことができる。										
授業の進め方	講義、グループワーク、演習を通して上記の到達目標を達成する。病気の子どもと家族、そして看護者として関わる自分自身を具体的にイメージできるように、教員は最新の知識を伝え、講義では視聴覚教材や模型を活用する。肺炎の事例(A児)を一貫して用いることにより、個別性のある援助を考える。グループワークや演習で、A児への援助方法を創造的に考え、主体的に繰り返し練習する。グループメンバーでロールプレイを行う。シミュレーターやモデル人形を活用し、状況設定に応じた援助技術を練習し、授業時間外においても教員の指導を受け練習する。バイタルサイン測定技術においては、演習期間中に技術試験を行って、一定のレベルの習得を図る。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		子どもの看護に必要な技術1									
	1	援助関係を形成する技術、安心・安全な環境を調整する技術(枝川)【講義】									
	2	生活援助技術 (枝川)【講義】									
	3	トリアージ・救命救急に関する技術(枝川)【講義】									
	4	症状・生体機能の管理技術、呼吸・循環を整える技術(松本)【講義】									
	5	学習課題の進め方、事例紹介・事例検討(松本・枝川)【講義・演習】									
	6	看護過程の展開 (松本・枝川)【講義・演習】									
		子どもの看護に必要な技術2									
	7	与薬の技術 (松本)【講義】									
	8	看護過程の展開 (松本・枝川)【講義・演習】									
9~14	子どもの看護に必要な技術3 (松本・枝川)【演習】										
15	乳幼児のバイタルサイン測定、乳幼児の身体計測、乳幼児の与薬 まとめ(松本・枝川)【講義・演習】										
教科書	ナーシング・グラフィカ 小児看護学①小児の発達と看護(メディカ出版) 小児看護学②小児看護技術(メディカ出版) 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学概論 小児臨床看護総論 小児看護学①(医学書院)										
参考書・参考資料等	発達段階を考えたアセスメントに基づく小児看護過程、荃津智子編(医歯薬出版) 発達段階から見た小児看護過程 病態関連図、石黒綾子、浅野みどり編(医学書院) 根拠と事故防止からみた小児看護技術、浅野みどり編(医学書院) 病と共に生きる子どもの看護、及川郁子監(メヂカルフレンド社) 小児看護実習ガイド、筒井真優美監(照林社)等										
事前学習・事後学習	事前学習:授業前に教科書の該当部分を熟読する。事例を踏まえた事前課題に取り組む。 事後学習:授業内容や実施状況を振り返り、自己の課題に応じて復習及び技能獲得に向けた取り組みを行う。 技術演習に関しては、事前に時間外における小児看護学実習室使用について予約し、主体的に繰り返し練習をすることができます。										
他の授業との関連	特に関連の強い科目を挙げる。 「小児看護学Ⅰ」は既習科目であり、習得した知識を活用しながら本科目の学習をすすめる。 「疾病と治療Ⅳ」は同時期に学習するが、関連の強い科目である。 「発達段階別看護論実習Ⅱ(小児看護学)」の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の内容で評価する。 知識の習得状況・・・期末筆記試験(50%) 問題解決思考力・・・看護過程演習(20%) 技術習得状況・・・演習への取り組み姿勢及び記録(20%)、技術試験(10%) フィードバック:毎回の授業後に提出する学びや課題のリフレクションシートを活用し、適時フィードバックを行う。さらに、演習記録等の成果物を返却し学習内容に関するフィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数の5分の4以上の出席が無ければ、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	随時対応します。枝川(研究室22)、松本(研究室24)										
備考	＊実務経験のある教員 枝川(看護師)、松本(看護師)、加藤(看護師) 技術演習に関しては、事前に時間外における小児看護学実習室使用について予約し、主体的に繰り返し練習をすることができ。特に、バイタルサイン測定技術においては、シミュレーター人形や測定物品など、技術試験で使用するものを揃えているので、積極的に活用し学習してください。										

精神保健看護学Ⅰ（対象理解）(Mental Health NursingⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●則包 和也(NORIKANE Kazuya)、土岐 弘美(TOKI Hiromi)、多田羅 光美(TATARA Terumi)										
授業の目的	精神疾患を持つ人たちを取り巻く現状を理解し、幅広い視野で援助を考察する能力を養い、メンタルヘルスに対する看護に必要な知識を学ぶことによって、対象者のもつ強みを活かした支援技術を検討し、理解する。また、精神保健医療福祉における制度や法律の変遷、倫理やリスクマネジメントに対する考察を行い、精神疾患を持つ当事者の体験や多職種スタッフの言葉を通して、効果的な生活支援や多職種連携の現状と課題について考察する。										
到達目標	①精神疾患を持つ人たちへの処遇の変遷と現状についての知識を得て、日常生活に及ぼす疾患の影響を具体的に把握することができる ②精神症状に影響を受けながら生活している人への看護援助を行うために必要な理論を理解し、支援方法を検討できる ③精神看護を実践するモデルを、自己の体験に当てはめて活用することができる ④精神保健医療福祉における法律や制度について理解し、考察できる ⑤精神保健医療福祉における倫理とリスクマネジメントについて理解し、考察できる ⑥精神障害者の体験について理解し、地域生活支援について考察できる ⑦精神障害者の地域生活支援に向けて精神保健医療福祉における多職種連携について理解し、考察できる										
授業の進め方	・授業中にグループで討議や演習する時間を設け、意見交換を行う ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して授業後に提出する ・講義、演習、グループワーク、グループプレゼンテーション、自己学習などアクティブラーニングを組み合わせる										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	心と精神看護(則包)【講義】									
	2	精神医療・看護の歴史(則包)【講義】									
	3	精神保健医療福祉の人権擁護と法制度(土岐)【講義】									
	4	倫理とリスクマネジメント(土岐)【講義】									
	5	シンポジウム(当事者・家族)(則包、土岐、他)									
	6	シンポジウム(当事者・家族)									
	7	ストレングスモデル1 ストレングスモデルとは(多田羅)【講義】									
	8	ストレングスモデル2 事例を用いて、実習記録用紙にストレングスを抽出し、全体像を理解する(多田羅)【講義・演習】									
	9	セルフケア理論1 セルフケアとは(土岐)【講義】									
	10	セルフケア理論2 セルフケア理論を活用して自己のセルフケアを査定し、看護計画を立案する(土岐)【演習】									
	11	シンポジウム(支援者)(則包、土岐、多田羅、他)									
	12	シンポジウム(支援者)(則包、土岐、多田羅、他)									
	13	精神精神保健福祉に関するテーマでのディベート1(則包):【講義・演習】									
	14	精神精神保健福祉に関するテーマでのディベート2(則包):【演習】									
	15	精神精神保健福祉に関するテーマでのディベート3(則包):【演習】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 精神看護学[1]精神看護の基礎(医学書院)、精神看護学[2]精神看護の展開(医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習:講義内容に該当する教科書の箇所を読み、大切なポイントや疑問点を考えておくこと。 事後学習:講義資料と教員の説明を基にして講義を振り返り、知識と自分の考えをまとめる。										
他の授業との関連	精神保健看護学Ⅱ、メンタルヘルス看護論実習の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 試験50%、演習課題36%、および、授業毎の小レポート(内容、文字数)と授業貢献度(参加態度、提出期限の順守、教員との連絡のやりとり等)を合わせた14%を総合して評価する。評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜受け付けますが、事前にメール等で連絡をしてください。則包研究室(研究室21)、土岐(研究室14)、多田羅研究室(研究室30)										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、時間外にメンタルヘルス看護学実習室を活用(実習室内のDVDや書籍の閲覧、精神関連グッズ等の使用)して、自主的に学習を進めること。 *実務経験のある教員 則包(看護師)、土岐(看護師)、多田羅(看護師)										

精神保健看護学Ⅱ（援助方法）（Mental Health NursingⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●則包 和也(NORIKANE Kazuya)、土岐 弘美(TOKI Hiromi)、多田羅 光美(TATARA Terumi)										
授業の目的	精神疾患の症状が及ぼす影響を理解し、様々な状況における対象者への治療的なコミュニケーションの方法や技術について、具体的に習得する。さらに、対象者に寄り添う看護とは何かを考察しながら、効果的な看護実践のためのアセスメントや展開方法を学ぶ。										
到達目標	①精神疾患をもつ人に対する治療的な関わりについて理解できる ②精神疾患の症状がもたらす影響を理解し、効果的な看護援助を患者の視点で考えることができる ③精神科看護で用いられている理論やモデルに基づいた演習を体験することによって、実践的な看護ケアを実施する構えを養う										
授業の進め方	・授業中にグループで討議や演習する時間を設け、意見交換を行う ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を用紙に記述して授業後に提出する ・講義、演習、グループワーク、グループプレゼンテーション、自己学習などアクティブラーニングを組み合わせる										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	精神疾患をもつ人への看護1:不安障害、強迫性障害（則包）【講義】									
	2	精神疾患をもつ人への看護2:人格障害、依存症（則包）【講義】									
	3	精神疾患をもつ人への看護3:気分障害（則包）【講義】									
	4	精神疾患をもつ人への看護4:統合失調症急性期（則包）【講義】									
	5	精神疾患をもつ人への看護5:統合失調症慢性期（則包）【講義】									
	6	薬物療法と看護（則包）【講義】									
	7	精神科看護のコミュニケーション1(質問を使う)(則包)【講義/演習】									
	8	精神科看護のコミュニケーション2(方向性を意識する)(則包)【講義/演習】									
	9	言語的・非言語的メッセージを意識したコミュニケーション演習(則包)【講義/演習】									
	10	認知行動療法の概要と活用（則包）【講義/演習】									
	11	災害における心のケア（則包）【講義】									
	12	ペーパーペイシエントを用いた看護過程の理解1(則包、土岐、多田羅)【講義/演習】									
	13	ペーパーペイシエントを用いた看護過程の理解2(則包、土岐、多田羅)【講義/演習】									
	14	発表とまとめ(則包、土岐、多田羅)【演習】									
	15	発表とまとめ(則包、土岐、多田羅)【演習】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 精神看護学[1]精神看護の基礎(医学書院)、精神看護学[2]精神看護の展開										
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習:毎回の講義項目に該当する箇所を教科書で読み、大切なポイントや疑問点等を考えたうえで講義に参加すること。 事後学習:講義資料と教員の説明を参考にして、学習したことを振り返り、実習での活用について具体的なイメージを持っておくこと。										
他の授業との関連	本科目は、メンタルヘルス看護論実習の履修要件科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。試験60%、授業毎の小レポート(内容、文字数)15%、授業貢献度(参加態度、提出期限の順守等)15%、演習課題(内容、形式の順守等)10%を総合して評価する。 評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜受け付けますが、事前にメール等で連絡があるとスムーズです。 則包研究室(研究室21)、土岐(研究室14)、多田羅研究室(研究室30)										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、時間外にメンタルヘルス看護学実習室を活用(実習室内のDVDや書籍の閲覧、精神関連グッズ等の使用)して、自主的に学習を進めること。 * 実務経験のある教員:則包(看護師)、土岐(看護師)、多田羅(看護師)										

地域看護学Ⅰ（看護職の活動の場と役割）（Community of NursingⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●片山陽子(KATAYAMA Yoko)、辻よしみ(TSUJI Yoshimi)、木戸久美子(KIDO Kumiko)、佐々木純子(SASA KI Junko)、他										
授業の目的	地域で暮らす人々の健康生活の維持向上をめざすための保健医療の必要性と、地域における看護職の活動の場と役割を理解する。										
到達目標	①地域で暮らす生活者の健康生活の支援における保健医療の必要性を説明できる。 ②すべての健康レベル、ライフステージにおいて看護職が関わっていることを認識する。 ③看護師、助産師、保健師の活動と役割の概要が述べられる。 ④地域における看護職の多様な活動の概要を理解する。 ⑤社会的変化に応じて多様化し拡大してきた看護実践の場と役割を理解する。 ⑥現時点での自分の関心について考察できる。										
授業の進め方	地域で活動する看護職として、保健師・助産師と看護師、特に慢性期看護や訪問看護師の活動を紹介し、個人ワークとグループワークにより看護職の専門性と活動の多様性が理解できるよう展開する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	本科目の必要性と意義、地域における保健医療の概要と必要性（片山）【講義】 地域で生活する人々の健康の維持・増進への支援（佐々木）【講義】 保健師の活動の場と役割（辻）【講義】 医療ニーズをもつ生活者への看護の役割と活動（片山）【講義】 慢性期看護・訪問看護の場の特性と役割（片山）【講義】 地域で子どもを産み育てていくこと（木戸）【講義】 助産師の活動の場と役割（木戸）【講義】 多様化する看護実践の場と拡大する看護職の役割と課題（片山）【講義・討議】									
教科書	指定教科書はなし。教員作成の教材資料を配布する。										
参考書・参考資料等	適宜、提示する。										
事前学習・事後学習	事前学習：看護学概論で学んだ内容を確認し、本科目の学習を進められるよう準備する。 授業時に実施内容を提示 事後学習：授業時の配布資料等を確認する										
他の授業との関連	・看護学概論は本科目の基盤であり関連が強い。 ・看護学導入実習は本科目で理解した看護職の活動を実際の具体的事象と統合し学習する科目である										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価：①小レポート・ワークシート(20%)②課題レポート(80%) 出席時間数が3分の2に満たない場合は、原則として評価を受けることができない。 評価基準：①は、内容理解、自己の考えの表現、考察の深さ、②は、課題発見力、論理的記述と表現 フィードバック：①は提出後の次回授業時に全体の傾向と共有すべき内容をコメントする、②課題レポート評価表に基づいて評価し、評価表を添付して返却する。フィードバック期間を提示し必要時に個別対応する。										
オフィスアワー	授業後に教室で対応する。										
備考	＊実務経験のある教員 片山(看護師、保健師)、辻(保健師、看護師)、木戸(看護師、助産師)、佐々木(保健師、看護師)										

地域看護学Ⅱ（ライフサイクルと健康支援）（Community of NursingⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●佐々木 純子(SASAKI Junko)、辻よしみ(TSUJI Yoshimi)										
授業の目的	地域で暮らす人々の生活と、健康の維持増進及び疾病予防に関する看護活動について、ライフサイクル別の対象者への健康支援活動から学ぶ。										
到達目標	①地域で生活する人々のライフサイクルにおける健康課題について概説できる。 ②地域で生活する人々の健康課題への保健・医療・福祉の取り組みが概説できる。 ③健康の維持増進及び疾病の予防に関わる看護職の役割について考えることができる。 ④看護の対象となる人の生活について、関心を持ち、自分なりの意見を持つことができる。										
授業の進め方	①授業の要点を示した資料に基づき講義する。 ②授業中に、グループ討議の時間を設け意見交換を行う。 ③講義内容を振りかえりながら自分の感想や意見を小レポートに記述して提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	地域看護の特徴・理念・歴史（佐々木）【講義】									
	2	地域での生活、ライフサイクルと健康課題（佐々木）【講義・討論】									
	3	地域看護の対象：母子保健（辻）【講義・討論】									
	4	地域看護の対象：乳幼児保健・学童保健（辻）【講義・討論】									
	5	地域看護の対象：成人保健（佐々木）【講義・討論】									
	6	地域看護の対象：産業保健（佐々木）【講義・討論】									
	7	地域看護の対象：高齢者保健（佐々木）【講義・討論】									
	8	様々な地域・諸外国における域看護活動（佐々木）【講義・討論】									
教科書	教科書は指定しない、授業資料を配布する										
参考書・参考資料等	標準保健師講座 1 公衆衛生看護学概論、3 対象別公衆衛生看護活動(医学書院) 系統看護学講座 専門分野 基礎看護学[1]看護学概論(医学書院)										
事前学習・事後学習	各ライフサイクルでの考えられる健康課題について調べて授業に参加する。 授業後は、配布資料と参考書等を読み内容の理解を深め、他の文献資料も参考にして考えを整理する。										
他の授業との関連	1年次前期の「看護学概論Ⅰ」「地域看護学Ⅰ」「看護学導入実習」に続く授業です。地域で生活する人々のライフサイクルに沿った対象への看護活動について、自分自身や周辺の人々の生活と結びつけながら理解していく。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 目標の達成状況を、「課題レポート(40%)」、「期末試験(筆記)(60%)」と授業参加度により総合的に評価する。 課題レポートの評価基準は、「形式的要件、文献の活用、自己の考えの一貫性・考察の深まり」で評価する。 フィードバック：小レポートでの質問等については、次の授業にてコメントを返していく。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	授業後及び研究室在室時に対応する。佐々木(研究室15 meail:sasaki-j@kagawa-puhs.ac.jp)、辻(研究室3)										
備考	様々なライフステージにいる看護の対象について理解を深め、自分自身の生活と結び付けて考えられる様に学習してください。 * 実務経験のある教員 佐々木(保健師、看護師)、辻(保健師)										

離島看護学Ⅰ（へき地の暮らし）（Nursing in Remote islandsⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岡西幸恵(OKANISHI Sachie)、岩本真紀(Iwamoto Maki)、森田公美子(MORIT A Kumiko)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、片山陽子(KATAYAMA Yoko)、山端美香子(YAMABERI Mikako)、大石由紀(OISHI Yuki)、近藤松子(KONDO Matsuko)、溝渕靖幸(MIZOBUCHI Yasu yuki)岡秀穂(OKA Hideo)、池永禎子(IKENAGA Sachiko)										
授業の目的	離島・へき地の特徴とその地で暮らす人々の生活や文化を理解し、その特性に応じた保健医療の現状を知り、課題と対策について学ぶ。加えて、離島にあるハンセン病療養所の実情を知り、離島での生活を支える課題について学ぶ。										
到達目標	①離島・へき地の特性、人々の生活・文化・環境、保健医療の概況について、考察できる。 ②ハンセン病療養所が存在する大島の特徴、離島に療養所があるが故の困難、離島にある療養所を支える方略、離島で一生を過ごすハンセン病回復者の苦悩と叡智について知り、ハンセン病問題の過去・現在・未来について考察できる。										
授業の進め方	①ハンセン病療養所のスタッフと協働で授業を進める。機会が許せば、ハンセン病回復者と直接対話する機会を設ける。 ②授業担当者が実施したハンセン病に関する研究知見に基づき、授業を展開する。 ③適宜、視聴覚教材を用いた講義や演習を行い、主体的に考えることを促進する。 ④学生自身が問いを立て、課題意識を持って参加できるよう、講義と討論を並行して進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	離島・へき地の概況・人々の暮らしと文化（片山）【講義】									
	2	香川県の離島・へき地の状況と保健医療（片山）【講義・討論】									
	3	ハンセン病の病態生理 （近藤）【講義】									
	4	ハンセン病の歴史的背景 （近藤）【講義】									
	5	ハンセン病の療養地で暮らす人々1 （近藤、岡西、岩本、森田、中島、金、山端、大石、近藤（松）、溝渕、岡、池永）【講義・GW】									
	6	ハンセン病の療養所で暮らす人々2 （近藤、岡西、岩本、森田、中島、金、山端、大石、近藤（松）、溝渕、岡、池永）【講義・GW】									
	7	ハンセン病の保健医療と倫理1 （近藤、岡西、岩本、森田、中島、金、山端、大石、近藤（松）、溝渕、岡、池永）【講義・GW】									
	8	ハンセン病の保健医療と倫理2 （近藤、岡西、岩本、森田、中島、金、山端、大石、近藤（松）、溝渕、岡、池永）【講義・GW】									
教科書	近藤真紀子、大島青松園：大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り（風間書房、2015）										
参考書・参考資料等	授業の中で、提示する。										
事前学習・事後学習	授業の中で、提示する。										
他の授業との関連	・社会学・文化人類学など基礎科目は、本科目の学修を深める。 ・本科目の学びを、医療倫理学の学修につなげる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	学習参加度（10%）と課題レポート評価（90%）により、学習目標の到達度を総合的に評価する。 評価基準：課題発見・解決力、論理的思考力、表現力 フィードバック：毎回提出する授業の感想をもとに、必要に応じて、その都度フィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	適宜、研究室在室時に対応する。 不在時は、メールに連絡してほしい。										
備考	＊実務経験のある教員：近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・片山・山端・近藤（松）・大石・溝渕（看護師）、岡（義肢装具士）、池永（学芸員）										

離島看護学Ⅱ（へき地の看護活動）（Nursing in Remote islandsⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岡西幸恵(OKANISHI Sachie)、岩本真紀(Iwamoto Maki)、森田公美子(MORIT A Kumiko)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、山端美香子(YAMABERI Mikako)、大石由紀(OISHI Yuki)、近藤松子(KONDO Matsuko)、溝渕靖幸(MIZOBUCHI Yasuyuki)、岡秀穂(OKA Hideo)、池永禎子(IKENAGA Sachiko)										
授業の目的	瀬戸内海の島にあるハンセン病療養所で一生を暮らすハンセン病回復者の思いと倫理的問題、ハンセン病回復者の暮らしと尊厳ある看取りを支える人々の実践を知り、ハンセン病から何を学び何を後世に伝えるのか、自ら考える。										
到達目標	①離島で暮らすハンセン病回復者の思いを知る。 ②ハンセン病回復者の離島での生活を支える職種とその役割について理解する。 ③ハンセン病回復者の体験を伝承する方法について考え実施する。										
授業の進め方	療養所のスタッフとともに、授業を進める										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ハンセン病回復者との対話(全員)									
	2	ハンセン病回復者を支える医師との対話(全員)									
	3~4	ハンセン病回復者を支えるスタッフとの対話(全員)									
	5~6	ハンセン病を語り継ぐ:グループワーク(全員)									
	7~8	ハンセン病を語り継ぐ:プレゼンテーション(全員) *研究成果に基づく講義									
教科書	近藤真紀子, 大島青松園:大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り(風間書房、2015)										
参考書・参考資料等	必要時、紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習:教科書に目を通しておくこと。 事後学習:医療倫理と結び付けて考える。ハンセン病回復者・療養所スタッフと直接対話できる貴重な機会である。医療者として何をどのように語り継ぐのかを考えること。										
他の授業との関連	離島看護学Ⅰと連動する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	意欲、学びの深さ、伝承における将来的貢献などの視点から、グループワーク・プレゼンテーション・レポート内容から評価する。 学びの到達度については、全員に対して、その傾向をフィードバックし、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	在室時は、適宜、対応する。 不在時は、メールに連絡してほしい。										
備考	実務経験のある教員:近藤・岩本・森田・岡西・中島・金・山端・大石・近藤(松)・溝渕(看護師)、岡(義肢装具士)、池永(学芸員)										

在宅看護学Ⅰ（概論）（Home Care NursingⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●片山 陽子（KATAYAMA Yoko）										
授業の目的	生活者として在宅療養者と家族の生活と生き方を理解し、住み慣れた地域で主体的に生きることを支援する在宅看護を展開するために必要な諸理論や概念、意思決定支援を主体とした目標志向型実践の思考の枠組みを学び、保健医療福祉の制度的基盤における展開方法を考究する。										
到達目標	①在宅医療・看護の目的、必要性和特性を説明できる。 ②在宅看護に関連する諸理論や概念が説明できる。 ③在宅看護の対象理解の方法を説明できる。 ④目標志向型看護実践の基盤となる理論と基本的考え方が説明できる。 ⑤Lifeを支えるACP・意思決定支援の方法と倫理的課題を考察できる。 ⑥地域包括ケア・在宅ケアに関する諸制度の概要を説明できる。 ⑦在宅看護に関する研究動向と今日的課題について考察・討議できる。										
授業の進め方	・講義と少人数討議を中心に展開する。 ・視聴覚教材や実際の臨床事例を活用し、学生個々の知的関心を明確化しながら展開する。 ・授業終了時（複数回の指定回）に、当該授業の関連テーマでのミニレポートを作成し学習内容の振り返りと学習到達度を確認しながら進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業ガイダンス、在宅看護学の位置づけと目的、必要性（片山）【講義】									
	2～3	在宅看護の役割と対象理解（片山）【講義】									
	4～6	在宅看護の関連理論と概念（片山）【講義】									
	7～8	在宅ケアと看護の実践活動（片山・非常勤講師）【講義・討論】									
	9～11	目標志向型実践の基盤理論と概要（片山）【講義】									
	12～13	意思決定支援・Advance Care Planningの基本と倫理的課題（片山）【講義】									
	14	関連する社会保障の諸制度（片山）【講義】									
	15	在宅看護学の研究動向と今日的課題（片山）【講義・討論】									
教科書	系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論[1] 地域・在宅看護の基礎（医学書院） 系統看護学講座 専門分野 地域・在宅看護論[2] 地域・在宅看護の実践（医学書院）										
参考書・参考資料等	授業時に提示する										
事前学習・事後学習	事前学習：①シラバスを確認し、該当する部分を教科書で学習しておく ②提示した動画資料・配信した教材などで予習しておく 事後学習：授業後に課題レポートを記述し学習の振り返りを行う。授業内容、レポートの評価内容に基づいて、学習内容を確認し、在宅看護学Ⅱに向けた自己の課題を明確化する										
他の授業との関連	・「在宅看護学Ⅱ」、「在宅看護学実習」の履修要件科目である。 ・哲学、倫理学に関する学習は準備性を高めるために重要であり、関連書籍を熟読しておく。 ・並行して開講される家族看護学、社会保障論は関連が高く、授業の理解を高める。										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価：①授業後のミニレポート（40％）、②期末筆記試験（60％） 最終試験の受験資格は、出席時間数3分の2以上を満たしていること。 評価基準：①は、内容の理解と活用、課題発見力、自分の意見の記述 ②は、内容の理解、論理的記述力、説明力 フィードバック：①は全体の傾向と要点について次回の授業でフィードバックを行う。②は採点后に結果を開示し、評価結果・内容への質問等はフィードバック期間を設けて個別に対応する。										
オフィスアワー	授業終了後、および在宅時に対応する（副学長室）										
備考	在宅医療・看護は社会情勢や医療システムの変化と併せて考究することが重要である。社会状況や保健医療システムに常に関心を持ち学習すること ＊実務経験のある教員 片山（保健師、看護師）										

在宅看護学Ⅱ（展開論）（Home Care Nursing Ⅱ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●片山 陽子(KATAYAMA Yoko)、岡田 麻里(OKADA Mari)、和田 知世(WADA Chise)										
授業の目的	在宅で生活している又は在宅生活への移行期にある療養者と家族の固有の価値観や生活課題を理解した上で、在宅看護実践（目標志向型実践）について事例での展開方法を学ぶ。また、基本的な援助技術について在宅の特性を踏まえた実施方法を身に着ける。										
到達目標	①在宅看護過程（目標志向型実践）の理解を基に、生活者を対象として展開し記述できる。 ②生活者である対象を時間軸・包括性・主体的存在の視点で説明し記述できる。 ③事例に必要な医療・生活の統合方法を説明できる。 ④基本的な基礎技術を習得し実施できる。 ⑤事例を基にチーム医療と社会資源のあり方を説明、記述できる。 ⑥地域包括ケア時代に求められる看護職の資質と役割を分析、考案できる。										
授業の進め方	・講義、演習、グループワークを通して実施する。 ・動画教材を活用し、在宅での展開をイメージしながら授業を進める。 ・事例展開は、個人ワークとグループワーク、全体共有を平行して実施し、事例への実践を展開しプレゼン・共有する。 ・在宅看護に必要な基本的援助技術の演習は、自己学習時間も活用しながら展開する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2～3 4～5 6～8 9～10 11～12 13 14 15	学習課題と進め方、在宅看護の支援の特徴（片山）【講義】 在宅看護過程の構造と展開方法（片山・岡田・和田）【講義・演習】 事例の目標設定と対象理解の記述（片山）【講義】 在宅看護過程の展開：事例展開（片山・岡田・和田）【演習】 在宅看護介入の特性：事例展開（片山・岡田・和田）【演習】 在宅での基礎的援助技術（生活支援）（片山・岡田・和田・他）【演習】 在宅での基礎的援助技術（口腔ケア・生活リハ）（非常勤講師）【演習】 在宅でのリスク管理（片山）【講義・討議】 地域包括ケア時代に求められる看護職の役割と実践（片山・岡田・和田）【討議】									
教科書	①専門分野 地域・在宅看護の基盤 地域・在宅看護論1 系統看護学講座（医学書院） ②専門分野 地域・在宅看護の実践 地域・在宅看護論2 系統看護学講座（医学書院） （上記①②は在宅看護学Ⅰ同様） ③地域・在宅看護実習ハンドブック（中央法規出版）										
参考書・参考資料等	生活と医療を統合する継続看護マネジメント、長江弘子、片山陽子、岡田麻里ほか、（医歯薬出版） その他、授業で提示										
事前学習・事後学習	【事前学習】 ・シラバスを確認し、授業内容に関連する既習事項の自己習得状況と課題を明確化しておく。 ・前期の在宅看護学Ⅰの学習内容を復習した上で授業に参加すること。 ・基本的な看護技術に関する既習事項と技術習得状況を確認しておくこと。 【事後学習】 ・授業内容、演習実施の評価内容に基づき学修内容を確認し、自己の課題を明確化する。										
他の授業との関連	・「在宅看護学実習」の履修要件科目である。 ・2年後期の在宅看護学Ⅰの学習内容を基盤にした演習授業である。 ・基本的な看護技術の既習内容は本科目の基盤となる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価：①演習ワークシートと演習参加度と貢献度（40%）②課題レポート（10%）③期末筆記試験（50%） 最終試験の受験資格は、出席時間数5分の4以上を満たしていること。 評価基準：①は、知識と既習内容を適用した記述内容、考察の深さ、グループでの協働学習への態度と参加状況及びGWへの貢献度 ②は、知識の活用、記述の具体性、考察の深さ、③は、内容の理解度、論理的記述 フィードバック：授業後に学び・質問等を記載するリフレクションシートを提出し、そのフィードバックは次回授業時に行う。①②は提出後の授業で全員の傾向と課題を提示した上で、提出物に個別にコメントを記入して返却する。コメントへの質問等も適宜対応する。③は試験実施後1週間以内に返却、フィードバック期間を設けて個別対応する。										
オフィスアワー	授業終了後および在室時には対応する。片山（副学長室）、岡田（研究室7）、和田（看護学科共同研究室1）										
備考	＊実務経験のある教員 片山（看護師）、岡田（看護師）、和田（看護師）、他 授業時間期間中及び前後の期間も学習効果を得るために実習室を活用すること。なお、授業時間外で実習室を使用する場合は、科目担当教員に申し出ること。										

地域包括ケア論 (Community-based integrated care)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●佐々木 純子 (SASAKI Junko)、岡田 麻里 (OKADA Mari)										
授業の目的	地域包括ケアの概念と様々なライフサイクル、健康レベルにある人々の地域 (医療施設等も含む) における健康支援、サービス提供のシステムを学ぶ。また、地域で生活する多様な人々を対象とした看護の役割を学び、地域包括ケアシステム全体の理解を深め、保健・医療・福祉と看護について包括的な視野を得る。										
到達目標	① 地域包括ケア、地域包括ケアシステムの概念について説明できる。 ② 様々なライフサイクル、健康レベルにある人々の地域における健康支援、サービス提供システムについて概説できる。 ③ 医療施設のみにとどまらず、地域で生活する多様な人々を対象とした看護の多様性について考察できる。 ④ 地域包括ケアにおける多様な専門職および地域の人々と連携協働し活動する看護の役割が考察できる。 ⑤ 地域包括ケアの取組の実際を知り、自分なりの意見を述べることができる。										
授業の進め方	講義を基にグループワークや討論で進めていく。様々な事例を検討していく中で、地域の社会資源の探索や、そこでの専門職の活動及び、地域のソーシャルキャピタル醸成への知見を深めていく。事例の生活支援・看護支援について、グループで討論・意見交換を行い地域包括ケアシステムにおける看護の役割を考えていく。毎回ミニレポートを作成し、学習内容を統合させていく。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3～4 5～6 7～8	地域包括ケア、地域包括ケアシステムの概念 (佐々木) 【講義】 様々なライフサイクル、健康レベルにある人々への支援、サービス提供システム (佐々木) 【講義】 事例検討をとおして保健・医療、介護・福祉の制度と看護の役割を検討 (佐々木) 【GW】 地域包括ケアの取組の実際 (岡田) 【講義・討論】 事例検討GW発表：地域包括ケアにおける多様な専門職および地域の人々との連携及び看護の役割 (佐々木・岡田) 【発表・討論】									
教科書	教科書は指定しない。各授業で資料を配布する。										
参考書・参考資料等	在宅看護学などの既習科目で使用した教科書、系統看護学講座専門基礎分野 社会保障・社会福祉 (医学書院)、医療福祉総合ガイド (医学書院) など										
事前学習・事後学習	事前学習：実習等で出会った対象者などをイメージして、様々なライフサイクル、健康レベルにある人々への保健・医療・福祉のサービス提供システムについて調べて討論に参加する。 事後学習：これまでの実習経験と授業内容を振り返り、統合させ、自己の課題を明確にする。										
他の授業との関連	既習の各発達段階別看護論、地域・在宅看護論での学習と、これまでの臨地実習での学びを統合させるものである。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 各回でのミニレポート、プレゼンテーション、課題レポート、期末筆記試験で評価する。 ① 各回でのミニレポート (10%：各コマごとの学びと自己の課題を記述。説明力、課題探求力) ② グループワークによるプレゼンテーション (40%：課題探求力、説明力) ③ 課題レポート (30%：倫理的思考力、説明記述力) ④ 期末筆記試験 (20%：知識、説明記述力) フィードバック：ミニレポートの記述内容は必要に応じて次回の講義にて対応する。 最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	授業後、および研究室在室時に対応する。佐々木 mail: sasaki-j@kagawa-puhs.ac.jp (研究室15)、岡田 (研究室7)										
備考	実務経験のある教員 佐々木 (保健師、看護師)、岡田 (看護師)										

家族看護 (Family Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●岡田 麻里 (OKADA Mari) 他										
授業の目的	家族看護の実践に必要な諸理論を理解し、家族全体が自立的に家族機能を維持・向上できるような看護援助方法を学ぶ。										
到達目標	①家族を理解するための基本的理論と概念を理解し、説明できる。 ②事例の家族の状況を理解し、ジェノグラム・エコマップを作成することができる。 ③事例家族のアセスメントと全体像把握ができる。 ④事例家族の看護援助計画をグループで作成し、対象と家族に必要な介入のポイントを説明できる。 ⑤本人を含む家族も看護の対象と捉え、看護の必要性を説明できる。										
授業の進め方	講義では、家族を理解するための基本的な知識・理論を学ぶ。小児期・成人期・老年期など、発達段階ごとに、当事者とその家族の関係性と看護の在り方について学ぶ。グループワーク・全体共有を通して、主体的に意見交換し、理解を深める。 文献および著書や学会等の取り組みなども考慮しつつ、最新の知見を紹介する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	家族看護とは：家族を取り巻く社会的背景と課題【講義】									
	2	家族看護とは：家族を理解するための理論【講義・討論】									
	3	家族の発達段階と課題【講義】									
	4	様々なライフステージの家族のアセスメント【講義・討議】									
	5	事例展開：グループワーク【講義・討議】									
	6	事例展開：グループワーク【講義・討議】									
	7	事例展開：全体発表・共有【講義・討議】									
	8	対象と家族の生活を支援するために【講義・討議】									
教科書	系統看護学講座 別巻 家族看護学（医学書院）										
参考書・参考資料等	毎回、授業資料を配布する。										
事前学習・事後学習	・授業前にテキスト資料を熟読して授業に参加する。 ・これまでの実習経験から受け持ち事例の家族について振り返りをする。 ・授業後は、授業内容の理解を深め、他の文献資料も参考にして考えを整理する。 ・ジェノグラム・エコマップを活用し、実習で家族看護の実践を目指す。										
他の授業との関連	・2年次前期までの基礎的な看護学の学習を踏まえて、さらに応用発展させる科目である。 ・学んだことを3年次と4年次の実習に活かす。										
成績評価方法・基準・フィードバック	講義・演習・討論の参加状況 (50%)、演習ワークシート (30%)、レポート (20%) 評価基準：論理的思考力、協働学習力、説明力 フィードバック：評価については、一定期間を設け対応する。 出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	授業終了時、または研究室在室時に対応										
備考	社会の動向に関心をもち、現代家族に関する課題などへの考えを持った上で、主体的に参加してください。 実践経験のある学内教員 岡田 (看護師)										

がん看護 (Cancer Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、岡西幸恵(OK ANISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)										
授業の目的	がん医療は、日進月歩の進歩を遂げている。がん治療(がん薬物療法・がん放射線療法)について、がん看護専門看護師による卓越した看護実践について学ぶと共に、がん看護学の研究者から、研究成果に基づく先駆的ながん看護実践について学び、がんサバイバーとその家族への全人的ケアについて考察する。										
到達目標	①がん薬物療法について、基盤となる医学的知識を踏まえた上で、必要な看護実践について説明できる。 ②がん放射線療法について、基盤となる医学的知識を踏まえた上で、必要な看護実践について説明できる。 ③研究成果に基づくがん看護の先駆的取り組みについて理解し、がん医療における看護師の役割について、自己の考えを明確にする。 ④卓越した看護実践を支える研究の意義について、自己の考えを深める。										
授業の進め方	第1回～4回については、がん治療とケアに関する講義(必要に応じてグループワーク)を行う。 第5回～8回については、オムニバス形式で、各講義の担当者が設定したテーマについて、講義・討議を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~4 5 6 7~8	がん看護専門看護師が実践するがん治療期におけるアドバンスドケア(がん薬物療法、がん放射線療法)【講義・討議】 * 研究成果に基づく授業: 遺伝性がん, * 研究成果に基づく授業: がん種別の特徴的ケア(膵臓がん、乳がん) がんサバイバーのストレングス(岩本・中島)【講義・討議】* 研究成果に基づく授業 頭頸部がん患者の病気体験(岡西)【講義・討議】* 研究成果に基づく授業 国際交流とがん(金)【講義・討議】* 研究成果に基づく授業 セクシュアリティとがん(吉川)【講義・討議】* 研究成果に基づく授業 子育て中のがん罹患(近藤)【講義・討議】* 研究成果に基づく授業									
教科書	講義の中で紹介する。										
参考書・参考資料等	講義の中で紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 慢性期ケアの講義の中の「がん看護」を復習しておくこと。 事後学習: 1～4回については十分に復習を行い、健康レベル別看護論実習に備えること。4～8回については、研究者としての各教員の姿勢から、看護実践を支える研究の意義について考えを深めると共に、がん看護において何が重要となるのか、自分の考えを明確にすること。										
他の授業との関連	・第1回～4回では、慢性期ケア(2年次)の講義をベースに、がん薬物療法・がん放射線療法について、より専門的な講義を行う。したがって、健康レベル別看護論実習において、がん薬物療法・放射線療法を受ける患者を受け持った場合には、本講義を基盤として実習を展開することから、非常に重要な科目となる。 ・第5回～8回では、各担当教員が、研究者としての専門性に基づき、各々の研究成果を紹介し、がん看護における先駆的取り組みについて検討する。したがって、卒業研究のみならず、今後のキャリアデザインについても考える機会となる。 ・成人看護学概論、慢性期ケア、リハビリテーション看護、緩和・エンドオブライフケア、急性期看護、健康レベル別看護技術演習などと関連するのは自明である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業に関する課題(100点)によって評価する。フィードバックは、毎回提出するレスポンスカードに基づき、必要に応じてその都度行う。学びの到達度については、全員に対してその傾向をフィードバックするとともに、個別にフィードバックの必要な学生については、個別に連絡する。授業時間数の3分の2に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	在室時、適宜対応する。										
備考	実務経験のある教員: 近藤(看護師)、森田(がん看護専門看護師)、岩本(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)										

チーム医療 (Interdisciplinary Medicine)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●岡田 麻里 (OKADA Mari)、竹内 千夏 (TAKEUCHI Chinatsu)										
授業の目的	対象のQOL向上を目指した質の高い医療を提供するための「チーム医療」の展開方法、つまり多職種の連携協働の方策と看護の在り方について、事例を通して学ぶ。										
到達目標	①チーム医療の目的、チームを理解する理論や概念について説明できる ②事例に関わる多職種の連携・協働について説明できる ③事例に関わる各職種の専門性、役割、責任、業務負担軽減や効率化を説明できる。 ④チーム医療における看護の在り方について自分の考えを述べることができる。										
授業の進め方	病院内でのチーム医療および地域におけるチーム医療について、基本的な知識や概念を学ぶ。事例を中心としたチームについて、グループワークを行い、多職種の実践や役割を全体で共有し深める。多職種チームにおける自己の役割や責任について考察する。 文献および著書を基に、最新の知見を紹介する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	チーム医療とは 多職種連携の基本姿勢(岡田)【講義】									
	2	退院支援チーム(竹内)【講義】									
	3	在宅ケアチーム(岡田)【講義】									
	4	専門職の役割と実践①(岡田)【講義】									
	5	専門職の役割と実践②(竹内)【講義】									
	6	グループワーク①(岡田・竹内)【講義・討議】									
	7	グループワーク②(岡田・竹内)【講義・討議】									
	8	発表・まとめ(岡田・竹内)【講義・討議】									
教科書	適宜紹介する。										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 実習などで出会った多職種の役割や実践について振り返る。										
	事後学習: 授業で提示される事例への支援を通して多職種の役割・実践および専門職としての自己の役割について内省する。										
他の授業との関連	3年次までの実習を通して、出会った多職種の役割や実践を振り返り、対象者への支援を通じて看護職とどのように連携・協働していたか理解を深める。さらに、4年次の実習に向けて、実習場の特徴に応じた、事例を中心とする多職種チームの役割と実践を学び理解につなげる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業の振り返り: 出席カード(20%) グループワーク(40%) 課題レポート(40%)										
	評価基準: 知識、論理的思考、協働学習力、説明力 フィードバック: 評価については、一定期間を設け対応する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時										
備考	受け持ち事例に関わる多様な多職種チームに関心をもつ。 * 実践経験のある学内教員 岡田(看護師)、竹内(看護師)										

看護における代替療法 (Alternative therapy of Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●塩田敦子 (SHIOTA Atsuko)										
授業の目的	近年、代替医療 (CAM: Complementary and Alternative Medicine) は様々な実臨床の場面で取り入れられている。その最たるものは漢方薬をはじめとする東洋医学であり、その全人的医療・心身一如という観点は、患者のみならず家族の背景や歴史、地域も含めて行われる「看護」の理念に深く関わり、素晴らしいフィジカルアセスメントの手法を備えている。 エビデンスの認められているいくつかのCAMについて、その歴史、理論と実際について、また看護の場面での活用について学ぶ。										
到達目標	様々なCAMの種類、方法、エビデンスについて概説でき、看護の場面に活かす方法を考えることができる。										
授業の進め方	講義、グループワーク、実技・体験を組み合わせで行う。 毎回授業終了後小レポートを提出してもらう。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	CAMについて その歴史、手法、エビデンスと期待される効果 (塩田)【講義】 東洋医学① 漢方、鍼灸の歴史と理論 病態把握の方法と診察法 (塩田)【講義】 東洋医学② 漢方の実際 舌診、腹診、脈診 (実技)、煎じの実技 (塩田)【講義・演習】 東洋医学③ 漢方の臨床 冷え、高齢者、女性、ストレスと漢方 (塩田)【講義】 東洋医学④ 漢方の臨床 アセスメントと方剤選択の実習 (カードゲーム) (塩田)【演習】 東洋医学⑤ 鍼灸・ツボ 経絡、経穴の理論、鍼灸実技 養生について (特別講義: 松尾)【講義・演習】 健康食品・サプリメント その種類や適応、効能、医薬品との違い、注意点 (特別講義: 立石)【講義】 マッサージ、リフレクソロジー、アロマテラピー、音楽療法、芸術療法など (塩田)【講義・演習】									
教科書	なし 資料を配布										
参考書・参考資料等	適宜紹介する										
事前学習・事後学習	看護の場面ではケアのための「ひきだし」を多く持つことが患者さんのためになるので、日頃からCAMなどの情報に関心を持ち、調べてみることを薦める。										
他の授業との関連	すべての臨床看護の授業と関連するが、特に「看護技術論」、「老年看護学」、「地域看護学」、「在宅看護学」、「母性看護学」、「小児看護学」、「精神保健看護学」、「災害看護」に役に立つと考える。										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業後の小レポート (80%)、授業での実技・討議参加 (20%) で評価する。 総合評価結果については、オフィスアワーに準ずる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価理由について説明する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	授業終了後に随時対応する。										
備考											

訪問看護論 (Home Visiting Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●片山陽子 (KATAYAMA Yoko)、他										
授業の目的	生活者である在宅療養者と家族が、住み慣れた自宅で人生の最期まで尊厳をもって生きること支える訪問看護について、基本的な考え方と方法論を学ぶ。本科目では、高齢多死社会であるわが国及び海外の訪問看護の実践活動の実際について、研究動向・研究内容を踏まえて考究する。										
到達目標	①訪問看護の基本的支援方法について概説できる ②本人の価値観、意思を尊重するための実践方法について討議できる ③学生個々の実習場面に基に訪問看護の特性を省察することができる ④高齢多死社会の我が国で求められる訪問看護のあり方を考察できる ⑤海外の訪問看護の実際を知り、多様な実践に関心が持てる ⑥地域包括ケア時代に必要な治し・支える看護について、自分の考えを記述できる										
授業の進め方	訪問看護の看護実践への関心を高め、臨床実践知と実習経験を統合できるようにする。 ①在宅看護学実習で受け持った事例を省察し、知識と体験を統合できるように組み立てる ②国内外の先進的な訪問看護活動について、臨床実践者から講義を受ける ③講義と討議・演習を並行してアクティブラーニングで実施する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	訪問看護の基本と特性 (片山)【講義】									
	2~3	訪問看護師に必要な姿勢と臨床実践能力 (片山)【講義】									
	4~5	わが国の先進的な訪問看護師の活動 (片山・非常勤講師)【講義・討議】									
	6~7	海外先進国の看護実践 (片山・非常勤講師)【講義・討議】									
	8	新卒訪問看護師と看護職のキャリア形成 (片山)【講義・討議】									
教科書	資料を配布										
参考書・参考資料等	資料を配布するとともに、著書等を紹介する										
事前学習・事後学習	訪問看護論の授業オリエンテーション、授業時に提示する										
他の授業との関連	・在宅看護学Ⅰ・Ⅱおよび在宅看護学実習での学びを基盤に訪問看護に特化して学修を進める ・特に在宅看護・訪問看護師、慢性期・終末期ケアを志向する学生は履修することを推奨する										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価:①討論参加度・ワークシート(20%)、②ミニレポート(30%)③課題レポート(50%) 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価基準:①は、課題探究力、論理的な説明力、協働学習力 ②③は、学習内容の活用、課題探究力、論理的な記述、考察の深さ フィードバック:①②は全体の傾向と要点を次回の授業時にフィードバックを行う。③は評価表に基づいて評価を実施、評価表にコメントを入れて返却する。フィードバック期間を設けて評価内容とコメントへの質問等について個別対応する										
オフィスアワー	授業後と研究室在室時に対応する(副学長室)										
備考	* 実務経験のある教員 片山(看護師・訪問看護師)										

看護政策論 (Nursing Policy)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●井伊 久美子 (Ii Kumiko)										
授業の目的	医療の高度化・複雑化に伴う看護業務の増大など、医療・看護を取り巻く環境が変化するなか、看護職に期待される役割は拡大しています。しかし、「人々に安全・安心の医療・看護」を提供するための環境は十分とは言えません。看護の質や現場を変える制度づくりのために、現場の声をどのように看護政策に反映していくかを学びます。政治的な関心や看護政策の基礎知識を持ち、時代が求める看護職の活動のために政策活動に参画できる基礎づくりの一つとします。										
到達目標	①看護政策につながる身近な課題を説明することができる。 ②現行制度と看護政策課題の関連を説明することができる。										
授業の進め方	難しくなりがちな看護政策を身近に感じ、興味深く学べるようにします。 講義で基礎的な事項を学び、現在の看護をめぐるさまざまな情勢を紹介し、身近な事項についての政策過程をたどります。また、実践現場で日々の活動を支える法律について、その狙いや意図するところを理解し、法的背景がいかに重要かを理解します。 最近の関連の出来事を分析し、法律や看護政策を身近にとらえます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護の社会的責務と法的根拠 法令と法体系 【講義】									
	2	看護関係法 保健師助産師看護師法等 【講義】									
	3	看護関係法医療政策が決まる仕組み 医療介護総合確保推進法を例にとつて 他 【講義】									
	4	看護関連法律のできるまで 特定行為に係る研修制度を例にとつて他 【講義】									
	5	看護関連法律と現場① 【GW】									
	6	看護関連法律と現場② 【GW】 看護職員確保対策 在宅ケアの推進 等々									
	7	現場の思いから政策へ 看護職者の政策過程への参画 【GW】 グループワーク									
	8	まとめ 発表 【発表】									
教科書	特になし										
参考書・参考資料等	看護管理学習テキスト 看護制度・政策論(日本看護協会出版会)、 私たちの拠りどころ保健師助産師看護師法(日本看護協会出版会)、 看護六法(新日本法規)										
事前学習・事後学習	事前学習: 関心のある看護政策課題に関する情報収集 事後学習: 看護政策課題推進のための情報収集										
他の授業との関連	保健医療制度論Ⅰ・Ⅱの学習内容を前提とする。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、グループワークの参加度、課題レポートにより総合的に評価します。 課題レポート60%、グループワークの参加度40% 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明します。										
オフィスアワー	在席時対応										
備考	看護政策を身近なものとして、また、看護実践の基礎となる領域として位置付けて、主体的に学んでください。 * 実務経験のある教員 井伊(保健師)										

災害看護 (Disaster Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●松本 登紀子 (MATSUMOTO Tokiko)										
授業の目的	・災害が人々の健康や社会生活に及ぼす影響と障害について理解を深める。 ・自らの防災意識を高め、日常の災害対策について考える。 ・災害に対して看護職者が果たす役割や災害時の看護実践について学習する。										
到達目標	①災害や災害医療について説明できる。 ②災害が人々の健康や社会生活に及ぼす影響と障害について説明できる。 ③災害時の看護職者の役割と機能を説明できる。 ④災害時の被災者への援助やこころのケアについて説明できる。 ⑤自らの防災意識を高め、日常の災害対策・防災対策について考えることができる。										
授業の進め方	・国内外で発生した災害事例や災害救護活動を紹介しながら、上記の目的が達成できるよう講義や演習を進める。 ・災害について具体的にイメージできるようにビデオ等を活用したい。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	災害とは ・災害の定義・分類、災害医療の歴史									
	2	災害が人々の健康や社会生活に及ぼす影響									
	3	災害医療とは									
	4	災害時の看護職者の役割と機能									
	5	被災者への援助									
	6	災害時のこころのケア									
	7	災害対策・防災対策									
	8	まとめ									
教科書	系統看護学講座 統合分野 災害看護学・国際看護学										
参考書・参考資料等	授業において適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	災害に関するニュースや情報に注目し関心を寄せておく。 授業前にテキスト資料を熟読して授業に参加する。 授業後は、授業内容の理解を深め、他の文献資料も参考にして考えを整理する。										
他の授業との関連	これまで学んだ看護学の知識技術を基盤にして、看護活動の広がりを意識して学ぶ科目である。 卒業後の自分の看護職としての活動を展望して学ぶ科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点 (10%)、授業への参加度 (10%)、課題レポート (80%) により総合的に評価する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	平日8:40～17:20、高松赤十字病院TEL:087-831-7101 (代表)										
備考											

看護職のメンタルヘルス(Mental Health of Nurses)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●則包 和也(NORIKANE Kazuya)										
授業の目的	看護職に特徴的なメンタルヘルスの現状や課題について理解し、今後の対応策について考察する。										
到達目標	①看護職のメンタルヘルスに影響を及ぼす要因について理解し、考察できる。 ②感情労働、バーンアウト、うつ状態などメンタルヘルスに関わる問題や課題について理解し、考察できる。 ③リエゾン精神看護専門看護師の活動など、メンタルヘルスの問題に対する制度や対策が理解し、考察できる。										
授業の進め方	・看護師のメンタルヘルスに及ぼす影響について、グループワーク等によって他者と意見交換を行いながら学びを深めていく。 ・メンタルヘルスに関連した専門職者(特別講義講師)からの発言を得る機会を設け、本講義での学びの臨床現場での活用を検討していく。 ・講義内容を振り返りながら自分の感想や意見を整理・要約することを学習し小レポートとして記述する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護師のメンタルヘルスに影響する要因1(則包)【講義】									
	2	看護師のメンタルヘルスに影響する要因2(則包)【講義】									
	3	看護職とバーンアウト(則包)【講義】									
	4	新人看護師のメンタルヘルス1(特別講義講師・則包)									
	5	新人看護師のメンタルヘルス2【GW】(則包) GWとレポート作成									
	6	看護職のメンタルヘルスの自己管理方法(則包)【講義・GW】									
	7	リエゾン精神看護専門看護師の活動と活用(特別講義講師・則包)【講義】									
	8	看護師のメンタルヘルスを考えることについて(則包)【講義・GW】									
教科書	教科書は使用せずに、資料を配付する。										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習：講義内容に該当する書籍等を読み、メンタルヘルスに関する問題意識を持って参加する。 事後学習：講義資料と教員の説明を振り返って知識を整理し、自分の考えと課題についてまとめる。										
他の授業との関連	4年次の卒業研究(看護研究)でメンタルヘルス領域を選択する学生は、本科目の受講が望ましい。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 ・授業毎の小レポート(内容、文字数)20%、授業貢献度20%(授業に関連した発言・質問、参加態度、提出期限の順守、教員との連絡のやりとり等)、最終レポート(内容、構成、形式の充足等)60%を総合して評価する。 ・評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜対応します。 * 事前にメール等の連絡があればスムーズです。										
備考	* 実務経験のある教員 則包(看護師)										

リプロダクティブ・ヘルス (Reproductive Health)											
必修・選択の区別	選択	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●植村裕子 (UEMURA Yuko)、木戸久美子 (KIDO Kumiko)、松下 有希子 (MATSUSHITA Yukiko)、十河 美智子 (SOGO Michiko)										
授業の目的	将来、助産師を目指す学生が、助産師の役割を知り、どのような能力が必要とされるのかを考える機会とし、専門的な知識修得への意欲を高める。										
到達目標	① "Midwife"の意味が自分の言葉で説明できる。 ② 助産師の役割が考察できる。 ③ 助産師に求められる能力について考察できる。 ④ 将来、どのような助産師になりたいかを自分の言葉で説明できる。										
授業の進め方	本授業は、設定されたテーマに関して最新の知見・話題を提供し、各自もしくはグループで調べて考察したことを発表し、討論していくスタイルです。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	リプロダクティブ・ヘルスの課題① (植村)【講義・討議】									
	2	リプロダクティブ・ヘルスの課題② (植村)【講義・討議】									
	3	助産領域における課題－周産期うつ－ (木戸)【講義・討議】									
	4	助産領域における課題－陣痛再考－ (木戸)【講義・討議】									
	5	リプロダクティブ・ヘルスの話題① (十河)【講義・討議】									
	6	リプロダクティブ・ヘルスの話題② (十河)【講義・討議】									
	7	助産師の役割① (松下)【講義、話題提供】									
	8	助産師の役割② (松下)【発表・討議】									
教科書	指定しない。										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習：設定されたテーマに関して情報を収集し、まとめる。 事後学習：個人およびグループで考察した内容の発表から得た学びをまとめる。										
他の授業との関連	本学大学院実践者養成コース (助産師)、他大学助産師課程を受験しようとする学生の履修を推奨する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	【形成評価60%】授業の目標達成度をみるルーブリック評価表をもとに、グループ討議の内容と参加度、発表の内容と姿勢等を評価する。 【総括評価40%】提示されたテーマに沿ったレポートの作成をルーブリック評価表 (課題の焦点化と結論、論理的な構成、引用文献数、文献の引用、文献リストの記載) で評価する。 【フィードバック】発表のフィードバックは、授業時間内に行う。毎回の授業後に、疑問等の質問を受け、次回の授業時にフィードバックする。 * 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ、評価を受けられません。										
オフィスアワー	植村 (研究室31) 個別に対応可。以下のメールアドレスに要件を書いて事前に予約をとる。 uemura@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	知識や理論に基づいて考える力と主体的に学習する姿勢を培い、意見交換を通して自分の考えを整理・表現し、思考が創造的に発展することを期待する。 * 実務経験のある教員 植村 (助産師)、木戸 (助産師)、松下 (助産師)、十河 (助産師)										

地域保健論 (Community Health)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●辻 よしみ (TSUJI Yoshimi)、佐々木純子 (SASAKI Junko)										
授業の目的	人々の健康を守り、生活状況を改善し、地域全体の生活の質を向上させる公衆衛生看護活動について理解し、地域保健活動を担う保健師の理解を深める。自己の将来像を描くことができる。										
到達目標	①地域看護・公衆衛生看護の目的・意義について理解できる。 ②地域看護・公衆衛生看護が実践されている場や活動について説明できる。 ③地域保健活動における健康課題について検討できる。 ④地域保健師活動を担う保健師の役割について考察できる。 ⑤自己の学修や経験を振り返り、キャリアや将来像を描くことができる。										
授業の進め方	地域看護及び公衆衛生看護についての概要について講義を実施する。また様々な場で地域看護及び公衆衛生看護活動を展開している保健師から具体的な活動についての講義を実施する。それを踏まえて地域の健康課題に関してのアプローチについてグループ討議を実施し、保健師の役割について理解していく。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	地域看護・公衆衛生看護の目的・意義(辻)【講義】									
	2	地域看護・公衆衛生看護の場、活動内容、方法(佐々木)【講義】									
	3	保健所保健師の活動・役割(外部講師)【講義】									
	4	市町村保健師の活動・役割(外部講師)【講義】									
	5	産業保健師の活動・役割(佐々木)【講義】									
	6	養護教諭の活動・役割(佐々木)【講義】									
	7	地域の健康課題についてグループワーク(辻・佐々木)【講義・討議】									
	8	地域保健活動における保健師の役割(辻)【講義・討議】									
教科書	標準保健師講座①公衆衛生看護学概論(医学書院)										
参考書・参考資料等	適宜、紹介します。										
事前学習・事後学習	教科書を事前に熟読しておく。										
他の授業との関連	地域看護学Ⅰ、地域看護学Ⅱ、地域包括ケア論、地域健康サポーター実習に関連する授業です。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることはできません。 評価方法: 到達目標の達成状況を、授業後の小レポート(30%)、演習及び学習態度(30%)、最終レポート(40%)で総合的に評価する。 評価基準: 知識、論理的思考、協働学習力 フィードバック: 試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	保健師に興味や関心のある方は受講してください。 ※実務経験のある教員 辻(保健師)、佐々木(保健師)										

異文化看護 (Intercultural Nursing)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)										
授業の目的	異文化とは何かを理解し、異なる文化を持つ人々を対象とした看護実践に必要な知識・技術・態度について修得する。さらに、看護職が広く国際的に活動している現状を把握し、その課題や展望について考えグローバルな視点をもった国際看護の基礎を理解する										
到達目標	①グローバル化と異文化の概念について説明できる ②異文化看護を行うために必要な知識・技術・態度について説明できる ③国際的活動や国際看護実践に必要な資質能力について説明できる ④社会情勢に関心をもち、国際看護の視点で現在の社会課題について議論できる										
授業の進め方	1.授業の要点を示した資料に基づき講義する。 2.授業中に、小グループで討議する時間を設け、意見交換を行う。 3.異文化看護・国際看護の課題についてグループおよび全体で討議する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3~4 5~6 7 8	看護における異文化・多文化の理解(片山)【講義】 グローバル看護学の基本的概念(片山)【講義】 海外の保健医療の状況と制度(非常勤講師)【講義】 海外における保健医療活動の実践(非常勤講師)【講義】 国際的な活動に必要な能力(片山)【講義・討議】 現在の国際的な社会課題と異文化看護の必要性(片山)【講義・討議】									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	授業時に資料を配布する										
事前学習・事後学習	授業前に資料を熟読して授業に参加する 授業後は、授業内容の理解を深め、他の文献資料も参考にして考えを整理する										
他の授業との関連	これまでの看護学の学習を総括し、学生の興味関心に基づき応用発展させる科目である										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価方法: ①小レポート(40%) ②課題レポート(30%) ③討議参加と成果(30%) 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない 評価視点: ①小レポートと②課題レポートは、内容の理解、論理的記述、考察の深さ ③討議参加状況は、意見交換の参加状況、論理的な説明、資料構成と表現内容 フィードバック: ①③は次回授業でコメントする、②の結果は、提出期限後1週間以内に評価、フィードバック期間を設けて評価内容を説明する										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する(副学長室)										
備考	実務経験のある教員 片山(保健師・看護師)										

看護学導入実習 (Practice of Intraduction to Nursing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	45	授業形態	実習
担当教員	●小野 美穂 (ONO Miho)、片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)、辻 よしみ (TSUJI Yoshimi)、木戸 久美子 (KIDO Kumiko)、岡田 麻里 (OKADA Mari)、小林 秋恵 (KOBAYASHI Akie)、他引率教員										
授業の目的	保健医療の場における看護職の実際の活動に触れて、看護職の役割と活動の実際を知る。また、見学実習により実際の活動を知り、看護学を学ぶ動機づけを図るとともに、多様な考えや実践を知り自身のキャリアを考える機会とする。実習での経験を通して、各自の学修課題と必要な学習方法を見つけ、グループでの協働学習のプロセスを進めることができる。看護学に対する時代の要請や最新の知見を踏まえることにより、看護学探求への足がかりとする。										
到達目標	①地域で展開される看護の実際を概説できる。 ②健康支援に寄与する多様な実践活動を知り、自身のキャリア形成について考えることができる。 ③実習経験から関心をもった事象について主体的に調べ、その内容を説明できる。 ④看護学生としてのマナーやルールを守り、周囲の人々と良い人間関係を築くことができる。 ⑤グループでのメンバーシップを発揮し協働しながら学習を進めることができる。 ⑥最新の知見や研究等にも触れながら、看護の学びや体験に意味づけすることができる。										
授業の進め方	・グループを編成し、地域や医療機関など臨地における看護の実践活動を見学することや看護職者からの話を聞くことで具体的な活動実際を学ぶ。 ・病院については全員、保健師、助産師、訪問看護師については、主に学生の選択により配置を行い、いずれかの選択学習を実施した上で発表資料を作成しプレゼンする。 ・他のグループが体験した看護職の実践についても全体発表を通して理解する。 ・実習体験から関心をもった事象について調べ、その内容をプレゼン・討議し学びの共有を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		【臨地での看護職の活動見学】 1)実習オリエンテーション 2)臨地実習 ・急性期医療機関(総合病院)の看護師の活動見学 1日 ・保健師、助産師、慢性看護、訪問看護の活動見学(いずれか選択)1日 【知識と体験の統合】 3)臨地実習のまとめ(グループ学習) 4)関心をもった事象について調べ学習しプレゼン資料を作成(グループ学習) 5)グループ学習についてプレゼンテーション 6)個人レポートの作成と提出									
教科書	特に指定教科書はなし。										
参考書・参考資料等	事前オリエンテーション等で提示。										
事前学習・事後学習	【事前学習】 ・実習要項を用いて「実習目標、実習の進め方、見学実習に行く際の注意事項等」を熟読しておく。 ・臨地見学時に向けて自己の学修目標を設定し、自主的に質問等を行えるように整理する。 ・提示した関連資料を熟読し、関心をもって参加できるように準備する。 【事後学習】 ・見学実習終了後、授業の進め方に従って事後学習を実施する。 ・看護学導入実習を学修動機付けの機会として、今後の学修計画を考える。										
他の授業との関連	・看護学概論Ⅰ、地域看護学Ⅰは、実習内容の基盤となる科目であり関連が強い。 ・看護ゼミナールⅠで履修した「調べる」、「情報分析する」、「討議する」、「プレゼンテーションする」等のアカデミックスキルを活用して学習する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間の5分の4に満たないときは、原則として評価をうけることができない。 成績評価:①実習参加・記録内容(40%)②グループワークへの個人の貢献度とグループでの成果物の内容(30%)③個人レポート(30%)により総合的に評価する。 評価基準:①は、自分の考えの記述、学習内容の表現、論理的思考、的確な記述、②は、協働学修への態度と参加状況を5段階で評価と資料内容のわかりやすさと表現力、考察の深さ フィードバック:①③は提出後評価し、必要時には個別に面接を実施する。提出物は評価表を添付し後期授業開始時に返却する、②はグループ発表時に発表内容についてはその場で全体傾向と個々のグループ評価をフィードバックする。										
オフィスアワー	実習終了後および随時相談に対応。										
備考	* 実務経験のある教員 小野(看護師)、片山(看護師)、辻(保健師)、木戸(助産師)、岡田(看護師)、小林(看護師)										

看護技術論実習 (Nursing skills Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●呉 小玉 (WU Xiaoyu)、小野 美穂 (ONO Miho)、小林 秋恵 (KOBAYASHI Akie)、新井 恵津子 (ARAI Etsuko)、重兼 望 (SHIGEKANE Nozomi)、中島 文香 (NAKASHIMA Fumika)、金 アンナ (Kimu Anna)、他担当教員										
授業の目的	臨床看護の場において看護ケアを必要としている人との直接的な関わりを通して、その人が援助を必要としているニーズを理解し、既習の知識・技術を活用して基本的な看護援助を行う。この経験を通して、臨床における看護の基本的な展開方法について理解を深めるとともに、臨地実習における基本的な学習方法を身につける。看護学への時代の要請や最新の知見を踏まえ、実習を通して看護学を探究する。										
到達目標	①対象者に積極的に関心をもち、対象者の身になって感じ考えることができる。 ②対象者と自分との相互作用に気づき、対象者および自分の理解を深めることができる。 ③対象者を個性のある生活者として把握することができる。 ④健康上の問題が対象者の生活行動に及ぼす影響を理解することができる。 ⑤対象者が援助を必要としているニーズを理解することができる。 ⑥既習の知識・技術を用いて、対象者の健康および自立に資するよう援助することができる。 ⑦行った看護を言語化し、振り返って考察することができる。 ⑧実習を通して、最新の知見や研究を踏まえた根拠に基づいた看護ケアの提供ができる。										
授業の進め方	・香川県立中央病院、高松赤十字病院、香川大学医学部附属病院の合計12病棟において、教員1名が学生5～6名／1グループを担当し、直接実習指導を行う。 ・各グループ担当の教員と臨地実習指導者が、双方の役割分担に基づき連携しながら、日々の学生の看護実践を支援する。 ・実習終了後は、教員と臨地実習指導者で学生の評価に関する情報交換をし、指導側の評価と課題を明らかにする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		・実習前は、学内オリエンテーションにおいて、実習目標、実習の進め方、事前学習、病院実習の注意事項等について理解する。 ・実習病棟から提示されたリストから受け持ち対象者を決定する。 ・実習中は、受け持ち患者と関わりながら、個々人が必要としているニーズを把握し、日常生活行動の援助を行う。自分が看護を行う中で、自分が感じたこと、気づいたこと、考えたことを実習記録やカンファレンスで言語化し、吟味する。また、学生メンバー、教員、臨地実習指導者とディスカッションして視野を広げる。実習最終日に「私が行った看護」として資料にまとめ、実習体験発表に取り組む。 ・実習後は、2週間の実習を振り返って、学生の自己評価と教員の評価を照らし合わせながら課題を明確にする。さらに、実習体験発表をさらに深めるために、「ケースレポート」にまとめ、自分にとっての本実習の意義を明らかにし、自分の看護に対する考えを深める。									
教科書	看護学生のための実習前に読む本 (医学書院 著：田中美穂ら)										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習：看護技術論で学んだ知識・技術を確実に身につけておく。また、受け持ち対象者が決定したら、病態・治療に関する知識を得ておく。 講義時間外に、看護技術練習を十分に行い実習に臨むこと。時間外の演習については、マニュアルに従いルールを遵守すること。										
他の授業との関連	看護学概論(看護の概念、看護における倫理)と、看護技術論(援助的人間関係、フィジカルアセスメント、日常生活援助技術)の知識と技術を活用しながら看護実践を行う。人体の構造と機能、疾病と治療の知識を活用して患者の身体情報を理解する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間の5分の4に満たない場合は、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を以下の2局面で評価する。 ＜看護実践能力の評価(70%)＞：7つの目標に出席等を加えて10項目に設定する。各項目を4段階で評価する。 ＜実習体験発表とケースレポートの評価(30%)＞：6項目の評価項目を5段階で評価する。これらの成績評価のフィードバックは、担当教員との自己評価の面接で知らされる。最終総括評価の結果と、実習記録は2年次前期の「看護過程論Ⅰ」の授業で返却する。										
オフィスアワー	各グループの担当教員が対応する。										
備考	＊実務経験のある教員 呉(看護師)、小野(看護師)、小林(看護師)、新井(看護師)、重兼(看護師)、中島(看護師)、金(看護師) 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

看護過程論実習 (Nursing process Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	4.0	時間数	180	授業形態	実習
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岡西幸恵(OKA NISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIMU Anna)、小野美穂(ONO Miho)、小林秋恵(KOBAYASHI Akie)、新井恵津子(ARAI Etsuko)、重兼望(SHIGEKANE Nozomi)、他実習指導教員										
授業の目的	臨床看護の場において、健康障害をもつ対象者と援助の人間関係を形成させながら看護過程を用いて健康上の課題解決に向けた看護援助を行う。この実践経験のなかで、臨床現場の状況下で適切に判断し行動するための学習方法および思考方法を身につける。										
到達目標	①対象者と援助の人間関係を形成することができる。 ②対象者を尊重し、対象者の尊厳を守るための対応を考えることができる。 ③看護アセスメントを行い、全体像を捉えることができる。 ④看護上の問題を明確にすることができる。 ⑤対象者の健康課題に資する看護援助を計画することができる。 ⑤看護援助を対象者の状況に合わせて実施し、評価考察することができる。 ⑥臨床現場で適切に判断し行動するための思考方法を身につけることができる。 ⑦学生として責任ある行動をとり、主体的に学びを深めることができる。										
授業の進め方	・県内の医療機関において、教員1名が6～8名の学生を担当し直接実習指導を行う。 ・大学教員と施設側実習指導者が、双方の役割分担に基づき連携しながら、日々の学生の看護実践を支援する。 ・実習終了後は、教員と指導者で学生個人およびグループの評価に関する情報交換をして、今後の課題を明らかにする。 1.香川県立中央病院、高松赤十字病院、香川大学医学部附属病院で4週間の実習を行う。 2.臨地実習では、看護過程の展開を学ぶ。すなわち、看護上の問題を有する患者を受け持ち、フィジカルアセスメントを用いて情報を収集し、ゴードンの理論に基づき、情報を整理・意味付け・統合し、患者の全体像を把握する。QOLの観点から、看護上の解決すべき課題を明確にし、実現可能な看護計画を立案する。この過程において、教員のほか、臨床指導者・看護師長など臨床家の指導を受け、受け持ち患者の実情に即した看護計画を立案する。 3.可能であれば、立案した看護計画を実施し、評価する。 4.臨地実習の前半は、情報収集・得られた情報の意味付けが効果的に行えるよう、ロングカンファレンスを有効に活用する。一方、実習の後半では、立案した計画を実施・評価できるよう、病棟での滞在時間を十分にとる。 5.臨地での実習を有効に機能するために、学内実習(事前)では、技術演習、受け持ち患者の病態についての学習、実習病棟の特徴を理解するための課題を行う。学内実習(事後)では、臨地での実習を十分に咀嚼するために、実習の振り返りを十分に行い、クラス全体でのプレゼンテーション、課題レポートの作成などを行う。また、実習の成果や自己課題を明確にするために、担当教員との面接を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		詳細は、実習要項・実習ガイダンス資料で説明する。(実習の進行状況により、変更する場合がある) 1週目(月火水):学内実習 1週目(木金):臨地実習 2週目(月～金):臨地実習 3週目(月火水):臨地実習 3週目(木金):学内実習 4週目(月～金):学内実習									
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	適宜、紹介する。										
事前学習・事後学習	事前学習:看護過程論で学んだ知識・技術を確実に身につけておく。また、受け持ち患者が決定したら、病態治療に関する知識を得ておく。										
他の授業との関連	1年次の看護技術論実習の上に積み上げる実習であり、3年次4年次の実習の基礎基盤となる実習である。特に、看護過程の展開に必要なアセスメント能力と問題解決能力を身につける。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の2つの局面で評価する。＜看護実践能力(70%)＞:7つの目標に出席状況等を加えた合計10の評価項目を設定し、各評価項目を4段階で評価する。＜ケースレポート(30%)＞:6つの評価視点を5段階で評価する。これらの評価結果は、実習担当教員が、学生の自己評価に照らして最終評価面接する際にフィードバックされる。総括評価の結果と実習記録は、2年次後期開始時に返却される。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	各グループの担当教員が対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)、小野(看護師)、小林(看護師)、新井(看護師)、重兼(看護師)、他指導教員 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

発達段階別看護論実習Ⅰ（母性看護学）(Life stage Nursing PracticeⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	通年	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●木戸 久美子(KIDO Kumiko)、植村 裕子(UEMURA Yuko)、松下 有希子(MATSUSHITA Yukiko)、十河美智子(SOGO Michiko)										
授業の目的	母子の身体的・心理社会的特徴をふまえた個別の健康課題に目を向け、家族を含めた母性看護に必要な看護実践能力を修得する。										
到達目標	①母子とその家族を含めた対象の看護が実践できる。 ②科学的根拠に基づいた対象の看護が実践できる。 ③母子とその家族の社会生活を支える継続的な看護が説明できる。 ④対象への倫理的配慮ができる。										
授業の進め方	発達段階別看護論実習Ⅰ（母性看護学）は、発達段階別看護論実習Ⅱ（小児看護学）、発達段階別看護論実習Ⅲ（老年看護学）、メンタルヘルス看護論実習（精神看護学）、在宅看護学実習をローテーションする実習である。全体オリエンテーションは、実習前に学内で実施する。グループ別オリエンテーションは、実習前の金曜日に実施する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		【実習内容】 1妊産褥婦および新生児の看護 2地域で生活する母子の看護 【学習方法】 臨地実習 妊産褥婦・新生児の看護、地域で生活する母子の看護 総合カンファレンス 【実習場所】 臨地実習 香川県内の助産院・高松市内の子育て支援拠点等 *詳細については実習要項参照									
教科書	母性看護学Ⅰ・Ⅱ、疾病と治療Ⅳの授業で用いた教科書、参考書、資料等とする。										
参考書・参考資料等	適宜、母性看護学Ⅰ・Ⅱの授業および実習中に紹介する。										
事前学習・事後学習	【事前学習】実習の目的・目標を達成するための学習は実習要項に示す。助産院で必要となる褥婦の観察方法の確認、新生児の観察および沐浴手技および妊婦健康診査時の血圧・腹囲・子宮底長の測定、レオポルド触診法の手技については事前に練習して臨むこと。 【事後学習】助産院での実習では、対象となる母子に提供した手技の確認とさらなる練習を行う。さらに、観察後はSBARで確実に報告ができるように練習する。また、対象の意思決定にかかる情報提供の内容（利用できる社会資源等）について調べる。										
他の授業との関連	母性看護学Ⅰ、Ⅱおよび疾病と治療Ⅳの内容を復習の上、実習に臨むこと。										
成績評価方法・基準・フィードバック	【成績評価方法・基準】出席時間数の5分の4に満たないときは、原則評価を受けることができない。実習における到達目標を細分化したルーブリック評価表を基準とし、実習内容から総合的に評価する（母性看護に特有の情報をアセスメントでき、ケア計画立案ができるかを評価する試験を含む）。 【フィードバック】毎日の実習内容に関するフィードバックは、実習担当教員からの個別に行う。実習終了後、担当教員が個人面接を行い、総合的なフィードバックを行う。欠席が2日以上の場合は、学生からの届出により補習実習が可能である。										
オフィスアワー	実習全体のことに関する質問は、木戸（研究室20）が対応します。以下のメールアドレスでアポイントをとってください。 kido-k@kagawa-puhs.ac.jp 随時対応可。										
備考	＊実務経験のある教員 木戸（助産師）、植村（助産師）、松下（助産師）、十河（助産師） 実習では、健康管理、学生間のチームワーク、受け持ち対象、教員やスタッフとの円滑なコミュニケーションのもと、自ら学びを修得することが求められます。報告・連絡・相談は密に行うように心がけましょう。 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

発達段階別看護論実習Ⅱ（小児看護学）（Life stage Nursing PracticeⅡ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	通年	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)、松本 裕子(MATSUMOTO Yuko)、加藤 豊(KATOU Yutaka)										
授業の目的	子どもとその家族の健康レベルや発達段階を踏まえて子どもを総合的に理解し、子どもとその家族の健康の保持、増進、回復にむけた看護援助を実践する基礎的能力を修得する。										
到達目標	①子どもとその家族との関わりを通して健康レベルや発達段階を踏まえた援助の人間関係を形成できる。 ②あらゆる健康レベルの子どもを、個々の成長・発達過程の中で総合的に捉え、援助の具体的な方法について説明できる。 ③入院している子どもと家族を受け持ち、健康レベルを高めるための看護過程の展開ができる。 ④小児看護に特有な検査や処置、ケアについて経験し、子どもの危機的な状況を理解するとともに、子どもへのインフォームド・コンセントやプレパレーションの重要性について説明できる。 ⑤子どもにとって安全・安楽な環境を整えることの重要性を説明できる。 ⑥多職種との連携および社会資源（保健・医療・福祉・教育等）の活用について説明できる。 ⑦自己の子ども観を深めるとともに、看護者としてのあり方について論述できる。										
授業の進め方	指定された日にオリエンテーションを受け、実習目標の達成を目指して、2週間の実習を展開する。「入院治療が必要な子どもの看護」、「様々な場で育つ子どもの看護」、「子どもの権利を守る看護」について、臨地での体験や、学内での体験をグループメンバーで共有し、研究論文等の文献を活用しながら統合させる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		・実習に先立って実習オリエンテーションを受け、実習目標に沿った事前学習を行う。 ・保育所等で直接子どもと関わり、様々な場で育つ子どもの成長・発達を促す援助や看護について学ぶ。 ・入院治療が必要な子どもや家族に対する看護を実践し、看護過程を展開する。 ・子どもの権利を守る看護について考え、多職種連携および社会資源（保健・医療・福祉・教育等）の活用について学ぶ。 ・学生主体でカンファレンスを行い、子どもとその家族の理解を深めると共に、看護上の問題解決のための具体策について討議し、学習効果を高める。また、子どもの権利を守る看護についてテーマカンファレンスをおこなう。 ・実習後には、さらに探求したいテーマを設定してレポートとしてまとめる。									
教科書	特に指定なし										
参考書・参考資料等	ナーシング・グラフィカ 小児看護学①小児の発達と看護（メディカ出版） 小児看護学②小児看護技術（メディカ出版） 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 小児看護学概論 小児臨床看護総論 小児看護学①（医学書院）										
事前学習・事後学習	事前学習：「小児看護学Ⅰ」、「小児看護学Ⅱ」、「疾患と治療Ⅳ」を中心に、既習の知識・技術を活用できるようにしておく。 事後学習：自分の本実習への取り組みを内省し、自分にとっての本実習の意義や看護に対する考えを深める。 技術演習に関しては、事前に時間外における小児看護学実習室使用について予約し、主体的に繰り返し練習をすることができます。										
他の授業との関連	看護ゼミナールⅡで自分の看護実践を分析考察して、実践的知識を整理し看護観を深化させる。 小児看護学Ⅱにおける技術試験に原則、合格している事とする。										
成績評価方法・基準・フィードバック	実習評価表、実習記録物、実習態度をもとに、以下の配点で評価する。 入院している子どもの看護：50% 保育所等における子どもの成長・発達への理解：20% 学内実習：5% 総合カンファレンス：5% レポート：10% 態度・取り組み姿勢など：10% フィードバック：実習中に取り組みや記録物に対しフィードバックを行う。また実習最終日に個人面接を行う。さらに、演習記録等の成果物を返却し学習内容に関するフィードバックを行う。 なお、原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	随時対応する。枝川（研究室22）、松本（研究室24）										
備考	＊実務経験のある教員 枝川（看護師）、松本（看護師）、加藤（看護師） バイタルサイン測定技術においては、シミュレーター人形や測定物品、DVD教材などを実習室に揃えているので、技術試験や実習に向けて時間外にも積極的に活用し学習してください。										

発達段階別看護論実習Ⅲ(老年看護学)(Life stage Nursing PracticeⅢ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	通年	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、竹内 千夏(TAKEUCHI Chinatsu)、平井 智重子(HIRAI Chieko)										
授業の目的	老年期にある人がこれまで培ってきたその人らしさを尊重しつつ、加齢による身体的・精神的・社会的変化やスピリチュアリティ、発達課題を踏まえ、その人が望む生活が送れることをめざした看護を実践する。さらに、チーム医療および地域との関係機関との連携・協働の実践を学ぶ。これらの経験を通して、老年期にある人に対する看護実践能力を身につける。										
到達目標	①高齢者および家族の発達段階や健康障害を踏まえた援助の人間関係を形成できる。 ②健康障害をもつ高齢者を、身体的、精神的、社会的側面をもつ生活者として包括的に捉えることができる。 ③高齢者の個別性に応じた看護過程を展開することができる。 ④老年看護の場における倫理的課題に気づき、権利を擁護する方法を考察することができる。 ⑤高齢者を取りまく保健・医療・福祉システム、チームでの連携・協働および看護の機能について説明することができる。 ⑥学生として責任ある行動をとり、主体的に学びを深めることができる。										
授業の進め方	・回復期リハビリテーション病棟、障がい者入院病棟のいずれかにおいて、入院している高齢者1名を受け持ち、看護を実践する。これまでの受け持ち患者の特性を考慮しながら、実習前週に受け持ち高齢者を決定する。 ・教員と実習指導者が連携しながら、学生の看護実践を支援する。 ・実習2週目には、学内で受け持ち高齢者のケース発表を行い、学生間の学びを共有する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1週目	入院している高齢者1名を受け持ち、情報収集・アセスメントを行い、健康問題を抽出する。なお、4日目(学内実習)は、個別性のある看護計画を立案する。5日目は、受け持ち高齢者のケースカンファレンスを行う。									
	2週目	看護計画に基づき実施・評価・修正を行う。なお、6日目は、実習において深めたいことなど、グループでテーマを決めてカンファレンスを行う。8日目は、高齢者へのケアの実践・評価や実習体験を通しての学びを共有するため、最終カンファレンスを行う。 10日目(学内実習)は、受け持ち高齢者のケース発表を行い、学びを共有する。 (詳細は実習要項を参照する)									
教科書	特に指定はなし										
参考書・参考資料等	老年看護学Ⅰ・Ⅱで用いた教科書および参考書、関連する専門図書等										
事前学習・事後学習	事前学習:実習オリエンテーションを受け、受け持ち高齢者の疾患における病態生理・検査・治療・処置・看護について学習する。受け持ち高齢者に、安全・安楽な看護援助を実施するために、実習室にある教育教材実習用モデル、動画教材等を用いて、実習室を効果的に活用して自主的に学習してください。 事後学習:実習体験を内省し、自らの看護に対する考えを深める。										
他の授業との関連	これまでの老年看護学Ⅰ・Ⅱの講義・演習、総合看護技術演習Ⅰ・Ⅱ、臨床推論演習Ⅰ、看護技術論実習、看護過程論実習での体験を活かし学びが深まるように取り組む。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として、総授業時間数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 成績評価は、到達目標の達成状況をルーブリック自己評価表(80%)、ケース発表への参加度、実習に取り組む姿勢・態度(20%)により総合的に評価する。 12月にルーブリック自己評価表により、フィードバックを行う。また、希望者には、実習記録返却後1週間を目安に期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	帰校日に必要に応じて対応します。										
備考	*実務経験のある教員 吉本(看護師)、竹内(看護師)、平井(看護師) 臨地の場において認知症や障害をもつ高齢者の方々との出会いを通して、非言語的コミュニケーションや観察の重要性を学び、受け持ち高齢者の生活史を踏まえた看護援助を行いましょう。高齢者の看護を行うにあたり、学生自身の心身の健康管理に十分配慮しましょう。 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

メンタルヘルス看護論実習(精神保健看護学)(Mental Health Nursing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	通年	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●則包和也(NORIKANE Kazuya)、土岐弘美(TOKI Hiromi)、多田羅光美(TATARA Terumi)										
授業の目的	精神疾患をもつ対象者への理解を、精神的・身体的・社会的な視点から深め、症状の程度やセルフケアのレベル、および、生活環境に応じた看護過程を展開する。さらに、地域とのつながりを視野にいれて、その人が望む生活を送ることができるような看護を検討し、実践する。										
到達目標	①対象者との援助的人間関係を基盤に対象者への治療的コミュニケーションを通じて、自己を治療の道具として活かすことの重要性を理解し、看護を実践できる。 ②地域とのつながりを保ちながら生活する対象者をその人の強みと困りごとの観点から包括的に理解し、看護を実践できる。 ③メンタルヘルス支援における多職種連携について考えることができる。 ④状況における倫理的問題に気づき、対象者の個性と意思決定を尊重する行動をとることができる。										
授業の進め方	病院実習では、受け持ち患者に対して看護過程を実践する。施設実習では、利用者と活動を共にしながらコミュニケーションを通して関わる。精神科病院、社会復帰施設、就労支援施設、社会福祉施設、および、学内で行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		1.事前に、全体オリエンテーションと、実習直前の実習オリエンテーション(グループ毎)を実施するため、事前学習を進めておくこと。 2.グループ毎に、病棟、病院デイケア、就労支援、地域精神保健福祉施設、学内等に分かれ、2週間の実習を行う。 3.病棟実習では対象者を受け持ち、発達理論、セルフケア理論、ストレングス理論に基づいたアセスメントを行う。その際、受け持ち患者の認知や感情、対処方法に焦点をあて、看護の方向性を提案し実践する。また、援助的な人間関係の構築のためにプロセスレコードを用いた記録を行うとともに、個人面接、および、グループでの意見交換を行う。 4.施設実習では、利用者と活動を共にすることによって、地域で生活するメリット、工夫、必要な支援等について理解を深め、地域生活を続けるためのストレングスの活用について、対象者と共に考える。 5.対象者への支援を通して、多職種連携の実践について把握する。 6.毎日実施するカンファレンスによって、対象者との関わり方や精神保健福祉における倫理的問題について討議を行い、学習効果を高める。 7.学内実習でのグループディスカッションで学びを共有する。									
教科書	特に指定せず										
参考書・参考資料等	精神看護学 学生・患者のストーリーで綴る実習展開(医歯薬出版) ストレングスモデル精神障害者のためにケースマネジメント(廣川出版) 自己理解・他者理解を深める プロセスレコード(日総研)										
事前学習・事後学習	メンタルヘルス看護論実習のオリエンテーション時に説明する。										
他の授業との関連	本科目では主に、精神保健看護学Ⅰ(対象理解)、精神保健看護学Ⅱ(援助方法)で学習した知識・技術をもとに展開する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成度を、看護過程の実践・記録内容・事前学習(70%)、ナラティブレポート(20%)、実習貢献度(カンファレンスでの発言・質問、参加態度、グループ協力度・提出期限の順守、教員との連絡のやりとり等:10%)によって、総合的に評価する。評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数(学内オリエンテーションを含む)の5分の4以上の出席がなければ、評価は受けられない。										
オフィスアワー	適宜受け付けます(事前にメール等の連絡があればスムーズ)。則包研究室(研究室21)、土岐(研究室14)、多田羅研究室(研究室30)										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、メンタルヘルス看護学実習室内にあるDVD、書籍、精神関連グッズ等を活用して、時間外にも自主的に学習を進めてください。 * 実務経験のある教員 則包(看護師)、土岐(看護師)、多田羅(看護師)										

在宅看護学実習 (Home Care Nursing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	通年	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)、岡田 麻里 (OKADA Mari)、和田 知世 (WADA Chise)、他										
授業の目的	生活者としての在宅療養者および家族への理解を深め、在宅療養者と家族の価値観・意向を基盤とする目標志向型実践の基礎的能力を養う。人生の最期まで住み慣れた地域で生きることを支える地域包括ケアシステムの実践を理解し、多職種で包括的に支援する必要性を考察できる。										
到達目標	①生活者としての在宅療養者と家族への理解を深め説明できる。 ②在宅生活に必要な生活と医療の統合および看護のあり方を考究し記述できる。 ③在宅療養者の病態と医療の必要性を記述した上で目標志向型思考で看護過程を展開し記述できる。 ④立案した計画に基づき、基本的な看護技術を用いて実践できる。 ⑤訪問看護の実践場面における臨床推論について記述し訪問看護師からの評価で省察できる。 ⑥療養者と家族の生活と価値観を尊重する姿勢や態度について考察し説明できる。 ⑦受け持ち療養者に必要な社会資源を抽出し多職種連携とチームアプローチの実践を記述できる。										
授業の進め方	訪問看護STにおいて継続訪問が可能な1事例を受け持ち、看護過程の展開を中心に学習する。訪問は訪問看護師と同行訪問する形態で行う。最終日は学内実習日として全体及びグループカンファレンスを実施し学修の振り返りと共有を行う。受け持ち事例の展開を通して継続看護や地域包括ケアの必要性と多職種協働のチームアプローチを学ぶため多職種との同行訪問や地域連携会議等には機会があれば参加する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		以下の要領で実習を行う:詳細は実習要項を参照する。 1.実習施設:訪問看護ステーション(香川県看護協会高松訪問看護ステーション、香川県看護協会訪問看護STこくふ、他 県内10訪問看護ステーション) 2.実習期間:前期令和7年6月9日～7月18日、後期令和7年9月22日～10月17日1クール2週間×5クール 3.学生配置:各訪問看護ステーションには、学生2～3名を配置する 4.展開方法 ①受け持ち事例の看護過程の展開:個別学習 ②在宅看護の思考枠組みをアクティブラーニングで学ぶ『探究テーマ』を設定した課題探究学習:ペア学習 ③チームアプローチ:受け持ち事例を中心に個別学習									
教科書	在宅看護学Ⅰ・Ⅱで用いた教科書・参考書・資料などを活用する。										
参考書・参考資料等	強みと弱みから見た在宅看護過程. 医学書院. 生活と医療を統合する継続看護マネジメント. 医歯薬出版. 他、適宜紹介する										
事前学習・事後学習	【事前学習】 ・在宅看護学Ⅰ・Ⅱの既習内容を確認した上で、各自の学習目標と課題を設定する。 ・既習の保健医療諸制度を復習し、対象が活用可能な社会資源を分析できるよう準備する。 ・その他、実習事前課題は別途提示する。 【事後学習】 ・実習期間での学びを総括し、文献学習を加え各自選択した探究課題を深めて自己学修を整理する。										
他の授業との関連	在宅看護学実習は在宅看護学Ⅰ、Ⅱの学修を基盤に、実際の実践展開をとおして学びを統合する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	成績評価:カンファレンスや発表の内容と貢献度を含めた実習評価表に基づき素点(80%)、レポート課題(20%)に基づき総合的に評価する。評価項目と配点は実習評価表を参照する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価基準:知識、論理的思考力、実践力、協働学修の姿勢と態度 フィードバック:実習記録は実習中に記録物にもコメントを行うとともに実習評価項目の到達度を確認し逐次指導助言を行う。実習終了時に評価個別面接を実施、実習担当教員全員で最終評価を実施する。最終評価の結果は3年後期科目の成績開示時に提示する。										
オフィスアワー	実習拠点とする訪問看護事業所等及び学内にて随時対応する。										
備考	対象者の生活の場で実習することを念頭に、実習に臨む準備等についてオリエンテーション時に提示する内容を確認しておくこと。 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。 * 実務経験のある教員 片山(看護師)、岡田(看護師)、和田(看護師)、他										

健康レベル別看護論実習 (Health level Nursing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	3.0	時間数	135	授業形態	実習
担当教員	●近藤真紀子(KONDO Makiko)、岩本真紀(IWAMOTO Maki)、森田公美子(MORITA Kumiko)、岡西幸恵(O KANISHI Sachie)、中島文香(NAKASHIMA Fumika)、金アンナ(KIM Anna)、重兼望(SHIGEKANE Nozomi)										
授業の目的	患者と家族を全人的に理解し、健康レベルに応じた看護実践を行い、対象者のQOLを高めるための基礎的能力を養う。その過程を通して、援助の人間関係を発展させると共に、問題解決のための科学的根拠に基づいた判断力、日々変化する病態とそれに伴う対象の心身の反応を的確にとらえる臨床判断能力、多職種と連携して問題解決に当たる調整能力、対象者の尊厳を擁護する基盤となる看護観を育成する。										
到達目標	①対象を全人的に理解したことを説明できる。 ②対象との援助の人間関係を発展させ、その関係性を洞察し自己課題を説明できる。 ③健康レベル(急性期・慢性期・リハビリテーション期・終末期)に応じた看護が実践できる。 ④対象の健康問題に対して、科学的思考に基づいた看護実践およびそのプロセスや結果について系統的、論理的に記述し説明ができる。 ⑤刻々と変化する病態、およびそれに対する対象の心身の反応を的確にとらえ、的確なケアを選択できる(臨床推論)。 ⑥看護実践は安全安楽に留意し対象の状況に応じて創意工夫すると共に臨機応変な対応ができる。 ⑦医療施設内外の多職種と連携して問題解決を図るための看護の機能および継続看護について説明できる。 ⑧周囲の人々と建設的人間関係を構築し、看護学生として責任を果たすことができる。										
授業の進め方	1.香川県立中央病院、高松赤十字病院、香川大学医学部附属病院で3週間の実習を行う。 2.臨地実習では、急性期(周術期)・慢性期・回復期・終末期など、健康レベルの特徴を有する患者を受け持ち、看護を展開する。 3.受け持ち患者の治療場面に合わせて、病棟以外に、手術室・ICU・HCU・その他の部署(透析室・外来など)で実習を行う場合があるが、COVID-19の感染状況に応じて変更する。 4.教員及び指導看護師などの指導を受けながら、健康レベルに応じた看護過程を展開する。 5.教員及び指導看護師への報告・カンファレンスを通して、刻々と変化する患者の病態を的確に把握し、それに伴う患者の心身の変化を的確にアセスメントし、変化に応じてどのようなケアが必要か、またその優先順位を判断する(臨床判断)能力の強化を行う。 6.カンファレンス・学習成果発表会では、グループメンバーの看護実践を共有することで、臨床判断・全人的理解とケアリング・多職種連携・地域包括・健康レベル別の看護実践の特徴・医療倫理・理論の実践への活用・看護観などについての見識を深める。 7.レポートなどで、対象理解や看護実践についての考えを深める場合には、研究論文などを先行知見を活用する。 注:COVID-19の蔓延状況により、実習内容・方法に変更が生じる場合がある。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	第1~3週	詳細なスケジュールは、実習要項・全体オリエンテーションで説明する。 健康レベルのいずれかの期にある患者(主に、周術期・慢性期)を受け持ち、臨床指導者・教員の指導の下、看護実践を行う。 1週目:病棟実習 2週目:病棟実習 3週目:学内実習									
教科書	成人看護学関連科目(成人看護学概論・慢性期ケア・急性期ケア・リハビリテーション看護・緩和ケア・エンドオブライフケア・がん看護・医療倫理学など)で用いた教科書等										
参考書・参考資料等	受持ち患者の病態・検査・治療などについては、図書館などを利用して広く情報を集める。インターネットなどを活用する場合は、学術団体の公表するガイドラインなどエビデンスの確かな情報を収集すること。										
事前学習・事後学習	事前学習:これまでに学んだ講義や演習をよく復習しておくこと。特に、病態の理解は重要である。 事後学習:実習での体験から普遍性を導き出し、それをどのように応用するのかについて検討する。										
他の授業との関連	これまでの既習科目の全てが連動する。特に、臨床推論に関する科目、成人看護学領域に関する科目は、実習の基盤となる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況により評価する。評価方法は、日々の看護実践・カンファレンス等の参加度・学習成果発表・レポート・個人情報の取扱い・実習態度などにより、総合的に評価する。フィードバックは、日々の看護実践の中で、その都度行う。また、実習最終日には、自己評価表を元に、実習の成果についてフィードバックを行う。授業時間数の5分の4に満たない時は、原則として、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	オリエンテーション時に周知する。										
備考	受け持ち対象者の状態変化に合わせて、時間外学習が多くなるので、心身の健康管理に留意すること。また、守秘義務を徹底すること。看護の現場でしか学べないことを大切にし、受け持ち患者に対して誠実な学習者であることを期待する。急性期病院などへの就職を考えている学生にとっては、非常に重要な実習である。 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。 *実務経験のある教員 近藤(看護師)、岩本(看護師)、森田(看護師)、岡西(看護師)、中島(看護師)、金(看護師)、重兼(看護師)										

看護学総合実習 (Comprehensive Nursing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	後期	単位数	3.0	時間数	135	授業形態	実習
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、他看護学科教員										
授業の目的	地域で生活する対象を全体論的に把握し、問題や課題の解決に向けて総合的な看護実践を行う。すなわち、「根拠に基づく看護実践」「看護実践の倫理的視点での分析」「多職種連携やチームアプローチを通じた看護実践」への取り組みを通して、地域に根ざした看護を創造するとともに自己の看護観を深める。										
到達目標	①対象にとってのウェルネスを目指した看護援助を実践することができる。 ②看護実践場面における倫理的課題に注目し、対応策を検討することができる。 ③多職種連携やチームアプローチに参加し、看護の調整的な機能に関与することができる。 ④看護のマネジメントの視点から、看護の質保証に向けた看護援助を学ぶことができる。 ⑤看護実践を通して看護の専門的な役割・機能を探求することができる。 ⑥これまでの実習経験を応用して、主体的な学習に取り組み自立した実践ができる。 ⑦既習の理論や文献を活用して、自己の看護観を言語化することができる。										
授業の進め方	実習期間: 8月～10月の期間の中で、領域毎に3週間行う。3週間のうち2週間は臨地実習とする。 実習施設: 基礎看護学、成人看護学、精神看護学、小児看護学、老年看護学、在宅看護学のいずれかの領域で行う。 実習時間: 原則8:30～16:30とし、実習場所によって変更することができる。 実習方法: 年度初めのガイダンスで総合実習オリエンテーションとして、各領域の総合実習の目的や特徴について説明する。その説明内容をもとにした学生の希望によって各領域に分かれて実習を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		《実習前》 ・実習施設の看護の理念や特徴を把握する。 ・卒業時の到達目標 (DP) や卒業後の進路に照らして現時点の自己課題を明確にする。 ・学生が自己課題に基づいて実習計画を立案して教員の指導を受ける。 《実習中》 ・主体的に看護実践に取り組む。 ・積極的に意見交換する。 《実習後》 ・地域に根ざした看護を探求する。 ・積極的に意見交換する。 ・自分の看護観等を言葉で表現する。									
教科書	既習の科目の文献資料を参考にする。										
参考書・参考資料等	自分で検索する。										
事前学習・事後学習	自分で必要な事前学習・事後学習を判断し取り組む。										
他の授業との関連	看護学総合実習はこれまでの実習をふまえた卒業前の総仕上げの実習である。全ての履修科目と関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 出席日数、実習への取り組み、実習記録、レポート、発表資料、評価表などを参考にして、各領域の担当教員が総合的に評価する。フィードバックは、各領域の担当教員が行う。詳細は、各領域の実習要項を参照する。										
オフィスアワー	実習領域が決定した後、担当教員に確認する。										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

地域健康サポーター実習 (Community Health Supporter Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期・後期	単位数	2.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●岡田麻里 (OKADA Mari)、片山 陽子 (KATAYAMA Yoko)、和田知世 (WADA Chise)、辻 よしみ (TSUJI Yoshimi)、佐々木 純子 (SASAKI Junko)、植原 千明 (UEHRA Chiaki)、藤村 保志花 (FUZIMURA Hoshika)、枝川 千鶴子 (EDAGAWA Chizuko)、松本 裕子 (MATSUMOTO Yuko)、加藤 豊 (KATO Yutaka)、則包 和也 (NORIKANE Kazuya)、土岐 弘美 (TOKI Hiromi)、多田羅 光美 (TATARA Terumi)、小林 秋恵 (KOBAYAS HI Akie)、重兼 望 (SHIGEKANE Nozomi)、竹内 千夏 (TAKEUCHI Chinatsu)、平井 智重子 (HIRAI Chieko) 他.										
授業の目的	地域住民の健康生活を支援するために、「地域健康サポーター」として学生が地域住民と共に活動を企画・運営・実施し、地域において様々な形態で実施されている地域活動に主体的に参画し、体験型学修を行うことにより、地域活動のあり方、参画者の姿勢や態度を学ぶ。 また、幅広い健康レベルにある人々や異なる立場の人々との出会いを通じて、社会的スキルの向上と視野の拡大につなげます。本実習活動を通じて、学年間の交流と学生間での支援・相談を経験し、学年を超えた学生相互の学びあいを体験する。										
到達目標	①多様な地域の健康支援活動への参画について、自らの探求心に基づき長期計画・年間計画を立案できる。 ②多様な地域の健康を支援する活動、実践を体験できる。 ③多様な活動のあり方や目的に資する活動への参画方法を説明できる。 ④体験した活動について報告し、プレゼンテーションできる。 ⑤他の学生の学びを共有することによって、多様な学びの方略を概説できる。 ⑥体験や人々との出会いによって、社会的スキル向上と視野が拡大したことが考察できる。 ⑦看護学生としての自己を俯瞰し、地域で実践する看護について考えを深めることができる。										
授業の進め方	3年生による活動報告会、実習オリエンテーションを受け情報収集したのち、関心ある活動事業を自ら選定する。自分の時間を調整し活動計画を立てる。(通常の授業を最優先し、本実習の実施は放課後または休日とする。)事業を担当する教員や地域の事業担当者や主体的にアポイントメントをとり、各事業に関するオリエンテーションを受けた後、活動を実施する。終了後は、振り返り、活動の記録および報告等を行う。 12月頃から地域健康サポーター係が中心となり、全員で来年4月の活動報告会のプログラム作成、配置など企画・運営を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	4月 5月～ 12月 1月～ 4月	活動報告会への参加、オリエンテーション 活動の年間計画立案・活動に関する情報収集・事業担当教員や地域担当者らとの関係構築 事業の事前オリエンテーションへの参加 活動への参加・振り返り・学びのまとめ 担当教員との学びの振り返り 記録様式の提出 報告会の企画・準備・運営									
教科書	なし										
参考書・参考資料等	各活動に関連する文献、著書を参考にする。 各団体が作成しているHP等も参考資料とする。										
事前学習・事後学習	・事前学習：活動計画を立てる(様式1)。地域活動や事業の成り立ちや背景となる課題、担当者や参加者らの思い、大切にされていること等、自ら収集する。必要に応じて、教員や地域の事業担当者からオリエンテーションを受ける。関連文献、紹介チラシ、活動報告書、HP等、活動に関連する情報収集を行い、ポートフォリオに整理しておく。 ・事後学習：地域の事業担当者へのお礼、担当教員への報告、活動の振り返り・学びの記録(様式2)をする。自己の課題や反省点についても振り返り、次の活動に活かす。										
他の授業との関連	既習の科目や実習を通して、対象理解や対象への関り、地域の理解や地域に関わる際の必要な知識・技術を活かす。										
成績評価方法・基準・フィードバック	実習記録(様式1・様式2およびポートフォリオの作成)内容と参加日数をまとめ、年度末に事業担当教員およびアドバイザー教員に報告し、押印された様式1・2を評価:80% 活動報告会および交流会発表資料、地域からの評価等総合的評価:20% 最終的な評価は4年次後期とする。										
オフィスアワー	在室時には対応する。教員不在時は、事前にメール等でアポイントメントをとる。 岡田(研究室7)、片山(副学長室)、和田(看護学科共同研究室1)、各教員研究室										
備考	* 実務経験のある教員、看護師、保健師、助産師、介護支援専門員等、資格を有する教員が担当する。 本科目の目的や到達目標を達成するために、実習室を活用して、時間外にも積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。										

看護研究方法論Ⅰ（看護研究概要/文献検討方法）（Methodology of Nursing ResearchⅠ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)										
授業の目的	看護現象を客観的に捉え、その中に存在する疑問や問題を科学的に探究する看護研究方法論の基礎的知識を獲得し、研究に必要な科学的思考力を身につける。研究計画書を作成する上で最も重要となる「研究テーマを絞り込み、研究課題に関する文献を検索して整理・分析し、文献検討としてまとめ、研究課題の明確化」について習得する。										
到達目標	①看護研究の目的や意義について説明できる。 ②看護研究における研究テーマの絞り込みのプロセスの方法について説明できる。 ③量的研究方法の概要を説明できる。 ④質的研究方法の概要を説明できる。 ⑤文献を検索、整理、分析することができる。 ⑥研究課題との関係を明確にしながらか文献検討としてまとめることができる。										
授業の進め方	講義資料と教科書を中心に看護研究の概要や基礎的内容について講義する。 提示した原著論文と一緒に読みながら、文献について理解ができるように進める。 講義の進行に沿って、以下の学習プロセスを個人で進める。 ・これまでの授業や実習・演習経験から、疑問や関心を持ったことについて振り返り、看護研究に取り組むためのテーマを決める。 ・テーマに沿って文献検索をする。 ・入手した研究論文を整理・分析し、研究課題を考察する。 ・研究倫理の詳細については、各自eラーニングを受講し、証明書を期日までに提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	看護研究の目的・意義									
	2	看護研究の基本的プロセスの概要、文献検討の目的と意義									
	3	文献検索の実際、論文の種類とその特徴									
	4	看護における研究課題の見つけ方、研究の問いと研究デザインの関係									
	5	研究テーマの絞り込み、研究方法の検討									
	6	量的研究:量的研究アプローチの特徴									
	7	質的研究:質的研究アプローチの特徴									
	8	文献検索と文献検討の方法、文献引用方法と書き方									
	9	文献検索と文献検討①:キーワード検討と検索									
	10	文献検索と文献検討②:入手した文献に目を通す									
	11	文献検索と文献検討③:主要文献をクリティークする									
	12	文献検索と文献検討④:主要文献をクリティークする									
	13	文献検索と文献検討⑤:文献を整理分類する									
	14	文献検索と文献検討⑥:文献検討の構成と記述									
	15	文献検索と文献検討⑦:文献検討としてまとめる									
教科書	看護における研究(日本看護協会出版会)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習:教科書の該当部分を熟読する。 事後学習:授業内容を振り返りながら、自己の課題に取り組む。										
他の授業との関連	・この科目を基本にして、看護研究方法論Ⅱ、Ⅲでさらに深く学び、4年次の看護研究の展開につなぐ。 ・看護ゼミナールⅠで身につけた自ら考え、調べ、論じ、書くスキルを活用する。 ・研究的な視点を持って授業や臨地実習に臨む。 ・実習での経験を看護の現象として客観的に捉え、看護ゼミナールⅡにおいて深める。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業後のリフレクションシートなどの記載内容30%、課題レポート70%により総合的に評価する。 フィードバック:毎回の授業後に提出する学びや課題のリフレクションシートを活用し、適時フィードバックを行う。最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席が無ければ、評価を受けることはできない。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。										
備考	* 実務経験のある学内教員 枝川(看護師)										

看護研究方法論Ⅱ（研究計画書/質的研究）(Methodology of Nursing ResearchⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、土岐 弘美(TOKI HIromi)										
授業の目的	看護現象を客観的に捉え、その中に存在する疑問や問題を科学的に探究する看護研究方法論の基礎的知識を獲得し、研究に必要な科学的思考力を身につける。研究計画書の作成及び質的研究データの収集・分析のための知識とスキルを習得する。										
到達目標	① 質的研究の研究デザインと研究方法について具体的に説明できる。 ② 研究計画書を作成する目的を説明できる。 ③ 研究計画書の構成を説明できる。 ④ 研究計画書の項目の要点(何について、どのように思考し、どのように記述するのか)を説明できる。 ⑤ 看護研究における倫理的配慮について説明できる。										
授業の進め方	以下の学習プロセスをグループで進める。担当教員の助言を受ける。 ・グループでテーマ絞り込みと文献検討を行う。 ・グループで研究計画書を作成する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	質的研究のデータ収集方法の実際(土岐)【講義・演習】									
	2	質的研究のデータ分析の実際(土岐)【講義・演習】									
	3	研究計画書とは(吉本)【講義】									
	4	看護研究における倫理的配慮および具体的手続き(吉本)【講義】									
	5	研究計画書作成 ① 研究課題の明確化 目標設定(吉本、土岐)【演習】									
	6	研究計画書作成 ② 研究課題の明確化、目標設定(吉本、土岐)【演習】									
	7	研究計画書作成 ③ 研究の枠組み、RQの明確化(吉本、土岐)【演習】									
	8	研究計画書作成 ④ 研究の枠組み、RQの明確化(吉本、土岐)【演習】									
	9	研究計画書作成 ⑤ データ収集・分析方法の検討(吉本、土岐)【演習】									
	10	研究計画書作成 ⑥ データ収集・分析方法の検討(吉本、土岐)【演習】									
	11	研究計画書作成 ⑦ 倫理的配慮、伴う資料の作成(吉本、土岐)【演習】									
	12	研究計画書作成 ⑧ 倫理的配慮、伴う資料の作成(吉本、土岐)【演習】									
	13	研究計画書作成 ⑨ 研究計画書発表・審査会(吉本、土岐)【個人ワーク】									
	14	研究計画書作成 ⑩ 研究計画書発表・審査会(吉本、土岐)【グループ発表】									
	15	研究計画書作成 ⑪ 研究計画書発表・審査会(吉本、土岐)【グループ発表】									
教科書	看護における研究 南裕子ほか(日本看護協会出版会)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習：個人で次の授業内容について教科書や関連書籍を閲覧し、グループ学習に向けて事前課題に取り組む。 事後学習：学びを復習し疑問や不明な点があればグループで話し合い理解を深める。										
他の授業との関連	・看護研究方法論Ⅰに続く科目である。量的研究の具体的方法については、看護研究方法論Ⅲで学ぶ。4年次の看護研究の展開につなぐ。 ・看護ゼミナールⅠで身につけた自ら考え、調べ、論じ、書くスキルを活用する。 ・研究的な視点をもって授業や臨地実習に臨む。 ・実習での経験を看護の現象として客観的に捉え、看護ゼミナールⅡにおいて深める。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を、授業参加状況20%(授業後の提出用紙、討論やグループ学習への取り組みなど)、演習課題80%(e-learning受講、質的分析課題、グループの研究計画書、研究計画書審査)により総合的に評価する。 評価結果のフィードバック：期間を設けて希望者に開示する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。吉本(研究室6)、土岐(研究室14)										
備考	* 実務経験のある学内教員 吉本(看護師)、土岐(看護師)										

看護研究方法論Ⅲ（量的研究）(Methodology of Nursing ResearchⅢ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)										
授業の目的	保健医療領域の発展は学術研究等で支えられており、看護領域も例外ではない。学術研究において重要なことは真理を科学的に探求することであり、その手続きにおいてデータサイエンス(統計学)は重要な役割を果たす。本講義では量的看護研究における真理探究の手続きを、学生ごとに異なるデモデータの処理を通して学修する。										
到達目標	① 量的看護研究における研究計画書の重要性について説明できる ② バイアスとその対処法を説明できる ③ データを入力、管理、分析できる ④ 分析結果に基づいて考察することができる										
授業の進め方	① 講義によるレクチャー教育と演習によるチュートリアル教育(自らの行動が必要)をミックスした形で実施する ②「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」で得た知識や技術(オンデマンド教材で復習可能)と本講義のレクチャー教育で得た知識を本講義のチュートリアル教育で行うデモデータの処理に生かす ③ デモデータの分析結果とその考察をまとめてプレゼンの準備を行い、さらにそのレポートを作成し提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の復習【講義】									
	2	バイアス【講義】									
	3	量的研究の進め方、データの集め方【講義】									
	4	データ入力・管理【講義】				データ入力【演習】					
	5	データ分析1【講義】				データ分析【演習】					
	6	データ分析2【講義】				データ分析【演習】					
	7	結果の公表【講義】				プレゼン・レポートの準備【演習】					
	8	発表会【演習】									
教科書	「ぜんぶ絵で見る医療統計」比江島欣慎(羊土社)＜「看護統計」で使用＞										
参考書・参考資料等	適宜、必要な資料を配付する。										
事前学習・事後学習	事前学習: 指定された資料を使って予習する 事後学習: 講義・演習の内容をノートに整理する										
他の授業との関連	・「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の延長上にある科目である ・「看護研究方法論Ⅱ」と連携しながら開講される科目である ・4年次の看護研究の展開につながる科目である										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を知識確認テスト(約10%)、プレゼン資料(約40%)、レポート(約50%)で総合的に評価する。 評価内容: 基本知識が身についているか、正しくデータの処理ができているか、データ分析結果に基づいて科学的な現象理解ができているか。 なお、出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 フィードバック: 評価結果の確認、評価結果の確認期間を設けて対応する。										
オフィスアワー	授業の前後、および研究室16(要事前連絡)にて対応する。										
備考											

看護ゼミナールⅠ(大学での学び方)(Nursing SeminarⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	通年	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	講義・演習
担当教員	●則包 和也(NORIKANE Kazuya)、佐々木 純子(SASAKI Junko)、筒井 邦彦(TSUTSUI Kunihiro)、比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)、枝川 千鶴子(EDAGAWA Chizuko)、小野 美穂(ONO Miho)、小林 秋恵(KOBAYA SHI Akie)、土岐 弘美(TOKI Hiromi)、多田羅 光美(TATARA Terumi)、植原 千明(UEHARA Chiaki)、新井 恵津子(ARAI Etsuko)										
授業の目的	「教わる」から「自ら考える」への学び方の変容を支援する授業科目であり、1年間のゼミナールを通して、大学での学び方に必要な「調べる力」「読む力」「書く力」「伝える力」「討論する力」の基礎的能力を身につける。										
到達目標	①調べたいテーマに関する文献を検索し収集できる。 ②学術的な文章を読んで内容が概説できる。 ③自分の意見について、理由や根拠を含めて相手にわかりやすく説明できる。 ④他者からの意見や疑問に対する自分の意見を、言葉や文章で表現することができる。 ⑤テーマに即した論理的な文章を書くことができる。 ⑥「どのような看護師になりたいのか」について想像することができる。										
授業の進め方	・1人の教員が1グループ(5～6人)を担当する ・毎回の目標が達成できるよう個人やグループで課題に取り組むアクティブラーニング形式で進める ・前期15回は、看護の主要概念である「人間とは」に関連するテーマを具体的にしていって過程で、グループで討論したことを基にして、個人レポートを作成する ・後期15回は、「看護とは」に関連するテーマを具体的に絞って、グループで探求する。探究の結果を、発表しディスカッションをする ・授業での学びを、個人レポートとして記載し、提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	オリエンテーション、講義「大学で学ぶということ」(則包)									
	2	講義「学生生活ガイド(飲酒・喫煙問題、薬物乱用等)」(則包)									
	3	小グループに分かれて演習開始、自己紹介(各担当教員)【演習・討論】									
	4～6	指定図書を読み自分の意見をまとめて発表し討論する(各担当教員)【演習・討論】									
	7～10	論文を読み自分の意見をレジュメにまとめ、発表・討論(各担当教員)【演習・討論】									
	11～14	レポート作成のための個別指導を受ける(各担当教員)【演習】									
	15	レポート発表会(各担当教員)【演習・討論】									
	16	自分が探求したいテーマを小グループに分かれて共有する(各担当教員)【演習】									
	17～20	小グループで探求したいテーマをさらに絞る(各担当教員)【演習】									
	21～23	小グループで討論し検証したい現象について検討する(各担当教員)【演習】									
	24～26	検証した現象などについてさらにグループで考えて調べる(各担当教員)【演習】									
	27	調べたことをもとに検証したいことについて深める(各担当教員)【演習】									
	28	テーマに沿って文献検索や調査に取り組む(各担当教員)【演習】									
29	プレゼンテーションの準備 (各担当教員)【演習】										
30	グループプレゼンテーション・討論(各担当教員)【発表・討論】										
教科書	思考を鍛える大学の学び入門(井下千似子、慶応義塾大学出版会) 思考を鍛えるレポート・論文作成法(井下千似子、慶応義塾大学出版会)										
参考書・参考資料等	必要に応じて紹介する。										
事前学習・事後学習	毎回のスケジュールに沿って取り組む。										
他の授業との関連	ゼミナールで身につけた能力は、他の科目の主体的学習行動として発揮する必要がある。特に個人とグループでの自己学習や討論などの協同学習に活かす。										
成績評価方法・基準・フィードバック	学生の自己評価(評価表の項目は以下を参照)を基にした教員評価(70%)と、授業貢献度(授業に関連した発言・質問、教員とのコミュニケーション、態度、期限遵守等)の評価(30%)を総合して評価する。最終評価は、前期担当の教員評価(50%)と後期担当の教員の評価(50%)を合わせて行う。 評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 ＜グループ討論＞①発表資料の見やすさわかりやすさ ②発表の説明のわかりやすさ ③他者との意見交換がスムーズにできる ④グループへの配慮ができる ⑤授業への取り組み ＜個人レポート＞①自分の主張の内容と方法 ②レポートの構成と論理展開 ③言語表現の適切性 ④形式的条件 ⑤レポートへの取り組み なお、原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ、評価は受けられない。										
オフィスアワー	各担当教員が初回授業で示す。										
備考	本科目の目的や到達目標を達成するために、各領域の実習室にある視聴覚機器、DVD、書籍等を用いて、時間外も含めた積極的な自己学習を進めていくことを期待しています。 *実務経験のある教員 則包(看護師)、佐々木(看護師、保健師)、筒井(医師)、枝川(看護師)、小野(看護師)、小林(看護師)、土岐(看護師、保健師)、多田羅(看護師、助産師)、植原(看護師、保健師)、新井(看護師)										

看護ゼミナールⅡ（実践知の探究）（Nursing Seminar Ⅱ）											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	通年	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	講義・演習
担当教員	●多田羅光美（TATARA Terumi）、則包和也（NORIKANE Kazuya）、土岐弘美（TOKI Hiromi）、枝川千鶴子（ED AGAWA Chizuko）、松本裕子（MATSUMOTO Yuko）、加藤豊（KATOY Yutaka）										
授業の目的	3年次の実習経験を振り返り、「看護倫理」と「科学的思考」の観点から看護実践を分析考察して、人の尊厳と権利を擁護する看護について探求する。倫理的判断に基づいて行動できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	①自分の看護実践を振り返り、他者に伝わるように記述表現できる。 ②学生一人ひとりが体験した看護実践をグループメンバーに自分の言葉で語り、互いに問い直すことができる。 ③他者の発言や考え方をよく聴き互いの価値観の相違を尊重し合いながら対話することができる。 ④グループ内でテーマを決め、「看護倫理」と「科学的思考」の観点からテーマについて分析考察しグループ発表ができる。 ⑤グループワークの学びをふまえて、「看護倫理」と「科学的思考」の観点で自己の看護実践を分析考察することができる。 ⑥グループワークでの学びを基に自分の実践知を整理し看護観を明確に表現することができる。 ⑦主体的に問題意識を持って課題に取組み、自己の取り組むべき課題を見出すことできる。										
授業の進め方	・グループは、3年次5領域実習のグループから集める形で編成される。 ・前期第1回目の授業にて、クラス全体で看護実践の振り返り方法と分析、考察方法、ゼミの進め方の説明を受ける。また、後期第1回目の授業にて、クラス全体でゼミの進め方の説明を受ける。 ・個人の3年次前期・後期の実習経験について、「看護倫理」と「科学的思考」の視点からA4用紙1枚程度を書き、担当教員に提出する。 ・個人レポートを基にグループで話し合う。 ・グループで、「看護倫理」と「科学的思考」の視点から事例を分析考察する。 ・グループでまとめた内容を複数のグループ内でプレゼンテーションし、討議する。 ・看護実践を分析考察することで明らかになった自身の看護観についてレポートにまとめ提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4~12 13~14 15 16~17 18~23 24~27 28~29 30	授業計画、看護実践の振り返りの視点、分析考察の方法（多田羅）【講義】 個人の3年次前期の実習経験について「看護倫理」の視点から個人レポートを作成【演習】 個人レポートに基づきグループワーク（各担当教員）【GW】 分析考察したい看護実践についてテーマを絞りグループワーク（各担当教員）【GW】 複数のグループで発表し意見交換（全教員）【討論】 発表会后、自己の看護実践について「看護倫理」と「科学的思考」の視点から後期実習に向けての課題を考える（各担当教員）【演習】 後期実習後に提出された個人レポートに基づきグループワーク（各担当教員）【GW】 分析考察したい看護実践についてテーマを絞りグループワーク（各担当教員）【GW】 発表会資料作成（各担当教員）【GW】 クラス全体で発表し意見交換（全教員）【討論】 発表会后、レポート作成について説明（多田羅）【講義】 発表での討論から導き出された自己の課題についての個人ワークと実践知に基づく看護観のレポート作成（各担当教員）【演習】									
教科書	系統看護学講座 別巻 看護倫理（医学書院）										
参考書・参考資料等	必要に応じて紹介する。										
事前学習・事後学習	講義計画に沿って自己課題を明確にし、主体的に取り組みましょう。 図書館や情報処理室を有効に使って探求したいテーマの学修を深めていってください。										
他の授業との関連	看護ゼミナールⅠ、研究方法論Ⅰで得た知識を応用し、臨地実習での体験を言語化し科学的に思考・分析することを目指す。										
成績評価方法・基準・フィードバック	本科目は講義・演習等であるため、出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない時は、原則として評価を受けることができません。到達目標の達成状況を、グループ討論（40%）、発表（20%）、レポート（40%）により総合的に評価する。フィードバックは演習内で適宜行う。また、最終評価については、フィードバックの期間を設け、希望者に評価内容を説明する。 グループ討論の評価基準は、教材となるレポートをわかりやすく書けているか、説明がわかりやすいか、意見交換ができているか、メンバーに配慮ができているかである。発表の評価基準は、発表資料の内容と構成、発表資料に基づく説明、質疑応答である。レポートの評価基準は、テーマにあった内容が書かれているか、レポートの構成と論理展開、言語表現の適切性、形式的条件である。										
オフィスアワー	各担当教員から提示される。										
備考	＊実務経験のある教員 多田羅（看護師）、則包（看護師）、土岐（看護師）、枝川（看護師）、松本（看護師）										

看護研究(Nursing Research)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	通年	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	演習
担当教員	●吉本 知恵(YOSHIMOTO Chie)、他看護学科教員										
授業の目的	看護研究方法論での学びを活かして、担当教員の指導のもとで、学生が関心のある研究テーマを設定して研究計画書を作成し、計画書に基づいて研究を実施し研究論文を作成する。研究内容をまとめてプレゼンテーション資料を作成、発表と質疑応答を行う。この経験によって、看護研究の理解を深めるとともに、課題を探究する能力を身につける。										
到達目標	①自分が興味関心や問題意識をもつ看護に関わる現象を明らかにすることができる。 ②関連文献を検討し、研究疑問を絞り込み、研究テーマおよび研究目的を設定することができる。 ③研究目的に適した研究方法を検討することができる。 ④自分の研究を実施する際に必要となる倫理的配慮を検討することができる。 ⑤研究計画書を作成することができる。 ⑥研究計画書に基づき、研究参加者を募集することができる。 ⑦研究計画書に基づき、データ収集することができる。 ⑧研究目的に沿って、収集したデータを分析し、解釈することができる。 ⑨研究結果を文献や知識と関連づけて考察することができる。 ⑩執筆要領に従い、論理一貫性のある研究論文を作成することができる。 ⑪研究内容を発表資料にまとめて公表し、質疑応答ができる。 ⑫研究活動の全過程を通して、主体的に取り組むことができる。										
授業の進め方	1. 3年次末に、学生個々が研究テーマを提出し領域が決定される。 2. 毎回の授業は、学生が発表資料を準備し「学生の発表・学生間の討論・教員の指導」で展開する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1～30	オリエンテーション 研究するにあたっての自己の関心や問題意識の明確化 問題現象から研究疑問の絞り込みと研究テーマの検討 研究テーマに関する文献検討とRQの明確化 研究デザインの選択と研究方法の検討 研究計画書の作成 データ収集と分析 研究論文の作成と成果の発表									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	「看護研究方法論」で使用したテキストと資料、担当教員が適宜紹介する										
事前学習・事後学習	毎回の授業は、前回授業の意見や指導を参考にして資料を準備する。 討論の意見や指導を受けて主体的に自分の研究を進める。										
他の授業との関連	3年次の看護研究方法論での学びを具体的に実践する										
成績評価方法・基準・フィードバック	評価方法:各担当教員が看護研究評価表として提示した評価視点に基づいて評価する フィードバック:研究発表後に各担当教員から講評を伝えるとともに、評価結果は、研究実施の全過程終了後に最終評価面接を実施してフィードバックする										
オフィスアワー	担当教員が提示する										
備考											

日本語表現法 (Japanese Language Expression)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●秋山 達也 (AKIYAMA Tatsuya)										
授業の目的	日本語の読み方、書き方、聞き方、話し方の資本技術を身に付ける。 論理的表現・文学的表現など、具体的な日本語表現法を学ぶ。										
到達目標	①正しい文法に則って倫理的な言語表現ができる。 ②言語表現を通して人と正対して、心を通わせるコミュニケーションができる。										
授業の進め方	授業の中で、まず、表現の仕方を学び、それを自己表現する。多様な表現様式による表現にチャレンジすることで、豊かで確かな表現力を習得する。グループで表現したり、発表し合う機会が多いので、出席を特に重視する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	日本語表現力 日本語表現力の必要性について									
	2	積極的な聞き方・話し方 楽しむ→受容→啓発									
	3	描写の技術① なりきり作文(視点を変える)									
	4	描写の技術② レトリックを楽しむ(比喩と対比)									
	5	朗読・群読① 声の楽しさ面白さ									
	6	群読・朗読② 声のハーモニー									
	7	レポート・論文の書き方① 論理的思考と文章表現									
	8	レポート・論文の書き方② 引用なきところに印象はびこる									
	9	質問と回答 ユーモアのある表現									
	10	ディベート① 自己主張と協調 グループで相談・調整									
	11	ディベート② 説得力のある表現									
	12	比べよう① 映像表現と文章表現(映画と原作)									
	13	比べよう② 音楽表現と文章表現(詩歌と歌詞)									
	14	ビブリオバトル(本の紹介)									
	15	アニメシオン(読書を楽しむ)									
教科書	特になし(こちらでプリントを準備する)										
参考書・参考資料等	特になし(こちらでプリントを準備する)										
事前学習・事後学習	事前学習は特になし。 事後学習としては学んだことの応用練習をしてもらう。										
他の授業との関連	日本語での表現の仕方を習得することは、すべての科目において必要不可欠である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、参加態度40%、提出物30%、レポート30%により評価する。 ＜評価の視点＞レポートは、①形式面(表現法、語句や文の使われ方)、②内容面(見方・考え方、論点の整理)、③総合的(立場の一貫性、独創性)から評価する。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	質問があれば、メールアドレスへ連絡して下さい。										
備考	毎回、プリント・ワークシートを配付するので、A4のプリントが綴じられるように各自でファイルを用意しておくこと。 オンライン授業になった際は、授業内容に変更があります。										

倫理学 (Ethics)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●佐藤 慶太 (SATO Keita)										
授業の目的	倫理学は、行為の善悪について考える学問です。この学では、その多くの部分が論争であり、歴史に名を残す倫理学者たちでも、基本的な事柄についてさえ一致しないことがあります。これは考えてみれば厄介な事態なのですが、「善悪」の問題の奥の深さを示すものともいえます。本授業では、主要な倫理学説のそれぞれを、他の学説との相違点にも着目しつつ、学びます。										
到達目標	① 主要な倫理学説の特徴とその根拠づけの方法について説明できる。 ② 倫理的問題について、根拠づけられた自分の考えを提示できる。										
授業の進め方	要点をまとめたハンドアウトや資料をもとに授業をおこないます。また授業中に、現代の倫理的問題について、グループディスカッションやミニレポートに取り組み、倫理学説の理解を深めます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	オリエンテーション:倫理学とは何か【講義・討論】									
	2	科学技術の発展と倫理【講義】									
	3	功利主義①: 善悪の基準は「最大多数の最大幸福」か?【講義・討論】									
	4	功利主義②: 功利主義の問題と新しいタイプの功利主義【講義・討論】									
	5	正義論:「平等」について考える【講義・討論】									
	6	義務論①: 善悪の基準は結果か、動機か?【講義・討論】									
	7	義務論②: 代理出産問題について考える【講義・討論】									
	8	中間考察「嘘」について①:嘘の何が人を傷つけるのか?【講義】									
	9	中間考察「嘘」について②:嘘についての討論【討論】									
	10	フェミニズムとケアの倫理 男と女で考え方に違いはあるか?【講義・討論】									
	11	徳倫理学①:倫理学は愛や友情について語ることができるか?									
	12	徳倫理学②:「限りなく親切であること」は義務か?									
	13	医療倫理の問題①: 具体的な医療倫理の問題について学ぶ【講義】									
	14	医療倫理の問題②: 医療倫理の問題について討論をする【討論】									
	15	まとめ:これまで学んだ倫理学説についての復習									
教科書	授業中にプリントを配布します。										
参考書・参考資料等	J・レイチェルズ／S・レイチェルズ『新版 現代を見つめる道徳哲学』(晃洋書房) その他、適宜授業中に紹介します。										
事前学習・事後学習	授業時間中に、次回の授業に関連する課題を提示しますので、事前学習として取り組んでください。 事後学習は、主に授業の復習になります。										
他の授業との関連	医療従事者を志す者にとって、その行為の善悪について考える習慣を身につけることは、必要不可欠です。したがって、すべての講義や実習をうける前提となります。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業中の取り組み(40%)、レポート(60%)で評価します。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ＜評価の視点＞レポートは、「授業で学んだ内容を十分踏まえているか、そのうえで自分自身で考えたことを適切に表現できているか」という点を指標として評価します。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明します。										
オフィスアワー	質問等は授業終了後に受け付けます。										
備考	グループ討論への積極的な参加を期待します。倫理学についての基礎知識がなくても、履修には問題ありません。										

物理学実験 (Physics Laboratory)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実験
担当教員	●鶴町 徳昭 (TSURUMACHI Noriaki)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)										
授業の目的	物理学は実験を用いた現象の測定を基礎に発展してきた。ここでは物理学の諸分野(力学、熱、波動、電磁気、原子)の実験を行うことにより、測定方法、データのまとめ方及び解析方法について理解し実践する。これらの実験は医療検査機器への応用の基礎でもある。										
到達目標	①基礎的な物理実験を遂行できる。 ②テスターやデジタルマルチメーターなどの測定器を使用できる。 ③実験で得られたデータをまとめ、解析することができる。 ④自然科学におけるレポートを書式に則って書くことができる。										
授業の進め方	少人数のグループを組み、実験課題に取り組む。結果を次の週にレポートとしてまとめて提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス 物理学実験の方法、実験レポートの書き方、有効数字、誤差の分布の取り扱い									
	2~15	以下のリストの中から7つを選択して実験を行う 実験① 金属の抵抗の温度変化測定 実験② 等電位線の分布の測定 実験③ 電子の比電荷e/mの測定 実験④ Franck-Hertzの実験(原子中の電子の離散性) 実験⑤ 超音波による波動の実験(音速、振動数、波長、干渉) 実験⑥ プランク定数の測定 実験⑦ 光の干渉実験(光の波長) 実験⑧ オシロスコープによる周波数と波形の観測 実験⑨ 直視分光器の製作と光の波長測定									
教科書	物理学実験指導書を配布する。										
参考書・参考資料等	適宜指示する。										
事前学習・事後学習	事前に実習書をよく読んで実験の原理や手順を頭に入れておくこと。 事後には結果を速やかにレポートにまとめておくこと。										
他の授業との関連	物理学実験の応用である医用電子工学実習は必修科目であり、物理学が基礎となっていることから物理学実験を選択することが望ましい。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として単位認定しない。 ＜評価の視点＞実験レポートの「背景と目的の内容」「結果に対する考察」および「構成および文章表現、図表」の適切性などにより成績・到達目標達成状況を評価する。 ＜成績のフィードバック＞毎時間提出されたレポートをチェックし、不備があれば返却する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	鶴町 香川大学工学部先端材料科学領域 電話番号: 087-864-2390 e-mail: tsuru@eng.kagawa-u.ac.jp 太田 質問や相談等がある場合は研究室44で随時対応する。										
備考	授業時間中、授業時間外の質問を歓迎する。 * 実務経験のある学内教員 太田(臨床検査技師)										

化学実験 (Chemistry Laboratory)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実験
担当教員	●新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	様々な化学反応の理論を理解するとともに化学物質の分析、分離、精製、定量方法を習得する。さらに得られた結果を適切に報告する方法を学習する。										
到達目標	① 実験器具を正確に操作し基礎的な化学実験を遂行できる。 ② 実験によって得られた成果を解釈し正確に報告するレポートを作成できる。 ③ 化学物質の安全な保管方法や廃棄方法を説明できる。										
授業の進め方	実験内容、理論、注意点等を全体へ説明した後、班に分かれて実験を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	アセチルサリチル酸の合成									
	2~3	中和滴定による食酢の酢酸濃度分析									
	4~5	キレート滴定による水の硬度分析									
	6~7	沈殿滴定による醤油の塩分濃度分析									
	8~9	シクロヘキサンの凝固点降下									
	10~11	分光光度計による真鍮の組成分析									
	12~13	茶葉に含まれるカフェインの抽出									
	14~15	メチルオレンジの合成									
教科書	使用しない。実習書を配布する。										
参考書・参考資料等	必要に応じて指示する。										
事前学習・事後学習	予め実習書を読み、背景の化学理論を理解するとともに実験の流れを整理しておく。 実習後はレポートを作成する。疑問点があれば調査、質問するなどして解決を試みる。										
他の授業との関連	化学反応を利用した分析手法を学習するため、分析検査系の科目と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況をレポートにより評価する。 レポートは ① フォーマットを守って作成していること ② 実験結果を正確に報告していること ③ 実験結果に対して根拠に基づいて論理的に考察していること ④ 読みやすく書かれていること の4点で主に評価する。 レポートは毎回返却し改善すべき点についてフィードバックを行う。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける (niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	・実験に適した服装で参加すること。 ・やむを得ず欠席する場合は事前に連絡すること。 ・準備の都合上、実験の順序を変更する場合がある。										

生物学実験 (Biology Laboratory)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実験
担当教員	●新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	生物の構造を観察すること及び様々な生命現象に実際に触れることにより、生物の構造と機能への理解を深める。										
到達目標	① 実験器具を正確に操作し基礎的な生物学実験を遂行できる。 ② 実験によって得られた成果を解釈し正確に報告するレポートを作成できる。										
授業の進め方	実験内容、理論、注意点等を全体へ説明した後、班に分かれて実験を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	オリエンテーション									
	2~3	様々なプレパラートの観察									
	4~5	環境水中の微小生物の観察									
	6~7	ヒト口腔粘膜上皮細胞の観察									
	8~9	食品中の微生物の観察									
	10~11	ホタテの筋の観察									
	12~13	マウスの解剖(事前説明)									
	14~15	マウスの解剖									
教科書	使用しない。実習書を配布する。										
参考書・参考資料等	必要に応じて指示する。										
事前学習・事後学習	予め実習書を読み、背景の理論を理解するとともに実験の流れを整理しておく。 実習後はレポートを作成する。疑問点があれば調査、質問するなどして解決を試みる。										
他の授業との関連	生物を形態的に分析する手法に重きを置いて学習するため、形態検査系の科目と関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況をレポートにより評価する。 レポートは ① フォーマットを守って作成していること ② 実験結果を正確に報告していること ③ 実験結果に対して根拠に基づいて論理的に考察していること ④ 読みやすく書かれていること の4点で主に評価する。 レポートは毎回返却し改善すべき点についてフィードバックを行う。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける (niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	・実験に適した服装で参加すること。 ・やむを得ず欠席する場合は事前に連絡すること。 ・準備の都合上、実験の順序を変更する場合がある。										

情報科学 I (Information Science I)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●服部 哲郎 (HATTORI Tetsuo)										
授業の目的	近年、医療の現場ではコンピュータの導入が進んでおり、情報処理に関する基礎技能の修得や、コンピュータ・システムの活用能力が求められている。 情報科学 I では、社会において要求される情報処理とコンピュータの基本的活用能力の習得を目標として、コンピュータ動作原理などの基礎知識と、ソフトウェア操作法を学ぶ。										
到達目標	①コンピュータ・システムの基本構成と動作原理が説明できる。 ②Word、Power Point、Excelのソフトウェアを活用した文書作成ができる。										
授業の進め方	授業は、コンピュータを使って教科書の演習問題やプリントの課題を実際にこなしながら進める。コンピュータ操作の得意・不得意によって進捗度に差が生じた場合には、時間外に作業を進め、大幅に遅れることが無いようにする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス、パソコンの基本概念や歴史的経緯、ハードウェアとソフトウェア									
	2	コンピュータの基礎知識 ハードウェア構成 (CPU、メモリ、入出力ポートなど)									
	3	コンピュータの基礎知識 コンピュータの動作原理、基本ソフト (OS) の役割									
	4	コンピュータの基礎知識 種々のファイルとフォルダ構造、ブラウザ検索									
	5	コンピュータの基礎知識 メールやインターネット・システムの基本原理									
	6	情報検索と情報モラル コンピュータ・ウイルス、著作権、情報倫理									
	7	文書処理の基本 Wordの基本操作									
	8	文書処理の基本 簡単な文書の作成									
	9	文書処理の基本 数式・図形の挿入									
	10	文書処理の基本 印刷設定、PDF (Portable Document Format) の作成									
	11	プレゼンテーション資料の作成 PowerPoint (PPT) の基本操作									
	12	プレゼンテーション資料の作成 PowerPoint (PPT) の応用技法									
	13	Excelの基本操作 (オートフィル機能、計算式設定、表作成)									
	14	Excelの基本操作 (種々の関数や統計ツールの操作)									
	15	コンピュータ・システムの動作原理の総括的復習									
教科書	学生のための情報リテラシー Office2021・Microsoft365対応、若山芳三郎著、(東京電機大学出版局)										
参考書・参考資料等	授業中に適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	他の学生と大幅に遅れることが無いよう、各自予習・復習をして授業に臨むこと。										
他の授業との関連	医療に従事する者にとって、情報処理能力は必須であり、コンピューターの活用能力を身に着けることは必須である。したがって、すべての基礎科目・専門科目と連携している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加度 (10%)、演習課題 (40%)、期末筆記試験 (50%) で総合的に評価する。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	随時対応する。										
備考	私語、遅刻など授業の進行を妨げる行為に対しては、厳格に対処する。										

情報科学Ⅱ (Information Science Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●服部 哲郎 (HATTORI Tetsuo)										
授業の目的	情報科学の中で重要な、確率・統計学や情報理論の基礎を学ぶ。チェビシェフ (Tshebyscheff) の不等式の定理や仮説検定の考え方など、統計解析の入門的知識を学び、特に、実用上有用なベイズ (Bayes) の定理と、それに基づく推論方法を理解し修得する。										
到達目標	① 確率論における基本的定義や統計的検定の考え方が説明できる。 ② ベイズの定理に基づく確率的推論方法を説明できる。 ③ ROC解析によるROC曲線とAUCの意味について説明できる。										
授業の進め方	授業は、情報理論や確率統計の基礎についての配布資料に基づいて行う。配布資料の問題や課題を実際に解きながら、その理解度に応じた講義を行う。得意・不得意によって進捗度に差が生じた場合には、授業時間外にも質問等を受け付けて学習を進め、大幅な遅れが無いようにする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス: 情報科学における情報理論									
	2	確率論の基礎: 確率の定義、根源事象の数									
	3	条件付き確率と結合確率 (Bayesの定理)									
	4	Bayesの定理に基づく確率的推論法: モンティホールの問題を解く									
	5	Bayesの定理に基づく確率的推論法: 3囚人問題などの例題を解く									
	6	Bayesの定理に基づく確率的推論法: 事前確率と事後確率、尤度									
	7	Bayesの定理に基づく確率的推論法: Bayes更新、Bayes統計									
	8	情報理論入門: 情報量とは何か、確率に基づく情報量関数の一意性									
	9	情報理論入門: 情報量とエントロピー (平均情報量)、相互情報量									
	10	情報理論入門: 情報量とBayes推論による分析法 (分類木など)									
	11	統計学基礎: 平均、分散、標準偏差、チェビシェフの不等式									
	12	統計学基礎: 度数分布とヒストグラム、離散事象の確率と連続事象の確率密度									
	13	統計学基礎: 検定の考え方 (統計学の仮説検定)、P値									
	14	種々の確率分布とBayes推定の応用: 2項分布、正規分布、ポアソン分布									
	15	種々の確率分布とBayes推定の応用: 医学のベイズ決定、ROC解析									
教科書	適宜資料を配付する。										
参考書・参考資料等	授業中に適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	他の学生と大幅に遅れることが無いよう、各自予習・復習をして授業に臨むこと。										
他の授業との関連	確率・統計学や情報理論を学ぶことは、医療が過去の事例を参考に、多くの人を対象に行われる行為であることから、必須である。したがってすべての基礎科目、専門科目と関連している。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業参加度 (10%)、レポート (約40%)、期末試験 (約50%) により総合的に評価する。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	随時対応する。										
備考	私語、遅刻など授業の進行を妨げる行為に対しては、厳格に対処する。										

情報科学演習 (Information Science Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	●服部 哲郎 (HATTORI Tetsuo)										
授業の目的	情報科学 I で学習したOfficeのアプリケーション・ソフトの活用技術を学ぶと共に、特に、ExcelにおけるVBA (Visual Basic for Applications) のプログラミング方法について実践的に習得する。										
到達目標	Excel VBAで基本的なプログラミング処理ができる。										
授業の進め方	授業は、コンピュータを使って教科書の演習問題やプリントの課題を実際に作成しながら進める。コンピュータ操作の得意・不得意によって進捗度に差が生じた場合には、時間外に作業を進め、大幅に遅れることが無いようにする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	全体ガイダンス、エクセルの種々の機能説明、エクセルにおける計算処理									
	2	シート内のセルに設定する関数の定義									
	3	VBAによるマクロ・プログラミングの操作法 VBAの起動、VBE (Visual Basic Editor) や、デバッガー等の利用									
	4	VBAによるマクロ・プログラミングの操作法 マクロ機能の活用									
	5	VBAによるマクロ・プログラミングの操作法 種々の標準関数の利用									
	6	Visual Basic 言語の基礎 プログラミングの文法と構造									
	7	Visual Basic 言語の基礎 プログラミングの文法と構造									
	8	具体的例題によるVBAプログラミングの演習									
	9	具体的例題によるVBAプログラミングの演習									
	10	具体的例題によるVBAプログラミングの演習									
	11	具体的例題によるVBAプログラミングの演習									
	12	VBAプログラミングの実践と活用 インタフェースとしてのForm作成									
	13	VBAプログラミングの実践と活用 グラフィックスや画像等を用いる資料作成の実践									
	14	VBAプログラミングの実践と活用 統計処理による表・グラフ作成									
	15	VBAプログラミングの実践と活用 R言語なども併用する表・グラフ作成									
教科書	情報科学 I の教科書における残りの部分を使用すると共に、特に演習用に次の教科書を使用する。 「学生のためのExcel VBA 第2版」、若山芳三郎著、(東京電機大学出版局)										
参考書・参考資料等	授業中に適宜紹介する。また必要に応じて適宜資料も配布する。										
事前学習・事後学習	他の学生と大幅に遅れることが無いよう、各自予習・復習をして授業に臨むこと。										
他の授業との関連	情報科学 I を履修していること。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業に臨む姿勢(約30%)、演習レポート課題(約20%)、期末筆記試験結果(約50%)などで総合的に評価する。原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	随時対応する。										
備考	私語、遅刻など授業の進行を妨げる行為に対しては、厳格に対処する。										

教養講座・香川(Liberal Arts and Sciences Seminar)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●古山 達雄(FURUYAMA Tatsuo)、新美 健太(NIIMI Kenta)、南 貴子(MINAMI Takako) 他										
授業の目的	香川県内外から入学された学生に対して、香川県の様々な領域で活躍しておられる香川県職員の方々を外部講師として招き講義をしていただくことを通して、香川県に関わる様々な方面からの情報を得ることにより、その魅力を知り、香川県に対して愛着を持ち、その良さを広める人材となつてもらう。										
到達目標	香川県について幅広い分野の知識をよく理解し、他者にもその魅力を発信できるようになる。										
授業の進め方	香川県内の様々な県機関から講師を招き香川県に係る話題について講義をしてもらう。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	本講座についての紹介、トピックス1(古山)									
	2	香川県に関する様々な話題①(県内各機関からの講演者)									
	3	香川県に関する様々な話題②(県内各機関からの講演者)									
	4	香川県に関する様々な話題③(県内各機関からの講演者)									
	5	香川県に関する様々な話題④(県内各機関からの講演者)									
	6	香川県に関する様々な話題⑤(県内各機関からの講演者)									
	7	香川県に関する様々な話題⑥(県内各機関からの講演者)									
	8	トピックス2(新美) 講義の日程・外部講師については未定。									
教科書	各演者が作成したプリントなど										
参考書・参考資料等	適宜講義時に提示予定										
事前学習・事後学習	講義の中から特に興味を持った内容について図書館やネットでより深く調べレポートを作成する。										
他の授業との関連	自ら調べ、まとめ、自分の意見を的確に表現できるようになることは、すべての授業に通じる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、レポート(50%)、受講態度(50%)により評価する。 ＜レポートの評価基準＞ 読み手にわかりやすく書いているか。 全体を通してまとまっているか。 自分の意見を加えているか。 引用文献等を正しく引用しているか。 など 最終講義の2週間後をめどにレポートを返却しますので、質問等があれば随時説明するので古山まで連絡してください。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	特に設定しません。質問のあるかたは講義後に時間をとります。										
備考	どのテーマについてレポートを作成するかは自由ですが講師の話をきちんと聞かないと判断できません。まずしっかりと講義の内容を理解して、その上で自分が調べたいテーマを選択し、必要に応じて講師に質問し、本やインターネットなどで調べて、レポートを作成すること。 * 実務経験のある学内教員: 新美(臨床検査技師)、古山(医師)										

解剖学 (Anatomy)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●古山達雄(FURUYAMA Tatsuo)										
授業の目的	解剖学は、人体が生存するために必要な生理機能を果たすうえで必要な生体の構造を理解することを目的とする。これらの知識は専門科目を理解する上での基礎となるものなので、授業を通して確実な解剖学的な知識の基盤を作り上げる。										
到達目標	① 生体を維持している各器官系を構成する器官について、細胞、組織のレベルから説明できる。 ② ①であげた各器官が器官系をどのように構成しているか説明できる。										
授業の進め方	スライドを用いた講義形式で進める。毎回、前回の講義の理解度を把握するために確認テストを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	イントロと細胞									
	2	組織 組織の種類と分類									
	3	皮膚 皮膚の構造									
	4	骨組織 骨組織の構造									
	5	骨格系 全身の骨格									
	6	筋組織 筋組織の構造									
	7	筋系 全身の筋肉									
	8	神経組織 神経組織の構造									
	9	脊髄 脊髄の構造									
	10	脳 脳の構造									
	11	感覚器 各感覚器の構造									
	12	内分泌器 各内分泌器の構造									
	13	呼吸器 各呼吸器器官の構造									
	14	循環器 心臓の構造									
	15	循環器 血管の構造と全身の血管									
	16	リンパ管系とリンパ組織									
	17	血液 血液の構成 血液細胞と血漿									
	18	消化器 各消化器器官の構造									
	19	消化器 付属器官の構造									
	20	泌尿器 各泌尿器器官の構造									
	21	男性生殖器 内・外男性生殖器器官の構造									
	22	女性生殖器 内・外女性生殖器器官の構造									
	23	人体の発生									
教科書	トートラ人体の構造と機能 第15版(丸善出版)										
参考書・参考資料等	カラーアトラス機能組織学 (南江堂)、最新カラー組織学 (西村書店)、グレイ解剖学アトラス (エルゼビア) 臨床のための解剖学 第3版(メディカル・サイエンス・インターナショナル)										
事前学習・事後学習	確認テストを各授業の終わりに配布するので事前に解答を作成して次の授業に臨むこと。その際にわからないところは教科書で補っておくこと。										
他の授業との関連	生理学と対になっており密接な関係にあるので並行して講義を行う。										
成績評価方法・基準・フィードバック	中間(50%)と期末試験(50%)を行い合計点で判定する(100%) 試験終了後1週間を目安に評価結果を開示する期間を設け必要があれば評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	水曜日12:00～13:00 35研究室										
備考	1年後期の解剖学実習において必須である。										

解剖学実習 (Anatomy Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●古山 達雄 (FURUYAMA Tatsuo)、新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	人体の構造を十分に理解しておくことが専門科目を習得するための基本になる。組織標本、人体模型などを用いたスケッチなどを実際に行うことで本の知識を体験を通して身に着ける。										
到達目標	解剖学Ⅰ、Ⅱで学んだ知識を利用し、実習を通して観察した各種組織、器官の特徴、構造を説明できる。										
授業の進め方	人体模型、組織標本を肉眼および顕微鏡で観察しノートにスケッチ並びに演習書で色塗りをする。これを実習後に提出し見るべきポイントを正しく観察しているかを教員が確認する。適宜、小テストを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	組織学実習1	骨組織の顕微鏡観察								
	2	組織学実習2	舌の顕微鏡観察								
	3	組織学実習3	心臓、大動脈の顕微鏡観察								
	4	組織学実習4	肝臓の顕微鏡観察								
	5	組織学実習5	食道－胃の顕微鏡観察								
	6	組織学実習6	胃幽門部－十二指腸の顕微鏡観察								
	7	組織学実習7	肺、脾臓の顕微鏡観察								
	8	組織学実習8	腎臓の顕微鏡観察								
	9	組織学実習9	副腎、卵巣の顕微鏡観察								
	10	肉眼解剖学実習1	骨格系の観察1								
	11	肉眼解剖学実習2	骨格系の観察2、関節の観察								
	12	肉眼解剖学実習3	筋系の観察								
	13	肉眼解剖学実習4	神経系の観察								
	14	肉眼解剖学実習5	循環器系の観察								
	15	肉眼解剖学実習6	呼吸器、消化器、泌尿器系の観察								
教科書	実習書を配布する。 人体解剖カラーリングブック 監訳 天野修ら（丸善出版）、トートラ 人体の構造と機能 第3版（丸善出版）										
参考書・参考資料等	カラーアトラス機能組織学 著者 J.B.カー（南江堂）、最新カラー組織学 石村和敬、井上貴夫監訳（西村書店）、グレイ解剖学アトラス 訳者 塩田浩平他（エルゼビア）、ガートナー・ハイアット組織学 第4版 訳者 川上速人他（メディカル・サイエンス・インターナショナル）										
事前学習・事後学習	予習をしてから実習に望むこと。スケッチ用ノート、12色程度の色鉛筆および教科書は必ず持参すること、さらに必要に応じて上記参考書を持参すること（参考書は図書館にあるものを借りてください）										
他の授業との関連	解剖学										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、実習レポート(70%)、小テスト(30%)により評価する。 ＜レポートの評価基準＞ 1. 実習書の項目をすべてスケッチしてあるか(標本にない場合はなくても可) 2. スケッチした各部位に名称を書き込んであるか 3. スケッチに観察倍率を記入してあるか 最終実習の1週間後をめどにレポートを返却します。評価等に疑問等があれば随時説明するので古山まで連絡してください。 原則として総実習数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	12:00~13:00 研究室35										
備考	＊実務経験のある学内教員 古山(医師)新美(臨床検査技師)										

生理学 (Physiology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●古山達雄 (FURUYAMA Tatsuo)										
授業の目的	生理学は、人体が生存するために必要な各器官系が担っている生理機能を理解すること、また各器官系の器官構成と生理機能とのつながりを理解することを目的とする。これらの知識は専門科目を理解する上での基礎となるものなので、授業を通して確実な生理学的な知識の基盤を作り上げる。										
到達目標	① 各器官系の特徴的な生理機能を説明できる。 ② 各器官系を構成する器官と生理機能の関係を説明できる。										
授業の進め方	スライドを用いた講義形式で進める。毎回、前回の講義の理解度を把握するために確認テストを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	細胞・組織									
	2	骨の生理1 骨形成の仕組み									
	3	骨の生理2 骨の成長・関節									
	4	筋の生理1 興奮・収縮の生理									
	5	筋の生理2 運動生理									
	6	神経系の生理1 興奮・伝導・伝達の仕組み									
	7	神経系の生理2 脊髄・脳の機能									
	8	神経系の生理3 脊髄神経・脳神経・自律神経系の機能									
	9	感覚器の生理 電気変換の仕組みと伝導路による情報伝達									
	10	内分泌系の生理1 視床下部の機能 体温・食欲などの調節									
	11	内分泌系の生理2 下垂体・甲状腺・副腎などの機能									
	12	呼吸器系の生理1 外呼吸の仕組み									
	13	呼吸器系の生理2 内呼吸の仕組み									
	14	循環器系の生理1 心臓の生理									
	15	循環器系の生理2 循環の調節									
	16	循環器系の生理3 リンパ管系の機能									
	17	生体防御 免疫の機能									
	18	消化器系の生理1 消化・吸収・排泄の生理									
	19	消化器系の生理2 代謝と栄養									
	20	泌尿器系の生理1 尿の形成									
	21	泌尿器系の生理2 体液バランス・pHの調節									
	22	男性生殖器系の生理									
	23	女性生殖器系の生理									
教科書	トートラ人体の構造と機能 第15版(丸善出版)										
参考書・参考資料等	ギャノン 生理学(丸善)										
事前学習・事後学習	確認テストを各授業の終わりに配布するので事前に解答を作成して次の授業に臨むこと。その際にわからないところは教科書で補っておくこと。										
他の授業との関連	解剖学と対になっており密接な関係にあるので並行して講義を行う。										
成績評価方法・基準・フィードバック	中間(50%)と期末試験(50%)を行い合計点で判定する(100%) 試験終了後1週間を目安に評価結果を開示する期間を設け、必要があれば評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	水曜日12:00～13:00 35研究室										
備考	2年前期の生理学実習において必須である。										

生化学 I (Biochemistry I)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	糖、脂質、タンパク質など生体を構成する物質の化学的性質およびそれらの代謝を学び、生命現象を化学的な視点から理解する。また生化学の最新の研究成果に触れ、生体内の化学反応に興味を持つ。										
到達目標	① 生命を構成する化学物質を概説できる。 ② 酵素反応の化学的性質を説明できる。 ③ 糖、脂質、タンパク質の化学的性質と代謝の機構を概説できる。										
授業の進め方	教科書を中心に配布プリントとスライドを用いて講義を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生体を構成する有機化合物と無機化合物									
	2	酵素の機能、分類、反応速度、阻害、補酵素/ ビタミンの性質、機能									
	3	糖の化学的特性、糖の異性体と誘導体、多糖類の種類と構造・性質									
	4	糖代謝① (糖の消化、解糖系)									
	5	糖代謝② (クエン酸回路、電子伝達系)									
	6	脂質の化学的特性									
	7	脂質代謝									
	8	タンパク質・アミノ酸の化学的特性、代謝									
教科書	系統看護学講座 専門基礎分野 人体の構造と機能2 生化学 (医学書院)										
参考書・参考資料等	最新臨床検査学講座 生化学 (医歯薬出版) マクマリー生物有機化学 生化学編 菅原二三男監訳 (丸善)										
事前学習・事後学習	・予め教科書の該当部分を読み、疑問点を整理しておく。 ・講義において理解できなかった部分を整理し適宜質問する。また興味を持った話題については積極的に文献検索するなどして学びを深める。										
他の授業との関連	臨床検査専門科目のうち、特に臨床化学系の科目を学習するうえでの基礎となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、リアクションペーパー(約20%)、期末試験(約80%)により評価する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける(niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	・単純に知識を吸収するだけではなく、生命現象に好奇心を持って積極的な態度で受講して欲しい。 ・疑問点、不明点はそのままにせず積極的に質問等すること。										

生化学Ⅱ (BiochemistryⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●太田 安彦(OTA Yasuhiko)										
授業の目的	生化学Ⅰで得られた知識をもとに、生命の基本単位である細胞レベルでの生体物質の代謝、および個体が生命活動を営むためそれぞれの特異な作業を分担している器官の生化学的特徴について理解する。										
到達目標	①生命現象を理解する上で必要な生化学的知識を身につけることができる。 ②生体内にある物質がどのような役割を持っているか、病態とどう関連するかを考える習慣を身につけることができる。										
授業の進め方	パワーポイントを用いて示された資料や講義内容を基に要約し、ノートをとる。 各章終了時に小テストをおこなって、理解の確認をおこなう。 生化学Ⅰと並行して講義が行われる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ポルフィリン代謝と異物代謝【講義】									
	2	遺伝子と核酸【講義】									
	3	遺伝子の複製・修復・組換え【講義】									
	4	転写【講義】									
	5	翻訳と翻訳後修飾【講義】									
	6	シグナル伝達①【講義】									
	7	シグナル伝達②【講義】									
	8	遺伝子とがん【講義】									
教科書	人体の構造と機能[2]生化学(医学書院)										
参考書・参考資料等	臨床検査学講座 生化学 阿南功一・阿部喜代司・原論吉 著(医歯薬出版) ヴォート・生化学(東京化学同人) ハーパー・生化学(丸善)										
事前学習・事後学習	事前学習:生化学Ⅰと並行して講義が行われるため、あらかじめ関連する部分について予習しておくこと。 事後学習:講義の内容について、すでに知っていた内容と新たに知った内容を整理しまとめる。 復習により、新たに理解できなかったこと、さらに深く知りたいことが判明した場合、教員研究室に行って、もしくは次の講義時間の冒頭に質問をおこなう。										
他の授業との関連	生化学は、生体内で起こる様々な現象の基本となるものである。従って、臨床検査学の基礎科目、専門科目すべてと関連している。 生化学Ⅰと並行して講義が行われる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として単位認定しない。 ＜成績評価方法＞ 到達目標の達成状況を、小テスト(10%)、期末筆記試験(90%)により評価する。態度についてはその都度注意を行う。 ＜評価の視点＞期末筆記試験では、講義の各項目の理解度を評価する。 ＜成績のフィードバック＞試験結果は一定期間掲示をするとともに、希望者には個別に結果を開示する。										
オフィスアワー	随時 (研究室44) メール可 E-mail:oota@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	生化学Ⅰの内容を踏まえたうえでの講義です。 様々な生化学の教科書が出版されており、説明方法もそれぞれ異なる。指定教科書以外の本も読んで理解を深めて欲しい。										

生命科学概論 (Introduction to Life Science)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)										
授業の目的	生命現象の科学的営みを深く包括的に理解するために、分子生化学、生物の進化、細胞の発生・分化・増殖に関する基本事項を学ぶ。さらに、これらを応用した再生医療、細胞のクローン技術、遺伝子治療、オーダーメイド医療の概要を知る。学生主導型授業では最先端の事項について修得し、理解を深める。										
到達目標	①生命の起源を説明できる。 ②細胞の構造と機能を説明できる。 ③生体の構造と機能を説明できる。 ④細胞の分裂と増殖について説明できる。 ⑤ヒトの発生について説明できる。										
授業の進め方	配布資料に沿って講義をすすめる。 学生主導型授業では、グループごとに与えられたテーマに関して学生自ら学習し発表する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生命の起源と進化									
	2	生体の構成物質①									
	3	生体の構成物質②									
	4	細胞の構造と機能									
	5	生体の構成と機能									
	6	エネルギー産生									
	7	細胞増殖と分化									
	8	核酸の機能と発現									
	9	ヒトの発生～誕生									
	10	遺伝子工学									
	11	学生主導型授業: タンパク質と疾患									
	12	学生主導型授業: 遺伝子と疾患									
	13	学生主導型授業: 再生医療									
	14	学生主導型授業: 感染症と免疫									
	15	学生主導型授業: がん									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	理系総合のための生命科学 第5版～分子・細胞・個体から知る“生命”のしくみ..、東京大学生命科学教科書編集委員会、羊土社 配布テキスト										
事前学習・事後学習	事前学習: 学生主導型授業では、担当テーマに関して発表までにグループ学習を行う。 事後学習: 必ずその日のうちに学習したことに関してまとめておく。										
他の授業との関連	本学における遺伝子検査教育における入門授業である。2年次に分子生物学、3年次に臨床遺伝子検査学、4年次に遺伝子分析科学、および遺伝子分析科学認定士資格取得へと発展させている。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、授業参加度(20%)、学生主導型授業での発表討論(30%)、期末筆記試験(50%)により評価する。評価の視点: 発表は生命科学の基本的な知識と理解、試験は生命科学の医療への応用に関する理解等で評価する。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。(研究室45)										
備考	* 実務経験のある教員 岡田(医師)										

微生物学 (Microbiology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●奥田 潤 (OKUDA Jun)										
授業の目的	微生物の分類、形態、構造と機能、増殖と観察、遺伝と変異、遺伝子操作法、滅菌・消毒と抗菌化学療法、薬剤耐性などについて学ぶ。さらに、感染症とその病因や感染免疫等について学ぶことにより、感染症の発症機構を理解するために必要な科学的思考力を養う。また、教員の最新の研究成果を講義内容に積極的に取り入れる。国家試験対策として配布資料に含まれる過去の国家試験問題を実際に解くことで、早くから国家試験問題のレベルや解き方を理解する。										
到達目標	① 授業で習ったことを説明できる。 ② 授業で出題した過去の国家試験問題を完全に解くことができる。										
授業の進め方	毎回、配布資料を配布し、教科書だけでは不十分な部分を補いながら、講義を中心に授業を進める。配布資料に過去の国家試験問題を含めるので、講義での解説前に必ず予習する。また、教員の最新の研究成果を分かりやすく説明する。さらに、質問等によって講義内容についての理解をより深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	微生物とは：微生物学、臨床微生物学の歴史的背景、原核生物と真核生物、									
	2	系統分類、命名法、微生物の分類									
	3	細菌の形態と構造①：細菌、真菌、ウイルスの相違点、細菌の分類(大きさ、形態と配列)									
	4	細菌の形態と構造②：細菌の微細構造と外部構造、芽胞の形成									
	5	細菌の代謝と発育：細菌の代謝の概要、呼吸と発酵、細菌の増殖、細菌数の測定法									
	6	細菌の観察法と染色法：顕微鏡の種類と細菌の観察、微生物の染色法									
	7	細菌の発育と培養：細菌の発育と培養(培地の成分、培養に必要な物理的条件、酸素の要求度による細菌の分類、培地の分類)、細菌培養法、細菌同定法									
	8	遺伝・変異と遺伝子診断： 遺伝子と変異の概念、遺伝子の構成、ゲノムの概念、プラスミドおよびバクテリオファージの概念、トランスポゾン、遺伝形質の伝達(形質転換、接合伝達、形質導入)、遺伝子の変化と再構築、感染症の遺伝子診断(ハイブリダイゼーション、遺伝子増幅法、DNA塩基配列の決定)									
	9	滅菌と消毒：滅菌と消毒の概念、滅菌法・消毒法の種類と特性									
	10	化学療法①：細菌の薬剤感受性試験、抗菌薬の種類と特徴									
	11	化学療法②：化学療法の基本(適正な抗菌薬の選択、抗菌薬のPK-PD、ブレイクポイント、TDM)、薬剤耐性									
	12	ワクチン・感染と抵抗力： ワクチン、正常細菌叢の概念と分布、正常細菌叢と感染(内因性感染、日和見感染、菌交代症)、感染と感染症、宿主の抵抗力(生体防御機構)									
	13	病原性：微生物の病原因子、各種病原細菌の代表的毒素、感染と発症(感染源と感染経路)									
	14	各種感染症と食中毒：各種感染症の概念(新興・再興感染症、輸入感染症、人獣共通感染症、性感染症、バイオテロ)、食中毒(感染型と毒素型)									
	15	バイオセーフティと医療関連感染： バイオセーフティ(バイオハザード対策、エアロゾル感染、病原体の危険度分類、生物学的安全キャビネット、感染性廃棄物の取り扱い方、バイオハザードに留意すべき疾患)と医療関連感染(病院感染、病院感染防止対策、感染制御とICT活動)									
16	細菌検査の精度管理と感染症関連法規： 内部精度管理と外部精度管理、感染症法、食品衛生法、検疫法、学校保健安全法、予防接種法										
教科書	「最新臨床検査学講座 臨床微生物学」(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	配布資料										
事前学習・事後学習	理解を深めるために、予習・復習を行うことが望ましい。										
他の授業との関連	微生物検査学、細菌検査学実習、ウイルス・真菌検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、平常点10%、期末筆記試験90%により総合的に評価する。〈評価の視点〉「期末筆記試験では、暗記力・理解力・記述力を評価する」 ・フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、研究室38										
備考	膨大な量の病原微生物学に関する知識を短期間で学習する必要があるため、使用する教科書や配布資料の重要事項に絞って講義を行う。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)										

病理病態学 (Pathology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、平川 栄一郎 (HIRAKAWA Eiichiro)										
授業の目的	臨床医学の専門基礎となる病理学を通して疾患の基本的特徴を考察する。疾患・健康逸脱状態の病態生理および病変の主要因について検討し、病因論に論及する。各疾患の病理病態に共通する総論・各論について考察する。										
到達目標	①病理学総論である細胞と組織の障害、循環障害の病態、炎症と免疫、移植と再生医療、感染症、代謝障害の基礎、老化と先天異常、腫瘍の特徴について説明できる。 ②病理学各論としては、心血管障害、呼吸器疾患、消化器疾患、内分泌疾患や生殖器・乳腺疾患、造血・リンパ疾患、腎・泌尿器疾患、脳神経の疾患について説明できる。										
授業の進め方	スライドとプリント、教科書を用いて授業を進める。 講義中に理解度の確認のための質疑応答の時間を設ける。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	病理学序説、細胞・組織とその障害、再生と修復									
	2	循環障害、炎症									
	3	免疫とアレルギー、感染症									
	4	代謝異常、先天異常									
	5	腫瘍									
	6	循環器疾患、心疾患の病理病態、動脈硬化									
	7	呼吸器疾患、肺炎、肺癌									
	8	消化器疾患①									
	9	消化器疾患②									
	10	内分泌疾患									
	11	造血・リンパ系疾患									
	12	腎・泌尿器疾患									
	13	生殖器系・乳腺疾患									
	14	中枢神経系、運動器疾患									
	15	まとめ									
教科書	最新臨床検査学講座 病理学/病理検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	カラーで学べる病理学 (ヌーヴェルヒロカワ)										
事前学習・事後学習	各回の疾患について、予習してくること。 前回の講義内容について復習してくること。										
他の授業との関連	解剖学、組織学、生理学と関連。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、期末筆記試験 (100%) により判断する。 原則として、再試験は行わない。 ＜評価の視点＞ 期末筆記試験では、疾病の病理学的な知識と理解力を評価する。 フィードバックについては、オフィスアワーに準ずる方法で評価結果の説明を行う。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	* 実務経験のある教員 平川 (医師)										

検査機器概論 (Introduction to Laboratory Instruments)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●太田 安彦(OTA Yasuhiko)、宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)末澤 千草(SUEZAWA Chigusa)、小河 佳織(O GO Kaoru)、森西 起也(MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏(KONDO Akihiro)、青野 りよ(AONO Riyo)										
授業の目的	今日に至る臨床検査の飛躍的な発展は、さまざまな検査機器の進歩によるものであるといっても過言ではない。そのため、検査に必要な基本的な機器や装置に関する知識の習得は欠くことのできないものであることから、本講義により検査機器の発展の歴史や最新の医療・分析機器などの構造・原理と特徴、取り扱いと保守管理について総論的に学習し活用する。										
到達目標	①化学容量器、各測定機器、各部門における検査機器の原理や正しい扱い方を説明できる。 ②測定値の精度を上げることを習得し、実施できる。 ③化学容量器を正しく操作できる。										
授業の進め方	テキストを用いて講義するが、パワーポイントやビデオも適宜利用する。また、後半の演習により機器・器具の正しい使い方を習得する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	検査機器学総説 用手法と検査機器 (太田)【講義】									
	2	化学容量器 フラスコ、ピペット等 (太田)【講義】									
	3	分離分析装置1 クロマトグラフィ、電気泳動装置 (太田)【講義】									
	4	分離分析装置2 測光装置:分光光度計、炎光光度計、原子吸光光度計 (太田)【講義】									
		電気化学装置 pHメータ、各種電極 (太田)【講義】									
	5	秤量装置、遠心分離 天秤の種類と原理、遠心分離器の原理と種類、攪拌装置の概要、装置と攪拌装置 各種攪拌機 (太田)【講義】									
	6	恒温装置、乾燥機、 恒温装置の概要、恒温水槽、乾燥機、冷蔵・冷凍装置、保冷装置 (太田)【講義】									
	7	化学検査用機器 自動分析装置 (太田)【講義】									
	8	血液検査用機器 自動血球計数装置、自動白血球分類装置等 (近藤)【講義】									
	9	病理検査用機器 自動固定包埋装置、包埋センターミクロトーム等 (森西)【講義】									
	10	微生物検査用機器 滅菌装置、培養装置、同定検査・薬剤感受性検査・遺伝子検査・抗原検査に用いる機器等 (末澤)【講義】									
	11	免疫血清・遺伝子 水平回転機、ダイリユーター、ELISA法測定装置、									
	12	検査用機器 プロッティング装置、PCR増幅装置、DNAシーケンサー等 (宮川・青野)【講義】									
	13	生理検査用機器 心電計、心音計、脈波計、脳波計、超音波装置等 (小河)【講義】									
	14	演習 化学容量器演習(ピペットの検定:重量法) (太田)【演習】									
15	演習 化学容量器演習(ピペットの検定:色素法) (太田)【演習】										
教科書	その都度テキストを配布する。										
参考書・参考資料等	最新臨床検査学講座 検査機器総論(医歯薬出版) Medical Technology 臨時増刊 最新臨床検査機器のすべて(医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	講義、演習前には配布したテキストをよく読んでから臨むこと										
他の授業との関連	すべての実習において使用する機器を学ぶ講義や演習であるため、使用法や注意事項については各関連実習の前には再度復習することが望ましい										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として単位認定しない。 到達目標の達成状況を、演習実技および期末筆記試験(100%)により総合的に評価する。 ＜評価の視点＞演習実技では正しい操作方法を、期末筆記試験では理解力を評価する。 ＜成績のフィードバック＞試験結果は一定期間掲示するとともに、希望者には個別に結果を開示する。										
オフィスアワー	質問や相談等がある場合は研究室44にて随時対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 太田(臨床検査技師)、宮川(臨床検査技師)、末澤(臨床検査技師)、小河(臨床検査技師)、森西(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)、青野(臨床検査技師)										

社会福祉学 (Social Welfare)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●辰巳 裕子 (TATSUMI Yuko)										
授業の目的	人が生きて行く上で生じる、様々な生活課題の解決に向け、福祉と医療の連携が重視をされている現状を踏まえ、将来医療現場で働く事になる学生の皆さんが、わが国の社会福祉制度についての理念や現状、また、児童福祉や障害福祉等の社会福祉の個別対策について、その基礎的知識を理解・学ぶ事を目指します。										
到達目標	① 社会福祉の思想を説明できる。 ② 医療と福祉の連携を説明できる。 ③ 児童虐待等を発見した場合、通報することができる。										
授業の進め方	看護師等、医療職にとって必要なわが国の社会福祉を中心とした社会保障制度に関する法制度やその置かれている現状をテキスト及び関連資料またDVDや新聞記事を活用して、わかりやすく授業を行います。(グループワークを適宜行う予定です)										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	オリエンテーション:授業計画や社会福祉とは何かについて総論的な講義【GW】									
	2	社会福祉の現状Ⅰ:現在社会の家族の現状やその変化【講義】									
	3	社会福祉の現状Ⅱ:現在社会の地域社会の現状やその変化【講義】									
	4	社会福祉の現状Ⅲ:日本国憲法と社会福祉法制【講義】									
	5	社会福祉の現状Ⅳ:ノーマライゼーション等の社会福祉の理念【講義・GW】									
	6	諸外国の福祉の歴史:イギリス・アメリカ等における社会福祉の歩み【講義】									
	7	日本の福祉の歴史:日本における社会福祉の古代から社会福祉の歩み【講義】									
	8	社会福祉ニーズとは:社会福祉ニーズについての考え方【講義・GW】									
	9	児童福祉:児童福祉法等の児童福祉制度について【講義】									
	10	児童虐待:児童虐待防止法等の児童虐待への対策について【講義・GW】									
	11	障害者福祉:障害者総合支援法等の障害者福祉の制度について【講義】									
	12	高齢者福祉:介護保険法等の高齢者福祉制度について【講義】									
	13	母子及び父子並びに寡婦福祉:母子父子寡婦福祉法等の制度について【講義】									
	14	生活困窮者福祉:生活保護法等の低所得者福祉制度について【講義】									
	15	社会保障:年金等の社会保障制度について【講義】									
教科書	4訂版 社会福祉概論ーその基礎学習のためにー(中央法規出版)										
参考書・参考資料等	関係資料を授業の際、配布予定です。										
事前学習・事後学習	初回を除く各授業の最後に、次回の授業内容を伝えるので、教科書の該当する箇所を事前に目を通しておくこと。また授業の中間と最後にまとめの作業を行うので、それまでに資料等を振り返っておくこと。										
他の授業との関連	チーム医療論										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点及び筆記試験により評価を行う(期末筆記試験 60%、平常点 20%、コメントシート等 20%)。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問がある場合は、毎回の授業終了時に申し出てください。										
備考	新聞・テレビ等で社会福祉関連の記事・報道が出た時は出来るだけ、気をつけて見ておいて下さい。また、グループワークを行う際には積極的に参加してください。										

瀬戸内圏環境論 (Environmental Studies of the Seto Inland Sea Region)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●平 篤志 (TAIRA Atsushi)										
授業の目的	本授業は、瀬戸内地域の自然的環境のみならず、人文社会的環境も視野に入れて、瀬戸内圏の環境を総合的に理解することを目指す。分析の視点として、自然と人文を総合的に扱ってきた地理学的な視点を重視する。										
到達目標	①環境の概念について説明できる。 ②瀬戸内海の特徴について説明できる。 ③瀬戸内地域の特徴と課題について説明できる。										
授業の進め方	まず、環境に関する基本的概念を整理する。つづいて瀬戸内地域の自然的特徴と人文的特徴を把握する。合わせて瀬戸内海の特徴を地形面と海水の運動から理解した後、さらに人間活動による影響について考察する。引きつづいて瀬戸内地域の社会・経済的発展と環境変化について、歴史的視点を交え検討する。最後に瀬戸内圏の美しさと将来展望について考察し、まとめとする。授業では、ビデオも使用し、視覚的にも瀬戸内地域と瀬戸内海の理解向上に努めたい。講義を主体とするが、一部アクティブラーニングも取り入れる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	環境とは何か：地理学的視点の重要性									
	2	瀬戸内地域の特徴：自然的特徴、人文的特徴									
	3	瀬戸内海の特徴：地形的特徴と海水の運動、人間活動と環境変化									
	4	瀬戸内地域の歴史的発展：近世社会の発展と瀬戸内地域、農村社会の特徴 まとめの小レポート(1日目)									
	5	瀬戸内地域の発展と課題①：工業活動の拡大と地域開発、環境汚染と防止策									
	6	瀬戸内地域の発展と課題②：本州四国連絡橋と瀬戸内海新時代の到来									
	7	瀬戸内地域の発展と課題③：環境系新産業の創造、瀬戸内の美しさ									
	8	総括：瀬戸内圏環境の価値 一次世代に残すために まとめの小レポート(2日目)									
教科書	特に定めない。										
参考書・参考資料等	守田逸人・寺尾徹・平篤志編『大学的香川ガイド』(昭和堂)ほか参考となる文献は、授業中に紹介する。										
事前学習・事後学習	集中講義であるため、事前学習としては、日頃より瀬戸内地域に関するニュースに注目して欲しい。また事後学習としては、授業中に紹介する参考文献を読んで欲しい。										
他の授業との関連	教養講座・香川										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業への取り組みとレポートの総合評価 到達目標の達成状況を、授業への取り組み10%、レポート(授業の内容理解)90%により評価する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問がある場合は、適宜授業内に受け付ける。										
備考	2日間の集中講義であるので、単位取得には両日出席が求められる。										

国際保健論 (Global Health)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、Nlandu Ngatu (NLANDU Ngatu)、新田 恭子 (NITTA Yasuko)、依田 健志 (YODA Takeshi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)										
授業の目的	先進国と発展途上国における健康・いのち・医療・生活・教育・環境・収入等の格差を知り、その諸要因を考察し、さまざまな解決策を自分なりに紡ぎ出すことができる。 国際社会において医療人として自分に何ができるかを考える力を身に着ける。										
到達目標	①発展途上国における健康に関する諸問題について説明できる。 ②国境を越えた健康に関する諸問題について説明できる。 ③健康水準の国家間・地域間格差とその要因について説明できる。 ④問題解決の手段や活動について説明できる。 ⑤SDGsについて説明できる。 ⑥JICAのボランティア事業について理解できる。										
授業の進め方	講義形式で行う。 最後の講義ではJICA隊員 (現職、元を含む) による特別講義を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	国際保健概論 (Nlandu)【講義】 ODAとNGO、NPO その特性について (新田)【講義】 SDGsとNGOによる保健医療分野での国際協力活動事例 (新田)【講義】 リプロダクティブヘルス・栄養・労働衛生 (依田)【講義】 国際保健医療の研究と実践の方法 (依田)【講義】 感染症コントロールへの取り組み (末澤)【講義】 ガーナ共和国の紹介とJICAボランティア事業について (太田)【講義】 JICA隊員経験者による特別講義【特別講義】									
教科書	なし										
参考書・参考資料等	国際保健医療学 第2版 (杏林書院) 国際保健医療のお仕事 改訂2版 (南山堂) 安全保障の今日的課題 (朝日新聞社)										
事前学習・事後学習	常に新聞やニュースなどで国際保健に関することをチェックしておく										
他の授業との関連	国際交流や海外ボランティアを見越して、可能であれば英語Ⅰ～Ⅳの講義を受講することが望ましい										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として単位認定しない。 全8回の講義の中から1つを選択し、その内容についてレポート (A4レポート用紙2枚以上) を提出する。 提出されたレポートを評価する (表題や名前のないもの、誤字、脱字、文章未完、インターネットからのコピー＆ペースト (参考資料として取り入れるのはよいが、その際は出典を明らかにしたうえでの引用は可)、自身の意見のないもの、字体の統一がされていないもの等は減点対象となる)。インターネットからのコピー＆ペーストが主体であると判断したレポートは採点から除外し不可とする。 授業態度についても減点対象となる。 ＜評価の視点＞レポートでは調べる力、タイトルと内容の関連性、文章の論理性、オリジナリティを評価する。 ＜成績のフィードバック＞提出されたレポートは採点後返却する。希望する者には一定期間を設けて点数の開示を行う。										
オフィスアワー	太田 (研究室44)、または授業終了時に担当教員に申し出てください。										
備考											

組織論 (Organization Studies)												
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習	
担当教員	●片山 昭彦 (KATAYAMA Akihiko)											
授業の目的	組織とは何でしょうか？みなさん自身もそれぞれの立場、役割でいくつかの組織に所属し、行動しています。それは、みなさんの意識無意識の関係なく、日々繰り返され継続されて、発展あるいは衰退していきます。そして重要なことは、組織は単なる人々の集まりだけではなく、目的を達成するために組織化された集団であるということです。組織に関して、客観的に観察し検討し、主観的にみなさん自身の視点から感覚的に考察し、問題発見、解決への方法論等を組織として考えます。組織、組織力に関して学習し、得た知識、思考方法等が、今後のみなさんのキャリアの一助となることを目的とします。											
到達目標	①組織および組織運営の基礎的な事項を説明することができる。 ②組織運営について実践的に思考することができる。											
授業の進め方	講義形式とグループワーク、グループディスカッション等を併用します。 ケーススタディにおいては、ロールプレイングも行います。 授業の進捗状況、環境等により、授業項目順番、内容を変更する場合があります。											
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等										
授業スケジュール	1	組織とは何か？【講義】	組織の概念									
	2	組織力とは何か？【講義】 組織づくりのマネジメント	組織力の概念 時間軸:タイムマネジメント 空間軸:環境設定 場をつくる 組織形態 ラインアンドスタッフ組織等									
	3~4	組織の中の個人【講義・GW】	健全な競争意識 組織における個人としての行動 個人の動機づけ									
	5~6	組織の中の集団【講義・GW】	個人の意思決定 組織における集団としての行動 人と人をつなぐコミュニケーション リーダーシップの発揮									
	7	組織力を高める【講義・GW】	組織の変革 組織のライフサイクル 生き物としての組織 物語性とバイアス									
	8	ケーススタディとまとめ【講義】	組織内のストレスとサポート ケースから考察 まとめ									
	教科書	特に指定はしません。講義資料を、授業当日に配布します。										
	参考書・参考資料等	関連資料等は、講義1週間前にはWeb配信し、あわせて印刷資料として、講義内容必要分を当日に配布します。										
事前学習・事後学習	みなさんご自身が興味を持つ分野(芸能、スポーツ分野など)の「組織」に関して、新聞・雑誌・インターネットなど、時事的な資料等から情報入手しておいてください。											
他の授業との関連	チーム医療論											
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、グループワーク・グループディスカッションへの参加度(50%)、レポート(50%)により総合評価します。 なお、原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 ＜評価の視点＞ レポートは、「学習した事項の適切な理解」ができているかを確認し、「学んだ知識の適切な活用の可能性」の視点から評価します。また、レポートは、採点后、評価事項を記入し返却いたします。 フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせてください。なお、授業開講期間前後にメールにて連絡することがあるので、メールチェックするようにしてください。 評価結果について、疑問等がある場合は、成績受け取り後1週間以内に、遠慮なくメール等で連絡してください。大学事務局と調整後、再度評価事項を確認し、問い合わせがあった本人に、評価内容について説明いたします。(できるだけ対面で説明を実施したいと思いますが、状況により電話等で対応する場合があります。)											
	オフィスアワー	授業に関する質問等は、遠慮なくメールにて連絡してください。 E-mail : kata@sg-u.ac.jp 授業当日、休憩時間、終了後も可能です。										
		備考										
		グループワーク、グループディスカッション等もありますので、受講生みなさんの積極的な授業への参加を期待しています。										

医療統計学 I (Medical Statistics I)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●横山 佳充(YOKOYAMA Yoshimitsu)										
授業の目的	この授業においては「統計学」の基本的な考え方、指標の見方、分析手法を学ぶことを目的とします。「統計学」自体はデータを扱う学問で難しいというイメージがありますが、各種分野と非常に関連のある分野です。私自身は経済学関係で統計学と接する仕事をしていますが、みなさんの関連する医療をはじめとして、生物学や化学など必要とされる分野は多く存在します。本講義ではデータの分析に関する基礎知識を学ぶことで、みなさんの将来の仕事の一助になればと思います。										
到達目標	①代表値を用いて分布を表現できる。 ②正規分布の性質を理解し、応用的側面を利用することができる。 ③推定などの初歩的な推測統計学について説明できる。										
授業の進め方	授業はテキストにしたがって進めることを基本とします。授業においてはプロジェクターでスライドを投影することで行います。統計学においては、実際コンピュータとの関係も重要になるので、コンピュータを用いた解説も行いたいと思います。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	授業の概要	統計学とはどのような学問かの解説								
	2	データの図示	データのグラフ化を学ぶ								
	3	データの集計	度数分布表とヒストグラムを学びデータを整理								
	4	情報の集約	基本統計量(分布の中心を表す指標)を考察								
	5	ばらつきの尺度	基本統計量(データのばらつきを表す指標)を導入する								
	6	情報の分析方法	基本統計量のまとめを行い、統計の尺度を確認する								
	7	正規分布の導入	正規分布の性質(平均と標準偏差の重要性)を考察								
	8	標準正規分布	Zスコアと偏差値を学び、標準正規分布の導入の用意をする								
	9	中心極限定理	中心極限定理を学び、標本平均の分布の状態を確認する								
	10	推定	推定を学び信頼区間を構成する								
	11	検定	仮説検定の基本的概念を学ぶ								
	12	演習1	ExcelやJMPを利用し基本統計量を学ぶ								
	13	演習2	ExcelやJMPを利用し正規分布の特性を確認								
	14	演習3	ExcelやJMPを利用し推定を学ぶ。								
	15	演習4	ExcelやJMPを利用し検定に触れる。								
教科書	新・涙なしの統計学(新世社)										
参考書・参考資料等	P.G.ホーエル『初等統計学』(培風館)、森棟公夫『教養 統計学』(新世社)										
事前学習・事後学習	適時、演習問題の指定や、次回授業の必要な部分などを指摘する場合があるので、各自授業の事前事後に対応すること。また、レポート等を課す場合があります。										
他の授業との関連	卒業研究										
成績評価方法・基準・フィードバック	授業中の演習、期末筆記試験によります。到達目標の達成状況を、最終試験70%、レポートの評価30%で判断します。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	授業が行われる前後の時間で対応します。 なお、メールにて質問等ある場合にはyokoyama.yoshimitsu@kagawa-u.ac.jpまで連絡してください。										
備考	授業中の私語は慎むこと。また、授業中のスマホ等の使用は禁止です。										

医用電子工学 (Medical Electronics Engineering)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●生越 重章 (OGOSE Shigeaki)										
授業の目的	臨床検査業務における医用機器の取り扱いに際して、その動作原理の理解は不可欠である。本講義では、動作原理理解のための基礎知識としての電子技術一般について学ぶとともに、電気的安全対策について学び、検査の精度や信頼性の向上と安全性確保を指向した考え方を身につけることを目的とする。										
到達目標	①電子素子、電気・電子回路の動作原理・特性について理解し、説明できる。 ②生体の電気的特性について理解し、説明できる。 ③医用機器の電気的安全性確保の必要性和その対策について理解し、説明できる。										
授業の進め方	教科書に基づいた板書による講義を行う。補足的にプロジェクトによる映像提示も併用する。必要に応じて電子素子などの実物に触れ理解を深める。医用工学の役割、臨床検査と生体物性について述べたのち、医用電子工学にかかわりの深い電気回路・電子回路の基礎について解説する。つぎに、情報処理技術に関してデジタル信号、通信の基礎などについて解説する。さらに、臨床検査において使用される医用センサ・トランスデューサの種類と動作原理、電撃に対する生体反応、医用機器の安全対策等について概説する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	医用電子工学の役割、臨床検査と生体物性									
	2	電磁気学の基礎 (電荷と電場、静電誘導、電流と磁場、電磁誘導など)									
	3	電気回路の基礎 (直流回路:オームの法則、キルヒホッフの法則)									
	4	電気回路の基礎 (直流回路:ブリッジ回路、電気エネルギーと電力量など)									
	5	電気回路の基礎 (交流回路の基本的性質)									
	6	電気回路の基礎 (交流回路:インダクタの働き)									
	7	電気回路の基礎 (交流回路:キャパシタの働き)									
	8	電気回路の基礎 (過渡現象と時定数など)									
	9	電子回路の基礎 (半導体と性質と特性)									
	10	電子回路の基礎 (増幅器回路:トランジスタ増幅回路、演算増幅回路)									
	11	電子回路の基礎 (増幅器の周波数特性、フィルタ回路)									
	12	電子回路の基礎 (電源回路など)									
	13	デジタル信号 (論理代数、論理回路など)、通信の基礎 (変調・復調)									
	14	医用センサ・トランスデューサの種類と動作原理									
	15	電撃に対する生体反応、医用機器の安全対策、非常電源									
教科書	最新臨床検査学講座 医用工学概論 (医歯薬出版) 補足説明のための資料を適宜配付する										
参考書・参考資料等	大内淳義・松尾正之 医用電子回路 (コロナ社)、中島章夫編 臨床工学講座 医用電子回路 (医歯薬出版)、三島清・荻原利彦 基礎から学ぶ医用工学 (大竹出版)										
事前学習・事後学習	三角関数、微分・積分などの数式を取り扱うものについては予習・復習が望まれる。複素数・ベクトルなどを高校で学修していないことを前提に授業を進めることは時間的に難しいので相応の自学が必要である。										
他の授業との関連	医用電子工学演習、物理学、物理学演習、情報科学Iなど										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を期末筆記試験 (80%)、レポート (20%) で評価し、合計60%以上を合格とする。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	疑問点はできる限りその場で解決すること。毎講義終了後、質問に対応する。 授業時間外の質問は、aki_ogose@yahoo.co.jp で受け付ける。										
備考											

医用電子工学演習 (Medical Electronics Engineering Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	演習
担当教員	●生越 重章 (OGOSE Shigeaki)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	臨床検査業務における医用機器の取り扱いに際して、その動作原理の理解は不可欠である。 本演習では、「医用電子工学」での学修内容に基づいて、データの精度・信頼性の判断、医療機器の故障や安全性に対処できるように、基本的な電子計測技術を習得する。										
到達目標	①基本的な電子回路を扱うことができる。 ②オシロスコープなどの基本的な測定器を用いて計測ができる。 ③電子回路や医療機器に関する計測結果に基づいて、動作原理・特性について説明できる。										
授業の進め方	実験形式の授業である。まず、実験に関するガイダンスを行う。次に、オシロスコープなど基本的な測定器の使用法を学ぶとともに、実験レポートの書き方（データ取り扱いの注意点など）を学ぶ。その後、2～3人で構成される班分けに従って、与えられた電子回路に関するテーマについてローテーションにより実験を行う。その結果をレポートとしてまとめて提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	基本的な測定器の使用法（オシロスコープ実験）とレポートの書き方									
	2～3	ダイオードの特性（以下のテーマについてローテーションで実施）									
	4～5	トランジスタの特性									
	6～7	交流増幅回路の特性									
	8～9	オペアンプ回路の特性									
	10～11	差動増幅回路の特性									
	12～13	センサ回路の特性									
	14～15	医用機器の電気的安全試験									
教科書	プリント(実験手引・レポートの書き方、実験実施上の注意事項等)配付予定										
参考書・参考資料等	医歯薬出版 医用工学概論 プリント(オシロスコープの使用法)配布予定										
事前学習・事後学習	事前学習 時間内の実験終了のため、予め実験内容を理解しておくとともに要領よく実施すること。 事後学習 レポートの再提出を避けるため、レポートチェックシートを各レポートに付けること。										
他の授業との関連	医用電子工学での学修内容に基づいた演習										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、以下の方法・基準により評価する。 全テーマについて実験を行い、提出されたレポートの評価が60点以上（100点満点）を合格とする。レポートは必ず自分で作成するものとし、他者のファイル（同一班で取得した数値データを除く）を使用してはいけない。万一、その事実が判明したときは、提供者とともに不合格となる。（原則としてパソコンでレポートを作成すること。） レポート評価については、成績評価終了後に一定期間開示し、評価内容を説明する。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	疑問点はできる限りその場で解決すること。 授業時間外の質問は、臨床検査学科共同研究室もしくはメールにて適宜受け付ける。 e-mail: aki_ogose@yahoo.co.jp（生越）、kondou-a@kagawa-puhs.ac.jp（近藤）										
備考	(1)実験に支障のない服装で参加し、事故のないようにすること。 (2)実験装置は精密機器であるので取り扱いには十分注意すること。誤配線などによる実験装置類の破損事故が多発しているので慎重に取り組むこと。 * 実務経験のある教員 近藤（臨床検査技師）										

顕微鏡技術論 (Microscope Technology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	組織、細胞、血液、微生物等の生物試料の形態学的特徴を捉えるための手段として用いられる生物顕微鏡とその各種観察法について考察し、実際に操作する。また、透過型、走査型電子顕微鏡の原理、技術についても考察する。										
到達目標	①各種生物顕微鏡を用いて観察ができる。 ②各種生物顕微鏡の特徴やその使用目的について説明できる。 ③電子顕微鏡の原理、技術について説明できる。										
授業の進め方	スライドとプリントを用いて講義を中心に授業を進め、生物顕微鏡については実習を行って具体的な操作方法を学ぶ。電子顕微鏡については、講義を行ったあとに電子顕微鏡の実際について見学を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	講義:走査型電子顕微鏡、透過型電子顕微鏡(水津)									
	2	講義:顕微鏡の概要(森西)									
	3	講義:顕微鏡の基本調整と操作法①(森西)									
	4	実習:顕微鏡の基本調整と操作法①(太田、末澤、森西、近藤)									
	5	講義:各種顕微鏡の観察法とレンズ清掃法、実習:顕微鏡の基本調整と操作法②(近藤)									
	6	実習:各種顕微鏡の観察(太田、末澤、森西、近藤)									
	7	実習試験									
	8	筆記試験									
教科書	顕微鏡の基礎知識(オリンパステクノラボ編集冊子)										
参考書・参考資料等	特に指定しない										
事前学習・事後学習	最終日に試験を行う予定なので必ず復習を行うこと。										
他の授業との関連	解剖組織学、臨床血液学、病理検査学、細菌検査学、一般検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、筆記試験80%、実習試験20%により評価する。 ＜評価の視点＞試験では、顕微鏡に関する知識と理解力、応用力を評価する。 ＜フィードバック＞試験の結果については、試験後に一定期間開示する。										
オフィスアワー	担当教員研究室、顕微鏡観察室等で適宜対応										
備考	* 実務経験のある学内教員 太田、森西、近藤(臨床検査技師)										

臨床医学Ⅰ (Clinical Medicine Ⅰ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)										
授業の目的	近年、少子高齢化や疾病構造の変化、科学技術のめざましい進歩等により、医学・医療を取り巻く環境はめまぐるしく変化しており、医療従事者にはこれらの変化に的確に対応できる能力が求められている。 本講義では、将来の医療従事者への登竜門として、疾病の分類と成り立ち、主な病因、症候などを理解するとともに、医療従事者の倫理や患者への接遇、医療の仕組みや社会との関わりなどを理解し、臨床医学の基本的事項を習得する。										
到達目標	医療従事者の役割、日本の医療制度や医療制度の抱える問題点および疾患の原因や兆候などが、論理的に説明できる。										
授業の進め方	講義では、まず健康と病気の概念、患者の心理や権利、医療と社会の関わりなどを学習し、医療の仕組みを理解する。また、現代社会における医療の様々な問題についても自ら探究し、考察する。次いで、疾病の分類と成り立ち、病因論、症候論などを系統的に学習し、臨床医学に必要な基本的事項を習得する。講義はプリントを用いて行い、講義終了前にまとめの問題を解いてそれらに関する理解度を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	健康と疾患(1)	病気と病人								
	2	健康と疾患(2)	医療と社会								
	3	健康と疾患(3)	医療従事者の倫理								
	4	疾患の原因(1)	遺伝、腫瘍、感染								
	5	疾患の原因(2)	老化、心因、医原病								
	6	診断学	診断学と臨床検査								
	7	症状および徴候(1)	全身症状								
	8	中間試験									
	9	症状および徴候(2)	神経系の症状および徴候								
	10	症状および徴候(3)	消化器系の症状および徴候(前編)								
	11	症状および徴候(4)	消化器系の症状および徴候(後編)								
	12	症状および徴候(5)	呼吸・循環器系の症状および徴候								
	13	症状および徴候(6)	腎泌尿器系・血液系の症状および徴候								
	14	症状および徴候(7)	その他の症状および徴候								
	15	将来の展望	臨床検査の課題								
教科書	特に指定はない。講義ではプリントを配布する。										
参考書・参考資料等	臨床検査学講座 臨床医学総論・臨床検査医学総論(医歯薬出版) 臨床検査技術学 医学概論・臨床医学総論・臨床病理学総論(医学書院) 内科診断学(医学書院) 学生のための医療概論(医学書院)										
事前学習・事後学習	復習をしっかりとすること。										
他の授業との関連	臨床医学Ⅱ										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として、総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 到達目標の達成状況を、筆記試験(中間・期末)で評価する。(100%) フィードバックについては、試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付ける。(研究室32)										
備考	* 実務経験のある教員 樋本(医師)										

検査学概論 (Introduction to Medical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	1	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	①臨床検査学とはどのようなものか、また、それを専門職として行う臨床検査技師はどのようにして誕生してきたかなど、臨床検査に関わる歴史、臨床検査の特徴・内容等を具体的に学習し、検査学への意欲を高める。 ②知り得た知識や特別講義などから、自らが進む方向を模索して考察する。										
到達目標	①臨床検査学の概要を理解する。 ②個々の将来と夢について具体的に考えることができる、 ③自分自身の将来像について討論およびレポートすることができる。										
授業の進め方	・講義により、臨床検査学の概要を理解する。 ・臨床検査部門ごとの検査の重要性を説明する中で、他部門との関連性や医療・環境の中での検査学の必要性を考察できるように進めていく。 ・臨床検査学における研究についての成果や重要性についても説明する。 ・最後に発表することで、自らの考えを整理し、表現する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	自己紹介・医学の歴史【講義】									
	2	臨床検査の歴史【講義】									
	3	臨床検査技師(医療従事者)の倫理【講義】									
	4	臨床検査学1: 化学検査学・免疫検査学・血液検査学【講義】									
	5	臨床検査学2: 細菌検査学・病理検査学・一般検査学【講義】									
	6	臨床検査学3: 生理検査学・緊急検査学・遺伝子検査学・他【講義】									
	7	臨床検査技師の役割について 【講義・討論】									
	8	将来の展望などについて、討論および発表 【討論・発表】									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	臨床検査法提要(金原出版)										
事前学習・事後学習	事前学習: 臨床検査学の種類と内容の確認 事後学習: 興味を持った臨床検査学についての個人学習										
他の授業との関連	全ての臨床検査専門科目が関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況をレポート等(80%)、学習態度(20%)により総合的に評価する。 ・評価の視点: 臨床検査概論を学習し、自身の将来像に関して、前向きかつ具体的に考えているかを評価する。 ・授業終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室36で適宜対応										
備考	* 実務経験のある教員 多田(臨床検査技師)										

臨床検査学体験実習 (Introductory Medical Technology Training)											
必修・選択の区別	選択	学年次	1	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、 樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、水津 太 (SUIZU Futoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、小河 佳織 (OGOKU Kaoru)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)、青野 りよ (AONO Riyo)										
授業の目的	① 臨床検査技師を目指すための動機付け科目として、臨床検査技師が実際に臨床現場で測定している検査法を体験し、その概要を知る。 ② 検査法の原理や特徴を学ぶ上で教育カリキュラムとの関係を把握し、今後、進むべき方向を考察する。 ③ 病院見学では、医療における臨床検査の役割について考え、医療人としての自覚を促し、自ら学ぶ姿勢について認識する。										
到達目標	臨床検査の体験から、個々の興味を分析し、興味ある分野について説明することができる										
授業の進め方	オムニバス方式でそれぞれの内容を体験する。病院見学では、1年担任の指示に従う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	臨床化学 血糖値を知ろう (多田、太田)									
	2	血液 顕微鏡で血液細胞を見てみよう (池亀、近藤)									
	3	遺伝子 DNAの抽出 (岡田)									
	4	臨床免疫 ABO血液型の検査 (宮川、青野)									
	5	微生物 手のひらの細菌を見よう (奥田、末澤)									
	6	病理 細胞を染めてみよう (水津、森西)									
	7	臨床生理 生理検査を体験しよう (樋本、太田、大栗、小河)									
	8	病院見学 県立中央病院見学 (1年担任教員)									
教科書	資料配布										
参考書・参考資料等	臨床検査法提要(金原出版)										
事前学習・事後学習	興味を持った分野に関しては、レポートの形で学習したことをまとめる。										
他の授業との関連	各分野の学内実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・興味を持った分野の内容についてまとめたレポートを、担当教員が評価する(100%)。 〈評価の視点〉 「レポートでは、興味を持った実習内容の理解力・記述力を評価する」 ・レポート評価については、提出後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、臨床検査学科長室または開講日授業終了後に受け付けます。										
備考	講義項目・順序は変更することがある。県立中央病院の見学の日程は、本学と病院側の話し合いで決定される。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)、樋本(医師)、岡田(医師)、多田(臨床検査技師)、池亀(臨床検査技師)、宮川(臨床検査技師)、太田(臨床検査技師)、大栗(臨床検査技師)、小河(臨床検査技師)、森西(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)、青野(臨床検査技師)										

生理学実習 (Physiology Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●古山 達雄 (FURUYAMA Tatsuo)、新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	生体の生理的機能について、さまざまな手法を用いて生理現象の観察と記録をおこない、そのような現象および外部刺激に対する反応がみられるメカニズムを理解する。										
到達目標	生理学I、IIで学んだ知識を利用し、実習中に自ら観察した現象を説明できる。										
授業の進め方	班に分かれての実習										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	心電図	心電図の測定、各種タスクによる自律神経系の影響、心音との関連								
	3~4	血圧	血圧の測定、各種タスクによる自律神経系の影響								
	5~6	内分泌	絶食時およびグルコース負荷による血糖値の時間変化								
	7~8	代謝	体温の測定と発汗機構、最大酸素摂取量の測定								
	9~10	体性感覚	皮膚知覚・深部知覚の測定								
	11~12	特殊内臓知覚	味覚の測定(ろ紙ディスク・電気味覚検査法)と 嗅覚測定(基準嗅覚検査法)、味覚受容体の構造と機能								
	13~15	筋電図	体肢筋表面筋電図/負荷筋電図/誘発筋電図および神経伝導速度の測定								
教科書	実習用のプリントを配布する。										
参考書・参考資料等	トートラ 人体の構造と機能 第15版(丸善出版)										
事前学習・事後学習	実習の内容を把握しておくことと、必要なものを用意するために配布される実習書を事前に読んでおくこと。実習後は生理学で用いた教科書などを調べてレポートを作成する。										
他の授業との関連	生理学										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、レポート100%により評価する。 ＜レポートの評価基準＞ 1. フォーマット(表紙、目的、方法、結果、考察、文献)を守っているか 2. 読み手に分かりやすく書いているか 3. 内容を理解したうえで書いているか 4. 考察の内容が論理的に書かれているか 最終実習の2週間後をめどにレポートを返却します。評価等に疑問等があれば随時説明するので古山まで連絡してください。 原則として総実習数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	12:00~13:00 研究室35										
備考	* 実務経験のある学内教員 古山(医師)、新美(臨床検査技師)										

生化学実習 (Biochemistry Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	生体を構成する化学物質を生体試料から抽出し、分離、精製、分析、評価する手法を習得することを通して、生体物質の性質や代謝への理解を深める。										
到達目標	① 実験器具を正確に操作し基礎的な生化学実験を遂行できる。 ② 実験によって得られた成果を解釈し正確に報告するレポートを作成できる。										
授業の進め方	実験内容、理論、注意点等を全体へ説明した後、班に分かれて実験を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	糖の定性									
	3~4	アミノ酸の定性									
	5~6	タンパク質の定量									
	7~8	脂質の抽出とTLCによる分析									
	9~10	酵素の活性測定									
	11~12	鉄イオンの定量									
	13~15	PCRによる遺伝子多型分析									
教科書	使用しない。実習書を配布する。										
参考書・参考資料等	必要に応じて指示する。										
事前学習・事後学習	予め実習書を読み、背景にある生化学的理論を理解するとともに実験の流れを整理しておく。 実習後はレポートを作成する。疑問点があれば調査、質問するなどして解決を試みる。										
他の授業との関連	生化学Ⅰ、Ⅱで学習した内容を踏まえた実習である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況をレポートにより評価する。 レポートは ① フォーマットを守って作成していること ② 実験結果を正確に報告していること ③ 実験結果に対して根拠に基づいて論理的に考察していること ④ 読みやすく書かれていること の4点で主に評価する。 レポートは毎回返却し改善すべき点についてフィードバックを行う。 原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられない。 評価内容について個別のフィードバックが必要である場合は、『オフィスアワー』に準ずる方法にて評価理由を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に随時対応する。 メールでも受け付ける (niimi-k@kagawa-puhs.ac.jp)。										
備考	・実験に適した服装で参加すること。 ・やむを得ず欠席する場合は事前に連絡すること。 ・準備の都合上、実験の順序を変更する場合がある。										

薬理学(Pharmacology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●小坂信二 (KOSAKA Shinji)、田中裕章 (TANAKA Hiroaki)、芳地 一 (HOUCHI Hitoshi)										
授業の目的	ヒトの生理機能と病態及び薬物の作用機序を理解し、薬物治療に適用する薬に関する知識を習得する。臨床でよく用いられる薬について、薬効と副作用を体系的に理解し、疾患ごとの薬物治療を習得する。										
到達目標	①体内における薬の動き(体内動態)を説明できる。 ②主な生活習慣病に使用する薬を説明できる。 ③抗がん剤の作用機序と薬物療法を説明できる。 ④中枢神経系疾患で使用する薬の作用機序と薬物療法を説明できる。 ⑤救命救急時に使用する薬を説明できる。 ⑥呼吸器疾患に使用する薬の作用機序と薬物療法を説明できる。 ⑦関節リウマチに使用する薬の作用機序と薬物療法を説明できる。 ⑧消化器系疾患に使用する薬の作用機序と薬物療法を説明できる。 ⑨臨床でよく遭遇する疾患に使用する薬の作用機序と薬物療法を説明できる。										
授業の進め方	パワーポイントとプリントを用いて授業を進行する。授業は教科書を用いて行うので、教科書をしっかり読み学習することが大切である。講師は香川大学部附属病院薬剤部(小坂・田中)、徳島文理大学香川薬学部(芳地)が担当する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15	医薬品総論(芳地) 主な生活習慣病に使用する薬(芳地) 救命救急時に使用する薬:ショック(芳地) 救命救急時に使用する薬:麻酔(芳地) 感染症に使用する薬1:抗菌薬(小坂) 感染症に使用する薬2:消毒薬(小坂) がん・痛みに使用する薬1:抗がん薬と副作用(田中) がん・痛みに使用する薬2:がん性疼痛(田中) 脳・中枢神経系疾患で使用する薬1:(田中) 脳・中枢神経系疾患で使用する薬2:(田中) アレルギー・免疫不全の患者に使用する薬:呼吸器(小坂) アレルギー・免疫不全の患者に使用する薬:リウマチ(小坂) 消化器系疾患に使用する薬(田中) 消化器系疾患に使用する薬(田中) その他の症状に使用する薬(小坂)									
教科書	ナーシング・グラフィカ 疾病の成り立ちと回復の促進(2) 臨床薬理学 第6版 古川裕之編(メディカ出版)ISBN: 978-4-8404-7834-2										
参考書・参考資料等	系統看護学講座 疾病の成り立ちと回復の促進③薬理学 吉岡光弘著(医学書院) ISBN:978-4260031844 NEW薬理学第7版 田中千賀子著(南江堂)ISBN: 978-4-524-26175-8 治療薬マニュアル4 矢崎 義雄 監修(医学書院)ISBN:978-4-260-05359-4										
事前学習・事後学習	教科書の該当する章を読む。①②1・2章、③④6章、⑤⑥5章、⑦⑧3章、⑨⑩4章、⑪⑫7章、⑬⑭8章、⑮9章 教科書にてでくる医薬品は医薬品集等で効能効果等を調べる。 PMDA検索サイト https://www.pmda.go.jp/PmdaSearch/iyakuSearch/										
他の授業との関連	健康食品学、健康食品学関係法規										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、課題レポート80%、授業態度 20% で評価する。 レポート課題は別途、小坂から指定する。フィードバックはオフィスアワーに準じて問い合わせること。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	授業の質問・相談は、香川大学医学部附属病院薬剤部・小坂までメールで連絡してください(随時)。 E-mail : kosaka.shinji@kagawa-u.ac.jp										
備考	薬の薬理作用には、病気の治療に役立つ作用(有効性)と期待しない作用(副作用)がある。副作用の初期症状を見逃さないように臨床実習で役立ててください。										

公衆衛生学Ⅰ (Public HealthⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●竹内 一 (TAKEUCHI Hajime)										
授業の目的	公衆衛生の目的は、組織的な社会の活動を通じて、地域社会の人々の疾病を予防し、健康の増進を図ることである。 公衆衛生学Ⅰでは、社会における集団の健康と疾病の状況およびその影響要因を把握し、公衆衛生の向上に貢献するための基本的知識、態度を修得する。										
到達目標	①健康と疾病の概念について説明できる。 ②集団の健康と疾病の現状およびその影響要因を把握するための指標を説明できる。 ③疾病の現状とその予防について説明できる。										
授業の進め方	公衆衛生学Ⅰでは、主に保健衛生について学習します。公衆衛生の意義、保健・医療における疾病予防の概念、わが国の健康水準等について学習し、疾病を予防するための、地域、学校、産業の場における公衆衛生の制度と保健衛生活動の実際について学習していきます。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	健康と公衆衛生 (国際保健等)	公衆衛生とは、健康の概念の変遷、ヘルスプロモーション【講義】								
	2	疾病の予防 (衛生行政)	疾病リスク、健康増進法、健康日本21 (2次)【講義】								
	3	保健統計 (1)	人口静態統計・人口動態統計【講義】								
	4	保健統計 (2)	死因統計、疾病統計【講義】								
	5	感染症 (1)	感染症の動向、感染症対策【講義】								
	6	感染症 (2)	感染症の動向、予防接種【講義】								
	7	地域保健 (多職種連携とチーム医療)	地域包括ケアシステム、在宅医療、成人保健、高齢者保健、母子保健【講義】								
	8	産業保健	労働安全衛生法、職業病とその予防【講義】								
教科書	シンプル衛生公衆衛生学 鈴木庄亮・久道茂/監修 小山 洋・辻 一郎/編集 (南江堂) 別に講義資料を配布する。										
参考書・参考資料等	公衆衛生がみえる (メディックメディア)、国民衛生の動向 (最新版) (厚生統計協会)										
事前学習・事後学習	事前学習: シラバスに示した項目について教科書を読み、専門用語などの予備知識を得ておくこと。 事後学習: 授業内容を他の科目で学習した内容と関連付けて総合的に理解すること。また、保健・医療の社会性を理解するために新聞、テレビ等の報道内容にも常に目を向けるようにすること。										
他の授業との関連	公衆衛生学Ⅱ、公衆衛生学Ⅲ、臨床検査関係法規、微生物学										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、レポート・課題提出 (10%)、期末筆記試験 (90%) により評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 なお、原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	メール可 E-mail: takeuchih@kph.bunri-u.ac.jp										
備考	広範囲の内容を8回の講義で網羅します。事前学習を行って講義に臨んでください。										

公衆衛生学Ⅱ (Public Health Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●比江島 欣慎(HIEJIMA Yoshimitsu)										
授業の目的	人の健康・生命に関連する分野において、生活習慣と疾病の発生、治療と症状改善などの因果の関係は、極めて関心の高い話題であり、そうした因果を推論するために、多くの研究・調査が実施されている。研究・調査を正しく実施したり、その結果を基に正しい意志決定を行ったりするためには疫学や統計学の知識は必要不可欠である。この講義では、因果推論に必要とされる疫学や統計学の基本的な知識を身につけ、研究デザインやバイアスを考慮した因果の指標の計算や解釈など、その応用ができるようになることを目指す。										
到達目標	① 因果推論に関する基本知識を説明できる ② ①の知識を事象理解に適用できる ③ 研究デザインについてその特徴を説明できる ④ 分析結果に基づいて考察することができる										
授業の進め方	① テキストで予習する ② 対面授業に参加し、ノートをとる ③ ②のノートとテキストやオンデマンド教材を使って復習する ④ 知識確認テストを受ける ⑤ ノートを整理して提出する										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	「医療統計学Ⅰ」の復習(データサイエンスの基本、検定の考え方) 保健医療分野におけるエビデンス(因果推論とランダム化比較試験) 観察研究(コホート研究、ケースコントロール研究) 観察研究におけるデータ分析(リスク比とオッズ比) 因果推論演習 バイアスとその対処法 スクリーニング(診断) 保健医療現場での疫学(医療安全、感染対策など)									
教科書	「ぜんぶ絵で見る医療統計」比江島欣慎(羊土社)										
参考書・参考資料等	公衆衛生学Ⅰのテキスト										
事前学習・事後学習	事前学習: 指定された資料を使って予習する 事後学習: 講義・演習の内容をノートに整理する										
他の授業との関連	・ 本科目は「クリニカルデータサイエンス教育プログラム」の該当科目である ・ 「医療統計学Ⅰ」を基礎とする科目である ・ 「公衆衛生学Ⅰ」、「公衆衛生学Ⅲ」と関連する科目である										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を知識確認テスト(約10%)、演習課題(約10%)、期末試験(約80%)で総合的に評価する(ただし、総授業数の3分の2以上の出席がなければ原則として評価を受けられない) 評価内容: 基本知識が身についているか、科学的に因果推論に関する思考ができているか フィードバック: 評価結果の確認、評価結果の確認期間を設けて対応する										
オフィスアワー	授業の前後、および研究室46(要事前連絡)にて対応する										
備考											

公衆衛生学Ⅲ (Public Health Ⅲ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●桐山 賀充 (KIRIYAMA Yoshimitsu)										
授業の目的	地球生態系に暮らす人間の健康と環境の関係を総合的に理解し、さまざまな環境因子による健康影響と規制対策についての知識を身につけるとともに、環境リスク評価能力を養う。										
到達目標	①人間の日常活動を取り巻く環境の成り立ちとあるべき姿を総合的に説明できる。 ②環境と健康の関係を説明できる。										
授業の進め方	過去の人類の歴史に遡って時系列的に考察する中で、古代医療、産業革命、近代医療、環境汚染・公害問題等の展開を通じて人間生活における環境の重要性を理解する。ついで、環境と人間の相互関係、環境規制の方式について学習し、空気・水環境、下水廃棄物処理、栄養・食環境、屋内・屋外環境（一般生活環境、学校環境、労働環境）における環境リスクの現状と課題、環境リスクモニタリング・評価手法等について学習する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	総論1：人間－環境系、生態系、食物連鎖、環境汚染、量－反応(影響)関係、 環境リスク対策									
	2	総論2：環境汚染・公害、地球環境、環境化学物質問題、内分泌攪乱化学物質、 ダイオキシン問題									
	3	大気環境1：物理的環境要因(温熱条件の測定と評価、暑熱の影響、騒音、気圧)									
	4	大気環境2：一酸化炭素、硫黄酸化物、窒素酸化物、浮遊粒子状物質、 揮発性有機化合物 (VOCs)									
	5	水環境1：上水道、水道水質基準、下水道、下水処理									
	6	水環境2：水質汚濁、排水基準									
	7	廃棄物：一般および産業廃棄物の処理、有害廃棄物の移動および管理、バーゼル条約									
	8	屋内環境：シックハウス問題、環境タバコ煙、レジオネラ症									
教科書	シンプル衛生公衆衛生学 鈴木庄亮・久道茂/監修 小山 洋・辻 一郎/編集(南江堂)、別に講義資料を配布する。										
参考書・参考資料等	特に指定しない。										
事前学習・事後学習	事前学習：シラバスに示したキーワードについて教科書、インターネット等であらかじめ予備知識を得ておくこと。 事後学習：授業内容、配布資料もまじえて、総合的に理解すること。また、保健・医療の社会性を理解するために新聞、テレビ等の報道内容にも常に目を向けるようにすること。										
他の授業との関連	公衆衛生学Ⅰ、公衆衛生学Ⅱ、臨床検査関係法規										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、平常点(10%)、期末筆記試験(90%)により評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	メール可。 E-mail: kiriyamay@kph.bunri-u.ac.jp										
備考	広範囲の内容を8回の講義で網羅します。事前学習を行って講義に臨んでください。										

食品衛生学 (Food Hygeine)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●中内 康起 (NAKAUCHI Yasuki)										
授業の目的	食品衛生とは、飲食に起因する衛生上の危害の発生を防止し安全性を確保することにより、消費者が安心して食品を摂取し、健康の保護を図ることにある。 食物環境では、食中毒の発生、食品に起因する新しい微生物による感染症、BSE、遺伝子組み換え食品、食物アレルギーなど多くの問題をかかえており、これらを学び深く追求することにより知識の幅を拡大する。 食品を介して起こり得る健康被害の発生とその防止のために、今何が行われているかについて理解し、食をとりまく安全性の確保のあり方と食品衛生管理者・食品衛生監視員の養成コース(卒業後資格取得)として学習する。										
到達目標	①食中毒について説明できる。 ②食品に係る衛生管理について説明できる。										
授業の進め方	本講義では、プリントに沿って、各論の講義をすすめるとともに、視覚的理解を容易にするために、パワーポイントによるプレゼンテーションを基本とする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	食品行政・法規 食品衛生行政の沿革と関連法規									
	2	食品と微生物 食品中の微生物と由来									
	3	食品による健康被害 微生物による食中毒発生状況と予防									
	4	食品による健康被害 自然毒などによる食中毒発生状況と予防									
	5	食品による健康被害 食品による感染症と寄生虫病									
	6	食品による健康被害 化学物質による汚染や食品の変質									
	7	添加物・表示 食品添加物、食品の表示、食品の器具、 容器包装及び台所洗剤の規格と基準									
	8	衛生管理・食の現状 食品の衛生管理、わが国及び世界の食を取り巻く状況									
教科書	特に指定しない。プリントを配布する。										
参考書・参考資料等	「食べ物と健康食品衛生学」、管家祐輔・白尾美佳編著：(光生館) 図解食品衛生学第5版、一戸正勝・西島基弘編著：(講談社) 等										
事前学習・事後学習	配布するプリントを授業前後に読むこと										
他の授業との関連	微生物検査学、細菌検査学実習、ウイルス・真菌検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、授業態度等を参考にして、基本は期末筆記試験により評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	連絡先(087-867-0719) mail : yasuki8064@gmail.com										
備考	要望や質問は講義中、講義後に受け付ける。 健康食品管理士認定資格取得を目指す場合は履修が必要である。										

環境・食品検査学実習 (Environment and Food Inspection Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、安永 恵 (YASUNAGA Megumi)、長尾 裕一 (NAGAO Yuichi)、千原 涼子 (SENBARA Ryoko)、小林 龍太郎 (KOBAYASHI Rintarou)、小河 佳織 (OGO Kaoru)										
授業の目的	公衆衛生学に関連する検査手技を学ぶことによって、公衆衛生に関する幅広い知識の習得と検査の必要性を学ぶ。										
到達目標	①公衆衛生学に関連する検査技術および検査の重要性について、説明できる。 ②ふきとり検査等の環境検査を実習して体験する。										
授業の進め方	大気検査、河川等の水質検査、食品添加物・食品微生物等の化学分析および微生物検査の基礎について、オムニバス方式で講義と実習を行い、結果について考察させレポートを提出させる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	大気環境について(大気汚染物質の測定) (長尾)									
	3~4	水環境について(全窒素、全りん)の分析) (小林)									
	5~6	水環境について(溶存酸素の分析) (千原)									
	7~8	油脂の化学的変敗について(酸価・過酸化値の分析) (安永)									
	9~10	食品添加物の使用基準について(発色剤 亜硝酸ナトリウムの分析) (安永)									
	11~12	食品衛生法・規格基準・指導基準・GMP・HACCP (池亀、小河)									
	13~14	ふきとり検査、乳酸菌数、指導基準食品(生菌数・大腸菌群数) (池亀、小河)									
	15	判定 (池亀、小河)									
教科書	最新臨床検査学講座 公衆衛生学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	食品衛生法、食品衛生検査指針(厚生労働省)、衛生試験法・注解 日本薬学会編、臨床検査技術学3 公衆衛生学(医学書院)										
事前学習・事後学習	関連の参考書等で、予習復習をしておく。										
他の授業との関連	公衆衛生学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、食品衛生学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況をレポート・実習態度(基準:レポート80%・実習態度等20%)により評価する。学生へのフィードバック方法は、レポート提出後の2週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	随時、研究室33(池亀)又は開講日授業終了後に受け付けます。										
備考	レポート提出期限を遵守すること。参考書等を参考にして、よく考察したレポートになるよう努力すること。 * 実務経験のある教員 池亀彰茂(臨床検査技師)、小河佳織(臨床検査技師)、安永恵(課長)、長尾裕一(主席研究員)、千原涼子(主席研究員)、小林龍太郎(主任研究員)										

地域チーム医療論 (Community and Team Medicine)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、松本 裕子 (MATSUMOTO Yuko)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、中村 丈洋 (NA KAMURA Takehiro)										
授業の目的	① 他職種が活躍する医療現場で、真の意味でのチーム医療について学習する。 ② 地域包括ケアシステムが展開していく上で、臨床検査技師の地域での役割を学習し認識する。										
到達目標	① チーム医療における各職種の役割が説明できる。 ② チーム医療の意義、役割、課題などが説明できる。 ③ 地域における臨床検査技師の役割が説明できる。 ④ 他職種と連携し、地域社会へ貢献する必要性・重要性について説明できる。										
授業の進め方	本授業の前半は、教員による講義形式でチーム医療および地域医療に関して概要を学習する。後半は、学生主導型授業とし、各グループに与えられたテーマに関して学生自ら学習し発表する。また、各教員はそれぞれの分野での研究成果を取り入れて授業を進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	地域チーム医療総論 (中村)【講義】									
	2	臨床検査技師としての地域チーム医療 (多田)【講義】									
	3	看護師としての地域チーム医療 (松本)【講義】									
	4	地域医療でのチーム医療の実際 (特別講義: 鶴川)【講義】									
	5	学生主導型授業①感染制御チームの実際(岡田)【発表】									
	6	学生主導型授業②栄養サポート/糖尿病指導チームの実際(多田)【発表】									
	7	学生主導型授業③救急外来チームの実際(中村)【発表】									
	8	学生主導型授業④臨床検査の展開・デブリーフィング(未定・中村)【発表】									
教科書	特に指定しない。講義資料を配布する。										
参考書・参考資料等	臨床検査技師のためのチーム医療教本(じほう)										
事前学習・事後学習	事前学習: 学生主導型授業では、担当したテーマに関して発表までに十分なグループ学習を行う。 事後学習: 必ずその日のうちに学習したことに関してまとめておく。										
他の授業との関連	検査学概論、社会福祉学、臨地実習など。										
成績評価方法・基準・フィードバック	本授業はアクティブ・ラーニングを導入しているので以下のような評価を行う。 到達目標の達成状況をグループディスカッションにおける発言内容(30%)、実技演習におけるパフォーマンス・発表態度(30%)、ミニレポート演習(40%)で評価する。 評価の視点: 時代の流れにより変化するチーム医療および地域医療への理解を中心に評価する。 授業終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 出席時間数が授業時間数の5 分の 4 に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。事前アポイントメントを取ることを勧める。(研究室36(多田)、45(岡田))										
備考	* 実務経験のある教員 岡田(医師)、多田(臨床検査技師)、松本(看護師)、中村(医師)										

医療統計学Ⅱ (Medical Statistics Ⅱ)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●太田 安彦 (OTA Yasuhiko)										
授業の目的	ヒトを対象とする臨床研究や疫学研究では、データの取集、解析、結果の解釈や報告の何れの過程においても生物統計学は必要である。また、医療の現場においても患者や医療従事者の状態、ケアの内容や程度など様々な数値が存在しており、そうした数値を正しく処理する能力が臨床検査技師を含む医療従事者には求められる。本講義において統計的推定、検定の手法を習得することを目標として、データ処理の方法を学ぶ、さらに、コンピュータを利用した統計分析の演習も行う。										
到達目標	①統計学の基本的な考え方とデータ処理について理解できる。 ②コンピュータを利用した統計分析ができる。 ③統計データや統計グラフから正しく情報を読み取ることができる。 ④母集団と標本の関係を理解し、信頼区間による推定や統計的仮説検定などの統計的推測の手法を適切に用いることができる。										
授業の進め方	前半は講義形式で進める。後半はコンピュータを使用した統計処理の演習を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	統計学と記述統計：母集団と標本、推計学と記述統計学、標本の分布、正規分布の特徴と使い方、分布の特徴点の表し方【講義】									
	2	検定の原理：統計的仮説検定の目的と理論、検定の原理を考える（平均値の検定） 関連2群の差の検定：1標本t検定（パラメトリック法）、統計学的推定（平均値の検定の場合）、1標本Wilcoxon検定（ノンパラメトリック法）【講義・演習】									
	3~4	独立2群の差の検定：2標本t検定（パラメトリック法）、統計学的推定（平均値の検定の場合）、等分散性の検定（F検定）、Mann-Whitney検定（ノンパラメトリック法）【講義・演習】									
	5~6	判断分析：感度・特異度・ROC解析、ROC分析による2群の判別度の分析、カットオフ値の設定法【講義・演習】									
	7~8	相関と回帰直線：相関係数、スピアマン順位相関係数、回帰直線【講義・演習】									
教科書	講義に必要な資料は講義中に配布する。										
参考書・参考資料等	カラーイメージで学ぶ＜新版＞統計学の基礎 第2版(株式会社 日本教育センター)										
事前学習・事後学習	医療統計学Ⅰの内容を講義前までに復習しておくこと。										
他の授業との関連	医療統計学Ⅰが基礎となるのでよく理解しておくこと。 卒業研究等のデータ処理に利用する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として単位認定しない。 到達目標の達成状況を、演習時の課題提出(100%)により評価する。 ＜評価の視点＞課題の内容を正しく理解し処理ができているかを評価する。 ＜成績のフィードバック＞評価結果は一定期間掲示するとともに、希望者には個別に評価を開示する。										
オフィスアワー	質問や相談等がある場合は研究室44で随時対応する。										
備考	講義後半に各自PC(CD/DVD/BDドライブのあるもの)を使用します。										

医療情報処理学 (Medical Informatics)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●徳原康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	医療情報学とは、コンピュータの進歩・普及によって成立した比較的新しい学問体系である。さらに、近年の急速なICT化により大きな変化が起きている分野である。本講義では、病院や地域医療、そして臨床研究に活用されている医療情報システムについての見識を深めることを目的とする。										
到達目標	① 医療に関する情報を批判的に吟味し、自分で情報の善し悪しを判断できる。 ② 医療情報に関する数字の意味を説明できる。 ③ 科学論文に記載されている方法を理解し、解析方法をトレースできる。										
授業の進め方	授業では、配布資料の内容を中心に行う講義と、グループごとに関連分野の課題発表を行うこととする。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	情報の概念、情報の収集と処理、プレゼンテーション課題									
	2	コンピュータネットワーク、セキュリティシステム									
	3	個人情報の保護									
	4	医療情報倫理、情報の利用（一次利用・二次利用）									
	5	臨床検査の情報システム、グループ別のプレゼンテーション									
	6	病院情報システム、グループ別のプレゼンテーション									
	7	医療情報システム①（病院内）									
	8	医療情報システム②（地域医療）									
教科書	プリント資料										
参考書・参考資料等	新版 医療情報 医療情報システム編（篠原出版新社）										
事前学習・事後学習	前もって課題を提示するので資料の準備し、授業後はレポートを作成すること。										
他の授業との関連	検査情報解析学、検査精度保証管理学、臨床検査管理運営学、検査分析システム学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、学習意欲と積極的な取り組み約30%、課題に対するレポート約30%、演習課題約40%（プレゼンテーションによる説明力等）により総合的に評価する。 ・レポート評価については、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室43で随時受け付ける。										
備考	＊ 実務経験のある学内教員 徳原（臨床検査技師）										

臨床化学検査学 (Clinical Chemistry Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	①臨床化学検査学で、生体成分を化学的に分析する基本的な事項についての知識を学び、習得する。 ②臨床化学検査の特徴、臨床検査データの精密度、正確性の評価について、精度管理、分析の標準体系を学ぶ。 ③分析方法の歴史・基本的原理を学び、最新の方法について理解する。										
到達目標	①臨床化学検査の特徴を理解し、測定値の単位や基準値、変動要因について説明できる。 ②分光光度分析法を説明できる。 ③分離分析法の種類と特徴が説明できる。 ④免疫化学分析法について説明できる。 ⑤酵素活性測定法を理解し、酵素活性測定法・測定単位について説明できる。 ⑥自動分析法、POCTなどについて説明できる。										
授業の進め方	講義では、臨床化学検査の特徴、臨床検査データの精密度、正確性の評価について、精度管理、分析の標準体系を学ぶ。これらの知識を基準にして、各種分析方法の原理、生体成分の分離技術、基礎技術を応用した自動分析法について学習する。 講義の前に、前回の講義についての小テストを行う。 講義は教科書、プリント資料、パワーポイントを用いて行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	臨床化学概論 臨床化学検査の歴史、意義、特徴									
	2	臨床化学の単位と標準物質 臨床化学検査で使用する単位、標準物質の規格、種類									
	3	測定値の管理 精度管理方法、基準範囲、測定値変動要因、臨床判断値									
	4	分析の標準体系 分析の標準化、物質濃度、活性分析の標準体系									
	5	分光光度分析法 分光光度分析の原理と種類									
	6	化学的分析方法 化学的分析法の特徴と種類									
	7	分離分析法Ⅰ クロマトグラフィ法の特徴と種類									
	8	分離分析法Ⅱ 電気泳動法、マスペクトロメトリ等									
	9	免疫化学分析法 免疫化学分析法の特徴と原理									
	10	電気化学分析法 イオン選択・酵素電極法									
	11	酵素的分析方法 基質と酵素反応速度、酵素法共通検出反応について									
	12	酵素活性測定法 酵素活性測定の基礎、単位、共存物質の影響									
	13	自動分析法 自動分析法の種類と構成、ドライケミストリー									
	14	簡易検査法 小型簡易測定器、POCTについて									
	15	その他の基礎技術 超遠心法など、研究に用いられる技術									
教科書	新版 臨床化学 第4版 生化学的検査 (講談社サイエンティク)										
参考書・参考資料等	最新臨床検査学講座 臨床化学検査学 (医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	・事前に生化学・生物学を復習し、臨床化学検査項目について予習しておくこと。 ・次回授業までにプリント資料を十分見直しておくこと。										
他の授業との関連	・生体試料分析検査学を学ぶ際に基礎となる。 ・様々な臨床検査に関連する比色定量法、酵素活性測定の基礎になる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、授業態度(積極性など)20%、小テスト10%、期末筆記試験70%により総合的に評価する。 ・評価の視点:各達成状況を小テストで順次確認する。分析方法の理解、特徴などについての学習意欲も評価対象とする。 ・期末試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室36にて対応する。 メール:tada@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	臨床化学検査は検体検査の中でも最も依頼件数の多い検査のひとつです。 臨床化学検査の基礎になる科目なので、しっかり理解することが大切です。 質問も積極的にしてください。 *実務経験のある学内教員 多田(臨床検査技師)										

生体試料分析検査学 (Biosample Analytical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	①各種生体試料の測定分析、検査の意義、疾患との関連性についての知識を習得する。 ②分析方法と検査結果の基準値と異常値、検査法の特徴と注意点を理解する。										
到達目標	①糖質・糖化タンパク質検査について測定法、臨床的意義について説明できる。 ②タンパク質の臨床化学検査について測定法、臨床的意義について説明できる。 ③非タンパク性窒素検査について測定法、臨床的意義について説明できる。 ④脂質関連の臨床化学検査について測定法、臨床的意義について説明できる。 ⑤各種酵素活性分析について測定法、臨床的意義について説明できる。 ⑥内分泌検査、骨代謝マーカー、ビタミン、電解質、微量元素の測定法、臨床的意義について説明できる。										
授業の進め方	・講義では各生体成分の化学的性質、代謝を理解し、成分に対する各種測定方法の原理、特徴を学ぶ。さらに基準範囲、臨床的意義について学習する。 ・授業の前に、前回の講義について小試験を行う。 ・講義は教科書とプリント資料、パワーポイントを用いて行う。 ・最新の検査も取り入れて講義を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	糖質	グルコースの代謝、分析法 (持続皮下グルコース測定を含む)								
	2	糖化タンパク質	グリコヘモグロビン、グリコアルブミンの臨床的意義、分析法								
	3	タンパク質	総タンパク、アルブミン、タンパク分画など								
	4	その他のタンパク質	免疫グロブリン、急性相反応性タンパクなどの分析								
	5	非タンパク性窒素	尿素窒素、クレアチニン、ビリルビンの代謝、分析								
	6	脂質Ⅰ	各種リポタンパク質の代謝、分析法、臨床的意義								
	7	脂質Ⅱ	各脂質成分の代謝、分析法、臨床的意義								
	8	酵素Ⅰ	臨床酵素と酵素活性測定方法								
	9	酵素Ⅱ	各酵素活性測定-AST、ALT、LD								
	10	酵素Ⅲ	各酵素活性測定-ALP、γ-GT、CHE、CK								
	11	酵素Ⅳ	各酵素活性測定-AMY、リパーゼ等								
	12	電解質	Na、K、Cl、アニオンギャップ、Ca、IP等								
	13	微量金属	鉄、銅、亜鉛、その他の微量元素等								
	14	ホルモン	視床下部・下垂体系、甲状腺、副腎系、性腺・胎盤系など								
	15	骨代謝、ビタミン	骨形成、骨吸収マーカー、ビタミンの種類と性質、欠乏症								
教科書	新版 臨床化学 第4版 生化学的検査 (講談社サイエンティク)										
参考書・参考資料等	最新臨床検査学講座 臨床化学検査学 (医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	・臨床化学検査項目について予習しておくこと。 ・教科書やプリント資料について復習しておくこと。										
他の授業との関連	・生体試料分析検査学は臨床化学検査の中心となる科目であり、重要な検査項目を学ぶ。 ・病態化学分析検査学を理解するためにも十分に学習する必要がある。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・授業態度 (積極性など) 20%、小テスト10%、定期試験70% ・到達目標の達成状況を、総合的に評価する。 ・評価の視点: 各達成状況を小テストで順次確認する。 ・臨床化学検査項目の基準範囲を含めた理解、検査の注意や特徴などについての学習意欲も評価対象とする。 ・期末試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室36にて対応する。 メール: tada@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	臨床化学検査を十分に理解し、学習する事は、臨床におけるデータ判読に必須です。しっかり学習してください。 * 実務経験のある学内教員 多田 (臨床検査技師)										

病態化学分析検査学(Pathochemical Analytical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	①生体成分を的に化学的に分析したデータを解析する能力を学ぶ。 ②各種病態を理解するための知識を習得する。 ③臨床化学検査データと病態の関連性について学ぶ。										
到達目標	①内分泌機能検査について理解し、各種疾患と検査データについて説明できる。 ②肝機能検査としての臨床化学検査の意義を理解し、疾患との関連性を説明できる。 ③循環器疾患における臨床化学検査の意義を理解し、疾患との関連性を説明できる。 ④腎疾患の臨床化学検査の意義を理解し、疾患との関連性を説明できる。 ⑤酸塩基平衡について学び、血液ガスデータについて理解し、解析できる。 ⑥骨代謝、炎症、腫瘍マーカーについて説明できる。 ⑦栄養管理と臨床化学データの関連性を説明できる。 ⑧薬物モニタリング検査について説明できる。 ⑨チーム医療を含む診療支援業務における臨床化学検査の意義について説明できる。										
授業の進め方	・講義の前に、前回の講義についての小試験を行う。 ・講義は教科書とプリント資料、パワーポイントを用いて行う。 ・理解度を確保するため、適宜、国家試験問題を解く事に挑戦する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	内分泌機能	視床下部・下垂体、甲状腺機能、副腎、性腺機能など								
	2	内分泌疾患Ⅰ	下垂体機能異常、甲状腺疾患など								
	3	内分泌疾患Ⅱ	副腎機能異常、性腺機能異常、その他内分泌疾患、各種負荷試験								
	4	肝機能Ⅰ	肝疾患の原因と臨床、肝機能検査の有用性								
	5	肝機能Ⅱ	脂肪肝、肝炎、肝硬変、その他の肝疾患と臨床化学検査								
	6	循環器系機能Ⅰ	心筋梗塞、心不全マーカーなど								
	7	循環器系機能Ⅱ	動脈硬化性疾患とその予防、リポ蛋白質との関係								
	8	腎機能	腎機能マーカー、クリアランスなどの腎機能検査								
	9	腎疾患	慢性腎臓病など腎疾患の分類と臨床検査								
	10	酸塩基平衡機能	酸一塩基平衡機能障害の基本と血液ガスの読み方								
	11	骨代謝機能	骨のリモデリング、骨形成マーカーと骨代謝マーカー								
	12	炎症、腫瘍マーカー	炎症と炎症性サイトカイン、炎症・腫瘍マーカーの種類と疾患								
	13	栄養管理	栄養アセスメントにおける臨床化学検査の意義								
	14	薬物モニタリング	モニタリング対象薬物の特徴、種類、分析方法など								
	15	診療支援	診療支援に必要な検査診断、パニック値の対応など								
教科書	最新臨床検査学講座 臨床化学検査学（医歯薬出版）										
参考書・参考資料等	臨床検査技術学 臨床化学（医学書院）										
事前学習・事後学習	・臨床化学検査学、生体試料分析検査学で得た知識を確認し、病態との関連性について復習すること。 ・検査データへ影響を与える因子、診療支援に必要な知識なども復習すること。										
他の授業との関連	臨床化学検査学、生体試料分析検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、授業態度（積極性など）20%、小テスト10%、期末筆記試験70%により総合的に評価する。 ・評価の視点：各達成状況を小テストで順次確認する。 ・病態と検査項目の関連性、注意点、検査値増減メカニズムについての学習意欲も評価対象とする。 ・期末試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室36 メール：tada@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	関連検査項目は非常に多いので、実際の臨床に役立てる事を念頭に、集中して理解するように。 * 実務経験のある教員 多田（臨床検査技師）										

生体試料分析検査学実習 (Biosample Analytical Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)										
授業の目的	生体の多成分試料から特定の成分を正確に測定するために、正確な検量方法、標準的測定方法を理解し、各種測定方法の原理、測定技術、手技を学び、測定結果を考察、判断する能力を習得する。さらに自動分析装置の原理・使用方法などについて理解を深める。										
到達目標	①分光分析、酵素反応分析について理解し、正確に測定できる。 ②各実習項目の測定原理を理解し、異常反応を含めた注意点について説明できる。 ③分離分析法について説明と測定ができ、データを解釈できる。 ④測定結果と病態を結び付けた考察ができる。 ⑤実験結果について考察し、課題を見いだすことができる。										
授業の進め方	・少人数の班に分け、各実習項目の目的、方法を説明し、班単位で試薬調整、実験を行う。 ・測定データから実験内容、測定項目の意義、結果について考察し、レポートを提出する。 ・各実習において、必要に応じて生化学自動分析装置を使用する。 ・各実習の実験は適切に行えば、時間内に終わる予定であるが、結果によっては再実験を認める。 ・実験・実習は最新の知見、研究成果に基づいた内容も考慮する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	ガイダンス 生体試料分析の基礎および実習機器使用方法									
	3~4	化学分析の基礎 分光光度計・吸収スペクトル測定									
	5~6	糖質・糖化タンパク質 グルコース測定(持続皮下グルコース測定を含む)、 酵素的測定法の理解、HbA1c測定									
	7~8	タンパク質 総タンパク測定、アルブミン定量 (BCG,BCP改良法)									
	9~10	タンパク質電気泳動 セルロース・アセテート膜電気泳動法									
	11~14	非タンパク性窒素 クレアチニン:ヤッフ法・酵素法 (クレアチニンクリアランス)、 尿素窒素:ウレアーゼ・インドフェノール法、 ビリルビン(ジアゾ法)									
	15~18	脂質 中性脂肪、コレステロール、HDL、Friedewald計算									
	19~22	酵素活性測定① AST、ALT試薬調整 AST、ALT活性測定(手法・自動分析法)									
	23~26	酵素活性測定② ALP活性を利用したKm値測定、 ALP、LD測定(自動分析法:IFCC法)、 LDアイソザイム(電気泳動法)									
	27~28	電解質 カルシウム、無機リン、鉄、Na、K、Cl など									
29~30	実技試験 実習手技確認(分光光度法:血糖値の測定と添加回収試験)										
教科書	最新臨床検査学講座 臨床化学検査学(医歯薬出版) プリント資料										
参考書・参考資料等	新版 臨床化学 第4版 生化学的検査 (講談社サイエンティク)										
事前学習・事後学習	・実習を始める前にテキストを読み、実習の操作手順を把握しておくこと。 ・臨地実習に臨むにあたり、実技能力の向上に努めること。										
他の授業との関連	・臨床化学検査学臨床実習に必要なかつ不可欠な知識を十分に習得し、実技を修練する重要な科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、レポート(25%)、期末筆記試験(60%)、実習態度・積極性(15%)で総合的に評価する。 ・評価の視点:各実習項目の理解度も重要だが、班員での協力体制を構築し、実験を行う事。他者との協調性、実験結果の考察、課題について議論する姿勢も評価する。 ・実技試験に不合格の場合は本科目の単位を認めない。 ・試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時。研究室36(多田)、研究室44(太田)										
備考	・座学で学んだことを基礎に、試薬調整の基礎的実習から臨床化学検査反応の原理の理解について積極的に学び、正確かつ迅速な検査技術を習得すること。 ・本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することが出できない。 * 実務経験のある教員 多田(臨床検査技師)、太田(臨床検査技師)										

一般検査学 (General Specimen Analytical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	一般検査は最も基本的な検査であり、スクリーニング検査として重要である事を認識し、各種体液測定の意義と測定方法を習得する。										
到達目標	①尿検体の取り扱い、性状について説明できる。 ②尿定性試験紙の原理を学び、説明できる。 ③尿中タンパク質、尿糖、潜血など各種尿一般検査の臨床的意義を説明できる。 ④腎機能検査としてのクリアランスについて説明できる。 ⑤尿沈渣・各種穿刺液・体液・便の検査法と意義について説明できる。										
授業の進め方	・講義では、尿、便、髄液、その他の体液の基本的知識を学び、測定値と病態との関連性について学習する。 ・オムニバス方式で行う。 ・講義は教科書とプリント資料を配布して行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	一般検査概論：一般検査の歴史・概要・尿生成と組成（徳原）									
	2	尿検査の基礎知識、一般性状：尿検査の基礎、検体取り扱い方法、尿の性状(徳原)									
	3	尿定性試験紙法：尿定性試験紙法の基礎、原理、尿自動分析装置（徳原）									
	4	化学的検査法Ⅰ：蛋白質・糖質・ケトン体・ビリルビン（徳原）									
	5	化学的検査法Ⅱ：ウロビリニン体・ポルフィリン体・潜血・妊娠反応（徳原）									
	6	腎機能検査：クレアチニンクリアランス、パラアミノ馬尿酸クリアランス、推算糸球体濾過値(eGFR)（徳原）									
	7	細菌尿の定性：尿中白血球・亜硝酸塩の検査や研究について等（徳原）									
	8	尿沈渣1：標本作成手順と鏡検法、尿沈渣(血球、上皮細胞)(池亀)									
	9	尿沈渣2:尿沈渣(円柱、結晶、塩類)(池亀)									
	10	尿沈渣3:尿沈渣(異型細胞)【まとめ 試験】(池亀)									
	11	穿刺液検査、CAPD排水：腹水、胸水、髄液(池亀)									
	12	髄液検査：髄液の生成と組成、一般性状、化学的検査法、細胞学的検査法(池亀)									
	13	糞便・精液検査：便・化学的検査・顕微鏡検査・虫卵、精子運動率・奇形率(池亀)									
	14	糞便:虫卵、便潜血検査【尿沈渣、髄液、虫卵等 試験】(池亀)									
	15	鼻汁好酸球検査、その他の一般検査、採血法、応用手技：翼状針採血(池亀)									
教科書	最新臨床検査学講座 一般検査学（医歯薬出版）										
参考書・参考資料等	一般検査技術教本:一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 監修（丸善出版）,尿沈渣検査法2010（日本臨床検査技師会）										
事前学習・事後学習	事前学習:関連の臓器解剖学復習										
他の授業との関連	一般検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、筆記試験100%により評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	随時。研究室33(池亀)、研究室43(徳原)										
備考	* 実務経験のある教員 池亀(臨床検査技師)、徳原(臨床検査技師)										

一般検査学実習 (General Specimen Analytical Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)										
授業の目的	一般検査学の講義で得た知識をもとに、臨床現場で測定可能な技術、および定性検査での正確な判断基準を習得する。										
到達目標	①尿の色調、混濁について説明できる。 ②尿試験紙法について説明でき、適切な使用と判定ができる。 ③尿タンパク、尿糖、潜血、妊娠反応の原理を説明でき、各方法の特徴および偽陽性、偽陰性について説明できる。 ④尿沈渣の項目、記載法、基本的な尿沈渣成分について説明できる。 ⑤髄液検査の原理・方法・意義について説明できる。										
授業の進め方	・小グループに班分けする。 ・試薬は班単位で作成し各自で実験を行う。 ・各自、結果について考察し、レポート(orスケッチブック)を提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2 3~4 5~6 7~8 9~10 11~12 13~14 15	尿定性検査：色調、混濁、試験紙による定性検査実習（徳原） 尿比重、尿タンパク定性および定量：比重計法、蛋白半定量：試験紙法など 定量法：ピロガロールレッド法（徳原） 尿糖：半定量法：ベネディクト法 定量法：酵素法 共存物質の影響（徳原） 潜血反応、妊娠反応実習、ケトン体(ランゲ法)、ビリルビン(ロザン法)、ウロビリノゲン(ワーレス・ダイヤモンド法)(徳原) 尿沈渣(健常者検体)：作成法、染色法、スケッチ、成績報告法（池亀） 尿沈渣(患者検体)：作成法、染色法、スケッチ、成績報告法（池亀） 髄液検査法：髄液の生成と組成、細胞学的検査法（池亀） 尿試験紙法、尿沈渣、髄液検査：標本作製試験【実技試験】（池亀、徳原）									
教科書	最新臨床検査学講座 一般検査学（医歯薬出版）										
参考書・参考資料等	一般検査技術教本：一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 監修（丸善出版）、尿沈渣検査法2010（日本臨床検査技師会）										
事前学習・事後学習	事前学習：一般検査学(2学年後期)の内容復習 事後学習：各検査項目の方法、特徴、結果の判定法、臨床学的意義										
他の授業との関連	一般検査学、臨床検査総論臨床実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、実習態度(積極性など) レポートおよびスケッチ20%、定期筆記試験80%で総合的に評価する。 ・評価の視点：各実習項目の理解度、実習時の積極性・協調性、結果の考察、課題について議論する姿勢もレポート点に含め評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	随時。研究室33(池亀)、研究室43(徳原)										
備考	・実習には予習をして臨むこと。 ・本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 池亀(臨床検査技師)、徳原(臨床検査技師)、森西(臨床検査技師)										

放射性同位元素学 (Radioisotope Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●岩崎 孝信 (IWASAKI takanobu)										
授業の目的	放射性同位元素(以下RIと略す)は多種多様な目的のために利用されている。その中で医療・医学に応用され、RIを利用して、画像診断・放射線治療・臨床検査に貢献している。 この授業では、臨床検査分野のRI利用の基礎から応用について学習する。この学習内容を習熟・理解して、学生が一般人に説明できるようになることを目的とする。										
到達目標	①放射線・RIの性質と特性について、放射線・RIの種類毎に具体的に説明できる。 ②放射線の生体作用について、教科書記載程度の内容について、一般人に具体的に説明できる。 ③臨床検査技師国家試験の放射性同位元素学の設問内容に対する解答を他の学生に、理解しやすく詳細に解説できる。										
授業の進め方	この授業では放射性同位元素を利用する広範囲に渡る内容を、短時間で学ぶため、授業ではポイントを絞った事項のみとなる。本授業では、臨床検査に応用されるRIに関し、臨床検査技師国家試験に出題される内容に基づいたことが中心となる。時間外学習は教員が読むべき教科書の範囲を指示するので、熟読しておくこと。なお、具体的国家試験内容等については、教員が作成した問題を配布して、解説しながら授業を進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	序章 身の回りにある放射線 1章 エックス線とは (教科書13p～24p)【講義】									
	2	2章 放射性同位元素の性質と放出放射線(教科書25p～43p)【講義】									
	3	3章 放射線測定器 4章 放射線の生体への作用(教科書45p～65p)【講義】									
	4	5章 放射線, 放射性同位元素の利用(教科書69p～100p)【講義】									
	5	In Vivo検査 測定用放射性医薬品、測定原理、測定装置、利用核種 (教員配布資料参照)【講義】									
	6	In Vitro検査 測定用放射性医薬品、測定原理、測定装置、利用核種 (教員配布資料参照)【講義】									
	7	RI体内投与検査 鉄代謝、赤血球寿命、循環血液、シリングテスト (教員配布資料参照)【講義】									
	8	放射線・RIに関する臨床検査技師国家試験問題 放射線(α線)の観察(教員配布資料参照)【講義】									
教科書	中学生にもわかる放射線・放射能と原子力発電(通商産業研究社)										
参考書・参考資料等	核医学ノート・第6版(金原出版)										
事前学習・事後学習	事前学習: 次回の授業範囲の教科書を読む。配布問題は目を通して回答の努力をしておく。 事後学習: 授業範囲の教科書を復習する。配布資料で解いた問題の理解をする。										
他の授業との関連	生体試料分析検査学、生体画像情報検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、学習態度20%、期末試験80%(マークシートによる択一方式)により総合的に評価する。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	電話番号087-899-7245(徳島文理大学 保健福祉学部 診療放射線学科)										
備考	学問を習熟するには、授業だけでなく、その前後の予習・復習が非常に大切である。学生が自分自身の思考で、理解しようとする努力・継続が重要事項である。										

分子生物学 (Molecular Biology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)										
授業の目的	1年次の生命科学概論を発展させ、遺伝子および分子レベルの理解を深める。遺伝子複製、発現と制御、翻訳、機能的タンパクの生成に至る経路とその調整機構について理解する。学生主導型授業ではグループ学習にて最先端の事項について理解を深める。										
到達目標	① 遺伝子の発現と制御について説明できる。 ② DNA損傷と修復について説明できる。 ③ シグナル伝達について説明できる。 ④ 細胞周期について説明できる。 ⑤ 最近の遺伝子工学について概説できる。										
授業の進め方	配布資料に沿って講義をすすめる。 学生主導型授業では、グループごとに与えられたテーマに関して学生自ら学習し発表する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	分子生物学概論									
	2	遺伝子発現									
	3	遺伝子制御									
	4	DNA損傷									
	5	DNA修復									
	6	シグナル伝達①									
	7	シグナル伝達②									
	8	細胞周期									
	9	遺伝子工学①									
	10	遺伝子工学②									
	11	学生主導型授業:テロメア									
	12	学生主導型授業:エピジェネティクス									
	13	学生主導型授業:p53									
	14	学生主導型授業:シグナル伝達									
	15	学生主導型授業:細胞周期と制御									
教科書	特に指定しない										
参考書・参考資料等	わかる!身につく!生物・生化学・分子生物学改訂2版、田村隆明、南山堂 配布テキスト										
事前学習・事後学習	事前学習: 学生主導型授業では、担当テーマに関して発表までにグループ学習を行う。 事後学習: 必ずその日のうちに学習したことに関してまとめておく。										
他の授業との関連	1年次の生命科学概論を発展させ、3年次の臨床遺伝子検査学、4年次の遺伝子分析科学および遺伝子分析科学認定士資格取得に展開していく。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、授業参加度(20%)、学生主導型授業での発表討論(30%)、期末筆記試験(50%)により評価する。評価の視点:発表は分子生物学の最新の知識と理解、期末試験では分子生物学的思考展開の充実度で評価する。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。(研究室45)										
備考	* 実務経験のある教員 岡田(医師)										

分子生物学実習 (Molecular Biology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、青野 りよ (AONO Riyo)										
授業の目的	2年前期で学んだ分子生物学を基に、臨床検査で行われている遺伝子関連検査や分子生物関連の検査についてタンパク質や遺伝子の基本的解析法を習得する。実験データの正しい記録法について修得する。										
到達目標	①医療における発光技術を概説できる。 ②ELISA法を用いてタンパク質の定量ができる。 ③塩基配列解析法が概説でき、シーケンサーの基本的操作を実施できる。 ④実験データの正しいの記録および記載ができる。										
授業の進め方	Watch then practice方式で実習を行う。座学と実技を組合せ、時間内での理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス									
	2~3	DNA抽出、PCR反応									
	4~5	核酸精製、核酸電気泳動									
	6~7	シーケンス解析および結果の評価									
	8~9	医療における発光の原理、化学発光									
	10~11	タンパク質検出法、ELISA法									
	12~13	タンパク質定性									
	14~15	タンパク質定量									
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	毎回、実習資料を配付する。										
事前学習・事後学習	事前学習：予め実習に関する内容について予習をしておくこと。 事後学習：必ずその日のうちに実施事項を実習ノートにまとめておく。										
他の授業との関連	3年次の臨床遺伝子検査学実習に発展していく。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、実習態度(50%)、レポート(50%)により評価する。評価の視点：基本的な分子生物学的実験方法の習得等で評価する。 フィードバックについては、実習終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。(研究室45)										
備考	＊実務経験のある教員 岡田(医師)										

臨床遺伝子検査学 (Clinical Genetic Testing)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)										
授業の目的	生命科学概論、分子生物学で学んだことを基に、遺伝子検査に利用されている主要な検査技術を学ぶ。実際に自ら遺伝子検査を行うことを想定して、検体の採取から検査結果の報告までの手順について理解する。また遺伝カウンセリングについても学び、医の倫理についても考える。学生主導型授業ではグループ学習にて最先端の事項について理解を深める。										
到達目標	① 遺伝子検査の工程について説明できる。 ② 個人情報の保護について十分に理解し概説できる。 ③ 遺伝子検査技術について概説できる。 ④ 染色体検査について概説できる。										
授業の進め方	講配布資料に沿って講義をすすめる。 学生主導型授業では、グループごとに与えられたテーマに関して学生自ら学習し発表する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	臨床遺伝子検査学総論【講義】									
	2	遺伝子検査の工程①【講義】									
	3	遺伝子検査の工程②【講義】									
	4	個人情報の保護【講義】									
	5	遺伝子検査技術①【講義】									
	6	遺伝子検査技術②【講義】									
	7	遺伝子検査技術③【講義】									
	8	遺伝子検査技術④【講義】									
	9	遺伝子関連検査【講義】									
	10	遺伝学的検査【講義】									
	11	染色体検査【講義】									
	12	学生主導型授業: 遺伝子検査 感染症【演習】									
	13	学生主導型授業: 遺伝子検査 先天異常【演習】									
	14	学生主導型授業: 遺伝子検査 造血器腫瘍【演習】									
	15	学生主導型授業: 遺伝子検査 固形腫瘍【演習】									
教科書	最新臨床検査学講座 遺伝子・染色体検査学 第3版、東田修二、医歯薬出版株式会社										
参考書・参考資料等	遺伝子検査技術—遺伝子分析科学認定士テキスト— 改訂第2版(克誠堂出版) テキスト配布										
事前学習・事後学習	事前学習: 学生主導型授業では、担当テーマに関して発表までにグループ学習を行う。 事後学習: 必ずその日のうちに学習したことに関してまとめておく。										
他の授業との関連	1年次の生命科学概論、2年次の分子生物学を発展させ、4年次の遺伝子分析科学および遺伝子分析科学認定士資格取得に展開していく。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、授業参加度(20%)、学生主導型授業での発表討論(30%)、期末筆記試験(50%)により評価する。評価の視点: 発表では先端遺伝子検査に関する知識と理解、試験は遺伝子検査の原理の理解と応用等を評価する。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。(研究室45)										
備考	* 実務経験のある教員 岡田(医師)										

臨床遺伝子検査学実習 (Clinical Genetic Testing Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、青野 りよ (AONO Riyo)										
授業の目的	2年次の分子生物学実習を基に、遺伝子関連検査で必要となる核酸抽出、増幅、電気泳動、染色体分染法などを修得する。										
到達目標	① 核酸抽出ができる。 ② 核酸増幅PCR法を実施できる。 ③ 電気泳動を実施できる。 ④ 染色体分染法を実施できる。										
授業の進め方	Watch then practice方式で実習を行う。座学と実技を組合せ、時間内での理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ガイダンス、実験器具操作									
	2~3	染色体検査 (染色)									
	4~5	染色体検査 (核型分析、FISH)									
	6~7	DNA鑑定(電気泳動1)									
	8~9	遺伝的多型1(核酸抽出、PCR)									
	10~11	遺伝的多型2(電気泳動2)									
	12~13	Real time PCR-1									
	14~15	Real time PCR-2									
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	毎回、実習資料を配付する。										
事前学習・事後学習	事前学習：予め事前学習内容を周知する。事前準備も行う。 事後学習：必ずその日のうちに実施事項を実習ノートにまとめておく。										
他の授業との関連	2年次の分子生物学実習を発展させた内容である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。到達目標の達成状況を、実習参加度(50%)、レポート(50%)により評価する。 評価の視点：基本的遺伝子検査技術の習得等で評価する。 フィードバックについては、実習終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	研究室在室時に対応する。(研究室45)										
備考	＊実務経験のある教員 岡田(医師)										

生体防御検査学 (Immunological Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)										
授業の目的	① 免疫機構、免疫担当細胞・関連分子・関連遺伝子のはたらき等について学習し、生体防御機構 (免疫の仕組み) を理解する。 ② 免疫機構が破綻した場合に発症する免疫疾患の概念を習得する。 ③ 抗原、抗体、補体などの機能、構造、特徴について理解する。										
到達目標	① 生体防御機構としての免疫の概要を説明できる。 ② 免疫細胞の役割と機能を説明できる。 ③ 細菌感染に対する生体防御機構について説明できる。 ④ ウイルスに対する生体防御機構について説明できる。 ⑤ T細胞・B細胞の獲得免疫への関わりについて説明できる。 ⑥ 過剰・異常な免疫による疾患のメカニズムについて説明できる。										
授業の進め方	教科書、参考書および配布資料に基づき講義を行う。免疫学特有の表現および語句を理解するため、適宜、小テストを実施する。必要に応じ、資料を配布する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	免疫システムの概要: “免疫学”の歴史と免疫システムの概要									
	2	免疫細胞・組織: 免疫細胞の発生と分化、相互作用と関連因子									
	3	自然免疫: 自然免疫の生体防御機構									
	4	細菌感染に対する生体防御機構									
	5	ウイルスに対する生体防御機構									
	6	抗原と抗体: 抗原・抗体の定義と特性									
	7	補体: 補体経路の活性化と生物学的作用									
	8	抗原情報の伝達: リンパ球抗原認識受容体と主要組織適合性遺伝子複合体 (MHC) 多様性の創成: 遺伝子再構成、クローン選択、自己反応性細胞の除去、遺伝子多型									
	9	T細胞とB細胞: 中枢免疫組織におけるリンパ球の分化・成熟									
	10	自己反応性の制御: 免疫寛容; アナジー、補助刺激因子、免疫反応の終結									
	11	感染症: 細菌感染症、ウイルス感染症、真菌感染症									
	12	腫瘍性疾患									
	13	過剰・異常な免疫による疾患①: アレルギー									
	14	過剰・異常な免疫による疾患②: 自己免疫疾患									
	15	まとめ: 振り返り学習									
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	「休み時間の免疫学」(講談社)										
事前学習・事後学習	免疫学の基礎となる学習である。 各回の講義テーマについて教科書および参考書の記載箇所を確認しておくこと。 免疫学特有の表現および語句を理解し、復習を行うこと。										
他の授業との関連	2年後期の「高感度分析検査学」、3年前期の「輸血・移植検査学」の基礎となる科目である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況 (評価の視点: 病原体からからだを守る細胞・分子・遺伝子の仕組みが理解できているか) を、期末筆記試験 (75%)、授業参加度 (20%)、小テスト (5%) で総合的に評価する。 ・期末試験終了1週間後をめどに試験結果内容を開示する期間を設け、内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 宮川 (臨床検査技師)										

高感度分析検査学(Immunoassay Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)										
授業の目的	①抗原抗体反応を利用した方法は生体内微量成分の定量測定に適していることを理解する。 ②抗原と抗体の特性を利用した各種抗原抗体反応(沈降反応、凝集反応、溶血反応、免疫比濁反応、標識抗原抗体反応等)の原理及び検査法の特徴・意義・臨床応用について理解する。 ③現在、自動化されている高感度分析の原理および特徴を理解する。										
到達目標	① 抗原抗体反応の臨床検査への応用原理を説明できる。 ② 抗原抗体反応を利用する臨床検査の特徴を説明できる。 ③ 標識抗原抗体反応と比色分析法の感度の違いを理論的に説明できる。 ④ 免疫血清検査項目の臨床的意義を説明できる。 ⑤非特異反応の原因および一般的な対応法について説明できる										
授業の進め方	教科書、参考書および配布資料に基づき講義を行う。抗原抗体反応を利用する臨床検査について、長所・短所を理解し、疾患との関りを考察する。関連するテーマについてのグループワークにより、日常検査での問題解決能力を養成する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	抗原抗体反応概論①:抗原抗体反応の特徴、高感度分析への応用									
	2	抗原抗体反応概論②:抗原抗体反応の特徴、高感度分析への応用									
	3	試験管内抗原抗体反応①:沈降反応、凝集反応、溶解反応、中和反応									
	4	試験管内抗原抗体反応②:補体結合反応、非標識抗原抗体反応									
	5	高感度分析検査の理論①:標識抗原抗体反応と測定感度									
	6	高感度分析検査の理論②:発光分析の原理と発光イムノアッセイへの応用									
	7	感染症の免疫検査①:細菌感染症									
	8	感染症の免疫検査②:ウイルス感染症、その他の感染症									
	9	アレルギー検査:アレルギーの分類と免疫検査									
	10	自己免疫疾患の検査:自己免疫疾患と自己抗体									
	11	腫瘍マーカー検査:腫瘍免疫、腫瘍マーカーの意義									
	12	血清蛋白異常症:M蛋白血症、炎症マーカー、熱依存性蛋白、免疫不全									
	13	免疫検査の方法:免疫電気泳動、イムノブロット法、フローサイトメトリー、細胞性免疫機能検査									
	14	非特異反応:原因と対応法									
	15	まとめ:振り返り学習									
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	臨床免疫検査技術教本(日本臨床衛生検査技師会監修・丸善出版)										
事前学習・事後学習	臨床検査室における免疫血清検査の基礎となる理論と検査項目の各論を学習する。 高感度免疫測定の実験と検査の目的を明確にし、知識を整理する。 本科目の領域は国家試験の主要なポイントであるため、国家試験の出題基準のところは特に復習する。										
他の授業との関連	「高感度分析検査学実習」と併せて臨床免疫検査学の主要な検査項目を学ぶことになる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:臨床免疫学検査の技術的理論と実際の検査法への応用の理解、自律的な学習の実践力)を、期末筆記試験(80%)、授業参加度(20%)で評価する。 ・期末試験終了1週間後をめどに試験結果内容を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たない場合は評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応する。										
備考	* 高感度分析検査学実習の履修要件科目である。* 実務経験のある教員 宮川(臨床検査技師)										

高感度分析検査学実習 (Immunoassay Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)、青野 りよ(AONO Riyo)										
授業の目的	①試験管内抗原抗体反応を体験してみることで抗原抗体反応の特徴を理解する。 ②応用技術としての高感度免疫測定法を理解する。										
到達目標	① 免疫血清検査に必要な器具・試薬類を適正に取り扱うことができる。 ② 免疫血清検査の基盤となる測定原理と特徴を説明できる。 ③ 細菌感染症の特徴に基づく免疫血清検査を実施して結果の解釈ができる。 ④ ウイルス感染症の特徴に基づく免疫血清検査を実施して結果の解釈ができる。 ⑤ 自己免疫疾患診断のための免疫血清検査を実施して結果の解釈ができる。 ⑥ 炎症マーカーや血漿蛋白異常症に関する免疫血清検査を実施して結果の解釈ができる。										
授業の進め方	配布する実習テキストに基づき実習ノートを各自で用意する(予習および実習中の記録)。標準化されている方法などはテキスト・ノートを見ることなく実施することを心がける。免疫血清検査の特徴と原理および検出対象を明確にして正確な検査技術を身に着ける。最終的なレポート作成により検査技術と知識を整理する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	免疫学的検査概要:検査に必要な器具と技術、検体採取と保存									
	2	赤血球凝集反応:直接赤血球凝集反応(Paul-Bunnell反応)									
	3	赤血球凝集抑制反応によるインフルエンザウイルス抗体測定									
	4	鼻腔からの検体採取、イムノクロマト法によるインフルエンザウイルス抗原検査									
	5	梅毒血清反応①:STS法;ガラス板法、RPRカードテスト									
	6	梅毒血清反応②:TP抗体法;TPPA法、(FTA-Abs試験の原理)									
	7~8	補体結合反応による血清補体価測定(CH50: Mayer変法)									
	9	ELISA法による風疹ウイルス抗体測定									
	10	B型肝炎ウイルスの抗原抗体マーカー(イムノクロマト法)									
11~12	自己抗体検査:間接蛍光抗体法による抗核抗体検査										
13~14	ゲル内沈降反応:免疫電気泳動(IEP)、平板内二重免疫拡散法(Ouchterlony法) 平板内単純免疫拡散法(SRID法)										
15	まとめ:振り返り学習、実技試験										
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	高感度分析検査学実習テキスト(配布)										
事前学習・事後学習	必ず実習ノート作成による予習を行うこと。 実習中は教科書を開くことを禁止する。 毎回の実習終了後は、各項目のレポートを作成し提出する。										
他の授業との関連	「高感度分析検査学」と併せて免疫血清検査の主要項目を学習することになる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:臨床検査室で行われる臨床免疫学検査を自律的に行い得る理論的・技術的能力の習得度)を、授業参加度(20%)、レポート(65%)、実習ノート(15%)で総合的に評価する。 ・評価について結果内容を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない場合は評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応します。										
備考	本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 宮川(臨床検査技師)										

輸血・移植検査学(Transfusion and Transplantation Immunology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)										
授業の目的	①免疫学的観点における輸血の基礎と、輸血医療の安全性にかかわる諸問題を理解する。 ②輸血検査の原理と技術(血液型検査、不規則抗体検査、交差適合試験、HLAタイピング等)の内容を確実に習得する。 ③移植医療の概要と、移植免疫の基礎的理論と臨床検査について理解する。										
到達目標	① 血液型システムを説明できる。 ② ABO・Rh血液型とそのパリアントについて説明できる。 ③ 臨床的意義のある血液型抗体を列挙し説明できる。 ④ 不規則抗体検査および交差適合試験の重要点を説明できる。 ⑤ 血液型以外の重要な細胞抗原について説明できる。 ⑥ HLAと移植医療について説明できる。										
授業の進め方	各回講義の目的・習得目標を明らかにし、それに基づいて講義を行う。講義による理解度を深めるために、重要項目についてのまとめや討論を行い、小テストなどによる振り返りを行う。必要に応じ、資料を配布する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	輸血と血液製剤:輸血の歴史、輸血療法、血液製剤の種類と保存、成分採血装置、自己血輸血									
	2	血液型総論、ABO血液型と自然抗体									
	3	血液型の検査、用手法と自動分析、Rh血液型と免疫抗体									
	4	その他の血液型、臨床的意義のある血液型関連抗体									
	5	亜型・変異型と後天的変化:ABO血液型の亜型、Rh血液型の変異型、後天的変化									
	6	輸血前検査:輸血前検査の方法と意義									
	7	抗血液型抗体の検出:不規則抗体検査、交差適合試験									
	8	輸血の安全管理:精度管理、成分輸血の意義と適応、輸血関連感染症の対策									
	9	適合血の選択:交差適合試験の限界、まれな血液型と輸血、タイプ・アンド・スクリーン									
	10	輸血後副反応:免疫学的副反応、非免疫学的副反応、溶血性副反応、非溶血性副反応									
	11	血液型不適合妊娠と新生児溶血性疾患(母児免疫)									
	12	ヒト白血球抗原(HLA):HLAとGVHD、拒絶反応、組織適合性検査									
	13	輸血・移植に関連する他のアロ抗原:血小板特異的抗原、顆粒球(好中球)抗原									
	14	移植医療:移植免疫、造血幹細胞移植、臓器移植、免疫抑制剤、移植関連検査									
	15	まとめ:振り返り学習									
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	輸血・移植検査 技術教本 (日本臨床衛生検査技師会監修・丸善出版)										
事前学習・事後学習	内容を深く理解するために、予習を行い、講義後は復習により要点を整理する。 輸血検査は間違いを起こしてはならない検査のため、講義で学習した理論を実際の検査に活かすことが重要である。										
他の授業との関連	「輸血・移植検査学実習」における輸血検査技術の理論的内容を学ぶ。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:輸血・移植医療における検査の重要性和実際の理解)を、期末筆記試験(80%)、授業参加度(20%)で総合的に評価する。 ・期末試験終了1週間後をめどに試験結果内容を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たない場合は評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応する。										
備考	＊輸血・移植検査学実習の履修要件科目である。＊実務経験のある教員 宮川(臨床検査技師)										

輸血・移植検査学演習 (Transfusion and Transplantation Immunology Seminar)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	演習
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)、青野 りよ(AONO Riyo)										
授業の目的	①輸血医療の意義を理解し、血液製剤に関する取扱いを修得する。 ②免疫学的観点における輸血・移植医療の成り立ちとして、アロ抗原の違いにより生体内で生じ得る副反応を理解する。 ③「生体防御検査学」で学んだ免疫応答の理論を実学的な医療に当てはめ、自らの知識に基づき考えることを起点にし、深く理解することを目標にする。										
到達目標	① 輸血医療の意義を説明できる。 ② 輸血に用いる血液製剤の種類と保存方法、および、製造プロセスを説明できる。 ③ 輸血前検査の概要を理解し説明できる。 ④ 輸血・移植医療における免疫応答と副反応を理解し説明できる。 ⑤ 輸血医療に関するリスクマネジメントについて考察し、対策を考えることができる。										
授業の進め方	毎回、学習内容に関する目的・テーマについてのグループワークを実施する。討議した内容を模造紙にまとめ発表する。担当教員のファシリテートにより、補足的な説明を加えることで理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	輸血の歴史、輸血療法の目的と意義 血液製剤の種類と特性、自己血輸血 輸血用血液製剤の製造プロセスと製剤の保存・管理、静脈路への成分採血装置の接続と操作 輸血・移植医療にかかわるヒトのアロ抗原 輸血・移植医療におけるアロ抗原に対する免疫応答の考え方 輸血関連血液媒介感染症の防止と検査 輸血・移植に必要な検査の精度管理とリスクマネジメント まとめ：振り返り学習									
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	輸血・移植検査 技術教本(日本臨床衛生検査技師会監修・丸善出版)										
事前学習・事後学習	生体防御反応としての免疫システムを確実に復習しておく。 生体防御検査学で学んだ非自己に対する免疫反応を応用して考える。 免疫の仕組みを実学的な医療に置き換え、生体内で生じる病態の可能性として考える。 毎回の演習内容の振り返りを実施する。										
他の授業との関連	「生体防御検査学」の理論を実学的な輸血・移植医療に応用し、「輸血・移植検査学」の学びにつなげる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:輸血・移植医療の意義、副反応の理解など)を、毎回のテーマのレポート(30%)、授業参加度(20%)、期末筆記試験または総合レポート(50%)により総合的に評価する。 ・期末試験終了1週間後をめどに試験結果内容を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 宮川(臨床検査技師)										

輸血・移植検査学実習 (Transfusion and Transplantation Immunology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)、青野 りよ(AONO Riyo)										
授業の目的	①免疫学的観点における輸血の基礎と輸血医療の安全性にかかわる諸問題を理解する。 ②輸血検査の検査法(血液型検査、不規則抗体検査、交差適合試験、HLAタイピング等)を実施し、その原理、技術、判定法及び検査の意義を確実に習得する。 ③病院輸血検査室における日常検査および緊急性に対応できる能力を養う。										
到達目標	① 輸血検査のための検体処理と準備ができる。 ② ABO血液型の検査と判定が確実にできる。 ③ Rh血液型の検査と判定が確実にできる。 ④ 不規則抗体検査の実施と判定が確実にできる。 ⑤ 交差適合試験の実施と判定が確実にできる。 ⑥ HLAタイピング検査の種類を列挙し説明できる。										
授業の進め方	配布する実習テキストに基づき実習ノートを各自で用意する(予習および実習中の記録)。標準化されている方法をテキスト・ノートを見ることなく実施できるように心がける。輸血関連検査は検査過誤が許されない検査であることを念頭に置き正確な検査技術と判定能力を身につける。最終的なレポート作成により検査技術と知識を整理する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	総論と準備:器具・試薬の取り扱いと試薬調整									
	2	ABO血液型:オモチ検査、ウラ検査(スライド法、試験管法、カラム凝集法、抗Hレクチン)									
	3	Rh血液型:Rh血液型検査実施(試験管法、確認試験、Rh(D)以外のRh血液型)									
	4	凝集素価:抗A・抗B凝集素価、抗A・抗B被凝集素価									
	5	唾液中型物質検出、吸着解離試験(熱解離法)									
	6	血清中のA型・B型転移酵素活性測定									
	7	直接クームス試験・抗体解離									
	8	不規則抗体検査:不規則抗体スクリーニング検査									
	9	不規則抗体検査:不規則抗体同定検査									
	10~11	交差適合試験:実技試験 (試薬・器具の取扱い、ABO血液型、Rh血液型、交差適合試験:総合判定)									
	12	HLAタイピング検査①:白血球の分離・調整法、白血球からのDNA抽出									
	13	HLAタイピング検査②:SSP-PCR法実施(混合リンパ球傷害試験の理論)									
	14	HLAタイピング検査③:アガロースゲル電気泳動による判定									
	15	まとめ:振り返り学習									
	教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)									
参考書・参考資料等	輸血・移植検査学実習テキスト(配布資料)、輸血・移植検査 技術教本 (日本臨床衛生検査技師会監修・丸善出版)、スタンダード輸血検査テキスト(認定輸血検査技師協議会編・医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	必ず実習ノート作成による予習を行うこと。 実習中は教科書を開くことを禁止する。 毎回の実習終了後は、各項目のレポートを作成し提出する。										
他の授業との関連	「輸血・移植検査学」で学んだ知識を実際の輸血検査に応用する。 2年時に学習した「生体防御検査学」の理論を発展的に理解する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:輸血・移植医療における検査の理論と実践的技術の習得)を、授業参加度(10%)、レポート(50%)、実技試験(40%)で総合的に評価する。 ・期末試験終了1週間後をめどに試験結果内容を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室37で適宜対応する。										
備考	本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 宮川(臨床検査技師)										

微生物検査学(Microbiological Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●奥田 潤(OKUDA Jun)										
授業の目的	病原微生物(細菌、ウイルス、真菌)の各論、培養方法、生化学的性状などについて学ぶ。さらに、検体の採取や取り扱い方法、各病原微生物の生化学的性状検査、免疫学的検査、毒性試験など、臨床の現場における病原微生物の分離・同定に必要な検査方法についても学ぶ。また、教員の最新の研究成果を講義内容に積極的に取り入れる。国家試験対策として配布資料に含まれる過去の国家試験問題を実際に解くことで、早くから国家試験問題のレベルや解き方を理解する。										
到達目標	①授業で習ったことを説明できる。 ②授業で出題した過去の国家試験問題を完全に解くことができる。										
授業の進め方	毎回、配布資料を配布し、教科書だけでは不十分な部分を補いながら、講義を中心に授業を進める。配布資料に過去の国家試験問題を含めるので、講義での解説前に必ず予習する。さらに、質問等によって講義内容についての理解をより深める。また、教員の最新の研究成果を分かりやすく説明する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	細菌学各論① 好気性、通性嫌気性のグラム陽性球菌									
	2	細菌学各論② 好気性、通性嫌気性のグラム陰性球菌と球桿菌									
	3	細菌学各論③ 通性嫌気性のグラム陰性桿菌									
	4	細菌学各論④ 好気性のグラム陰性桿菌と微好気性のグラム陰性らせん菌									
	5	細菌学各論⑤ 好気性、通性嫌気性のグラム陽性桿菌									
	6	細菌学各論⑥ グラム陽性、抗酸性の桿菌、嫌気性菌、嫌気性菌検査法、 アクチノミセス属									
	7	細菌学各論⑦ スピロヘータ、レプトスピラ、マイコプラズマ、リケッチア、 クラミジア									
	8	真菌学 真菌学総論(真菌の分類、酵母、糸状菌、菌糸、分生子)、 真菌学各論(酵母、糸状菌(アスペルギルス属、ムーコル類、 黒色真菌、二形性真菌、皮膚糸状菌)、ニューモシスチス・ イロベチ)、真菌症の治療									
	9	真菌学検査法 真菌検査法の特徴と留意点、臨床材料別の病原真菌、真菌の検査法 (塗抹鏡検検査、分離培養検査、同定検査、血清学的検査)、 真菌の薬剤感受性検査									
	10	ウイルス学総論 ウイルスの構造と形態、ウイルスの分類、ウイルス感染の病態、 ウイルス感染症の治療									
	11	ウイルス学各論 ウイルスの病原性(DNAウイルス、RNAウイルス、プリオン)									
	12	ウイルス検査法 ウイルス検査法の概要、ウイルス感染症の検査法(培養・同定、 血清学的診断、抗原検出法、遺伝子学的検査、病理学的検査)									
	13	細菌学検査法① 基本操作、各種検査材料からのGram染色所見(特殊染色を含む)、 培養と培地、検査材料別検査法(血液、髄液、尿、下気道検体、 咽頭・鼻咽腔粘液、糞便、膿・分泌物、体腔液、穿刺液)									
	14	細菌学検査法② 細菌の鑑別と同定に日常用いられる検査法、細菌の薬剤感受性 検査法、簡易同定キットによる生化学的性状検査および菌種同定法 (免疫学的方法による検出同定法や検査材料からの直接検出法)									
	15	細菌学検査法③ 検査に関与する機器、迅速診断技術(微生物遺伝子検査)、 質量分析を用いた同定法、免疫学的検査法(抗酸菌の免疫学的検 査)、微生物検査結果の評価(微生物検査におけるパニック値と その取扱い)、サーベイランス									
教科書	「最新臨床検査学講座 臨床微生物学」(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	配布資料										
事前学習・事後学習	理解を深めるために、予習・復習を行うことが望ましい。										
他の授業との関連	微生物学、細菌検査学実習、ウイルス・真菌検査学実習										
成績評価方法・基準・ フィードバック	・到達目標の達成状況を、平常点10%、期末筆記試験90%により総合的に評価する。〈評価の視点〉:「期末筆記試験では、暗記力・理解力・記述力を評価する」 ・フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、研究室38										
備考	膨大な量の病原微生物学に関する知識を短期間で学習する必要があるため、使用する教科書や配布資料の重要事項に絞って講義を行う。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)										

細菌検査学実習 (Bacterial Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●奥田 潤 (OKUDA Jun)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)										
授業の目的	細菌の分類、形態、培養についての専門的な知識および技術を修得する。さらに、染色所見、分離培養所見、生化学的性状、免疫学的反応などによる病原菌の同定、薬剤感受性試験、遺伝子検査などについての専門的な知識や技術を修得することにより、医療の高度化に対応できる実践能力を養う。										
到達目標	①無菌操作、分離培養、染色など基本的な細菌学的実験技術を実施できる。 ②病原菌の同定、薬剤感受性試験、遺伝子検査について説明できる。										
授業の進め方	学生の一人ひとりが実習内容を確実に習得することができるように、小グループ(2人/1グループ)での実習を行う。実習中における質問やレポート等によって実習内容についての理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~3	滅菌法・消毒法:培地の作製、無菌操作									
	4~6	細菌の培養方法:落下細菌、付着・常在細菌の培養と観察									
	7~9	細菌の増殖曲線:生菌数の測定と細菌の増殖曲線の作成									
	10~12	細菌の形態観察①:単染色、グラム染色による染色と観察									
	13~15	細菌の形態観察②:特殊染色(莢膜、鞭毛、芽胞等)による染色と観察									
	16~18	レンサ球菌:レンサ球菌鑑別のための各種性状試験									
	19~21	ブドウ球菌:ブドウ球菌鑑別のための各種性状試験									
	22~24	ヘモフィルス、ビブリオ:ヘモフィルス属菌、ビブリオ属菌鑑別のための各種性状試験									
	25~27	薬剤感受性試験、遺伝子検査:E-testを用いた薬剤感受性試験、遺伝子増幅法を用いた遺伝子解析									
	28~30	腸内細菌:腸内細菌鑑別のための各種性状試験、実技試験									
教科書	「最新臨床検査学講座 臨床微生物学」(医歯薬出版)、「図解臨床細菌検査 坂崎利一」(文光堂)										
参考書・参考資料等	「臨床検査法提要 奥村伸生ら」(金原出版)										
事前学習・事後学習	①実習に先立って、実習内容についての予習をしておくこと。 ②実習後は、実習内容の詳細についてレポートとしてまとめること。										
他の授業との関連	微生物学、微生物検査学、臨床微生物検査学臨床実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、レポート(40%)、筆記試験(40%)、平常点(20%)により評価する。 〈評価の視点〉 「レポートでは、実習内容の理解力、実習方法や実習結果の正確な記述力、得られた実験結果に関する考察力、課題についての記述力や記述内容の正確性を評価する。期末筆記試験では、実習内容の暗記力・理解力・記述力を評価する」 ・フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時。研究室38(奥田)、研究室34(末澤)										
備考	・生きた細菌を取り扱うので、汚染や感染のないように、細心の注意を払って実習を行うこと。実習に先立って、実習内容についての予習をしておくこと。細菌検査学実習専用の白衣を用意すること。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 ・「臨地実習」を履修するために、単位修得を必要とする科目である。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)										

ウイルス・真菌検査学実習 (Viral and Fungal Technology practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、根ヶ山 清 (NEGAYAMA Kiyoshi)										
授業の目的	ウイルス感染症の中には、臨床症状から特定困難なウイルスが多く存在する。ウイルス検出には、感染症対策や適切な医療の提供等の観点から迅速性に優れた遺伝子検査の他に、免疫学的検査法や主に研究に資するための細胞培養法が用いられる。ウイルス検査学実習では、これらの基本的な技術を習得する。 真菌検査学実習では、酵母様真菌および糸状菌の検査法について理解を深め、基本的な技術を習得する。										
到達目標	【ウイルス検査学実習】 授業を通して、ウイルス感染症の特徴により様々なウイルス検査法があることを学び、各検査法を理解した上で、的確な検査を行うことができる。 【真菌検査学実習】 一般的な真菌・酵母様真菌の検査の進め方を説明できる。										
授業の進め方	ウイルス検査学実習では、免疫学的検査法、細胞培養法、核酸抽出法、分子生物学的検査法の基本操作について学習する。 真菌検査学実習では、糸状真菌、酵母様真菌の染色・鏡検・培養・同定および感受性検査に関する一連の検査手技について実習する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	ウイルス検査学実習① 病原ウイルスの検査法と基本技術、免疫学的検査法 (末澤、奥田)									
	2~5	ウイルス検査学実習② 細胞培養法 細胞の保存、無菌操作法、細胞の継代等(末澤)									
	6~7	ウイルス検査学実習③ 単層培養法によるウイルス分離 ウイルス接種、 細胞変性効果観察等(末澤)									
	8~9	ウイルス検査学実習④ 分子生物学的検査法 RNAウイルスの核酸抽出法(末澤)									
	10~11	ウイルス検査学実習⑤ 分子生物学的検査法 RT-LAMP法(末澤)									
	12~13	真菌検査学実習① 酵母様真菌のグラム染色・培養・感受性検査、糸状菌の検体 採取・培養(スライドカルチャー)(根ヶ山、末澤)									
	14~15	真菌検査学実習② 真菌の直接鏡検(湿標本・グラム染色・墨汁染色) 真菌の集落および 形態学的観察と同定、感受性検査の判定 (根ヶ山、末澤)									
教科書	最新 臨床検査学講座 臨床微生物学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	病原真菌同定の指針 文部省総合研究・真菌症班編(文光堂) 病原性真菌ハンドブック 宮治誠編(医薬ジャーナル)										
事前学習・事後学習	配布テキストを事前に良く読み実習内容を理解する。										
他の授業との関連	細菌検査学実習 微生物検査として、細菌検査、ウイルス検査、真菌検査を関連付けて学ぶ。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則評価を受けることができない。 ・到達目標の達成状況を、平常点60%、レポート40%により評価する。 ＜評価の視点＞平常点は実習態度や積極性で評価する。レポートは記述内容の正確性や記述力・観察力を評価する。 ・評価結果のフィードバックについては、全実習終了後、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	随時。研究室34(末澤)										
備考	感染性因子を用い、実習を行うため、常に緊張感を持って望み、基本的な取扱い操作を習得して欲しい。 実習内容・目的を十分理解してから望む。バイオハザードに留意する。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)										

医動物検査学演習 (Laboratory Medical Zoology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、原田 正和 (HARADA Masakazu)										
授業の目的	寄生性の原虫類、線虫類、吸虫類、条虫類、および衛生動物としての節足動物類、軟体動物類等に属する、各種の分布、形態、生活史、病理、症状、検査、診断、治療などについて理解する。										
到達目標	教科書に載っている上記医動物の検査依頼に対し、適切な検査法を用いて同定ができる、あるいは適切な処理ができる。										
授業の進め方	毎回それぞれの医動物についてスライドを中心に講義を行い、重要な語句を書き込むプリントを配布する。講義後の演習では代表的な標本をスケッチすることで、各医動物の形態・病理・検査法に関する理解を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~3	医動物学総論、線虫類総論、線虫類各論(1) (原田)【講義】 実習1 線虫類(1) (末澤・原田)【演習】									
	4~6	線虫類各論(2) (原田)【講義】 実習2 線虫類(2) (末澤・原田)【演習】									
	7~9	吸虫類総論、吸虫類各論 (原田)【講義】 実習3 吸虫類 (末澤・原田)【演習】									
	10~12	原虫類総論、原虫類各論 (原田)【講義】 実習4 原虫類 (末澤・原田)【演習】									
	13~15	条虫類総論、条虫類各論、衛生動物総論、衛生動物各論 (原田)【講義】 実習5 条虫類、衛生動物 (末澤・原田)【演習】									
	16~18	検査法 (原田)【講義】 実習6 虫卵検査法、実技試験 (末澤・原田)【演習】									
教科書	最新 臨床検査学講座 医動物学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	医動物学 吉田幸雄ほか(南山堂) 図説人体寄生虫学 吉田幸雄ほか(南山堂)										
事前学習・事後学習	予め教科書にざっと目を通しておく。各種の生活史等を頭の中で整理しながら演習を行う。演習後、毎回重要事項を記憶する。										
他の授業との関連	細菌検査学実習、ウイルス・真菌検査学実習、一般検査学 様々な病原体に対して適切な検査方法を学び習得する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則評価を受けることができない。 ・到達目標の達成状況を、筆記試験80%、演習レポート20%により評価する。 ＜評価の視点＞筆記試験は知識と理解力を評価する。演習レポートは記述内容の正確性を評価する。 ・評価結果のフィードバックについては、筆記試験終了後1週間を目処に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	必要に応じて対応します。 研究室34(末澤)、原田正和E-mail: m2000harada@yahoo.co.jp										
備考	講義の情報量が多いことから、内容を良く理解するためには、講義前・講義後に教科書の該当部分を読んでおくことが望ましい。また、演習が所定時間内に終わるように全員が協力して欲しい。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。										

病理病態学演習 (Pathology Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)										
授業の目的	病理病態学演習では症例検討を行い、主な疾病の病態とその形態学的変化、特徴について考察する。基本的な疾患については病理標本の顕微鏡観察を行い、病理組織学的な変化を確認する。										
到達目標	①基本的な正常の解剖組織学的特徴について説明できる。 ②主要な疾病の病理組織学的な特徴について説明できる。										
授業の進め方	プリントを事前に配布するので、教科書等を参考にして討論形式で授業を進める。顕微鏡観察室での演習では、実際の病理組織標本を観察し、そのスケッチを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	発生・解剖・組織学①【講義】									
	2	発生・解剖・組織学②【講義】									
	3	代謝異常、循環障害①【講義】									
	4	代謝異常、循環障害②【講義】									
	5	腫瘍、先天異常①【講義】									
	6	腫瘍、先天異常②【講義】									
	7	固定、脱灰、包埋、薄切、染色①【演習】									
	8	固定、脱灰、包埋、薄切、染色②【演習】									
	9	呼吸器疾患①【演習】									
	10	呼吸器疾患②【演習】									
	11	消化器疾患①【演習】									
	12	消化器疾患②【演習】									
	13	内分泌疾患・尿路系疾患①【演習】									
	14	内分泌疾患・尿路系疾患②【演習】									
	15	まとめ									
教科書	最新臨床検査学講座 病理学／病理検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	特に指定しない										
事前学習・事後学習	配布したプリントに従い症例や疾患について予習してくる。										
他の授業との関連	病理病態学と関連										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、発表内容と討論内容(70%)、レポート提出(30%)により評価する。 ＜評価の視点＞発表と討論、レポートでは、疾病の病理病態学に関する知識と理解力、積極性を評価する。 フィードバックについては、オフィスアワーに準ずる方法で評価結果の説明を行う。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	顕微鏡観察室での演習では12色以上の色鉛筆とスケッチ用ノートを持参すること。 * 実務経験のある教員 森西 (臨床検査技師)										

病理検査学 (Pathological Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、平川 栄一郎 (HIRAKAWA Eiichiro)										
授業の目的	病理学的検査法の基本的な意義、役割、方法論を説明する。病理組織標本や特殊染色標本の意義、原理、作製法を考察する。さらには免疫組織化学的検査法や凍結切片作成法、細胞診検査法、病理解剖の役割についても考察する。										
到達目標	① 標本作製法では病理組織標本作製について説明できる。 ② 各種染色法では、それぞれの特殊染色や免疫染色について説明できる。 ③ 細胞学的検査法とスクリーニングについては、細胞学的特徴とその実際について説明できる。										
授業の進め方	スライドとプリントを用いて、授業を進める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	切りだしと包埋実習準備、組織検査の意義と検査法									
	2	検体採取法、固定法、脱灰法									
	3	薄切、HE染色法、凍結標本作製法、脂質の染色									
	4	アザン染色、マッソントリクローム染色									
	5	PAM染色、渡辺の鍍銀染色、組織内病原体の染色									
	6	グリメリウス染色、マッソンフォンタナ染色、ボディアン染色									
	7	PAS染色、アルシアン青染色									
	8	PTAH染色、KB染色									
	9	酵素抗体法、蛍光抗体法、病理遺伝子解析の意義									
	10	細胞診検査の意義と検査法、検体採取法、細胞診標本作製法、固定、パパニコロウ染色									
	11	呼吸器の細胞診									
	12	消化器(肝、胆、膵)、泌尿器(膀胱、前立腺、腎)の細胞診									
	13	女性性器(子宮頸部、子宮内膜)の細胞診、ホルモン細胞診									
	14	乳腺の細胞診、体腔液の細胞診									
	15	スクリーニング									
教科書	最新臨床検査学講座 病理学/病理検査学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	特に指定しない										
事前学習・事後学習	予習、復習を行ってこること。										
他の授業との関連	病理検査学実習と関連										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、期末筆記試験(100%)により評価する。 ＜評価の視点＞期末筆記試験では、病理検査法に関する知識と理解力、応用力を評価する。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	* 実務経験のある教員 平川(医師)										

病理検査学実習 (Pathological Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、平川 栄一郎 (HIRAKAWA Eiichiro)										
授業の目的	病理学的検査法の基本的な意義、役割、方法論を確認した上で、病理組織標本や特殊染色標本の意義、原理、作製法を考察する。さらには免疫組織化学的検査法や凍結切片作成法、細胞診検査法について実施する。										
到達目標	① 標本作製法では病理組織標本作製について説明できる。 ② 各種染色法では、それぞれの特殊染色や免疫染色について説明できる。 ③ 細胞学的検査法とスクリーニングについては、細胞学的特徴とその実際について説明できる。										
授業の進め方	プリントを参考に、試薬の調整、染色、作製を行い、顕微鏡観察によるスケッチを行う。細胞診検査法でも、同様に標本作製法と顕微鏡実習による観察、スケッチを行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	包埋、脱脂、脱灰									
	3~4	薄切、HE染色									
	5~6	弾性線維 (EVG染色)、脂肪 (オイル赤O染色)									
	7~8	膠原線維 (マッソントリクローム染色、アザン・マロリー染色)									
	9~10	細網線維 (PAM染色)、真菌 (グロコット染色)									
	11~12	中性粘液、糖原 (PAS染色)、酸性粘液多糖類 (アルシアン青染色)									
	13~14	細網線維の染色 (渡辺の鍍銀法)、内分泌の染色 (グリメリウス染色)									
	15~16	髄鞘と神経細胞の染色 (KB染色)、軸索と神経線維の染色 (ボディアン染色)									
	17~18	抗原賦活法、酵素抗体法、組織検査結果の解析と評価									
	19~20	細胞診の標本作製法 (尿、喀痰)、Pap染色、ギムザ染色、検体の観察と処理保存									
	21~22	婦人科非腫瘍性病変の細胞診									
	23~24	婦人科腫瘍性病変の細胞診									
	25~26	精度管理と標準化									
	27~28	呼吸器の細胞診									
	29~30	実技試験									
教科書	病理検査学実習書 臨床検査学実習書シリーズ (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	特に指定しない										
事前学習・事後学習	小テストを行うので予習をしてくること。										
他の授業との関連	病理検査学と関連										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、期末試験および小テスト等により総合的に判断する。 期末筆記試験 (70%)、小テスト (30%) ＜評価の視点＞ 「期末筆記試験と小テストでは、病理検査法に関する知識や理解力、実践能力を評価する」 フィードバックについては、オフィスアワーに準ずる方法で評価結果の説明を行う。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	白衣を着用すること。12色以上の色鉛筆とスケッチ用のノートを持参すること。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 平川 (医師)、森西 (臨床検査技師)										

血液検査学Ⅰ (Hematological TechnologyⅠ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)										
授業の目的	血液の成分や機能、その生成と崩壊等についての基本的事項を習得する。造血器官や血球分化形態についても学習し、血液疾患時の変化を理解する。また、止血作用や凝固線溶系の基礎と因子や分子マーカーの意義を理解する。										
到達目標	①各血球の機能を理解して、造血器疾患における血液検査について説明ができる。 ②凝固線溶系検査について説明ができる。 ③検査値から造血器腫瘍の推測ができる。										
授業の進め方	授業は、スライドと配布するプリント資料によって進める。單元ごとに小テストを実施して、理解度をその都度確認する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	総論　：血液成分と機能									
	2	赤血球1：血液の成分、分化と成熟、形態と特徴									
	3	赤血球2：ヘモグロビン合成、分解、必要な栄養素と代謝									
	4	赤血球3　：赤血球系疾患の検査、形態									
	5	白血球1　：分化と成熟、産生と崩壊									
	6	白血球2　：血液の機能、血球形態									
	7	白血球 3　：白血球系疾患の検査									
	8	血小板、造血器腫瘍：母細胞、産生と崩壊、造血器腫瘍の検査									
	9	造血器：血液疾患と遺伝子・染色体検査									
	10	総論・血球まとめ試験：(総論～造血器まで)【まとめ・試験】									
	11	血液検査：血液検査業務を中心とした病院検査室と検査センターの違いについて									
	12	凝固1　：血栓・止血機構(凝固因子の種類と性質、凝固機序)									
	13	凝固2　：凝固機序詳細									
	14	凝固3　：凝固抑制機序、線溶機序									
	15	検査結果の解析と評価【まとめ・試験】									
教科書	最新臨床検査講座 血液検査学(医歯薬出版)、血液細胞アトラス第6版、通山薫、文光堂、病気がみえるシリーズvol.5 血液 医療情報科学研究所、プリント資料										
参考書・参考資料等	血算の読み方・考え方、岡田定、医学書院、血液疾患診断・治療方針、金倉譲、中山書店										
事前学習・事後学習	事前学習：血算の基準値、血液検査に関する専門用語 事後学習：授業の内容に沿った国家試験問題の実践										
他の授業との関連	血液検査学実習、臨床血液検査学臨地実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・単元別を実施する筆記試験100%により評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	池亀:研究室33:"ikegame-a@kagawa-puhs.ac.jp" 臨床血液実習室等で適宜対応										
備考	* 実務経験のある教員 池亀(臨床検査技師)										

血液検査学Ⅱ (Hematological TechnologyⅡ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●田岡 輝久(TAOKA Teruhisa)										
授業の目的	血液検査結果の評価(血液・造血器疾患)について学ぶ。										
到達目標	①骨髄の構造及び多能性(全能性)造血幹細胞から各血球への分化と成熟の課程を説明できる。 ②血球の種類とそれぞれの血球の機能を説明できる。 ③貧血の種類、それぞれの貧血の概念及び診断に必要な検査とその結果について説明できる。 ④造血器腫瘍(白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、慢性骨髄増殖性腫瘍及び骨髄異形成症候群)等について、それぞれの疾患概念、診断に必要な検査とその結果及び治療と経過の判定について説明できる。 ⑤出血性素因(血小板及び凝固因子の異常)の種類、それぞれの疾患概念、診断に必要な検査とその結果について説明できる。										
授業の進め方	1. 講義の要点を記述したプリントを配布し、プリントの記述に従って順に講義を進める。 2. 講義の中で、教科書、血液細胞アトラスの対応する箇所について説明する。 3. テストは講義が終了してまとめて行い、小テストは行わない。 4. 講義終了時の試験については、点数が及ばない者に対しては再試験を実施する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	造血	造血のしくみ、造血幹細胞								
	2	赤血球系の異常	貧血総論、鉄代謝異常による貧血、二次性貧血								
	3		骨髄機能低下による貧血、巨赤芽球貧血								
	4		溶血性貧血、(小テスト1)								
	5	造血器腫瘍	白血病総論、急性骨髄性白血病								
	6		急性リンパ性白血病、急性白血病の診断と治療の進歩								
	7		慢性白血病、骨髄異形成症候群								
	8		悪性リンパ腫総論、ホジキンリンパ腫、非ホジキンリンパ腫								
	9		骨髄腫とその類縁疾患								
	10		白血球増加症、白血球減少症、(小テスト2)								
	11		慢性骨髄増殖性腫瘍								
	12		造血幹細胞移植								
	13	出血傾向と血栓傾向	血小板減少症、血小板増加症、血小板機能異常								
	14		凝固因子欠損症、凝固異常症								
	15		播種性血管内凝固、線溶亢進、血栓性素因								
教科書	最新臨床検査学講座 血液検査学(医歯薬出版) 病気がみえるシリーズvol.5 血液(医療情報科学研究所) 血液細胞アトラス 第6版(文光堂)										
参考書・参考資料等	臨床検査技術学11 血液検査学(医学書院)										
事前学習・事後学習	事前に配付するプリントの、授業スケジュールの対応箇所を読み込み、疑問な点については講義中に氷解させるようにする。 毎回の講義内容を、必ずその日のうちにノート、プリント、教科書、アトラスで復習し、なお不明な点については、次回の講義中に質問し、解決を図ること。										
他の授業との関連	血液検査学Ⅰ、血液検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、最終テストで評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	講義終了後に質問の時間を設ける。(質問の希望があれば、前もって時間調整をして、講義以外の時も質問を受け付ける。)										
備考											

血液検査学実習 (Hematological Technology Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	血球計数の手法と機器分析の実技、血球の染色実技と血球形態のスケッチ、疾病別の形態観察、各種の凝固線溶検査などについて、基本的な知識と技術を修得する。										
到達目標	①血液検査に関する基礎的な知識について説明でき、基礎的な技術を使うことができる。 ②正常な末梢血・骨髓血の細胞同定ができる。凝固線溶検査法および各種マーカーについての説明ができる。										
授業の進め方	各回、講義・実習(実習講義・実習)・グループ討議・口頭試問の流れで行う。グループ討議を通して、各自が2年次の検査血液学Ⅰ、Ⅱの内容を再確認できるように進め、臨床実習に繋げる。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	血球に関する検査Ⅰ：血球算定に関する検査(赤血球、白血球)									
	3~4	血球に関する検査Ⅱ：自動血球計数装置の使い方、血小板数測定、ヘモグロビン測定、ヘマトクリット									
	5~6	血球に関する検査Ⅲ：細胞表面マーカー検査、血液薄層塗抹標本の作製練習									
	7~8	血球に関する検査Ⅳ：赤血球系疾患の検査:全血比重、赤血球抵抗試験(概説)赤血球沈降速度実習									
	9~10	実技試験：血液薄層塗抹標本作製テスト(臨地実習前技能到達度評価)									
	11~12	形態に関する検査Ⅰ：普通染色(末梢血液像:白血球分類、網赤血球染色スケッチ)									
	13~14	形態に関する検査Ⅱ：骨髓像のスケッチ									
	15~16	形態に関する検査Ⅲ：骨髓像のスケッチ									
	17~18	形態に関する検査Ⅳ：白血球系疾患の検査 症例の骨髓像スケッチ、特殊染色(ペルオキシダーゼ染色)									
	19~20	形態に関する検査Ⅴ：造血腫瘍の検査 細胞形態による造血器腫瘍鑑別									
	21~22	血小板・凝固検査Ⅰ：止血に関する検査:出血時間・凝固時間 PPP・PRP・吸着血漿の作製									
	23~24	血小板・凝固検査Ⅱ：PT・APTT(手法、分析装置)-1									
	25~26	血小板・凝固検査Ⅲ：PT・APTT(手法、分析装置)-2									
	27~28	血小板・凝固検査Ⅳ：血栓に関する検査: FDP、Dダイマー検査									
	29~30	血小板・凝固検査Ⅴ：血餅退縮、毛細血管抵抗試験 血小板機能に関する検査:血小板凝集能、血小板粘着能									
教科書	最新臨床検査講座 血液検査学(医歯薬出版)、血液細胞アトラス 第6版(文光堂)、病気がみえるシリーズvol.5 血液(医療情報科学研究所)、プリント資料										
参考書・参考資料等	臨床検査技術学11 血液検査学第4版(医学書院)										
事前学習・事後学習	事前学習:血液検査学Ⅰ・Ⅱ(2学年)の内容復習 事後学習:血液検査学検査の方法、特徴、結果の判定法、臨床学的意義										
他の授業との関連	血液検査学Ⅰ・Ⅱ、臨床血液検査学臨床実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、課題レポート・筆記試験・実習態度(基準:筆記試験80%、レポート・実習態度等20%)により評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	研究室33(池亀)、臨床血液実習室等で適宜対応										
備考	課題レポートは、実習内容を詳細に理解するためなので、時間をかけて探求したレポート作成となるよう、各自努力すること。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 池亀(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)										

写真技術論 (Photograph Technology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●田中 康弘 (TANAKA Yasuhiro)										
授業の目的	アナログ及びデジタル写真を扱う上で必要な基礎知識・技術を習得する。基本となるカメラ、フィルム、カラー写真の原理を学習する。その上で、医用画像で代表的なX線画像の基礎を学習する。画像のアナログ・デジタル記録手段と出力の特徴について理解する。										
到達目標	①電磁波である可視光、X線、赤外線、紫外線の差異を説明できる。 ②加法混色と減法混色の原理を説明できる。 ③カメラの構造、レンズとピントの役割、絞りとシャッターの露光及び像質への影響を説明できる。 ④白黒フィルムの構造と感光剤の役割、現像作業の流れとそのメカニズムを説明できる。 ⑤カラーフィルムにおける発色機構と現像定着の特徴を大まかに説明できる。 ⑥医用画像取得に用いられる検出器の大まかな機構や特徴を説明できる。 ⑦デジタル画像における画像解像度や画像サイズの関係を説明できる。										
授業の進め方	講義資料を配付し、液晶プロジェクタを使った視覚教材を活用して授業を行う。アナログ記録手段であるフィルムと印画紙はデジタル化の中、姿を消しつつある。しかし、アナログ記録における概念はそのままデジタル記録に持ち込まれている。身近でなくなったアナログ記録について、詳しく学習する。一方、デジタル記録技術の発展は著しい。できる限り最新の装置・技術も授業内容に織り込んで、今後のデジタル写真技術にも対応できる知識を習得する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	画像の形成と認識 可視光、電磁波、加法混色と減法混色									
	2	カメラの原理 レンズ、ピント、露光、絞りとシャッター									
	3	フィルムの原理 フィルムの構造と特性、現像・停止・定着、感度と画質									
	4	カラー写真の原理 カプラー、ネガフィルムとポジフィルム、定着と漂白(脱銀)									
	5	医用画像の特徴 像を形成するためのプロローブとその検出器									
	6	X線写真 X線の基礎、X線検出装置、写真特性の評価									
	7	デジタル画像の基礎 デジタルカメラ、スキャナ、画像解像度と画像サイズ、ファイルタイプと特徴、プリンタ									
	8	まとめ、補足									
教科書	特に指定しない。講義時間に講義資料を配付する。										
参考書・参考資料等	改訂 写真工学の基礎－銀塩写真編－ (社)日本写真学会編(コロナ社) 体系的に学ぶデジタルカメラのしくみ 第2版(日経BPソフトプレス) 写真の百科事典(朝倉書店)										
事前学習・事後学習	授業内容の復習のため、授業時間に相当する時間外学習を求める。 授業内容の理解のために適宜課題レポートを課す。										
他の授業との関連	顕微鏡技術論										
成績評価方法・基準・フィードバック	期末筆記試験は行わない。到達目標の達成状況を、課題・宿題60%、期末レポート40%の配分で評価する。評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。										
オフィスアワー	講義後、または電話(087-864-2405)、E-mail(tanaka.yasuhiro@kagawa-u.ac.jp)										
備考	質問などは講義中、講義後に受け付ける。E-mail(tanaka.yasuhiro@kagawa-u.ac.jp)を使った質問も常時受け付ける。										

生体画像情報検査学 (Clinical Imaging Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	4.0	時間数	60	授業形態	講義・演習
担当教員	●大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)										
授業の目的	臨床検査技師が行いうる循環器系の生理検査(心電図、心音図、血圧脈波)と超音波検査(心臓、腹部、体表、婦人科、血管)、平衡機能検査、聴力検査、熱画像検査、MRI検査について、専門的知識や技術と実践能力を習得する。また、各検査項目で学んだデータ管理能力や科学的思考力を用いて、研究できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	①心電図を判読し、緊急を要する場合の対処法を説明できる。 ②心音、脈波、血圧の測定意義を説明できる。 ③超音波検査の正常像と異常像について説明できる。 ④平衡機能検査、聴力検査、熱画像検査、MRI画像を説明できる。										
授業の進め方	授業は、教科書の内容を中心にスライドを使用して講義する。また、できる限り、人体モデルを使用したり、具体的な症例を呈示し積極的に授業に参加できるようにしている。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	生体画像検査総論 臨床生理機能検査の種類【講義】									
	2	心臓の解剖・心臓の働き・心電図の基礎【講義】									
	3	心電図の測定方法・心電図の誘導法【講義】									
	4	正常心電図の波形【講義】									
	5	不整脈心電図の波形・特殊な不整脈心電図の波形【講義】									
	6	虚血性心疾患と心電図【講義】									
	7	運動負荷心電図、トレッドミル、ホルター心電計の記録と評価法【講義】									
	8	心電図症例の判読練習(1)【演習】									
	9	心電図症例の判読練習(2)【演習】									
	10	心電図症例の判読練習(グループディスカッション)【演習】									
	11	心電図についてのまとめ【演習】									
	12	心音の成因と記録方法・異常心音図【講義】									
	13	脈波検査の原理と測定方法・血圧の原理と測定方法【講義】									
	14	超音波の仕組み・原理と測定法・ドップラー法とアーチファクト【講義】									
	15	腹部超音波(胆嚢)【講義】									
	16	腹部超音波(肝臓)【講義】									
	17	腹部超音波(膵臓、脾臓、腎臓、大動脈)【講義】									
	18	腹部超音波画像(造影剤注入および画像評価)【講義】									
	19	腹部超音波画像判読【演習】									
	20	心臓超音波検査の正常画像【講義】									
	21	心臓超音波検査の異常画像【講義】									
	22	心臓超音波画像判読【演習】									
	23	頸動脈超音波検査の正常画像と異常画像【講義】									
	24	乳房超音波検査と婦人科・産科超音波検査の正常画像と異常画像【講義】									
	25	甲状腺超音波の正常画像と異常画像【講義】									
	26	超音波検査のまとめ【講義】									
	27	聴力検査【講義】									
	28	平衡機能検査・重心動揺検査【講義】									
	29	眼底検査・熱画像検査法の原理と測定法【講義】									
	30	MRI検査の原理と測定法【講義】									
教科書	最新臨床検査学講座 生理機能検査学(医歯薬出版株式会社)										
参考書・参考資料等	ポケットマスター臨床検査知識の整理 臨床生理学(医歯薬出版株式会社) 講義内でレジュメを配布する。										
事前学習・事後学習	事前学習として教科書を一読する。事後学習として与えられた資料の内容を教科書に追記する。										
他の授業との関連	講義内容は生体機能検査学実習で演習する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない場合、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を、期末筆記試験(50%)、小テスト(50%)により総合的に評価する。 期末筆記試験終了後、1週間を目安に、評価結果に対するフィードバックを行う。										
オフィスアワー	随時、研究室39または授業終了後に受け付ける。										
備考	将来、臨床生理学検査を実施するうえで、画像や波形の判読ができるように学習してください。 * 実務経験のある教員 大栗(臨床検査技師)										

生体制御機能検査学 (Clinical Regulatory Physiology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	3.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)										
授業の目的	生体の生命現象を制御している呼吸、体液、神経などの生理機能について、各生理機能を把握するための検査法（呼吸機能検査法、血液ガス分析、脳波検査、神経伝導検査など）の専門的な知識・技術と実践能力を習得する。また、各検査項目のデータ管理力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	神経伝導検査、誘発脳波、脳波および呼吸機能検査を行う目的が述べられ、それぞれの検査結果を評価できる。										
授業の進め方	① プリントやパワーポイント、Youtubeを用いた講義を聞く。 ② 理解度を深めるため、講義終了前に適宜まとめの問題を解く。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		(樋本#1～#11.#23)									
	1	生理学的検査の役割と測定意義・安全対策・感染対策・患者急変時の対応									
	2	患者の心理と対応、外来、病棟、手術室など医療現場における多様なニーズ									
	3	末梢神経の機能：運動神経、感覚神経の機能									
	4	末梢神経伝導検査：運動神経伝導検査、感覚神経伝導検査									
	5	筋電図：針筋電図、単一線維筋電図検査、末梢神経伝導検査：反復神経刺激試験									
	6	神経・筋疾患：主な神経・筋疾患の概説									
	7	脳波検査の基礎：脳波発現の機序、基礎的要素<δ波、θ波、α波、β波、棘波>、脳波計、電極配置部位									
	8	賦活法：開閉眼、閃光、睡眠、過呼吸の各賦活法の実際									
	9	アーチファクト：生体、測定機器または環境に起因するもの									
	10	異常脳波：てんかん、Creutzfeldt-Jakob病、肝性脳症、脳死判定									
	11	直腸肛門機能検査、消化管内視鏡検査（組織検体の採取手技を含む）									
	23	急変時の対応：救急措置の適応、バイタルサイン、1次救急法、2次救急法									
		(大栗#12～#22)									
	12	聴性脳幹反応<ABR>、視覚誘発電位<VEP>、体性感覚誘発電位<SEP>									
	13	事象関連電位<ERP>、磁気刺激									
	14	臨床における運動誘発電位、体性感覚誘発電位									
	15	呼吸器系の基礎：呼吸調節、ガス交換、気体の法則									
	16	換気機能検査：臨床的意義、肺気量分画									
	17	フローボリューム曲線									
	18	クロージングボリューム									
	19	機能的残気量、呼吸抵抗									
	20	肺胞機能検査：肺内ガス分布、肺拡散能力、呼気ガス分析、評価法									
21	血液ガスの基礎：臨床的意義、検体の取り扱い、測定上の留意点、分析装置										
22	血液ガス検査：検査法、酸塩基平衡、ガス交換										
教科書	最新臨床検査学講座 生理機能検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	ポケットマスター臨床検査知識の整理 臨床生理学 (医歯薬出版株式会社) 標準臨床検査学 生理検査学・画像検査学 (医学書院) 講義内でレジュメを配布する。										
事前学習・事後学習	次の授業までに復習をしっかりとしておくこと。										
他の授業との関連	臨床医学Ⅰ、臨床医学Ⅱ、病態生理機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たない場合、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を、筆記試験（中間・期末）で評価する（100％）。 期末筆記試験終了後、1週間を目安に、評価結果に対するフィードバックを行う。										
オフィスアワー	質問等は随時可能。樋本（研究室32）、大栗（研究室39）										
備考	* 実務経験のある教員 樋本（医師）、大栗（臨床検査技師）										

生体機能検査学実習 I (Physiological Technology Practice I)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、小河 佳織 (OGO Kaoru)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	循環器、神経・筋、感覚器、画像検査の生理機能検査について、専門的な知識・技術と実践能力を習得する。また、生理機能検査に関するデータ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	心電図、血圧脈波検査、神経伝導検査、誘発脳波、重心動揺検査、眼底検査、腹部超音波検査、下肢静脈超音波検査を理解し、検査結果を正しく評価できる。										
授業の進め方	① 学生は交互に検者と被検者になって検査を実習し、患者の立場からも生理機能検査の理解に努める。 ② 実技を施行していない学生は、課題について自習し、その後討論する。 ③ 各単元についてレポートを提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~5	循環器系の生理機能検査 心電図、運動負荷心電図(マスター)、ホルター心電図、血圧脈波検査について、機器の扱い方や電極の装着、波形の導出、検査結果の解析と評価法などを実習する。 (小河)									
	6~10	神経・筋、感覚器系の生理機能検査 神経伝導検査、聴性脳幹反応検査、重心動揺検査、眼底検査について、機器の取扱い方や実技、検査結果の解析と評価法などを実習する。(樋本、近藤)									
	11~14	超音波検査 超音波検査について機器の取扱い方や肝臓、胆嚢、膵臓、腎臓、脾臓、膀胱、前立腺、子宮、下肢静脈の標準的な描出法、描出画像の手技や解析と評価法などを実習する。(大栗)									
	15	実技試験 実習に際しては、学生は3グループに分かれ、各生理機能検査を学習する。									
教科書	最新臨床検査学講座 生理機能検査学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	配布資料 JAMT技術教本シリーズ(じほう) 標準臨床検査学 生理検査学・画像検査学(医学書院) 病気がみえる 循環器(MEDICA MEDICA)										
事前学習・事後学習	事前に実習書をよく読んで実習に臨むこと。 実習後は疑問点や実習で行った内容を実習書に書き込み、知識の整理を行うこと。										
他の授業との関連	生体制御機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない場合、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を、課題レポートおよび期末試験(筆記)により評価する。 評価の配分割合(筆記試験70%、レポート30%) 期末筆記試験終了後、1週間を目安に、評価結果に対するフィードバックを行う。										
オフィスアワー	質問等は随時受けつける。樋本(研究室32)、大栗(研究室39)、小河・近藤(臨床検査学科共同研究室)										
備考	各生理機能検査の実習中は、その部門の基礎的知識をしっかりと身につけること。 本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 樋本(医師)、大栗(臨床検査技師)、小河(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)										

生体機能検査学実習Ⅱ (Physiological Technology Practice Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、小河 佳織 (OGO Kaoru)										
授業の目的	呼吸器、体液、脳・神経、画像検査の生理機能検査について、専門的な知識・技術と実践能力を習得する。また、生理機能検査に関するデータ管理能力や科学的思考力を用いて研究できる基礎的能力を習得する。										
到達目標	呼吸機能検査、脳波検査、心臓超音波検査を理解し、検査結果を正しく評価できる。										
授業の進め方	① 学生は交互に検者と被検者になって検査を実習し、患者の立場からも生理機能検査の理解に努める。 ② 実技を施行していない学生は、課題について自習し、その後討論する。 ③ 各単元の実習についてレポートを提出する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~5	呼吸器系、体液の生理機能検査 換気機能検査、肺胞機能検査、体成分分析について、機器の取扱い方や実技、検査結果の解析や評価法などを実習する。（太田、大栗）									
	6~10	脳・神経系の生理機能検査 脳波検査について、機器の取扱い方や電極の装着、波形の導出、脳波波形の解析や評価法などを実習する。（樋本、末澤、大栗）									
	11~14	心臓超音波検査 心臓超音波検査について、機器の取扱い方や標準的な画像の描出法、検査結果の解析や評価法などを実習する。（小河）									
	15	実技試験 実習に際しては、学生は3グループに分かれ、各生理機能検査を学習する。 最終日には、老年看護学教員を講師に招いて生理検査における患者接遇の講義・実習を行う。									
教科書	最新臨床検査学講座 生理機能検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	配布資料 JAMT技術教本シリーズ (じほう) 標準臨床検査学 生理検査学・画像検査学 (医学書院) 病気がみえる 循環器 (MEDICA MEDICA)										
事前学習・事後学習	事前に実習書をよく読んでそれぞれの実習に臨むこと。 実習後は疑問点や実習で行った内容を実習書に書き込み、知識の整理を行うこと。										
他の授業との関連	生体制御機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない場合、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を、レポートおよび期末試験 (筆記) で評価する。 評価の配分割合 (筆記試験70%、レポート30%) 期末筆記試験終了後、1週間を目安に、評価結果に対するフィードバックを行う。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付け可能。樋本 (研究室32)、太田 (研究室44)、末澤 (研究室34)、大栗 (研究室39)、小河 (臨床検査学科共同研究室)										
備考	本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 樋本 (医師)、太田 (臨床検査技師)、大栗 (臨床検査技師)、小河 (臨床検査技師)										

臨床医学Ⅱ (Clinical Medicine Ⅱ)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)										
授業の目的	主として内科的疾患について、代表的な疾病の病因、病態、症状、検査所見、経過、治療などを学習し、医療における臨床検査の役割を理解するとともに、検査結果を正しく管理、分析、評価するのに必要な専門的知識を習得する。										
到達目標	疾患の病態を理解し、それぞれの疾患の診断に必要な検査所見が論理的に説明できる。										
授業の進め方	代表的な疾病の病態や臨床検査の異常所見および治療法について、プリントを用いて説明する。講義終了前にまとめの問題を解いて、それらに関する理解度を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	内分泌疾患(1) 下垂体疾患、甲状腺疾患									
	2	内分泌疾患(2) 副甲状腺疾患、副腎疾患									
	3	代謝(1) 糖代謝異常									
	4	代謝(2) 脂質代謝異常、尿酸代謝異常など									
	5	血液疾患(1) 貧血症、白血病など									
	6	血液疾患(2) 悪性リンパ腫など									
	7	血液疾患(3) 血小板減少症、凝固異常など									
	8	免疫・アレルギー性疾患(1) アレルギー疾患									
	9	免疫・アレルギー性疾患(2) 膠原病、免疫不全症など									
	10	感染症(1) 細菌感染症									
	11	感染症(2) ウイルス感染症									
	12	感染症(3) その他の感染症									
	13	腎疾患 腎炎、腎不全									
	14	泌尿器疾患 腎・尿路結石、尿路感染症、腫瘍									
	15	循環器疾患(1) 心不全、不整脈、先天性心疾患、心臓弁膜症									
	16	循環器疾患(2) 虚血性心疾患、心筋疾患、脈管疾患									
	17	呼吸器疾患(1) 感染性肺疾患、慢性閉塞性肺疾患など									
	18	呼吸器疾患(2) 肺循環障害、胸膜疾患、肺癌、睡眠時無呼吸症候群など									
	19	消化管疾患(1) 食道、胃・十二指腸の疾患									
	20	消化管疾患(2) 大腸の疾患									
	21	肝疾患(1) 肝炎、肝硬変、脂肪性肝疾患									
	22	肝疾患(2) 自己免疫性肝疾患、肝腫瘍									
	23	胆膵疾患 胆石、胆道感染症、膵炎、膵癌、神経内分泌腫瘍など									
教科書	最新臨床検査学講座 病態学／臨床検査医学総論(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	臨床医学総論・臨床検査医学総論(医歯薬出版) 内科学(朝倉書店)										
事前学習・事後学習	復習をしっかりとる。										
他の授業との関連	臨床医学Ⅰ、病態生理機能検査学、病態代謝機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 到達目標の達成状況を、筆記試験(中間・期末)により評価する。(100%) フィードバックについては、試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付け可能。(研究室32)										
備考	次回の講義までに復習しておくこと。 * 実務経験のある教員 樋本(医師)										

病態生理機能検査学 (Clinical Pathophysiology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)										
授業の目的	臨床検査学を学ぶうえで、種々の疾患の病態生理を理解することは極めて重要である。本講義では、循環器、消化器、神経など生体の生理機能を調節している各器官についてその構造や機能を十分把握したうえで疾患の病態を理解し、臨床検査の異常を論理的に説明できることを目的とする。										
到達目標	①循環器疾患の病態生理および臨床検査の異常所見について論理的に概説できる。 ②消化器疾患の病態生理および臨床検査の異常所見について論理的に概説できる。 ③神経・筋疾患の病態生理および臨床検査の異常所見について論理的に概説できる。										
授業の進め方	本講義では、まず循環器、消化器および神経・筋肉などの構造や生理機能について理解する。次に、主な循環器疾患、消化器疾患や神経・筋疾患の基本的な病態について学習する。また、それらの疾患を診断したり、治療効果を評価したりするために行われる臨床検査の意義、さらには緊急検査の果たす役割についても学習する。講義はプリントを用いて行い、講義終了前にまとめの問題を解いてそれらに関する理解度を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	循環器(1) 循環器系の構造と機能									
	2	循環器(2) 循環器疾患の病態生理と臨床検査(1)									
	3	循環器(3) 循環器疾患の病態生理と臨床検査(2)									
	4	循環器(4) 循環器疾患の病態生理と臨床検査(3)									
	5	消化器(1) 消化管の構造と機能(樋本)									
	6	消化器(2) 消化管の内視鏡検査と内視鏡を用いた治療									
	7	消化器(3) 肝機能検査									
	8	消化器(4) 自己免疫性肝疾患の病態生理と臨床検査									
	9	消化器(5) 肝腫瘍・膵腫瘍の病態生理と臨床検査									
	10	消化器(6) 非腫瘍性膵疾患の病態生理と臨床検査									
	11	神経(1) 神経・筋の構造と機能									
	12	神経(2) 神経・筋疾患の病態生理と臨床検査(1)(認知症の検査含む)									
	13	神経(3) 神経・筋疾患の病態生理と臨床検査(2)									
	14	神経(4) 神経・筋疾患の病態生理と臨床検査(3)									
	15	緊急検査 緊急検査									
教科書	特に指定はない。講義ではプリントを配布する。										
参考書・参考資料等	臨床検査学講座 臨床医学総論・臨床検査医学総論(医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	復習をしっかりとすること。										
他の授業との関連	臨床医学Ⅱ、病態代謝機能検査学、生体制御機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として、総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 到達目標の達成状況を、原則として筆記試験(中間・期末)で評価する。(100%) フィードバックについては、試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付け可能。樋本(研究室32)										
備考	* 実務経験のある教員 樋本(医師)										

病態代謝機能検査学 (Clinical Pathometabolic physiology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	45	授業形態	講義
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)										
授業の目的	生体の代謝機能や防御機能を調節している各器官について主な疾患の基本的な病態を理解するとともに、臨床検査の異常所見を体系的に学習する。										
到達目標	それぞれの臨床検査項目が異常値を示す機序について論理的に説明ができる。										
授業の進め方	検査値の異常所見から疾患の病態に迫る。講義はプリントを用いて講義を行う。講義終了前にまとめの問題を解いてその理解度を深める。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	内分泌疾患 (1)	内分泌疾患の病態と臨床検査								
	2	内分泌疾患 (2)	内分泌疾患の病態と臨床検査								
	3	内分泌疾患 (3)	内分泌疾患の病態と臨床検査								
	4	内分泌疾患 (4)	内分泌疾患の病態と臨床検査								
	5	代謝異常 (1)	代謝異常の病態と臨床検査								
	6	代謝異常 (2)	代謝異常の病態と臨床検査								
	7	代謝異常 (3)	代謝異常の病態と臨床検査								
	8	血液疾患 (1)	血液疾患の病態と臨床検査								
	9	血液疾患 (2)	血液疾患の病態と臨床検査								
	10	血液疾患 (3)	血液疾患の病態と臨床検査								
	11	免疫異常 (1)	免疫異常の病態と臨床検査								
	12	免疫異常 (2)	免疫異常の病態と臨床検査								
	13	総括	中間試験 (範囲は第1回～第12回)								
	14	感染症 (1)	感染症の病態と臨床検査								
	15	感染症 (2)	感染症の病態と臨床検査								
	16	感染症 (3)	感染症の病態と臨床検査								
	17	消化器疾患 (1)	消化器疾患の病態と臨床検査								
	18	消化器疾患 (2)	消化器疾患の病態と臨床検査								
	19	消化器疾患 (3)	消化器疾患の病態と臨床検査								
	20	消化器疾患 (4)	消化器疾患の病態と臨床検査								
	21	神経・腎疾患	神経および腎疾患の病態と臨床検査								
	22	呼吸器・循環器疾患	呼吸器および循環器疾患の病態と臨床検査								
	23	悪性腫瘍	悪性腫瘍の病態と臨床検査								
教科書	最新臨床検査学講座 病態学／臨床検査医学総論 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	異常値の出るメカニズム (医学書院)										
事前学習・事後学習	復習をしっかりとすること。										
他の授業との関連	臨床医学Ⅱ、病態生理機能検査学										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として、総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられない。 到達目標の達成状況を、筆記試験 (中間・期末) により評価する。(100%) フィードバックについては、試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	随時 (研究室32)										
備考	* 実務経験のある教員 樋本 (医師)										

検査精度保証管理学 (Quality Assurance Management)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	正確さを基盤とした測定体系による臨床検査データの標準化、標準物質、測定誤差要因、内部精度管理、外部精度保証など、国際的な標準化の視野から検査精度保証に関する基本的な考え方や、臨床研究等の実践方法について習得する。										
到達目標	①精度保証の概念と標準化およびSI単位について説明できる。 ②測定値の誤差と変動要因について説明できる。 ③精密さと正確さの評価法を説明し、実践できる。 ④内部精度管理と外部精度保証の実際についてそれぞれの特徴を理解し、実践できる。										
授業の進め方	教科書やプリントを用いて講義するが、パワーポイントも適宜利用する。また、各自が授業に参加できるようなレポート発表や討論も行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	精度管理とは クオリティマネジメント体系 臨床検査に関する国際標準化 精度管理に必要な統計学① 精度管理に必要な統計学② 精度管理法の分類 内部精度管理 外部精度管理 誤差の分類と許容範囲 化学分析の単位 酵素活性の単位、SI単位 標準化(基準測定操作法と標準物質) トレーサビリティと共用基準範囲 業務や研究における測定法の信頼性評価 臨床検査の品質保証									
	2										
	3										
	4										
	5										
	6										
	7										
	8										
	9										
	10										
	11										
	12										
	13										
	14										
	15										
教科書	最新臨床検査学講座 臨床検査総合管理学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	理解を深めるため、予習・復習をしっかりとしておくこと。レポートでは自分の意見や主張をしっかりと述べること。討論会では自分が言いたいことを聞き手に明確に伝えられるように常日頃より練習しておくこと。										
他の授業との関連	検査情報解析学、医療情報処理学、臨床検査管理運営学、検査分析システム学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、学習意欲と積極的な取り組み30%、課題提出40%、確認テスト30%により総合的に評価する。 ・提出した課題や確認テストについては、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問や相談等がある場合は研究室43にて随時対応する。										
備考	本科目が不可になった場合は、臨地実習を履修することができない。 * 実務経験のある教員 徳原(臨床検査技師)										

検査分析システム学 (Laboratory Analytical Systems)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	講義・演習
担当教員	●徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	現在までの臨床検査システムおよびオーダリングシステム等の変遷と背景を理解し、臨床検査システム構築の基本的な考え方と実際、検査各部門における自動分析装置オンラインシステム等について学ぶ。また、電子カルテや病院全体の情報システムについて学び、症例を用いた検査や研究結果の検討と評価を行う。										
到達目標	①臨床検査システムの概要を説明できる。 ②自動分析装置オンラインシステム、臨床検査搬送システムを実際に見学し、その機能を理解し、メリット・デメリットを説明できる。 ③医療における情報システムについて理解し、そのなかで臨床検査の役割を説明することができる。 ④検査結果から病態を考察できる。										
授業の進め方	教科書やプリントを用いて講義し、パワーポイントも適宜利用する。また、施設見学、プレゼンテーション、そしてグループワーク等も行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	病院全体の情報システム									
	3~4	臨床検査システム(オーダリングシステム)									
	5	検査受付(予約・照合・搬送)									
	6	臨床検査の自動化									
	7	検体の前処理①(検体の種類)									
	8~9	検体の前処理②(業務や研究に必要な検体処理と注意点)									
	10	検査結果を確認するシステム体制									
	11~13	検査結果報告の種類と方法									
	14~16	検査結果への付加情報、コメント									
	17~19	検査結果の問い合わせ									
	20~24	症例を用いた検査結果の検討と評価①									
	25~28	症例を用いた検査結果の検討と評価②									
29~30	検査体制と検査業務(株式会社 四国中検 見学)										
教科書	最新臨床検査学講座 臨床検査総合管理学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	予習・復習をしっかりとしておくこと。プレゼンテーションやグループワークでは自分が言いたいことを聞き手に明確に伝えられるように平日頃より練習しておくこと。										
他の授業との関連	検査情報解析学、検査精度保証管理学、臨床検査管理運営学、医療情報処理学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、学習意欲と積極的な取り組み30%、課題提出30%、演習課題40%(プレゼンテーションやグループワークによる説明力等)により総合的に評価する。 ・提出した課題については、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問・相談等は研究室43にて随時対応する。										
備考	施設見学では指示を守り、素早く行動すること。挨拶をきちんと行うこと。また、仕事の邪魔にならないように配慮し、私語を慎むこと。* 実務経験のある教員 徳原(臨床検査技師)										

検査情報解析学 (Laboratory Informatics)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	質の高い診療支援を行うためには検査情報解析は不可欠である。そこで検査データを解析するための判断基準としての基準範囲(正常値)の設定方法とその意義や診断能力の評価方法など科学的な思考力を養い、診療支援や臨床研究についての手法を学ぶ。										
到達目標	①臨床判断値について説明できる。 ②基準範囲の設定方法を説明できる。 ③検査の特性と診断能力を評価できる。										
授業の進め方	教科書やプリントを用いて講義するが、パワーポイントも適宜利用する。また、各自が授業に参加できるような課題提出も行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	臨床検査の重要性									
	2	臨床検査の意義と目的									
	3	臨床検査の技術評価制度									
	4	スクリーニング検査・精密検査・特殊検査									
	5	診察前検査・緊急検査									
	6	重症度・予後の検査									
	7	外部評価と臨床検査の質									
	8	認証制度と検査の安全管理									
教科書	最新臨床検査学講座 臨床検査総合管理学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	理解を深めるため、その都度予習・復習をしっかりとっておくこと。										
他の授業との関連	医療情報処理学、検査精度保証管理学、臨床検査管理運営学、検査分析システム学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、学習意欲と積極的な取り組み30%、課題提出30%、演習課題40%(プレゼンテーションやグループワークによる説明力等)により総合的に評価する。 ・提出した課題については、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問や相談は研究室43にて随時対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 徳原(臨床検査技師)										

臨床検査管理運営学 (Laboratory Management)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	医療関連施設における臨床検査室・臨床検査技師の役割、組織体制、検体の取り扱いや研究に関する倫理、接遇、管理法の実際や安全管理、そして医療過誤および検査保険点数を含む損益に関する運営方法について学ぶ。										
到達目標	①管理の本質を理解し、倫理的行動や組織体系を説明できる。 ②臨床検査の意義が説明できる。 ③臨床検査部門の役割を説明できる。 ④臨床検査部門の管理運営を説明できる。										
授業の進め方	教科書・プリント・学術論文等を用いて講義するが、パワーポイントも適宜利用する。また、各自が授業に参加できるような討論会や課題提出も行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	検査体制と検査業務									
	2	臨床検査部門の組織と業務管理									
	3	予防医学と衛生検査所									
	4	臨床検査部門の機器管理および物品管理									
	5	臨床検査部門の人事管理									
	6	臨床検査部門の安全管理									
	7	臨床検査部門の情報管理									
	8	臨床検査部門の財務管理									
教科書	最新臨床検査学講座 臨床検査総合管理学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	資料を配布する。										
事前学習・事後学習	理解を深めるため、予習・復習をしっかりとしておくこと。レポートでは自分の意見や主張をしっかりと述べること。討論会では自分が言いたいことを聞き手に明確に伝えられるように常日頃より練習しておくこと。										
他の授業との関連	検査情報解析学、検査精度保証管理学、医療情報処理学、検査分析システム学										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、学習意欲と積極的な取り組み30%、課題提出40%、演習課題30%(グループワークによる説明力等)により総合的に評価する。 ・提出した課題については、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問や相談は研究室43にて随時対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 徳原 (臨床検査技師)										

基礎検査技術学演習 (Basic Medical Technology Laboratory)											
必修・選択の区別	必修	学年次	2	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	演習
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	静脈採血における知識および採血手技を修得する。										
到達目標	① 採血に必要な器具および手順を説明することができる。 ② 採血時の安全管理を理解して採血業務ができる。										
授業の進め方	実習および講義は、スライドとプリント資料を用いて行う。採血用の模擬腕を使用して採血手順を習得する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	実験室、研究室：室内の機器・器具について(安全キャビネット、クリーンベンチ等)									
	2	採血法：採血時の安全管理、採血に際しての注意事項									
	3	採血法：採血の種類、部位									
	4	採血法：採血の手段(乳幼児の採血)									
	5	採血法：採血の手順Ⅰ									
	6	採血法：採血の手順Ⅱ									
	7	採血法：採血の手順Ⅲ									
	8	まとめ：採血業務、機器・器具、消毒									
教科書	プリント資料										
参考書・参考資料等	臨床検査禁忌・注意マニュアル(医歯薬出版)、分子生物学実験の基礎(バイオ実験イラストレイテッド)										
事前学習・事後学習	事前学習：採血の注意点、必要器具、手順を確認しておく。 事後学習：採血に関する器具の準備、手技について実践できるようにする。										
他の授業との関連	臨床検査学科 専門教育科目										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、実習態度40%、筆記試験60%により評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	池亀:研究室33:"ikegame-a@kagawa-puhs.ac.jp" 臨床血液実習室等で適宜対応										
備考	演習にかけられる時間が短時間であるため、積極的に行うこと。 * 実務経験のある教員 池亀(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)										

専門ゼミナール (Seminar in Medical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、古山 達雄 (FURUYAMA Tatsuo)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、水津 太 (SUIZU Futoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)、宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	①卒業研究に先立ち、教員が実際に行っている研究内容を学び、そのテーマについて国内外の科学論文の読み方、書き方、文献検索法等の研究手法について習得する。 ②研究や医療における倫理について学習する。 ③研修会への参加などから、医療従事者の一人として生涯学習の重要性を認識する。										
到達目標	各検査学分野の研究内容の中から、興味を持った内容について詳しく説明できる。										
授業の進め方	オムニバス方式で行う。各教員が行っている最新の研究内容を紹介し、研究テーマに関する文献等の検索法や論文の読み方、書き方等について学習する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	遺伝子	小児疾患における分子生物学および遺伝学的解析 (岡田)								
	2	細胞病理	発がんメカニズムの分子病理学的解析 (水津)								
	3	臨床生理検査	電気生理学および超音波検査法を用いた早期診断法の開発 (大栗)								
	4	血液系検査	敗血症におけるプレセプシン産生機序に関する研究 (池亀)								
	5	肝免疫	肝疾患における自己抗体の臨床的意義 (樋本)								
	6	感染症Ⅰ	病原細菌の内因性血液感染機構の分子生物学的解析 (奥田)								
	7	一般検査	尿検査に関連する新規検査法開発の研究結果と内容の紹介 (徳原)								
	8	臨床化学	糖質・脂質代謝関連検査、細胞中酵素活性測定法の研究と開発 (多田)								
	9	臨床免疫	Rh表現型と生化学自動分析装置を用いたRhD定量結果の関連 (宮川)								
	10	形態学	血管新生の分子メカニズムに関する研究 (新美)								
	11	解剖生理	老化、寿命を制御する因子 (古山)								
	12	感染症Ⅱ	下痢原性細菌の病原性に関する研究 (末澤)								
	13	糖質代謝	糖尿病とDPP-Ⅳに関する研究 (太田)								
	14	研修会参加	3大学連携研修会への参加								
	15	検討会	文献検索・レポート作成								
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	各分野における専門書										
事前学習・事後学習	興味を持った研究内容に関しては、レポートの形で学習したことをまとめる。										
他の授業との関連	卒業研究										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、レポートで評価する(100%)。 〈評価の視点〉 「レポートでは、研究内容の理解力・記述力を評価する」 ・レポート評価については、提出後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、臨床検査学科長室または開講日授業終了後に受け付けます。										
備考	卒業研究のテーマを決める上で、重要な授業である。 * 実務経験のある教員 奥田 (薬剤師)、樋本 (医師)、岡田 (医師)、多田 (臨床検査技師)、池亀 (臨床検査技師)、徳原 (臨床検査技師)、宮川 (臨床検査技師)、太田 (臨床検査技師)、大栗 (臨床検査技師)、古山 (医師)										

臨床検査関係法規 (Law and Medical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●太田 安彦 (OTA Yasuhiko)										
授業の目的	わが国の憲法－法－制度の体系のもとで形づくられる保健・医療・福祉を総合的に理解するとともに、臨床検査技師の業務に必要な臨床検査技師等に関する法律他、医事関係法規を習得する。										
到達目標	①臨床検査技師等に関する法律の内容を説明できる。 ②医事関係法規の概要を説明できる。 ③わが国の保健・医療・福祉制度の成り立ちを説明できる。										
授業の進め方	法の概念、法令の成り立ち、わが国の憲法・法・制度体系を理解したのち、医療従事者として必要な関係法規について、その法体系を中心に講義を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	総論 法の概念、法、命令、規則、憲法・法・制度、医事法規概説、厚生行政体系【講義】									
	2	臨床検査技師法詳説 臨床検査技師法の変遷、総則、免許、試験【講義】									
	3	臨床検査技師法詳説 業務と守秘義務、診療行為と診療の補助行為、保健師助産師看護師法との関連、採血と生理検査【講義】									
	4	臨床検査技師法詳説 衛生検査所、院内委託業務、精度管理【講義】									
	5	保健医療福祉法規 医療法、地域保健法、医師法、歯科医師法、薬剤師法、保健師助産師看護師法ほか【講義】									
	6	保健医療福祉法規 予防・保健関係法規、薬事・食品関係法規【講義】									
	7	保健医療福祉法規 環境衛生関係法規、福祉関係法規、労働関係法規【講義】									
	8	臨床検査と医療過誤 医療過誤、検査過誤の実態、臨床検査技師の医療事故における責任【講義】									
教科書	最新臨床検査学講座 関係法規(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	特に指定しない。										
事前学習・事後学習	事前学習：シラバスに示したキーワードについて教科書、インターネット等であらかじめ予備知識を得ておくこと。 事後学習：授業内容、配布資料もまじえて、総合的に理解すること。また、保健・医療の社会性を理解するために新聞、テレビ等の報道内容にも常に目を向けるようにすること。										
他の授業との関連	健康食品学関係法規、公衆衛生学Ⅰ、公衆衛生学Ⅱ、公衆衛生学Ⅲ										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として単位認定しない。 到達目標の達成状況を、筆記試験(100%)により評価する。 ＜評価の視点＞筆記試験で臨床検査技師にかかわる様々な法規について正しく理解できているかを評価する。 ＜結果のフィードバック＞試験結果は一定期間掲示するとともに、希望者には個別に結果を開示する。										
オフィスアワー	随時 (研究室44) メール可 E-mail: oota@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	法規は、毎年改訂されることが多いので、教科書等の購入にあたっては最新刊を用意すること。										

先端医療技術学 (Advanced Medical Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、平川 栄一郎 (HIRAKAWA Eiichiro)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、古山 達雄 (FURUYAMA Tatsuo)、樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、水津 太 (SUIZU Futoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)、宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、大栗 聖由 (OGURI Masayshi)、新美 健太 (NIIMI Kenta)										
授業の目的	①臨床検査分野で注目されている国内外の先端医療技術についてのトピックス、将来展望、課題について学習する。 ②国際感覚を備え、臨床検査技師として資質を高めるための内容を習得する。										
到達目標	①臨床検査分野で注目されている先端医療技術についてのトピックスについて説明ができる。 ②興味を持った先端医療技術について、詳細なレポートを作成できる。										
授業の進め方	オムニバス方式で行う。新しい技術等の内容を理解させるために、画像やスライド等を用いて行う場合がある。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	血液検査	造血器腫瘍に対する検査結果の考え方 (池亀)								
	2	老化	老化の制御に関する基礎研究から臨床への応用 (古山)								
	3	臨床化学検査	糖尿病治療の最前線 (太田)								
	4	分子生物・遺伝子	小児疾患の分子メカニズムと治療 (岡田)								
	5	腫瘍分子病理	発癌の分子病理 (水津)								
	6	一般検査	一般検査業務から臨床研究へと発展した研究成果の紹介 (徳原)								
	7	免疫・輸血検査	治療薬による輸血検査偽陽性反応への対処法 (宮川)								
	8	臨床生理	神経生理検査のアプローチ (大栗)								
	9	肝免疫①	肝疾患における自己抗体の臨床的意義 (樋本)								
	10	肝免疫②	肝疾患における自己抗体の臨床的意義 (樋本)								
	11	癌の治療戦略	肺がん治療戦略のための病理検査 (平川)								
	12	形態学	組織透明化による全細胞解析 (新美)								
	13	動脈硬化検査	動脈硬化性疾患研究の最前線 (多田)								
	14	微生物検査①	緑膿菌の糞便監視培養の重要性 (奥田)								
	15	微生物検査②	細菌の病原性に関する研究とその将来展望、病原体検査法 (末澤)								
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	各講義に関する専門書										
事前学習・事後学習	興味を持った研究内容に関しては、レポートの形で学習したことをまとめる。										
他の授業との関連	卒業研究										
成績評価方法・基準・フィードバック	・興味を持った講義内容についてレポートを提出し、到達目標の達成状況を担当教員が評価する (100%)。 〈評価の視点〉 「レポートでは、興味を持った講義内容の理解力・記述力を評価する」 ・レポート評価については、提出後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、臨床検査学科長室または開講日授業終了後に受け付けます。										
備考	講義項目・順序は変更することがある。 * 実務経験のある教員 奥田 (薬剤師)、平川 (医師)、樋本 (医師)、岡田 (医師)、多田 (臨床検査技師)、池亀 (臨床検査技師)、徳原 (臨床検査技師)、宮川 (臨床検査技師)、太田 (臨床検査技師)、大栗 (臨床検査技師)										

医療安全管理学 (Health Care Safety Management)											
必修・選択の区別	必修	学年次	4	学期	後期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義・演習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、古山 達雄 (FURUYAMA Tatsuo)、樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、小林 英治 (KOBAYASHI Eiji)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)										
授業の目的	①臨床検査技師の責任と業務範囲を理解する。 ②感染管理及び医療安全に配慮して、適切に検体採取ができる能力を身につける。 ③危険因子を認識し、合併症の発生時に適切に対処する能力を身につける。										
到達目標	①臨床検査と医療事故に関するリスクマネジメントについて説明できる。 ②感染対策について説明できる。 ③鼻腔・咽頭・皮膚・口腔等からの検体採取法・注意点を理解し、実施できる。 ④消化管・肛門等からの検体採取法・注意点を理解し、実施できる。 ⑤静脈路確保と輸液の接続・成分採血・造影剤注入について注意点を理解し、実施できる。 ⑥運動誘発電位・体性感覚誘発電位検査に係る電極の注意点を理解し、実施できる。 ⑦持続皮下グルコース検査の注意点を理解し、実施できる。 ⑧経口、経鼻・気管カニューレ内部の喀痰を吸引採取する行為の注意点を理解し、実施できる。										
授業の進め方	・オムニバス方式でスライドとプリントを用いて講義を行い、動画なども適宜使用する。 ・演習には関連した演習用教材を使用し、より実践的な演習を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	○臨床検査技師に関する法律と医療倫理：法的知識とその責任範囲、検体採取の意義、リスクマネジメント、検査説明、患者とのかかわり方 (多田)【講義】									
	2	○感染対策の意義、手指衛生、PPEの使用、標準予防策、感染経路予防策、ワクチン等による予防、アウトブレイク、感染対策業務の組織化と実践。(奥田)【講義】									
	3~4	○皮膚・口腔等からの検体採取：目的と対象疾患、解剖・生理(皮膚・口腔)、検体採取の手技、患者への配慮、注意点、検体採取後の対応。(古山)【講義・演習】									
	5~6	○肛門からの検体採取：目的と対象疾患、検体採取の手技、患者への配慮、注意点、検体採取後の対応。(樋本)【講義・演習】									
	7~8	○直腸肛門機能検査・消化管内視鏡検査・医師の立会いの下、生検鉗子を用いて消化管から組織検体採取する行為・注意事項と安全管理(樋本・池亀)【講義・演習】									
	9~10	○鼻腔・咽頭等からの検体採取：目的と対象疾患、解剖・生理(鼻腔・咽頭・喉頭)、検体採取の手技、患者への配慮、注意点、検体採取後の対応。(小林)【講義・演習】									
	11~12	○採血に伴い静脈路を確保し、電解質輸液に接続する行為、成分採血装置の接続・操作、終了後に抜針及び止血する行為・注意事項と安全管理(岡田・近藤)【講義・演習】									
	13~14	○超音波検査に関連する行為で、静脈路を確保し、造影剤を注入するための装置を接続する行為、終了した後に抜針及び止血する行為。運動誘発・体性感覚誘発電位検査に係る電極(針電極を含む。)装着及び脱着・注意事項と安全管理(古山・大栗)【講義・演習】									
	15	○持続皮下グルコース検査、経口、経鼻又は気管カニューレ内部から喀痰吸引して採取する行為・注意事項と安全管理、患者急変時の対応(岡田・森西)【講義・演習】									
教科書	最新臨床検査学講座 医療安全管理学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	適宜紹介する。										
事前学習・事後学習	・解剖学を復習しておくこと、学習後も様々なリスク管理について十分復習しておくこと。										
他の授業との関連	人体の構造と機能、微生物検査学、臨床医学等										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を各レポート80%、学習態度20%により総合的に評価する。 ・評価の視点:検体採取に関する注意点・安全管理について十分に理解できているかを評価する。 ・評価結果については、授業終了後2週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	担当教員の研究室で随時。研究室36(多田)、研究室38(奥田)、研究室35(古山)、研究室32(樋本)、研究室45(岡田)、研究室33(池亀)、または、開講日授業終了後に受け付ける。										
備考	臨床現場で活かせるように積極的に学び、十分に技術を取得すること。 * 実務経験のある教員 多田、池亀、大栗、森西、近藤(臨床検査技師)、奥田(薬剤師)、樋本、小林、古山、岡田(医師)										

検診検査学 (Medical Examination Technology)											
必修・選択の区別	必修	学年次	カリキュラムにより異なります。	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●松本 導彦 (MATSUMOTO Michihiko)										
授業の目的	検診におけるデータの評価や管理方法などの実務を身に付け、検診の意義やその中で検査技師が果たす役割を学ぶ。 〔学習目標〕 ・検診の意義を理解する ・検診におけるデータの重要性と管理方法を学ぶ ・検診における検査技師の役割を理解する										
到達目標	① 検診の意義を広く理解し検診における受診率向上などについて具体的に提案できる。 ② 検診におけるデータ管理の重要性を具体的に理解し仕事の中で役立てることができる。										
授業の進め方	資料及びパワーポイント等を用いてそれぞれの内容で講義を行う。 検診施設の見学を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	予防医学と検診(検診を取り巻く社会環境、検診の目的)【講義】									
	2	検診の種類と目的(特定健診・がん検診・働く人の健康診断など)【講義】									
	3	検診施設について(検診の流れ・各検査の説明など)【講義】									
	4	がん検診-総論-(がん検診の仕組み・指針・精度管理の重要性)【講義】									
	5	がん検診-精度管理-(精度管理の概要・技術・体制的指標、プロセス指標、アウトカム指標)【演習】									
	6	がん検診-受診対策-(対象者の特性から対策を考える)【討論】									
	7	がん検診-精度管理-(検査技師の役割)【講義】									
	8	検診施設(予防医学協会)の見学(検診会場・検査室・検診車内部の見学)【演習】									
教科書	なし										
参考書・参考資料等	『働く人の健康』((社)全国労働衛生団体連合会)										
事前学習・事後学習	参考資料を読んでくる。										
他の授業との関連	臨床検査学専門科目全般										
成績評価方法・基準・フィードバック	到達目標の達成状況を、 ①グループワークでの参加度、発表内容(30%) ②レポート内容(学んだ知識を活用した考察ができているか)(70%) により評価する。 評価結果については、オフィスアワーに準じる方法または大学事務局に問い合わせがあった場合に評価内容を説明する。 出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として単位認定しない。										
オフィスアワー	質問等についてはメールでの受付を行います。 e-mail: matsumoto@kumegawa-hsp.jp 又は授業後の講師控室でも可能な日もあり。										
備考	・講義項目・順序は変更することがあります。										

生殖補助医療技術論 (Assisted Reproductive Technology)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義・演習
担当教員	●小河 佳織 (OGO Kaoru)、塩田 敦子 (SHIOTA Atsuko)、中澤 留美 (NAKAZAWA Rumi)										
授業の目的	臨床検査技師がエンブリオロジストとして働くための生殖補助医療技術 (ART) の基礎と倫理、関連する最新の知見を学ぶ。そのために産婦人科の疾患、不妊治療に関わる具体的な内容と技術、すなわち精子や卵子の発生学や妊娠成立などの基礎的な講義に加えて、体外受精や顕微授精などの生殖補助医療技術の基本的な細胞培養、精液分析などの技術を演習で学ぶ。										
到達目標	① 不妊症の基礎知識を習得し、その原因、検査、治療法について概説できる。 ② 生殖補助医療技術 (ART) の進歩、実際の方法について概説できる。 ③ 不妊症治療に関わる生殖生命倫理について考察し、自分の考えを述べることができる。 ④ ARTに関わる技術の演習を行い、その基本的操作法を実施できる。										
授業の進め方	エンブリオロジストとして働くための基礎として産婦人科の疾患や受精のしくみ、また生殖生命倫理について解説した後、演習にて生殖補助医療技術の基本的操作法を習得する。担当教員それぞれの関連研究についても概説する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	性周期とホルモン、婦人科疾患の診断と臨床検査、治療 (塩田)【講義】									
	2	リプロダクティブ・ヘルスと生殖生命倫理 (塩田)【講義】									
	3	産婦人科領域における超音波検査 (小河)【講義】									
	4	不妊症の原因とその検査 (小河)【講義】									
	5	生殖補助医療技術 (ART) の実際 (小河)【講義】									
	6	エンブリオロジストと生殖補助医療技術 (ART) (中澤)【演習】									
	7	精液検査 (精子数のカウント、運動精子数の算出、精液処理法) (中澤)【演習】									
	8	胚の取り扱い (ガラス管の作成、ガラスビーズにて胚の移動、凍結技術) (中澤)【演習】									
教科書	講義資料を配布します。										
参考書・参考資料等	生殖補助医療 (ART) 胚培養の理論と実際 (近代出版)										
事前学習・事後学習	事前学習: 日頃から婦人科疾患、不妊症、生殖生命倫理のニュース、記事に興味をもってほしい。 事後学習: エンブリオロジストの使命、生殖生命倫理について自らの考えを述べられる。										
他の授業との関連	婦人科疾患、不妊症、生殖倫理および最新の生殖補助医療技術を学ぶことは他の臨床検査分野の学習、実践に役に立つと考える。										
成績評価方法・基準・フィードバック	演習後のレポート (80%)、演習態度 (20%) により総合的に評価する。 評価の公開後、結果を開示する期間を約1週間設る。 なお、出席時間数が授業時間数の 5 分の 4 に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	研究室在室時はいつでも質問、相談を受け付ける。(検査学科共同研究室) 授業終了後に随時対応する。(塩田)										
備考	* 実務経験のある教員 小河 (臨床検査技師)、塩田 (医師)、中澤 (臨床検査技師、胚培養士)										

リスクマネジメント(実践臨床検査学) (Risk Management)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	後期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●多田 達史(TADA Satoshi)、奥田 潤(OKUDA Jun)、池亀 彰茂(IKEGAME Akishige)、徳原 康哲(TOKUHARA Yasunori)、宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草(SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦(OTA Yasuhiko)、大栗 聖由(OGURI Masayshi)、小河 佳織(OGO Kaoru)、近藤 明宏(KONDO Akihiro)、森西 起也(MORINISHI Tatsuya)、青野 りよ(AONO Riyo)										
授業の目的	総合病院等で臨床検査技師として活躍する為には、各検査領域の実践能力およびリスクマネジメントの知識が必要である。本教科は日常臨床検査業務の中で、特に日当直業務に必要な知識・リスクを学び、就職前の臨床検査実践能力を高める事を目的とする。										
到達目標	① 心電図の精度管理、異常データおよび測定時のリスクについて説明できる。 ② 臨床化学検査の精度管理、異常データ、パニック値、リスクについて説明できる。 ③ 輸血検査におけるリスクおよび緊急対応について説明できる。 ④ 血液検査(血算・止血検査)の異常データ、パニック値、リスクについて説明できる。 ⑤ 微生物検査におけるGram染色の臨床的意義、リスクについて説明できる。 ⑥ 病理検査におけるリスクとマネジメントについて説明できる。										
授業の進め方	オムニバス方式で行う。各講義ではより実践に役立つ資料(画像・臨床データ)を用いて行う場合がある										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2 3 4 5 6 7 8	生理機能検査Ⅰ 生理機能検査Ⅱ 臨床化学検査(検査データの読み方、リスク管理、パニック値対応など) 輸血検査(緊急輸血検査のリスク管理など) 微生物検査(Gram染色など) 血液学検査 病理検査 精度管理(検体保存方法や日常検査の精度管理の対応など)									
教科書	特に指定しない。										
参考書・参考資料等	各講義に関する専門書										
事前学習・事後学習	臨地実習で学んだことの復習をする事。学習後は就職までに繰り返し復習しておく。										
他の授業との関連	すべての臨地実習が関連する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況をレポートで評価する(100%)。 〈評価の視点〉 「レポートでは異常データへの対応、緊急時対応、様々な分野でのリスクの理解・記述内容を評価する」 ・レポート評価に関して、全講義終了後1週間を目途に、評価結果を各学生へ開示する期間を設け、結果に対して評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、各担当教員が受け付ける。										
備考	講義項目・順序は変更することがある。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)、多田(臨床検査技師)、池亀(臨床検査技師)、徳原(臨床検査技師)、宮川(臨床検査技師)、末澤(臨床検査技師)、太田(臨床検査技師)、大栗(臨床検査技師)、小河(臨床検査技師)、森西(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)、青野(臨床検査技師)										

遺伝子分析科学 (Molecular Analysis)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●岡田 仁 (OKADA Hitoshi)										
授業の目的	1年次の生命科学概論、2年次の分子生物学、3年次の臨床遺伝子検査学を発展させ、在学中での遺伝子分析科学認定士資格を取得する。										
到達目標	① 遺伝子関連検査に必要な基礎医学知識を概説できる。 ② 遺伝子関連検査における機器や検体の取り扱いについて説明できる。 ③ 遺伝学的検査について概説できる。 ④ 染色体検査について概説できる。										
授業の進め方	遺伝子分析科学認定士資格試験に対応した内容を中心とした授業を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1 2~3 4~5 6~7 8~9 10~11 12~13 14~15	医学的知識・技術 遺伝子の基礎 遺伝子関連検査技術 遺伝子関連検査検査法 遺伝子関連検査結果の評価 染色体の基礎 染色体の検査学科技術 染色体検査結果の評価									
教科書	遺伝子検査技術-遺伝子分析科学認定士テキスト-、日本遺伝子分析科学同学院遺伝子分析科学認定士制度委員会、克誠堂出版										
参考書・参考資料等	参考資料を適宜配付。										
事前学習・事後学習	事前学習：生命科学概論、分子生物学、臨床遺伝子検査学で学習したことをまとめておく。 事後学習：演習は繰り返し行い、自分で展開できるようにする。										
他の授業との関連	1年次の生命科学概論、2年次の分子生物学、3年次の臨床遺伝子検査学で学んだ知識を基に授業を進める。										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の3分の2以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、授業参加度 (50%)、試験 (50%) により評価する。評価の視点：演習および試験では遺伝子検査技術の理解度で評価する。 フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	随時受け付ける。(研究室45)										
備考	* 実務経験のある教員 岡田 (医師)										

健康食品学 (Health Food Dietetics)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	2.0	時間数	30	授業形態	講義
担当教員	●太田 安彦(OTA Yasuhiko)、藤井 映子(FUJI Eiko)、多田 達史(TADA Satoshi)、池亀 彰茂(IKEGAME Akishige)、末澤 千草(SUEZAWA Chigusa)、近藤 明宏(KONDO Akihiro)										
授業の目的	臨床検査技師に対し栄養学、食品学および健康食品についての知識を習得し、健康食品の正しい使用法や健康増進に寄与できる人材育成を図る。また、健康食品等の摂取により変動が予想される臨床検査データの読み方や健康食品と医薬品の同時摂取により生体内で起こる相互作用について学び、その知識を一般消費者や患者に説明する方法等についての知識を身に着ける。										
到達目標	①健康維持における食の重要性、食品の3つの機能、健康食品の問題点、保健機能食品制度の概略、保健機能食品の各論について理解している。 ②一般の人に保健機能食品についてわかりやすく説明するための、健康食品に必要なコミュニケーション技術を理解している。 ③健康食品と医薬品との相互作用について理解している。										
授業の進め方	オムニバス方式で行う。レジュメ等を用いて講義するが、パワーポイントやビデオも適宜利用する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	保健機能食品総論1	食品の機能と健康、健康食品の問題点 (太田)【講義】								
	2	保健機能食品総論2	保健機能食品、特別用途食品制度について (太田)【講義】								
	3	保健機能食品各論1	特定保健機能食品と栄養機能食品1 (池亀)【講義】								
	4	保健機能食品各論2	特定保健機能食品と栄養機能食品2 (近藤)【講義】								
	5	医薬品と食品の相互作用	民間でよく使用されている機能性素材、医薬品と食品の相互作用 (太田)【講義】								
	6	病態解析と臨床検査1	臨床検査総論、疾病予防と臨床検査 (多田)【講義】								
	7	病態解析と臨床検査2	各種疾患と臨床検査 (多田)【講義】								
	8	病態と栄養管理1	傷病者に対する栄養管理 (藤井)【講義】								
	9	病態と栄養管理2	健康食品管理士とチーム医療 (藤井)【講義】								
	10	病態と栄養管理3	病態別の栄養管理1 (藤井)【講義】								
	11	病態と栄養管理4	病態別の栄養管理2 (藤井)【講義】								
	12	食品の安全性	食品の安全と衛生管理、食品添加物(規格基準、使用量、簡略化法等)、食中毒 (末澤)【講義】								
	13	食品の表示	表示制度、法律、食品マーク (末澤)【講義】								
	14	リスクコミュニケーション1	リスクコミュニケーションの基礎 (太田)【講義】								
	15	リスクコミュニケーション2	リスクコミュニケーションに関する法律と事例 (太田)【講義】								
教科書	講義資料を配布する。										
参考書・参考資料等	食の機能と健康の科学(一般社団法人日本食品安全協会)、健康・栄養食品アドバイザリースタッフ・テキストブック(第一出版)、健康食品のすべて 第2版(同文書院)、消化管吸収と相互作用(南山堂)、健康食品アドバイザリースタッフのための教本2014(健康食品管理士会四国支部香川県部会編)、健康食品管理士認定試験のための問題解説集(一般社団法人日本食品安全協会)										
事前学習・事後学習	保健機能食品に興味を持ち、普段の生活において常に意識するように心がけること。 認定試験受験予定者は、講義終了から認定試験まで間が空くのでよく復習しておくこと。その時には健康食品管理士認定試験のための問題解説集(一般社団法人日本食品安全協会)をよく理解しておくこと。										
他の授業との関連	健康食品学関係法規とともに健康食品管理士認定試験(11月～12月頃)の試験範囲になる。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として単位認定しない。 到達目標の達成状況を、試験もしくはレポート(100%)で評価する。 ＜評価の視点＞試験もしくはレポートで健康食品(保健機能食品)に関して正しく理解しているかを評価する。 ＜成績のフィードバック＞評価結果は一定期間掲示をするとともに、希望者には個別に結果を開示する。										
オフィスアワー	質問や相談等がある場合は研究室44で随時対応する。										
備考	* 実務経験のある教員 太田(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、藤井(管理栄養士)、多田(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、池亀(食の安全管理士、臨床検査技師)、末澤(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、近藤(上級食の安全管理士、臨床検査技師)										

健康食品学関係法規 (Health Food Law)											
必修・選択の区別	選択	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	15	授業形態	講義
担当教員	●太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)										
授業の目的	健康食品に関して消費者と製造・販売業者間で問題となっている現状を整理し、食品及び健康食品と関係する法規の概要を説明できる。また、健康食品の表示や販売等で問題となる虚偽・誇大広告など違反の事例を説明できる。さらに、保健機能食品制度に関する海外の現状を理解し、国際的な視野に立った健康食品の安全性について考察できる力を身に付ける。										
到達目標	① 食品安全法、食品衛生法、健康増進法、JAS法、医薬品医療機器等法(薬機法)、景品表示法、食品表示法、消費者安全法、製造物責任法特定商取引法(PL法)、消費者教育の推進に関する法律について目的と適用について理解している。 ② これらの法律と健康食品の関わりやリスク評価およびリスク管理について理解している。										
授業の進め方	オムニバス方式で行う。レジュメ等を用いて講義するが、パワーポイントも適宜利用する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	関係法規の概要、食品安全基本法 (近藤)【講義】									
	2	食品表示法 (末澤)【講義】									
	3	医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保に関する法律 (森西)【講義】									
	4	食品衛生法 (末澤)【講義】									
	5	JAS法 (森西)【講義】									
	6	健康増進法、景品表示法 (太田)【講義】									
	7	消費者安全法、特定商取引法、製造物責任法 (PL法) (太田)【講義】									
	8	消費者教育の推進に関する法律、違反に関する事例、問題集の解説 (太田)【講義】									
教科書	講義資料を配布する。										
参考書・参考資料等	食の機能と健康の科学(一般社団法人 日本食品安全協会)、健康食品管理士認定試験のための問題解説集(一般社団法人 日本食品安全協会)、健康食品のすべて(同文書院)、健康食品・保健機能食品関係法令・通知集(中央法規)、健康食品取扱マニュアル(薬事日報社)										
事前学習・事後学習	健康食品や保健機能食品は様々な法律で規定されている。理解度を深めるためにも普段から食品や栄養に関する法律の情報を収集しておくことが大切である。 認定資格を取得予定の人は受講が必須である。										
他の授業との関連	健康食品学とともに健康食品管理士認定試験(11月～12月頃)の試験範囲である。										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の3分の2に満たないときは、原則として単位認定しない。 到達目標の達成状況を、試験もしくはレポート(100%)で評価する。 ＜評価の視点＞試験もしくはレポートで、健康食品に関する法律の理解力を評価する。 ＜成績のフィードバック＞評価結果は一定期間掲示するとともに、希望者には個別に結果を開示する。										
オフィスアワー	質問や相談等がある場合は研究室44で随時対応する。										
備考	健康食品管理士認定試験を受験する場合は履修が必須である。 * 実務経験のある教員 太田(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、末澤(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、近藤(上級食の安全管理士、臨床検査技師)、森西(上級食の安全管理士、臨床検査技師)										

卒業研究 (Graduation Research)											
必修・選択の区別	選択	学年次	4	学期	前期	単位数	3.0	時間数	135	授業形態	実習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、古山 達雄 (FURUYA MA Tatsuo)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、水津 太 (SUIZU Futoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)、宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、新美 健太 (NIIMI Kenta)、小河 佳織 (OGO Kaoru)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)、青野りよ (AONO Riyo)										
授業の目的	①臨床検査をはじめ、自分達が将来関係したり、興味ある分野から研究テーマを選び、その研究計画、国内外の文献検索・調査、実験および研究結果の解析を行い、研究発表や研究論文の書き方等の過程を通じ様々な知見を吸収する。 ②国際的視野を養い、検査法の評価や臨床検査の価値観などの総合的な研究能力を習得する。 ③研究におけるモラルについて理解する。 ④研究を通して学会・論文発表等で社会へ貢献できる能力を習得する。										
到達目標	研究内容について、抄録(目的・方法・結果・考察)にまとめ、発表し、討論できる。										
授業の進め方	学生2名程度のグループに分かれ、指導教員と共同して研究テーマについて調査・実験等を行い、その結果について討論し、論文形式としてまとめ、発表を行う。研究の進展によっては国内外で開催される学会での発表や学術誌への論文投稿を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1	分子生物	新生児黄疸管理に関する研究 (岡田)								
	2	病理検査	発がんメカニズムの分子病理学的解析 (水津、森西)								
	3	臨床生理	生理機能学領域における検査法の開発 (大栗、小河)								
	4	血液検査	敗血症の好中球細胞外トラップに関する研究(池亀、近藤)								
	5	微生物Ⅰ	病原微生物の病原性に関する分子生物学的研究 (奥田)								
	6	微生物Ⅱ	病原微生物の病原性に基づいた検査法の開発 (末澤)								
	7	肝免疫	肝疾患における自己抗体の臨床的意義 (樋本)								
	8	一般検査	一般検査学領域の新規検査法開発に関する研究(徳原)								
	9	糖・脂質検査Ⅰ	糖・脂質代謝や酵素活性測定の検査法の開発と研究 (多田)								
	10	糖・脂質検査Ⅱ	生活習慣病における糖・脂質代謝に関する研究 (太田)								
	11	輸血検査	血液型検査に関する研究(宮川、青野)								
	12	解剖生理Ⅰ	寿命関連因子による神経・脈管の形成調節機構に関する研究(古山)								
	13	解剖生理Ⅱ	血管形成にかかわる因子の形態学的研究 (新美)								
教科書	各教員より必要に応じて指定する。										
参考書・参考資料等	各教員より必要に応じて指定する。										
事前学習・事後学習	専門ゼミナールの講義内容を参考にして、興味ある研究分野を選択する。										
他の授業との関連	専門ゼミナール										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、研究態度を考慮した、研究成果のまとめ(抄録)(100%)から、指導教員が評価する。 ・フィードバックについては、卒業研究発表会終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、臨床検査学科長室または開講日授業終了後に受け付けます。										
備考	3年次後期に、学生に対し、卒業研究志望先アンケート調査を実施する。 * 実務経験のある教員 奥田(薬剤師)、古山(医師)、樋本(医師)、岡田(医師)、多田(臨床検査技師)、池亀(臨床検査技師)、徳原(臨床検査技師)、宮川(臨床検査技師)、太田(臨床検査技師)、大栗(臨床検査技師)、新美(臨床検査技師)、小河(臨床検査技師)、森西(臨床検査技師)、近藤(臨床検査技師)、青野(臨床検査技師)										

臨地実習前技能到達度評価 (Objective structured assessment of technical skill)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	前期	単位数	1.0	時間数	30	授業形態	実習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)、奥田 潤 (OKUDA Jun)、樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、岡田 仁 (OKADA Hitoshi)、水津 太 (SUIZU Futoshi)、池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)、徳原 康哲 (TOKUHARA Yasunori)、宮川 朱美 (MIYAGAWA Akemi)、末澤 千草 (SUEZAWA Chigusa)、太田 安彦 (OTA Yasuhiko)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)、小河 佳織 (OGO Kaoru)、森西 起也 (MORINISHI Tatsuya)、近藤 明宏 (KONDO Akihiro)、青野りよ (AONO Riyo)										
授業の目的	①臨地実習に必要な技能・態度を備えていることを実技試験等により確認し、必要な知識・技術を習得する。 ②臨床検査技師資格のない学生が一定の資質を備えた上で、臨地実習で行う行為を実施できることを確認する。 ③臨地実習へ臨む態度、身だしなみ、衛生管理を学び考察する。										
到達目標	①後期の臨地実習前に、一定の資質を備えた上、臨地実習で行うこととなる行為を実施できる。 ②自身が習得している技術を確認し、臨地実習までに身につける手技・実技を認識する。										
授業の進め方	各専門科目における学内実習の中でそれぞれ実技試験を行う。最新の知見を踏まえた内容で実施する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール	1~2	生体試料分析検査学実習実技試験(血糖値測定等の検査)									
	3	一般検査学実習実技試験(尿沈渣、顕微鏡操作、尿試験紙等の検査)									
	4	高感度分析検査学実習実技試験(梅毒等に関する検査)									
	5~7	細菌検査学実習実技試験(グラム染色等の検査)									
	8~9	医動物検査学演習実技試験(虫卵同定等の検査)									
	10~11	病理検査学実習実技試験(組織・細胞診等に関する検査)									
	12~13	血液検査学実習実技試験(血球等の形態に関する検査)									
	14	生体機能検査学実習Ⅰ実技試験(心電図検査等の生理学的検査)									
15	生体機能検査学実習Ⅱ実技試験(肺機能検査等の生理学的検査)										
教科書	各専門科目の学内実習に使用される教科書・実習書及びテキスト										
参考書・参考資料等	各専門科目の学内実習で使用される参考資料										
事前学習・事後学習	事前学習:各学内実習においてそれぞれの意義、原理、手技、結果の解釈、注意事項等について事前に予習して実技試験に臨むこと 事後学習:実技試験後、臨床実習までの期間に復習をしておくこと										
他の授業との関連	臨床検査総論臨床実習、病理組織細胞学臨床実習、臨床生理検査学臨床実習、臨床化学検査臨床実習、臨床血液検査学臨床実習、臨床微生物学臨床実習、臨床免疫検査学・輸血移植免疫検査学臨床実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	〈成績評価方法〉 ・各学内実習に続いて実技試験(100%)を行い、それぞれの科目毎に一定の資質を備えているかを評価する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。 〈学生へのフィードバック〉 各実習内で結果を公開する ・実技試験終了後、各実習内で結果を公開し、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	各専門科目における質問は各担当教員まで										
備考	臨地実習前技能到達度評価に合格していない学生は臨地実習を受講することができない。										

臨床検査総論臨床実習 (General Specimen Analytical Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●徳原 康哲(TOKUHARA Yasunori)										
授業の目的	臨地実習では大学で学んだ知識が、医療の現場でどのように利用されているかを実感し知識を深めることを目的とする。 検体受付、分析、報告に至る検査のながれを理解し、検体の分析を通じて患者の接し方、異常データの判断、臨床的意義など検査の実践を学ぶ。										
到達目標	①尿の外観を観察し判定することができる。 ②尿定性試験の測定原理、分析装置の操作法を習得し、偽陽性、偽陰性の要因について説明できる。 ③尿沈渣の標本を正しく作製し、沈渣成分を鏡検できる。また、沈査検査結果の表現方法について説明できる。 ④尿沈渣の代表成分が鑑別できる。 ⑤尿沈渣で見間違えやすいものについて(赤血球・白血球)認識し、正確に鑑別できる。 ⑥尿定性検査と尿沈渣の関連について理解し、病態との関連について説明できる。 ⑦糞便検査(潜血など)、髄液検査(化学的検査、細胞数など)、体腔液検査(胸水、腹水など)について説明できる。										
授業の進め方	・臨床検査部を7つの部門に分け、実際の臨床現場での体験実習を行う。 ・一般検査について、実際の患者検体を用いて実習を行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		検査部の検体の流れを把握する 検体受付、分析、報告 それぞれの注意点について理解する 実習検査項目 1)尿定性検査 試験紙法(目視・機器判定):試験紙の準備、外観観察と攪拌、 操作法、結果判定(臨床的意義)、精度管理 2)尿混濁鑑別法 3)尿沈査 尿沈渣標本の作製、尿沈渣鏡検に適した顕微鏡調整、成分の判定、 正常成分と異常成分の特徴 4)便検査 5)潜血反応 6)虫卵検査 7)体液検査 脳脊髄液の細胞数算定、臨床的意義 腹水、胸水、胃液、精液、関節液など									
教科書	最新臨床検査学講座 一般検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	一般検査技術教本:一般社団法人日本臨床衛生検査技師会 監修 (丸善出版),尿沈渣検査法2010 (日本臨床検査技師会)										
事前学習・事後学習	・大学での講義と実習を十分に復習する事。臨床検体の重要性や危険性も意識し、臨床実習に臨む事。 ・臨床実習で得た知識・技術を確認・復習する事。										
他の授業との関連	一般検査学、一般検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 ・到達目標の達成状況を、実習評価(50%)、期末筆記試験(50%)で総合的に評価する。 ・評価の視点:臨地実習指導者の評価基準に基づく評価(知識・技術・責任感・礼儀など)および期末試験(臨床検査総論に関する講義内容と臨床に関する理解力、応用力)で評価する。 ・評価結果については、個別対応で評価内容を説明する。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室43										
備考	・本科目が不可になった場合は、進級できない。 * 実務経験のある学内教員 徳原(臨床検査技師)										

病理組織細胞学臨床実習 (Pathological Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●水津 太 (SUIZU Futoshi)										
授業の目的	病理検査室における検査材料の受付、検査物の処理、標本の作製、検査方法の種類などについて確認し検討する。また、臨床における病理組織学的な病因の解明方法や臓器・組織・細胞などに関する肉眼的特徴や顕微鏡標本の組織・細胞学的特徴について考察する。										
到達目標	①病理検査室における主要な各種検査法について説明することができ、実際に検査を行うことができる。 ②標本作製法では検体処理や基本的な標本作製、HE染色、各種特殊染色を行うことができる。 ③細胞診では、標本作製や各種疾患のスクリーニング、推定診断ができる。										
授業の進め方	実際の臨床現場での体験実習を行う。病院病理検査室において病理標本作製、各種染色、免疫組織化学、凍結切片作製法、細胞診の実際等の実習を行う。また、病理解剖検査についても機会があれば見学する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		病理検査、病理解剖の実際、見学:臓器切り出しと臓器写真撮影、精度管理(病理学的検査) 検体処理 標本作製法、特殊染色、見学:迅速標本作成から報告 検体処理、細胞診標本作製 呼吸器の細胞診 婦人科の細胞診 体腔液の細胞診 消化器の細胞診 見学:消化管からの組織の採取									
教科書	最新臨床検査学講座 病理学/病理検査学(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	組織病理アトラス(文光堂)、細胞診のすすめ方(松浪硝子工業)、実践細胞診カラー図鑑(医歯薬出版)、人体組織図譜(南江堂)										
事前学習・事後学習	実習内容に沿った予習を行うこと。										
他の授業との関連	病理検査学、病理検査学実習と関連										
成績評価方法・基準・フィードバック	原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。 到達目標の達成状況を、実習評価(20%)、期末筆記試験(80%)により評価する。 ＜評価の視点＞ 「実習評価では、病理検査室での基本的な実践能力を評価し、期末筆記試験では、病理検査に関する知識と理解力、実践能力を評価する」 フィードバックについては、オフィスアワーに準ずる方法で評価結果の説明を行う。										
オフィスアワー	教員研究室で適宜対応										
備考	・本科目が不可になった場合は、進級できない。										

臨床生理検査学臨床実習 (Physiological Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	3.0	時間数	90	授業形態	実習
担当教員	●樋本 尚志 (HIMOTO Takashi)、大栗 聖由 (OGURI Masayoshi)										
授業の目的	各生理検査について、検査に必要な実際の方法論、検査結果の評価および管理法、患者への接し方、緊急時の対応、他の医療従事者とのチームワークなど、臨床現場で必要とされている知識や技術について理解する。また、臨床現場で働く医療従事者として必要な人間性と高い倫理観を理解する。										
到達目標	それぞれの生理検査を理解し、検査結果を正しく評価できる。										
授業の進め方	臨床検査部内を7つの部門に分け、1部門を2週間間隔で順次移動し、実際の臨床現場での体験実習を行う。臨床生理検査実習期間については、最低12日間程度確保する。 ①臨床生理検査実習スケジュールに従って、循環器系の検査、神経・筋系の検査、呼吸器系の検査、超音波検査の見学と実習、および臨地実習指導者の下で患者への検査を実施する。 ②学生同士でお互いに実習する場合もある。 ③実習の内容をレポートとしてまとめる場合がある。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		循環器系の生理機能検査 標準12誘導心電図、負荷心電図(見学)、ホルター心電図(見学)、 負荷心筋シンチ(見学)、心臓カテーテル検査(見学) 神経・筋系の生理機能検査 脳波検査(見学)、運動誘発電位検査(見学)、 体性感覚誘発電位検査(見学)、聴性脳幹反応検査(見学)、 視覚誘発電位検査(見学)、末梢神経伝導検査(見学) 呼吸器系の生理機能検査 スパイロメトリ、血液ガス検査(見学)、 スパイロメトリ以外の肺機能検査(見学) 画像検査 超音波検査(心臓、腹部)(見学)、MRI検査(見学)、 消化管内視鏡検査(見学)、ABI(見学)									
教科書	最新臨床検査学講座 生理機能検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	配布資料 標準臨床検査学 生理検査学・画像検査学 (医学書院)										
事前学習・事後学習	復習をしっかりとすること。										
他の授業との関連	生体機能検査学実習ⅠおよびⅡ										
成績評価方法・基準・フィードバック	出席時間数が授業時間数の5分の4に満たない場合、原則として評価を受けることができない。 到達目標の達成状況を実習態度、レポートなどによる実習病院の評価、期末試験(筆記)により評価する。 評価の配分割合(筆記試験70%、実習病院での評価30%) フィードバックについては、レポート返却時及び試験終了後1週間を目安に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。										
オフィスアワー	質問等は随時受け付ける。樋本(研究室32)、大栗(研究室39)										
備考	・実習および見学は積極的におこなうこと。患者と直接に接する検査であることを十分に自覚して、服装や言葉使いに気をつけること。 ・本科目が不可になった場合は、進級できない。										

臨床化学検査学臨床実習 (Clinical Chemistry Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●多田 達史 (TADA Satoshi)										
授業の目的	① 臨地実習では大学で学んだ知識が、医療の現場でどのように利用されているかを実感し知識を習得する。 ② 検体の受付、ながれに沿った検体処理、自動化学分析装置による分析、コンピューター処理を理解し、検査値の変化、他の項目との相関性、臨床的意義、精度管理の方法など検査の実践を学ぶ。										
到達目標	① 分析のための検体処置(採取法及び保存法)、分析機器の取扱いについて説明できる。 ② 緊急検査の検査項目と対応の仕方について説明できる。 ③ 臨床化学分析法の精度管理法、データチェックの実際と異常値に対する対応を学び、説明できる。 ④ 臨床検体の状況(溶血、混濁、フィブリン塊など)、干渉物質の影響について説明できる。 ⑤ 検査機器トラブル(試薬不足、非特異反応)について学び、対応法を説明できる。 ⑥ 臨床症状の急変、パニック値の対応方法、コメントなどについて説明できる。 ⑦ チーム医療(NST 回診、血糖測定指導等)について学び、必要性や意義について説明できる。										
授業の進め方	・臨床検査部内を7つの部門に分け、部門を順次移動し、臨床現場での実習を行う。 ・ここでは、臨床化学検査において、患者検体を用いた実習を行う。検体採取の影響、検体の確認方法、前回値チェックなどを含む精度管理方法、データの読み方、チーム医療の見学などを中心に行う。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		自動化学分析装置の構成と実際 検体処理の注意点(溶血、フィブリン等) 遠心分離機の取り扱い 自動分析装置の原理と取り扱い 標準作業手順書の目的・理解 メンテナンス作業(生化学的検査)等 実習検査項目1)糖質 2)タンパク質、電気泳動(タンパク分画・アイソエンザイム) 3)脂質(代謝異常データの見方等) 4)電解質・無機質、血液ガス検査 5)非タンパク性窒素 6)酵素 7)機能検査(OGTT、ICG等) 8)生化学的検査の精度管理方法 (異常値・パニック値対応、内部・外部精度管理) 9)各検査結果の臨床的意義と評価 10)糖尿病教室・NSTなどチーム医療の見学(自己血糖測定装置の使い方の説明、検査前の患者への検査説明などについて積極的に学ぶ)									
教科書	臨床検査学講座 臨床化学検査学 (医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	臨床化学検査技術教本(一般社団法人日本臨床衛生検査技師会)										
事前学習・事後学習	・大学での講義と実習を十分に復習する事。臨床検体の重要性や危険性も意識し、臨床実習に臨む事。 ・臨床実習で得た知識・技術を確認・復習する事。										
他の授業との関連	臨床化学検査学、生体試料分析検査学、病態化学分析検査学、生体試料分析検査学実習。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、レポートを含む実習評価(40%)、期末筆記試験(60%)で総合的に判断する。 ・評価の視点:臨地実習指導者の評価基準に基づく評価(知識・技術・責任感・礼儀など)および期末試験(臨床化学検査に関する講義内容と臨床に関する理解力、応用力)で評価する。 ・期末試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室36 メール:tada@kagawa-puhs.ac.jp										
備考	・本科目が不可になった場合は、進級できない。										

臨床血液検査学臨床実習 (Hematological Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●池亀 彰茂 (IKEGAME Akishige)										
授業の目的	学外実習を通して、医療現場における患者や他の医療従事者への対応の仕方を学ぶ。また、血液検査器具や測定機器の管理の重要性を学ぶと共に、血液検査学以外の検査データとの関連から血液疾患の理解を深める。										
到達目標	①血液検査における機器管理および内部精度管理を理解する。 ②臨床現場における血液検査の流れを理解する。 ③血算値および血液形態から異常値を検出することができる。 ④凝固線溶系検査から異常値を見つけ、疾患を推測することができる。										
授業の進め方	臨床実習では、臨床検査部内を7つの部門に分け、1部門を2週間間隔で順次移動し、実際の臨床現場での体験実習を行う。血液部門では、見学および実習をし、血液検査データの見方や疾病との関連および検査精度の必要性を理解する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		血球検査Ⅰ：血液検査の流れと検体処理（抗凝固剤、検体量、凝固、溶血等の確認）、 血液塗抹標本作成と鏡検、精度管理（血液学的検査）、 メンテナンス作業（血液学的検査） 血球検査Ⅱ：測定検査結果の解釈 （基本的なデータ、再検基準およびパニック値の判断） 骨髓検査：病棟での骨髓検査（見学）と事後処理検査 （末梢血像、骨髓像の観察） 特殊染色：特殊染色の手順と臨床的意義 凝固線溶検査Ⅰ：凝固線溶系検査の検査の流れと検体処理 （抗凝固剤、検体量、凝固、溶血等の確認） 凝固線溶検査Ⅱ：測定検査結果の解釈 （基本的なデータ、再検基準およびパニック値の判断） その他の検査：血球計数検査、血小板凝集能検査、フローサイトメトリー検査、 遺伝子染色体検査等 測定機器の精度管理および機器管理方法：内部精度管理、機器メンテナンスの手順 まとめ：血液検査学まとめ試験									
教科書	最新臨床検査講座 血液検査学(医歯薬出版)、血液細胞アトラス(文光堂)、病気がみえるシリーズvol.5 血液(医療情報科学研究所)、プリント資料										
参考書・参考資料等	臨床検査技術学11 血液検査学(医学書院)										
事前学習・事後学習	事前学習：血液検査学Ⅰ・Ⅱ・学内実習の復習 事後学習：血液検査学のまとめ										
他の授業との関連	血液検査学Ⅰ・Ⅱ、血液検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・実習評価20%、期末筆記試験80%により評価する。 ・学生へのフィードバック方法は、試験後1週間を目途に評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けられません。										
オフィスアワー	研究室33、実習室等で適宜対応										
備考	・教科書等での予習(知識の復習)を必ず行うこと。積極性をもって臨むこと。 ・本科目が不可になった場合は、進級できない。										

臨床微生物検査学臨床実習 (Microbiological Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●奥田 潤 (OKUDA Jun)										
授業の目的	実際の臨床現場での、微生物検査に関する体験実習を行う。										
到達目標	①臨床検査室での検査材料の採取と保存法、輸送法などの前処理方法や、染色と形態、培養、同定、薬剤感受性試験など、微生物検査を進める上で必要な知識、手技を実際の臨床検査の流れの中で体得できる。 ②また、実習を通して微生物検査の臨床的意義について説明できる。										
授業の進め方	実際の臨床現場での体験実習を行う。臨床微生物検査学臨床実習では、実際の臨床検体を用いて微生物検査を進めていく。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		検体の取り扱い 染色法と検鏡 (培養・Gram染色検査等) 分離培養の判定 (培養・Gram染色検査等) 分離培地の観察 分離菌の同定 薬剤感受性検査 結果報告書作成 検査成績の意義 見学: 検体採取 見学: 感染制御活動									
教科書	「最新臨床検査学講座 臨床微生物学」(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	「臨床検査法提要 奥村伸生ら」(金原出版)										
事前学習・事後学習	実習に臨む前に、必ず大学で学習した微生物に関する講義や実習の内容について必ず復習する。										
他の授業との関連	微生物学、微生物検査学、細菌検査学実習、ウイルス・真菌検査学実習										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況を、実習評価(30%)、期末筆記試験(70%)により評価する。 〈評価の視点〉 「実習評価では、臨床現場の指導者の評価基準(知識・技術、責任感、意欲等)に基づいて、指導者が評価する。期末筆記試験では、微生物検査学に関するこれまでの講義内容の暗記力・理解力・記述力を評価する」 ・フィードバックについては、期末筆記試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・原則として総授業数の5分の4以上の出席がなければ評価を受けることができない。										
オフィスアワー	随時、研究室38										
備考	・大学での講義と実習について必ず復習してから、臨床の現場であることを忘れずに、積極的に実習に臨むこと。 ・本科目が不可になった場合は、進級できない。										

臨床免疫検査学・輸血移植免疫検査学臨床実習 (Immunological Technology :Clinical Practice)											
必修・選択の区別	必修	学年次	3	学期	後期	単位数	2.0	時間数	60	授業形態	実習
担当教員	●宮川 朱美(MIYAGAWA Akemi)										
授業の目的	①学内で学んだ高感度分析検査学や輸血・移植検査学の基本技法が、検査室の現場でどのように活用されているか、その方法がどのように進化しているか、検査システム化の現状を理解する。 ②測定された検査データの解析法と評価法及び疾病との関連性を理解する。 ③検査材料の受付や処理法・管理保存法を適切に判断し適用することを学習する。 ④輸血検査室においては適合血の選択法と移植検査における諸問題を理解し習得する。										
到達目標	① 実際の臨床検査室における検査の流れを説明できる。 ② 特殊な検査項目における検体処理法を列挙できる。 ③ 自動分析された測定値を正しく評価できる。 ④ 異常値の出現に関して検査の妥当性や臨床的意義を判断できる。 ⑤ 輸血医療に必要な関連検査を正しく実施し判定できる。 ⑥ 臨床免疫検査の実際を整理して列挙できる。										
授業の進め方	臨床検査部内を7つの部門に分け、1部門を2週間間隔で順次移動し、実際の臨床現場での体験実習を行う。 この分野では免疫血清検査室、輸血検査室、緊急検査室を体験する。										
	回	内 容 ・ 教 員 ・ 形 式 等									
授業スケジュール		1.検査室運営： 1)検査の流れ(受付、準備、検査、報告、 精度管理:免疫学的検査および輸血・移植検査、片付け、 外注検査)、メンテナンス作業(免疫学的検査および輸血・移植検査) 2)他部門との関連性と協調性 3)検体の扱い方(採血、分離、保管法、廃棄法) 4)検査データの読み方、異常値への対応法 5)コンピュータシステム運用法とデータベースの利用法 6)検査保険点数との関わり 7)感染対策 8)緊急検査での対応法 2.実習検査項目： 9)感染症検査 10)自己免疫疾患の検査 11)異常血漿蛋白と急性相反応物質の検査 12)免疫自動分析機の原理と扱い方 13)フローサイトメトリの原理と扱い方 14)輸血検査の実際 15)輸血検査の業務管理法 16)移植検査									
教科書	最新 臨床検査学講座 免疫検査学/輸血・移植検査学第2版(医歯薬出版)										
参考書・参考資料等	輸血・移植検査 技術教本 (日本臨床衛生検査技師会監修・丸善出版)、スタンダード輸血検査テキスト(第3版)(医歯薬出版)										
事前学習・事後学習	該当する実習部門に入る前には必ず該当検査項目の要点を予習しておくこと。 実習期間終了時には学内で学んだ検査項目が臨床でどのように活用されていたかを整理すること。										
他の授業との関連	生体防御検査学、高感度分析検査学、輸血・移植検査学の臨床における応用として理解する。										
成績評価方法・基準・フィードバック	・到達目標の達成状況(評価の視点:実際の臨床検査室における臨床免疫学的検査の自律的実践的能力の習得度)を、実習施設における評価(20%)、期末筆記試験(80%)により総合的に評価する。 ・期末試験終了後1週間を目途に、評価結果を開示する期間を設け、評価内容を説明する。 ・出席時間数が授業時間数の5分の4に満たないときは、原則として評価を受けることができない。										
オフィスアワー	適宜受け付ける。研究室37にて対応する。										
備考	本科目が不可になった場合は、進級できない。										

